

第6項 q域 (付図10・11)



第295図 q域 平面図

丘陵上東部地区の南東部分である。川2を挟んで南のj域東端部と共に、勝尾寺川と川合裏川の合流部分に面する、丘陵の先端部分である。

東側は、川合裏川が北から南へと流れて段丘面を形成しており、高低差約6.3mの崖となっている。この崖から分岐して、丘陵上に高低差約2.5mの崖が南北方向に伸びている。

この二つの崖によって西と東を限られた、丘陵東南端の一段低い部分がq域である。西側の崖上はp域、東側の崖下がs域である。

南側の川2は、上流域に比べて非常に深く開析されている。

主な遺構に、建物2棟・柱列3列・墓2基・井戸1基・焼土坑3基・ピット・土坑などがある。

建物116 (第295・296図 図版119・121)

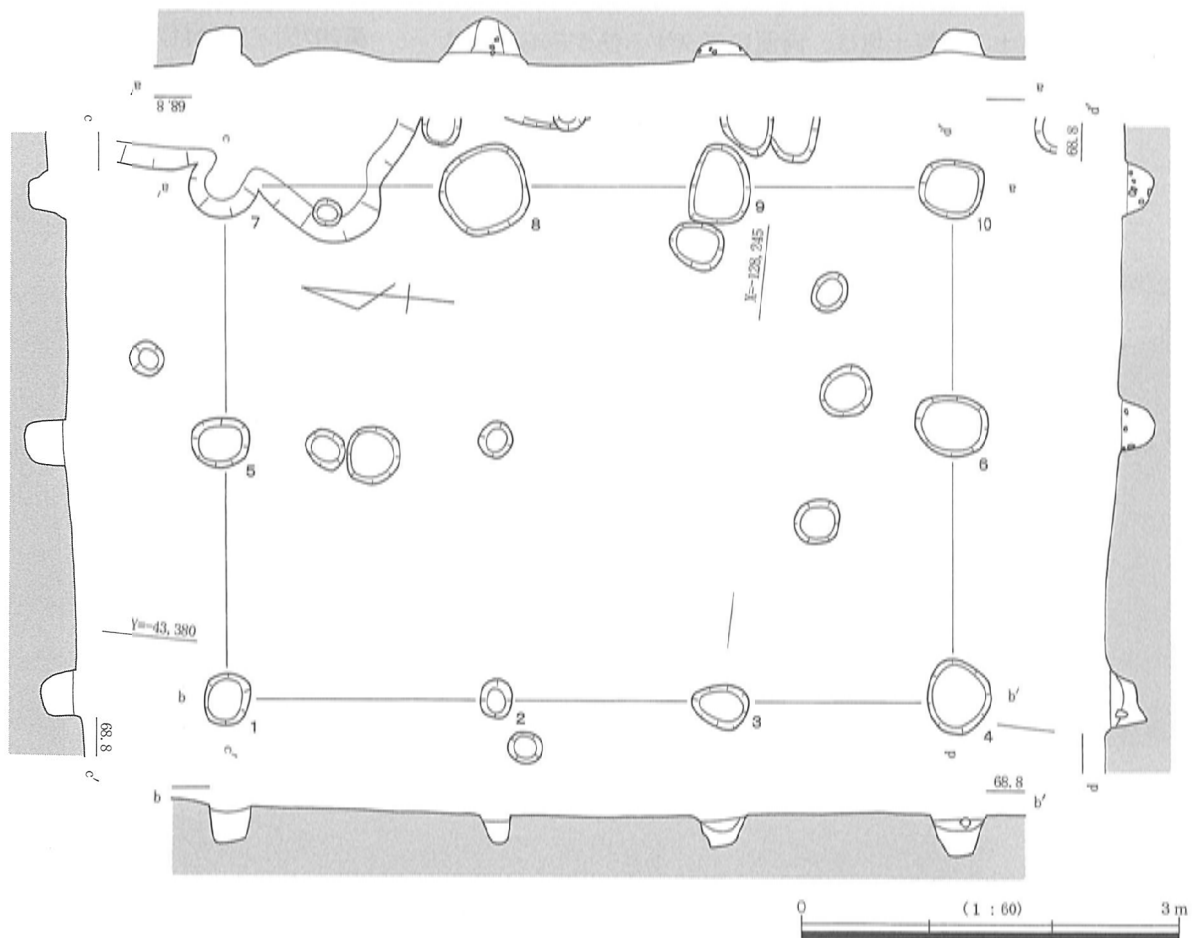
中央部に位置し、南北3間×東西2間、約5.8m×4.1m、約23.8㎡である。主軸方向は、N-5°-Wである。平面検出時に8世紀の遺構である土坑98に切られていると認識しており、古代のものである可能性がある。

遺物は、土師器煮炊具片、製塩土器片が出土している。

建物117 (第295・297・298図 図版119・121)

中央部に位置し、南北2間×東西1間、約5.6m×3.1m、約17.4㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を示す。

遺物は、土師器、瓦器椀、焼土の小片が出土し、12世紀後葉~13世紀代のものと思われる。



第296図 建物116 平面・断面図

柱列6 (第295・299図 図版119)

中央部に位置する、東西4間、約8.6mの柱列である。柱間は一定ではない。

遺物は、土師器皿片が出土しており、14世紀中葉～15世紀前葉のものである可能性がある。

東には南北方向の柱列2列が約1.3mの間隔をおいて並行している。その北から1間の部分に取り付くような位置関係であるが、南北列に対して厳密には直交せず、やや振れている。本来建物であったものを復元できていない可能性もある。

柱列7 (第295・299図 図版119)

中央部に位置する、南北4間、約9.2mの柱列である。川合裏川段丘面にいたる崖の肩近くに位置し、それに沿うように伸びており、この崖に対する柵などであったことも想定できる。

遺物は、土師器、瓦器椀、瓦質羽釜の小片、焼土片が出土している。14世紀中葉～15世紀前葉のものである可能性がある。

東側には同方向の柱列8が約1.3mの間隔をおいて並行している。北から1間の部分に取り付くように、東西方向の柱列6がある。いずれも柱間は一定ではない。南北の柱列7・8は共に中央の柱穴のみ他と比較して浅い。本来建物であったものを復元できていない可能性もある。

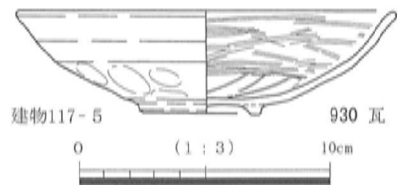
柱列8 (第295・299図 図版119)

中央部に位置する、南北4間、約9.3mの柱列である。

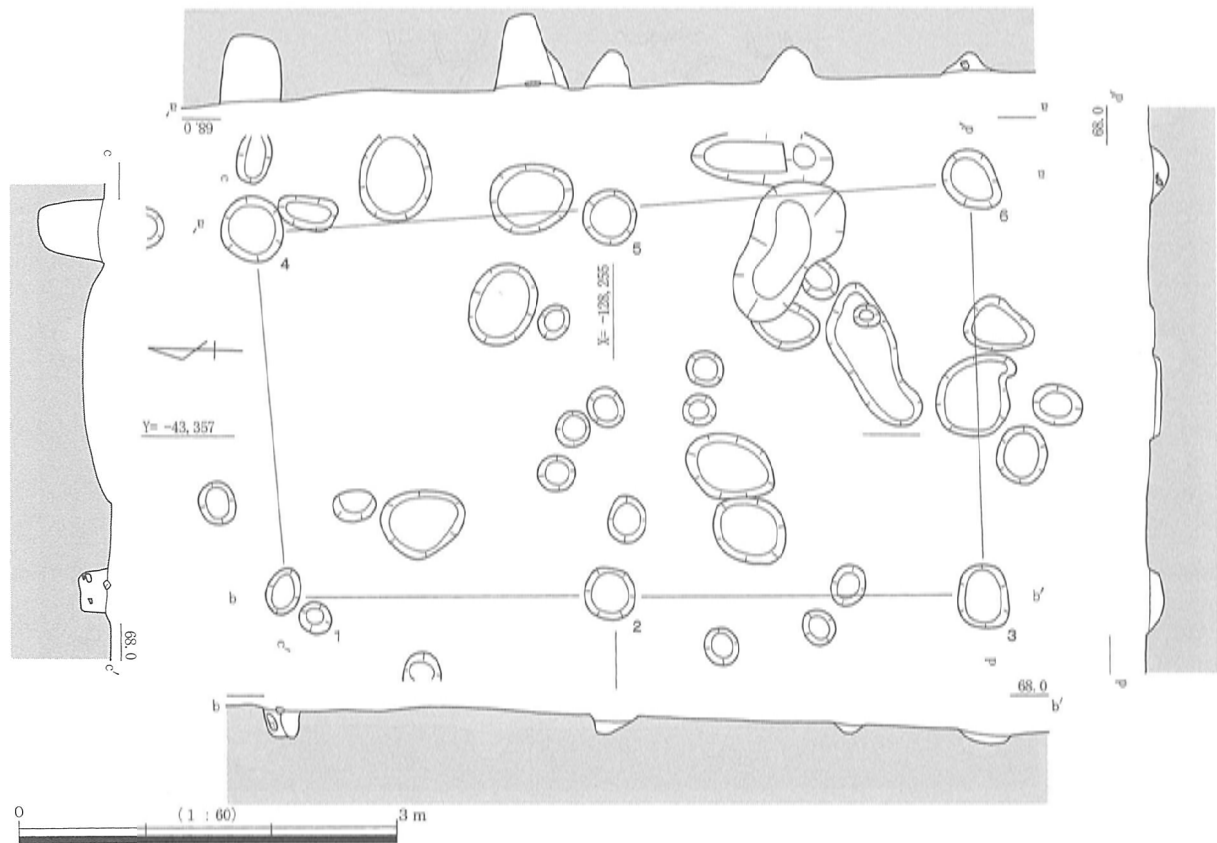
遺物は、瓦器、土師器、常滑焼の小片、焼土塊が出土している。

14世紀中葉～15世紀前葉のものである可能性がある。

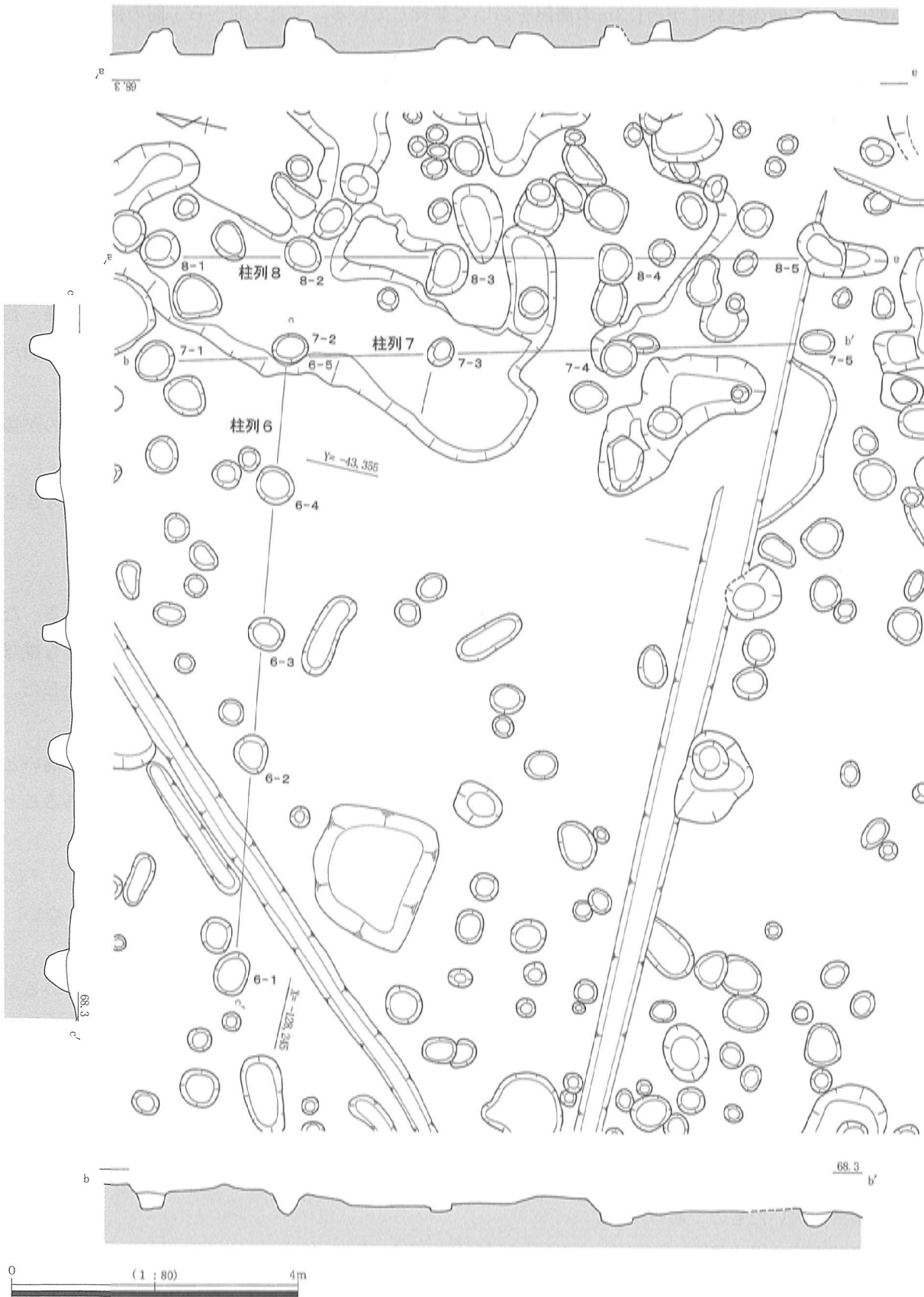
柱穴5から出土した焼土塊は、両面に直交する筋がみられ、こ



第297図 建物117 出土遺物



第298図 建物117 平面・断面図



第299図 柱列6～8 平面・断面図

れが木舞とすれば土壁の破片であると思われる。

西側には同方向の柱列7が約1.3mの間隔をおいて並行している。また、北から1間の部分に取り付くように、東西方向の柱列6がある。

井戸8 (第295・300～308図 図版121・211～215・250)

川合裏川段丘面にいたる崖の肩部分に位置する。素掘りの大規模な井戸で、径が約3.1～3.7m、深さは5.2m以上ある。危険が伴うため掘削を途中で断念した。

埋土に人頭大の礫と遺物を多量に含み、コンテナ10数箱分の遺物が出土した。礫は最上層から掘削し得た深度まで多量に含まれているが、遺物は圧倒的に上層部分に多い。

遺物は、最上層(1層の最上部)、上層(1～3層、4層の上部)、4層(4層の下部)、5層(5層)出土のものに分けて掲載している。遺物の多くが瓦質羽釜の破片で、他に羽釜以外の瓦質土器(甕・茶釜・鍋・火鉢・把手付鍋)、土師器皿・鍋、瓦器椀、須恵器鉢・甕、備前焼播鉢・壺、常滑焼甕、瀬戸焼折縁皿、青磁碗、巴紋軒丸瓦、硯、焼土などが出土している。

ほとんどの遺物がおおよそ14世紀後葉のものと思われる。上層部出土の破片と第4層出土のものが接合した例もあり、掘削し得た部分に関しては、埋まった時期にあまり差がないと思われる。

羽釜が非常に多く出土していることから、羽釜積みの井戸であったことも想定されるが、その大きさが大、小様々であることから、その可能性は低いと思われる。

墓9 (第295・309・311図 図版123・216・242)

中央部に位置する。礫の集積として検出した。南北約1.8m、東西約1.0mの長方形の範囲である。ただし、この周辺は全体的に大きく掘りすぎているため、その範囲は確実ではなく、掘り方の有無も確認できていない。礫は上面が比較的平らである。礫を除去した際に、土師器大皿・小皿、釘が出土した。土師器皿は12世紀後葉～13世紀前葉のものである。

その構造などは不明とせざるを得ないが、釘、完形の土師器皿の出土から、墓である可能性が高いと考えている。墓であるとすれば、礫は、墓壙を埋めた後に築かれた上部構造、もしくは棺台であることが想定される。

墓10 (第295・312・313図 図版123・215・240・242・250)

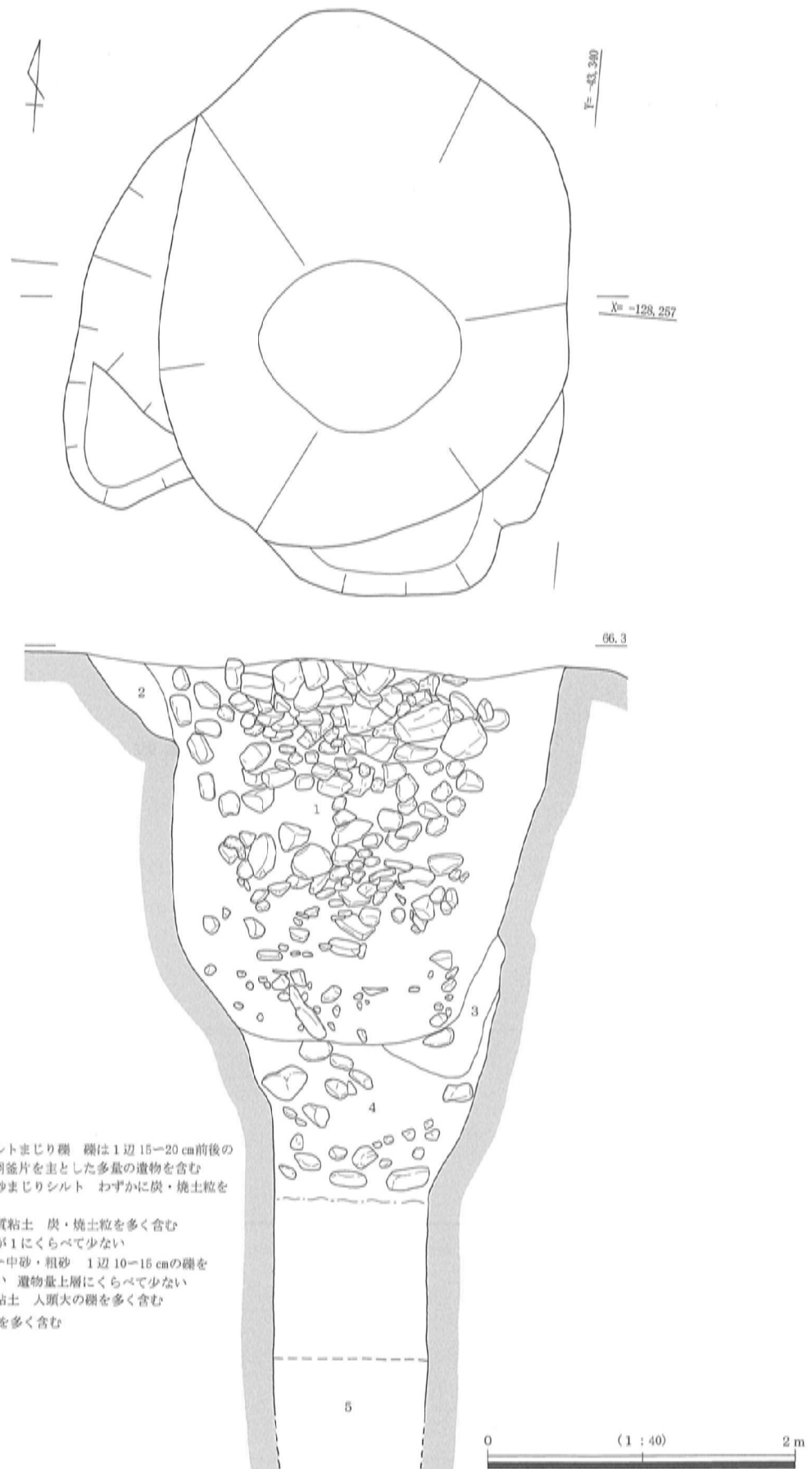
川2の肩部分に位置する。南北約2.1m、東西約0.9m、深さ約0.2mである。骨は出土していない。墓としては浅く、削平されている可能性がある。主軸は、正方位からやや東に振れている。

北部中央の底面近くで、高麗青磁皿、刀子2本、砥石が重なった状態で出土した。やや傾いているが正置状態の青磁皿の上に、短い方の刀子(1015)が切っ先を南に向けて重なり、その上に長軸を南北方向にした砥石、切っ先を北に向けた長い方の刀子(1016)が重なっている。これらは、本来置かれた状態を保っていると思われる。

青磁皿は五輪花、碁笥底で、内面には印花花紋を施し、底部外面には白色耐火土目が付着している。初期高麗の良質なもので、森本朝子・片山まび分類のI-②類¹⁾であると思われる。2箇所が欠けている。意図的に欠いたものであろうか。

砥石は井本伸廣氏に鑑定を依頼し、砥石型珪質頁岩で仕上げ砥と思われる、との鑑定結果を得た。現在砥石の産地として知られる京都高雄産のものに似ているが、これは農具などには用いず、刃物を研ぐために使用するきわめて上質のものであるとのことである。

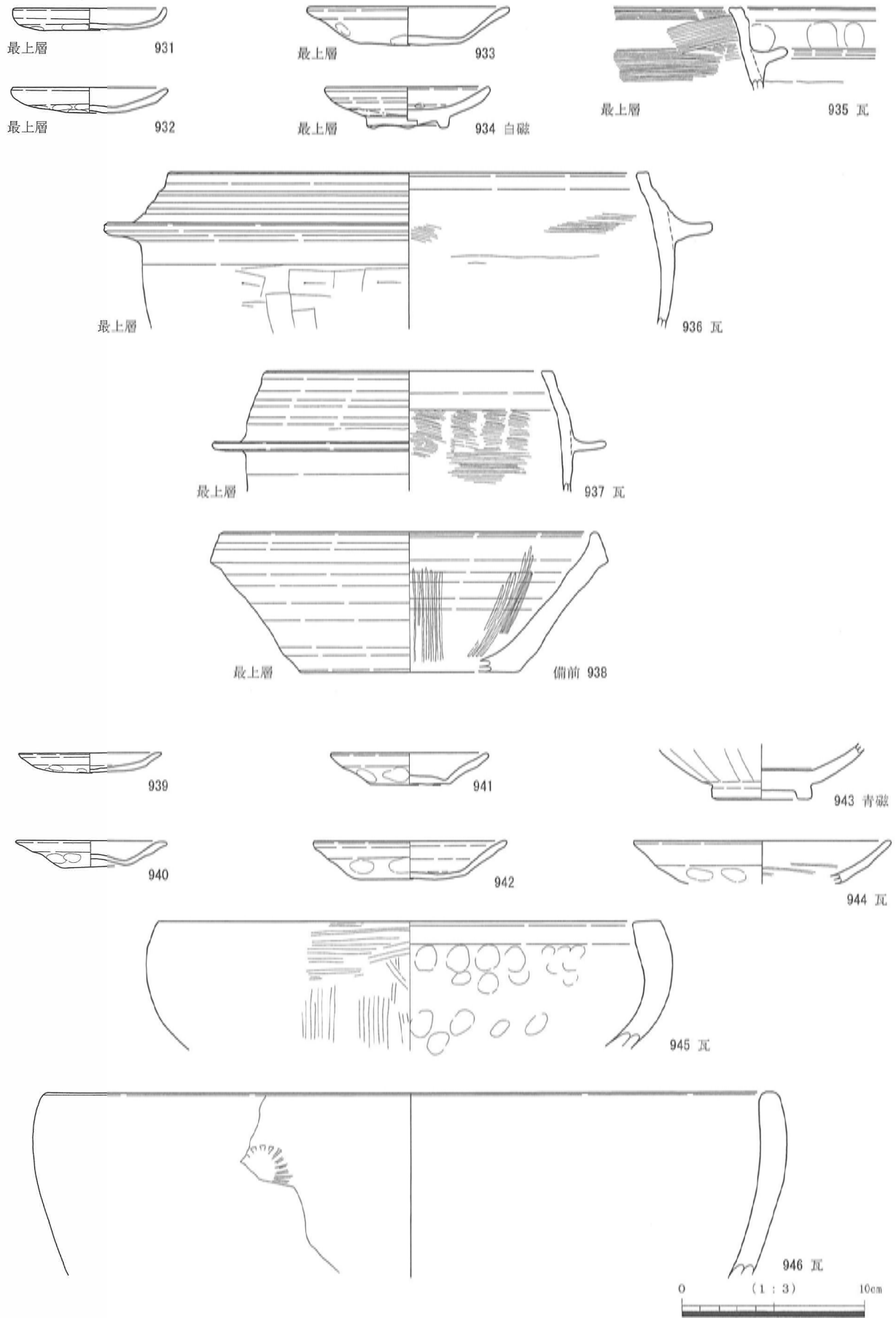
土師器皿も出土しているが、出土位置は不明である。青磁皿の時期は、生産地では11世紀後葉とされ



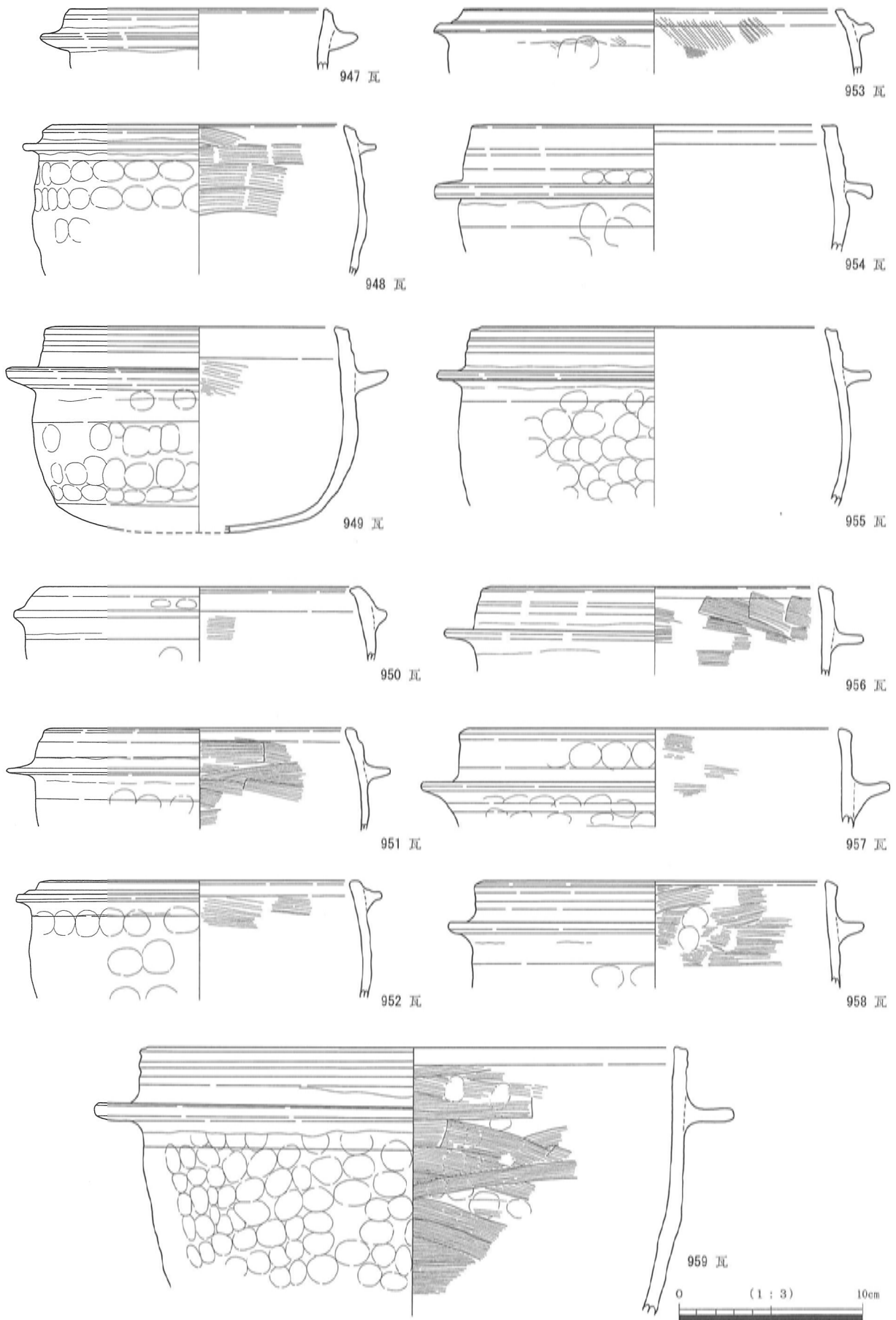
1. 5Y 4/2 灰オリーブ シルトまじり礫 礫は1辺15-20cm前後の角礫 または河原石など羽釜片を主とした多量の遺物を含む
2. 2.5Y 4/3 オリーブ褐 中砂まじりシルト わずかに炭・焼土粒を含む 遺物は少ない
3. 10YR 5/2 灰黄褐 シルト質粘土 炭・焼土粒を多く含む 1辺5-10cmの礫を含むが1にくらべて少ない
4. 2.5Y 5/2 暗灰黄 シルト-中砂・粗砂 1辺10-15cmの礫を含むが1にくらべて少ない 遺物量上層にくらべて少ない
5. 2.5Y 3/1 黒褐 シルト質粘土 人頭穴の礫を多く含む 中砂-粗砂・炭・焼土粒を多く含む

第300図 井戸8 平面・断面図

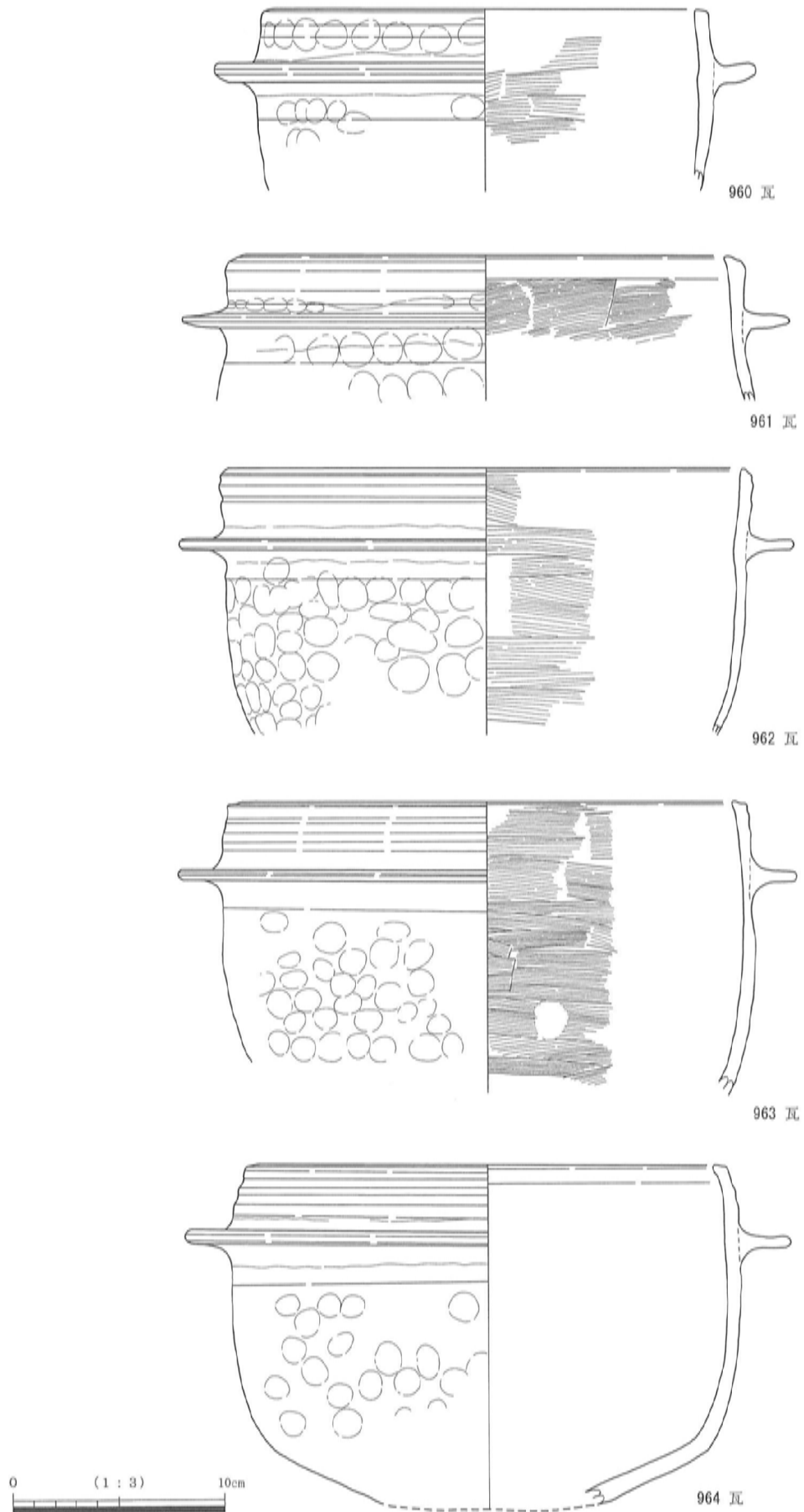
第3節 丘陵上東部(q城)



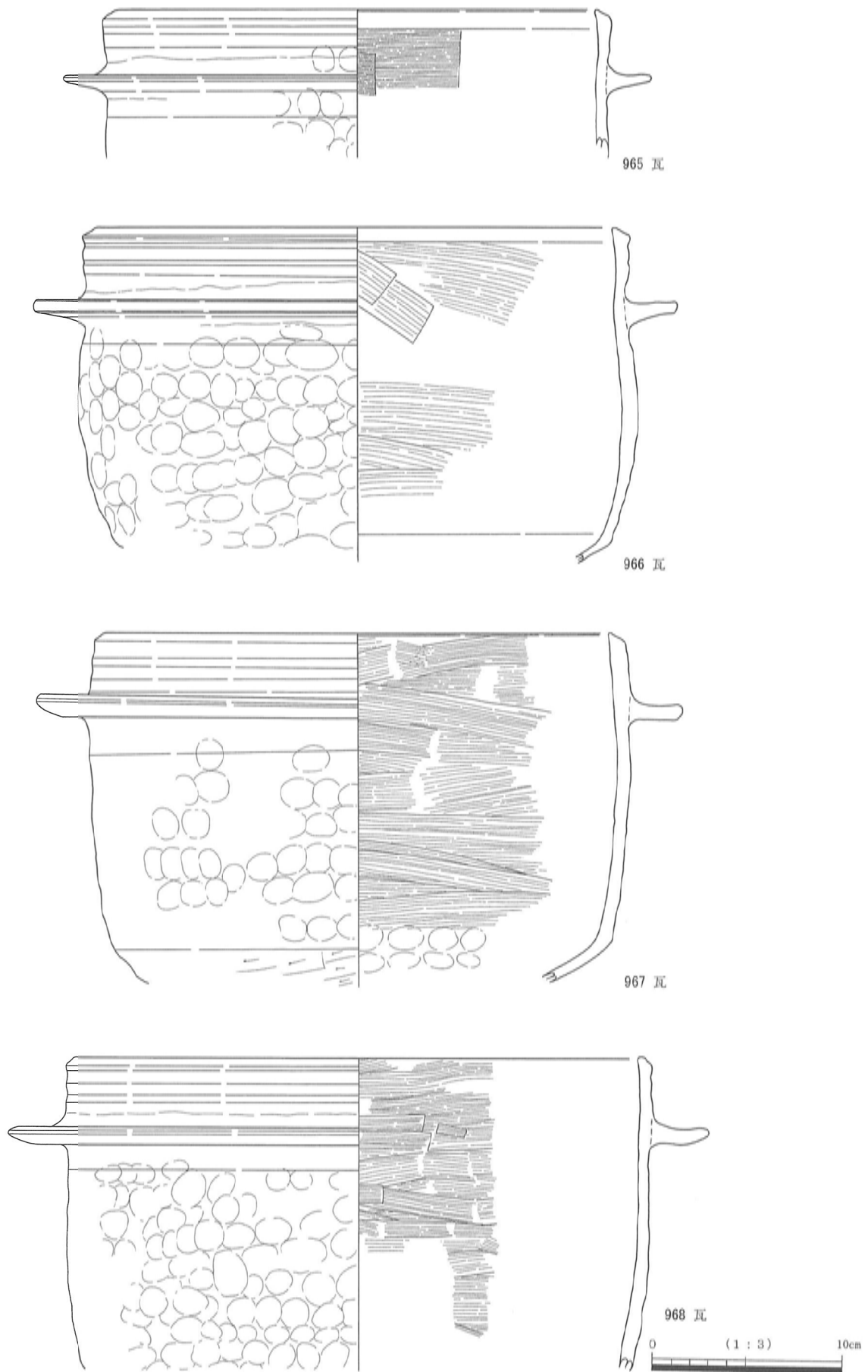
第301図 井戸8 出土遺物(1)(最上層・上層)



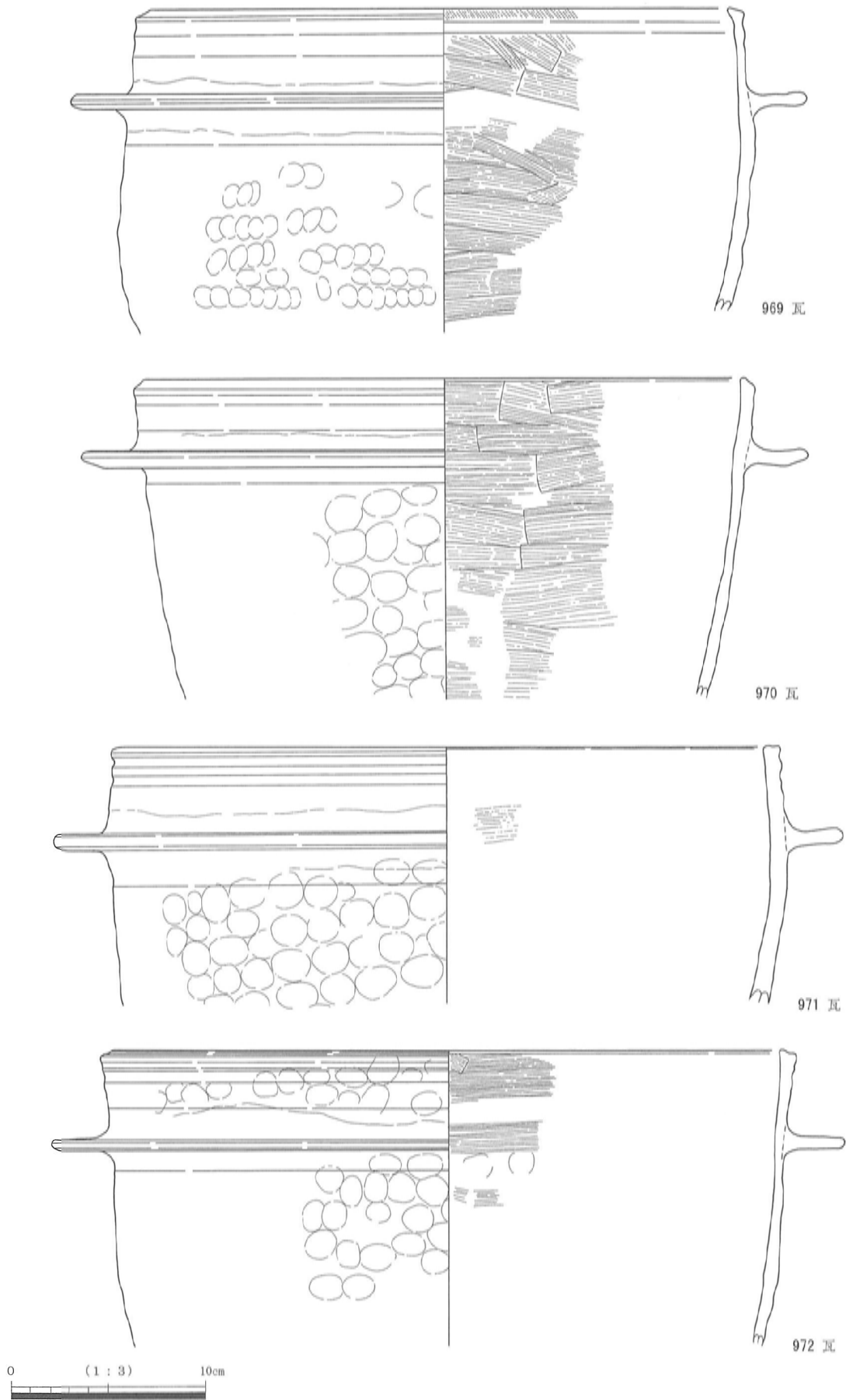
第302図 井戸8 出土遺物(2)(上層)



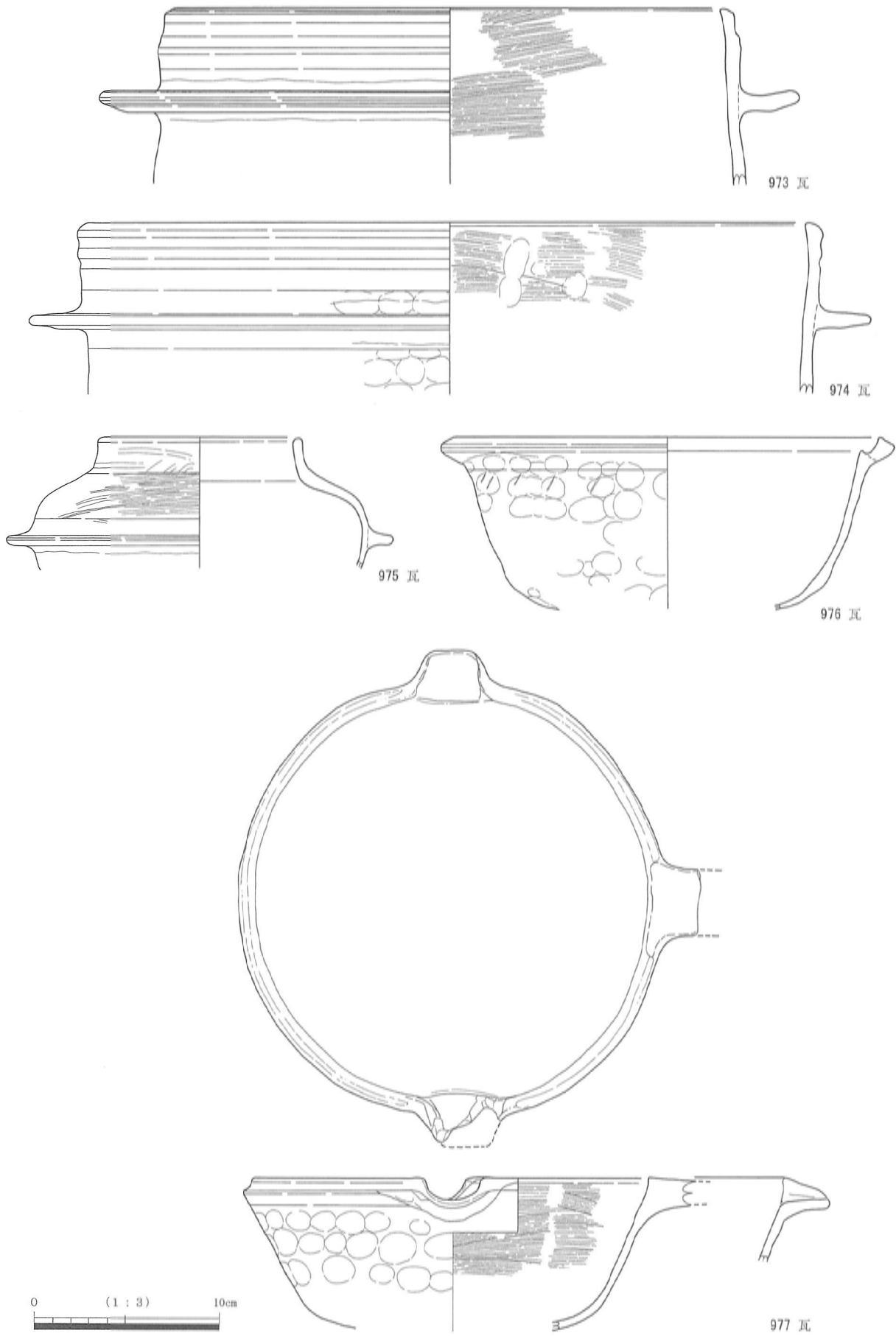
第303図 井戸8 出土遺物(3)(上層)



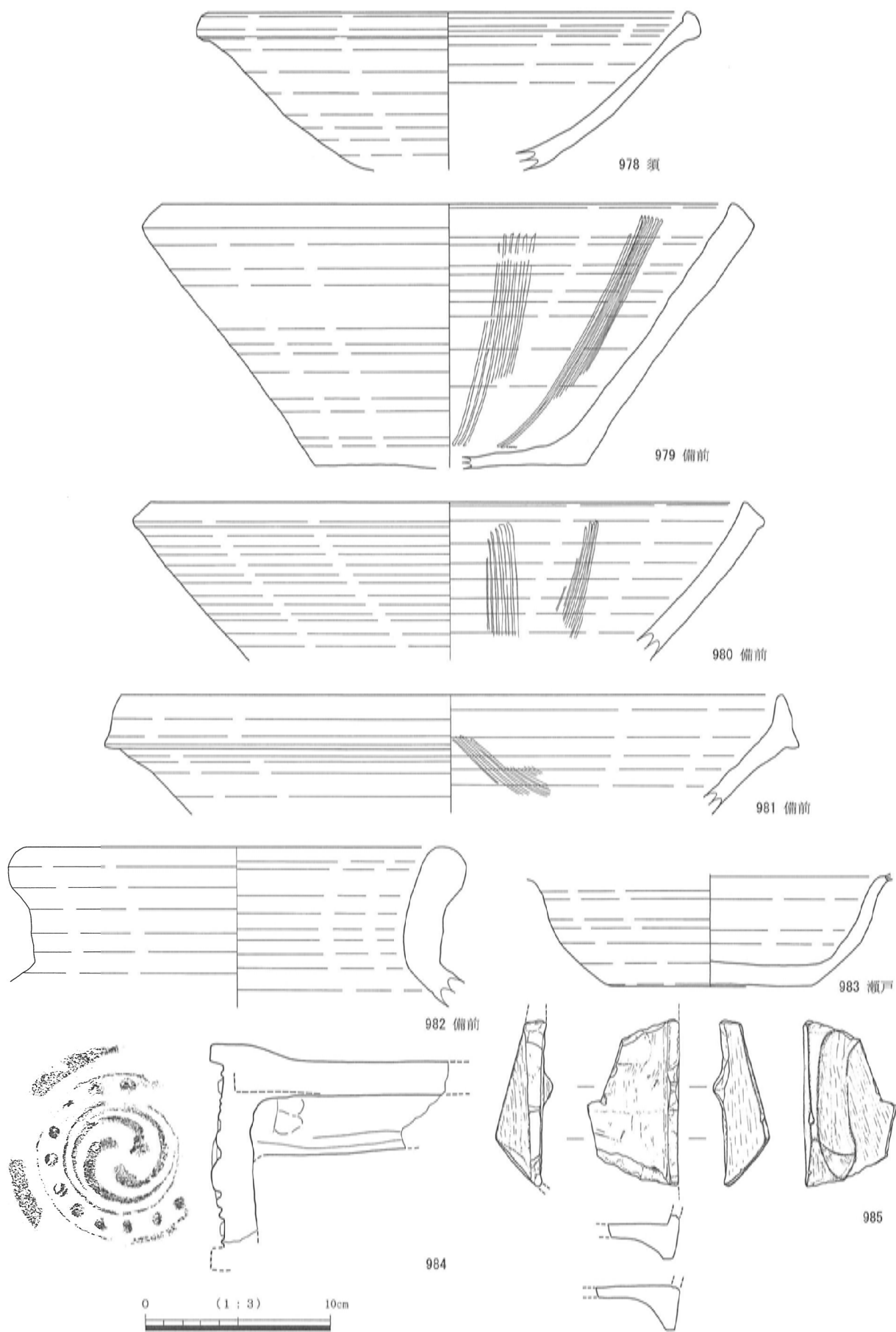
第304図 井戸8 出土遺物(4)(上層)



第305図 井戸8 出土遺物(5)(上層)



第306図 井戸8 出土遺物(6)(上層)



第307図 井戸8 出土遺物(7)(上層)

ているが、消費地では12世紀前葉まで下る可能性が指摘されている。土師器皿は詳しい時期は不明であるが11～13世紀のものであると思われる。

ピット71 (第295図)

北部に位置する。楕円形で、長径約0.6m、短径約0.2m、深さ約0.1mである。

図示できなかったが、製塩土器、土師器の小片が出土した。

ピット72 (第314・315図)

北部に位置し、径約0.5m、深さ約0.2mである。埋土は焼土、炭などが主体である。被熱はしていない。

遺物は、須恵器壺などの小片が少量出土したのみである。古代のものと思われるが、遺構の時期を示すものかは不明である。

ピット73 (第295図)

北部に位置し、径約0.5m、深さ約0.2mである。

須恵器杯が出土しており、古代の遺構である可能性がある。

ピット74 (第295・315図 図版219)

北部に位置し、径約0.6m、深さ約0.3mである。半分程度遺存している土師器鉢などが出土した。古代の遺構である可能性がある。

ピット75 (第295・319図 図版125・244)

北部に位置し、径約0.2m、深さ約0.1mである。椀形滓が埋土の上部から出土した。他に、黒色土器A類椀、土師器の細片が出土している。

鉄滓は分析をおこなっており、結果をIV 第4章に記載している。

ピット76 (第295図)

中央部に位置し、径約0.4m、深さ約0.3mである。建物として復元できなかったが、断面観察から柱穴であると思われる。遺物は出土していない。

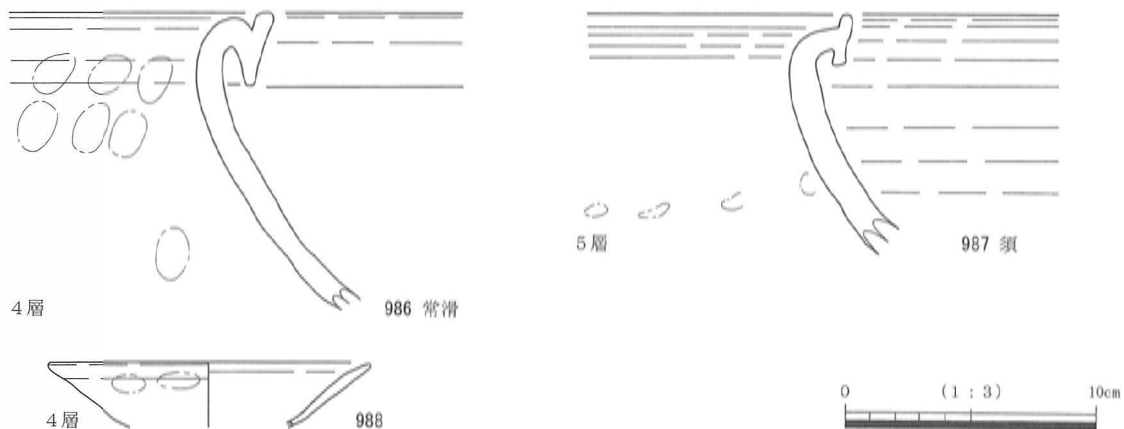
ピット77 (第295図)

中央部に位置し、径約0.4m、深さ約0.5mである。断面観察から柱穴であると思われる。

遺物は出土していない。

ピット78 (第295・315図 図版219)

中央部に位置し、径約0.3m、深さ約0.4mである。埋土に炭片を含む。



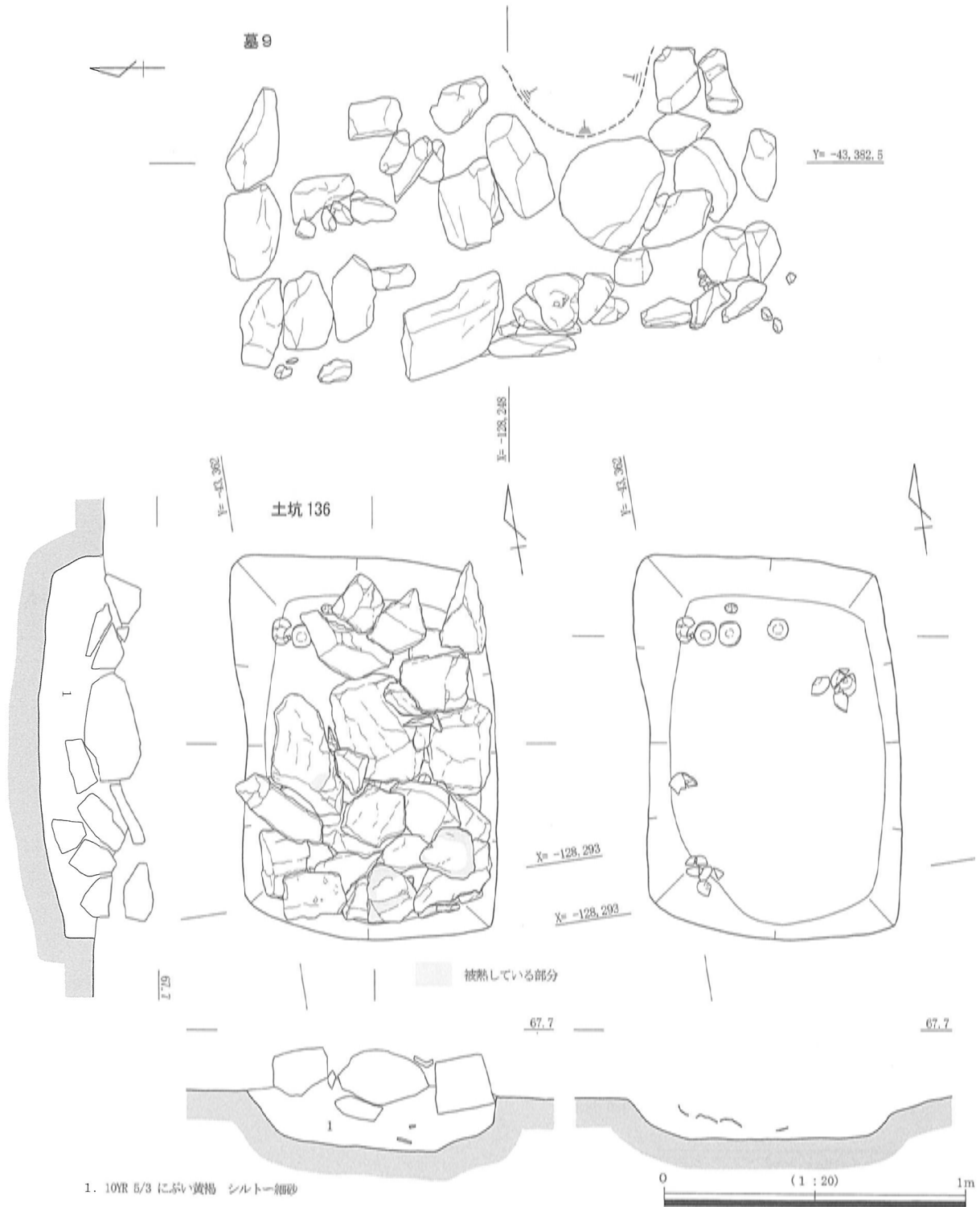
第308図 井戸8 出土遺物(8)(4層・5層)

土師器甕片などが出土した。古代のものである可能性がある。

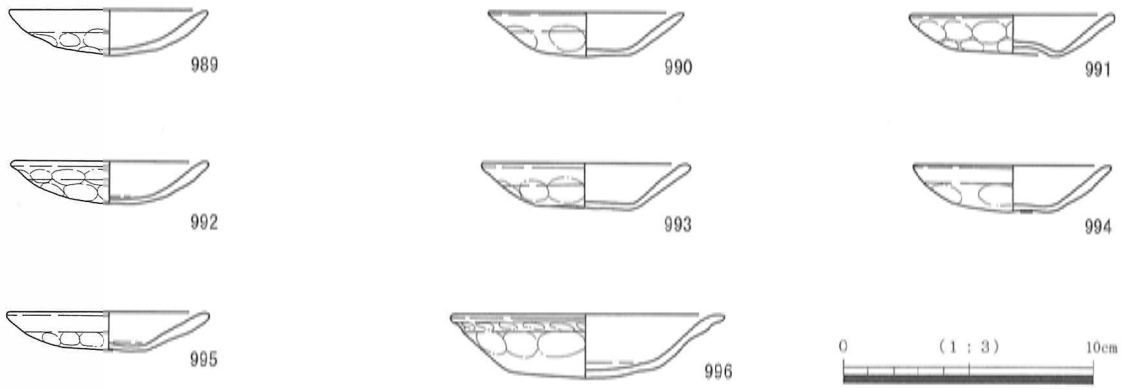
ピット79 (第321図)

中央部の段丘崖肩部に立地する。径約0.5mの円形で、深さ約0.3mである。土坑112・115などと同様の、特徴的な埋土である。

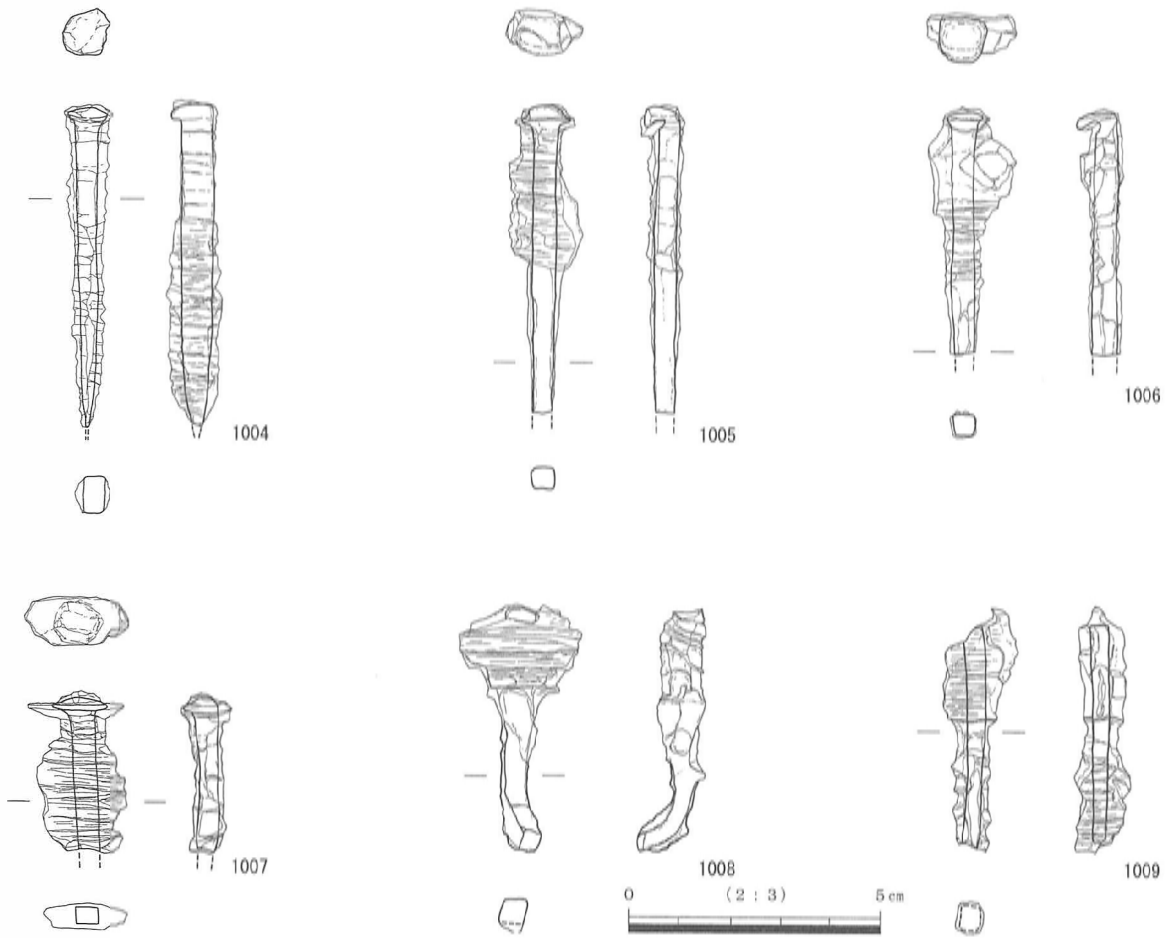
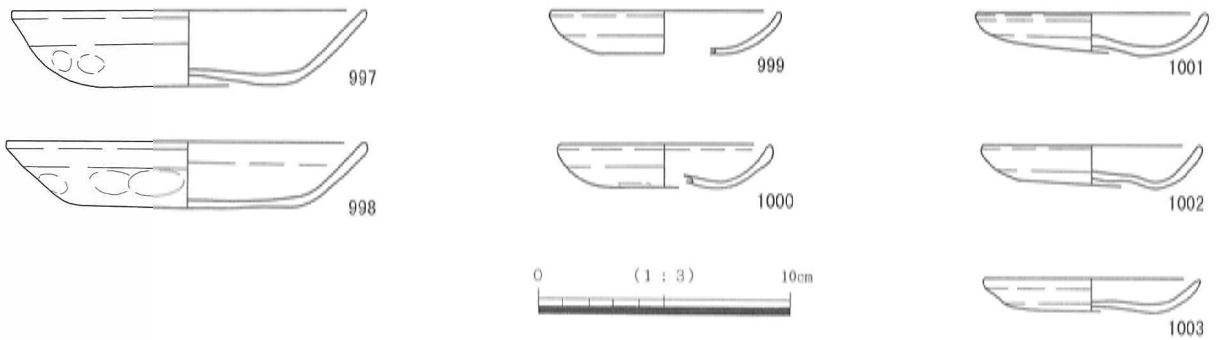
遺物は、瀬戸焼褐釉天目椀の小片が出土している。



第309図 墓9 土坑136 平面・断面図

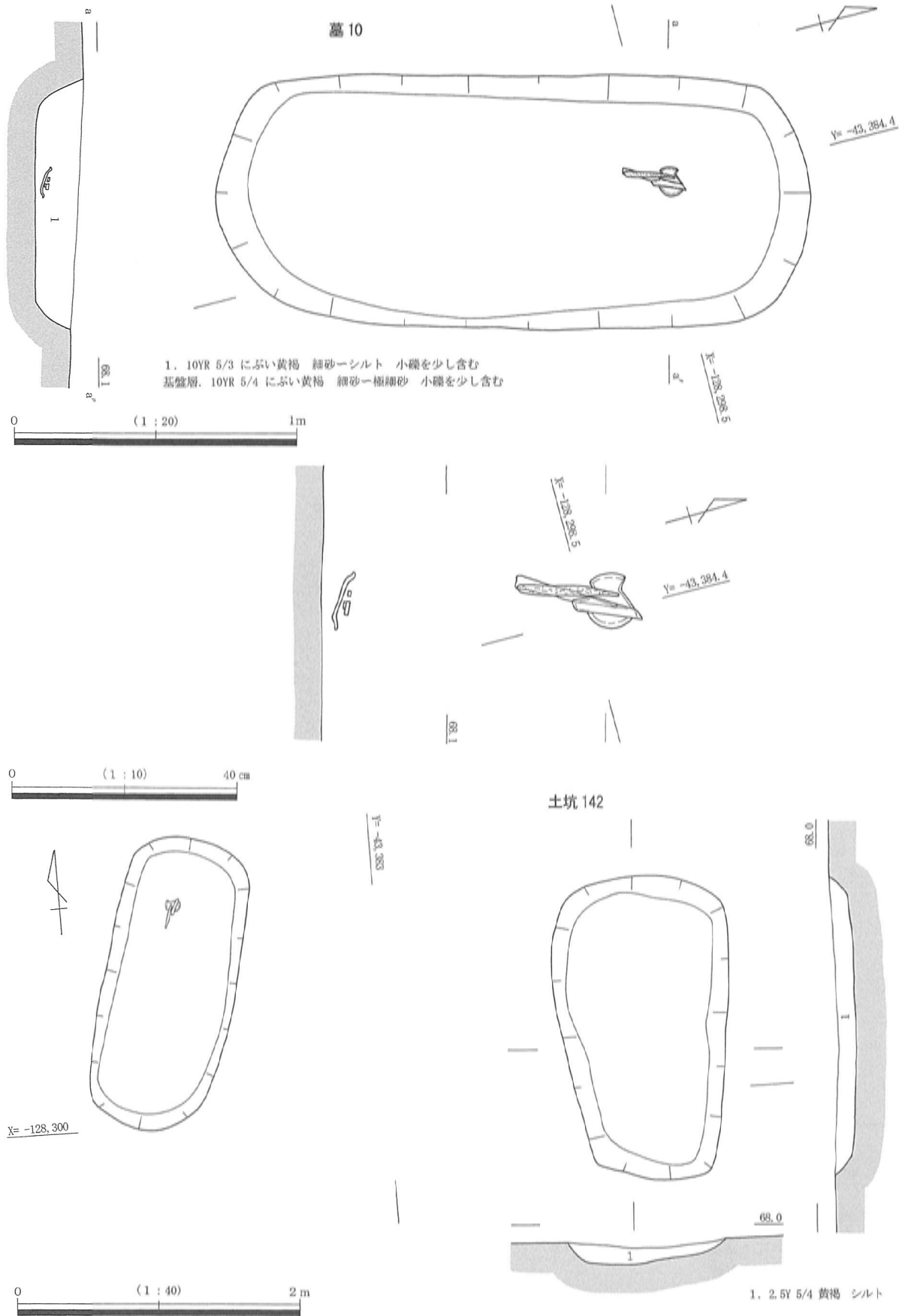


第310图 土坑136 出土遺物

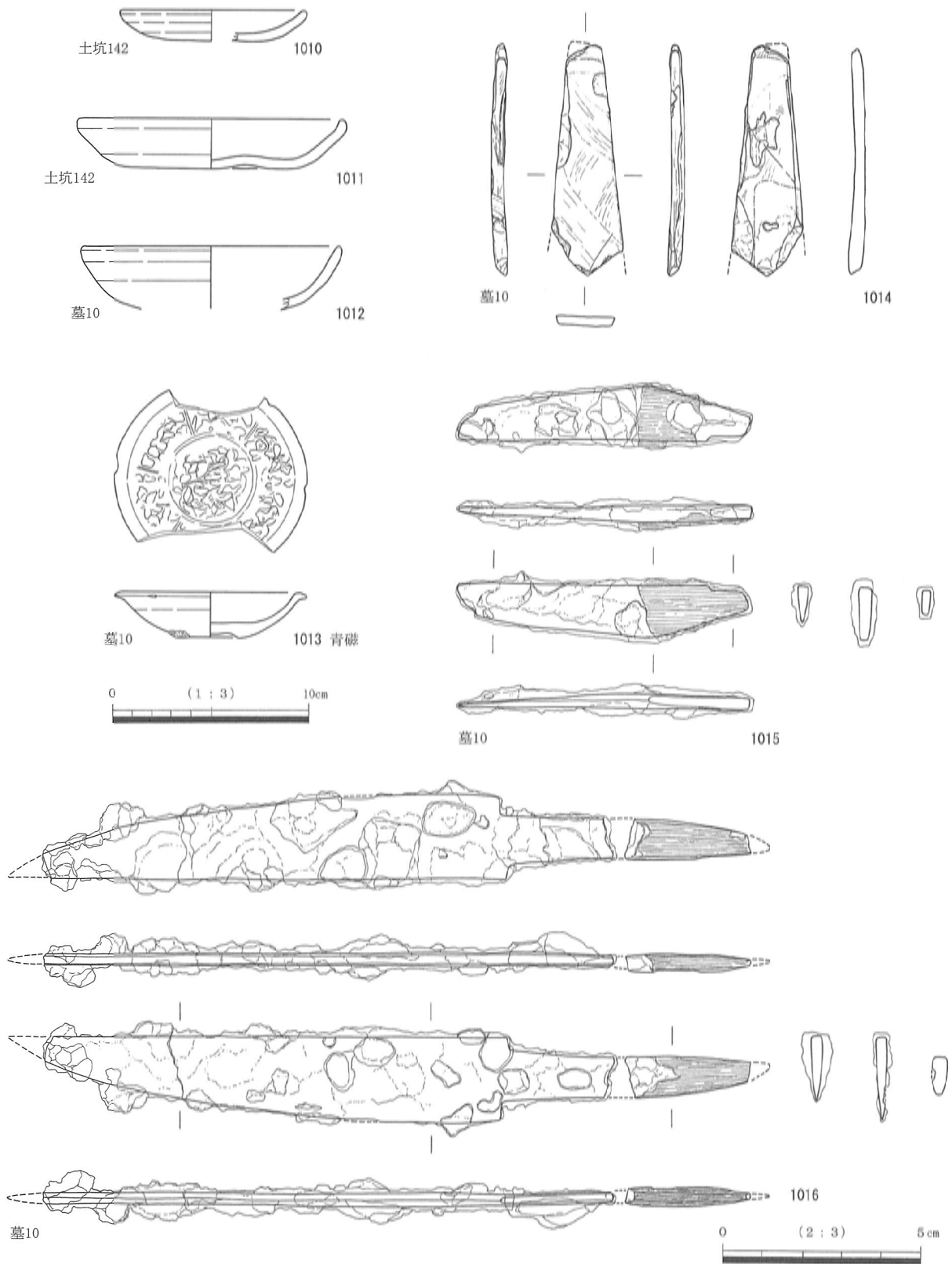


第311图 墓9 出土遺物 (2/3 = 1004~1009)

第3節 丘陵上東部(q城)



第312図 墓10 土坑142 平面・断面図



第313图 墓10 土坑142 出土遺物 (2/3 = 1015 · 1016)

ピット80 (第324・325図 図版220)

中央部に位置し、楕円形で、長径約0.4m、短径約0.3m、深さ約0.1mである。

ほぼ完形の瀬戸焼水滴が出土した。

ピット81 (第295図)

中央部の段丘崖肩部に立地する。径約0.2m、深さ約0.2mである。底面に石があり、根石をもつ柱穴である可能性がある。遺物は出土していない。

ピット82 (第324・325図 図版220)

中央付近の段丘崖肩部に立地する。径約0.4m～0.5mの楕円形で、深さ約0.4mである。断面観察から、柱穴である可能性が考えられる。北寄りの埋土の上部から完形に近い瓦器椀が1点出土した。高台をもたず、13世紀後葉以降のものと思われる。

ピット83 (第321・323図)

中央部の段丘崖肩部に立地する。楕円形で、長径約0.7m、短径約0.4m、深さ約0.5mである。土坑112・115などと同様の特徴的な埋土である。

遺物は、土師器、瓦質羽釜の小片が出土している。14世紀のものと思われる。

ピット84 (第321・323図 図版219)

中央部の段丘崖肩部に立地する。円形または隅丸方形で、径約0.5m、深さ約0.4mである。埋土は、土坑112・115と同様の特徴的なものである。

遺物は、土師器、瓦器の小片が出土した。13世紀後葉～14世紀前葉のものと思われる。

ピット85 (第321図)

中央部に位置し、径約0.5m、深さ約0.3mである。底面に平らな石が置かれており、これが根石であれば柱穴であると思われる。土坑112・115などと同様の特徴的な埋土である。

遺物は、出土していない。

ピット86 (第295図)

中央部に位置し、径約0.4m、深さ約0.1mである。底面に平らな石があり、これが根石であれば柱穴であると思われる。

ピット90 (第295・325図)

南部に位置する。円形、または隅丸方形で、径約0.5m、深さ約0.2mである。検出面と同じレベルで、土師器皿小片が出土した。埋土の上部に含まれていたと想定され、複数枚分かと思われる。12世紀後葉～13世紀前葉のものである。

ピット91 (第295図)

南部に位置し、径約0.4m、深さ約0.3mである。埋土に10～30cm大の礫を3点含む。

遺物は出土していない。

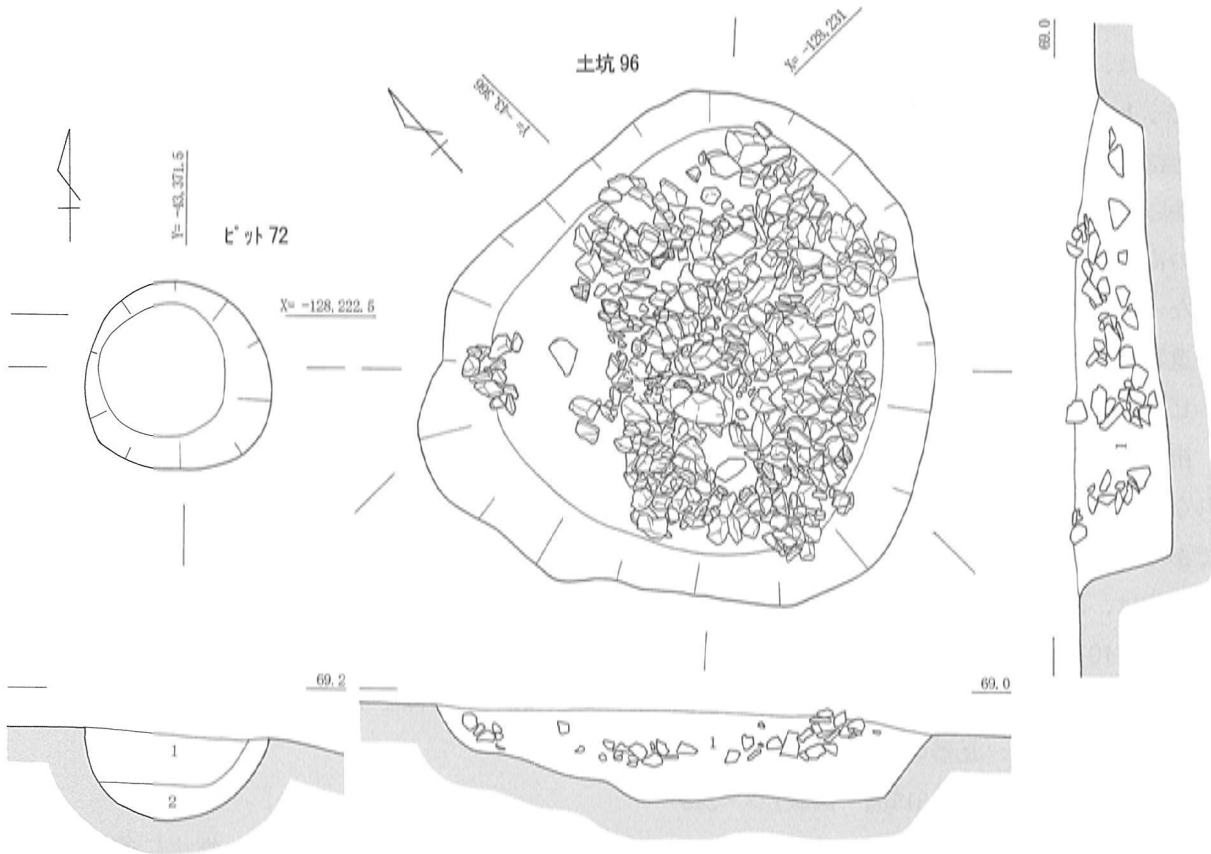
ピット93 (第324・325図 図版125)

南部に位置し、径約0.3m、深さ約0.2mである。検出面と同じレベルで、70%程度遺存している土師器皿が出土した。埋土の上部に含まれていたものと思われる。

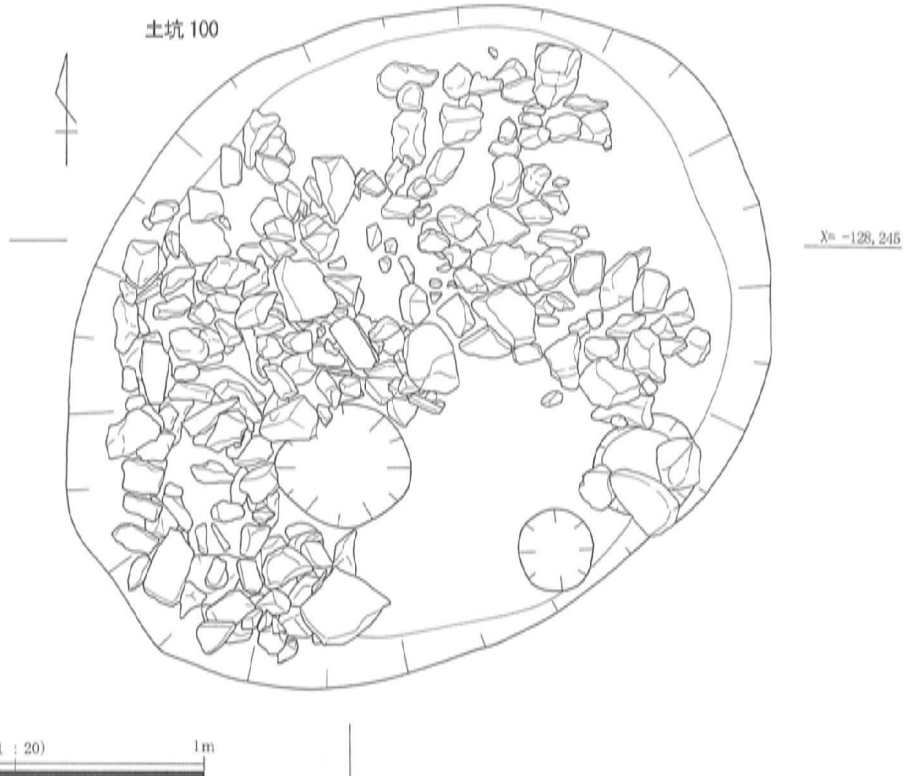
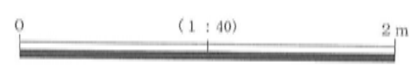
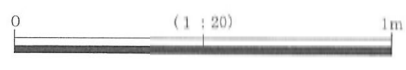
土師器皿は12世紀後葉～13世紀前葉のものである。

ピット96 (第295図)

南部に位置し、径約0.4m、深さ約0.2mである。根石の可能性のある礫を底面にもつ。礫の平面形は



- 1. 焼土粒・炭化物・灰
- 2. 2.5Y 5/3 黄褐 シルト質細砂 炭化物粒若干含む
- 1. 10YR 4/3 に5%黄褐 シルト質細砂 粗砂・小礫多く含む 炭化物粒若干含む



第314図 ピット72 土坑96・100 平面・断面図

南北約18cm、東西約10cmの不定形で、検出状態の高さは約5cmである。土坑128を切っている。

遺物は、土師器小片、常滑焼片などが出土している。13~14世紀のものと思われる。

ピット99 (第295図)

南部に位置し、径約0.5m、深さ約0.2mである。埋土は、2.5Y 6/3 黄褐色シルトで、柱痕はみられなかった。根石の可能性ある礫を埋土中に含む。礫は比較的平らで薄く、長さが25cm~30cm、検出状態の高さは約9cmである。底面からは浮いており、やや斜めになっているが、上面が比較的平らな状態となっている。

遺物は出土していない。

ピット100 (第295図)

南部に位置し、径約0.3m、深さ約0.2mである。埋土は10Y R 4/2 灰黄褐色砂質土で、柱痕はみられなかった。根石の可能性ある礫を底面にもつ。礫は平らで薄く、平面形は南北約25cm、東西約16cmである。

遺物は、出土していない。

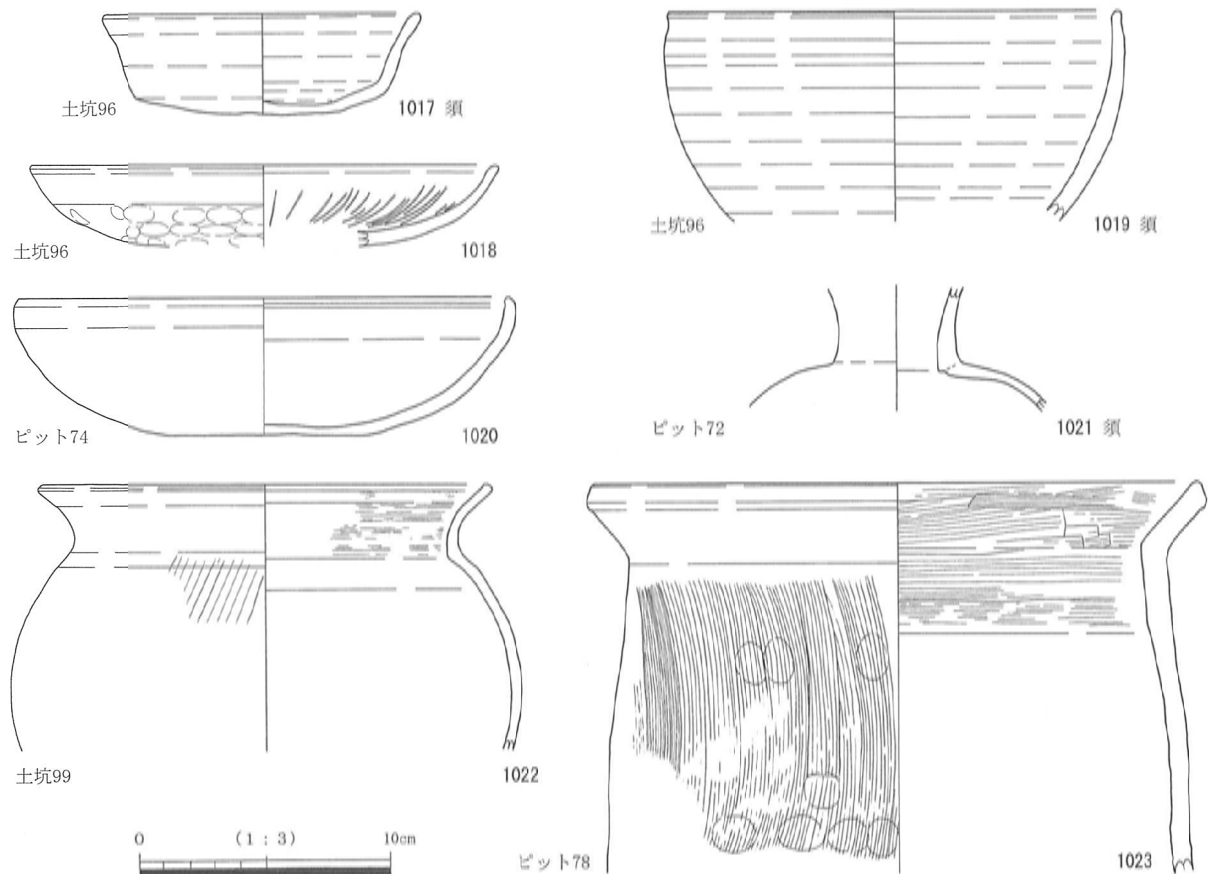
ピット101 (第295図)

南部に位置し、径約0.4m、深さ約0.2mである。20cm~30cm大の礫を上層に含む。

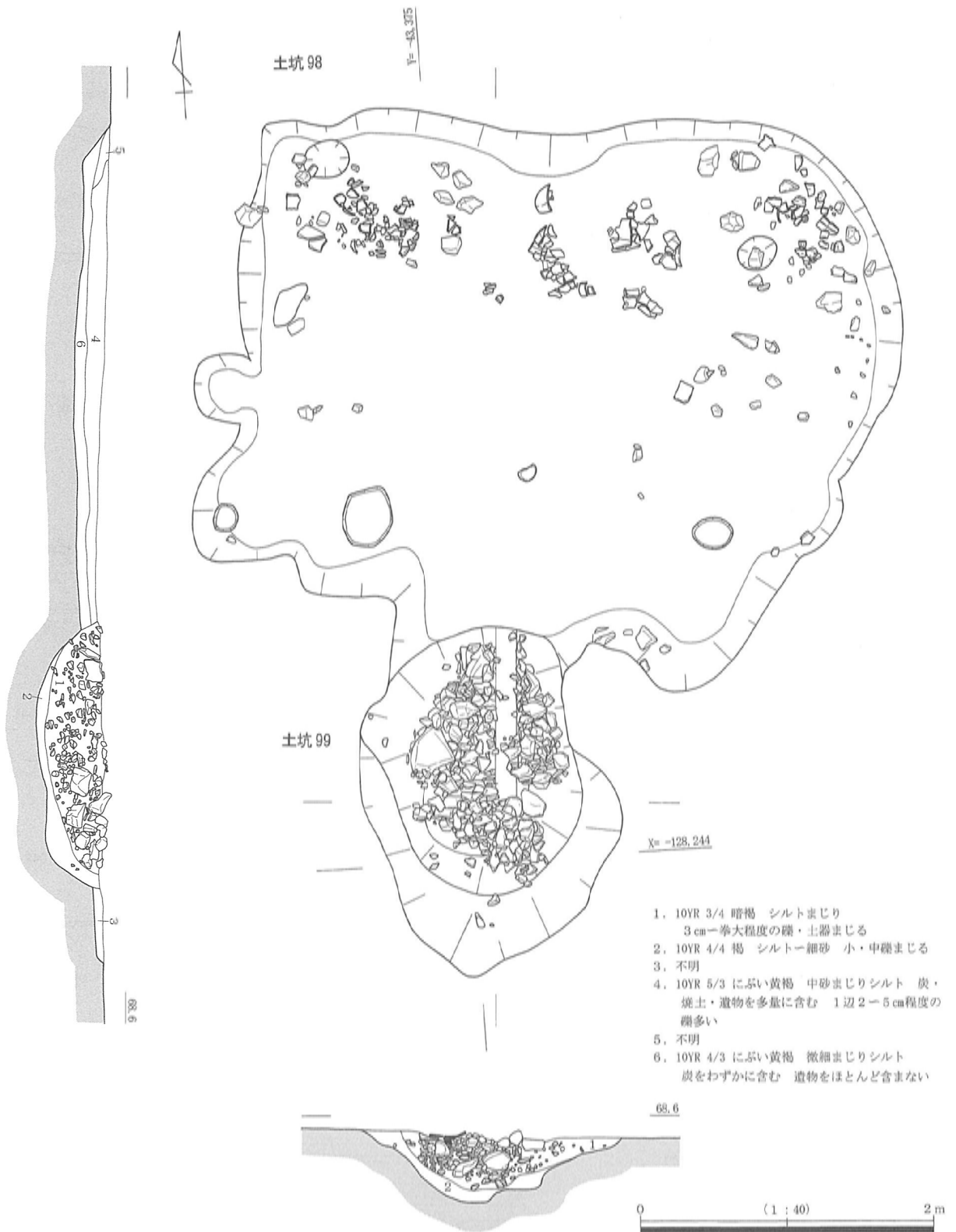
遺物は、土師器、瓦器の小片が出土したのみである。

土坑96 (第295・314・315図 図版123・219)

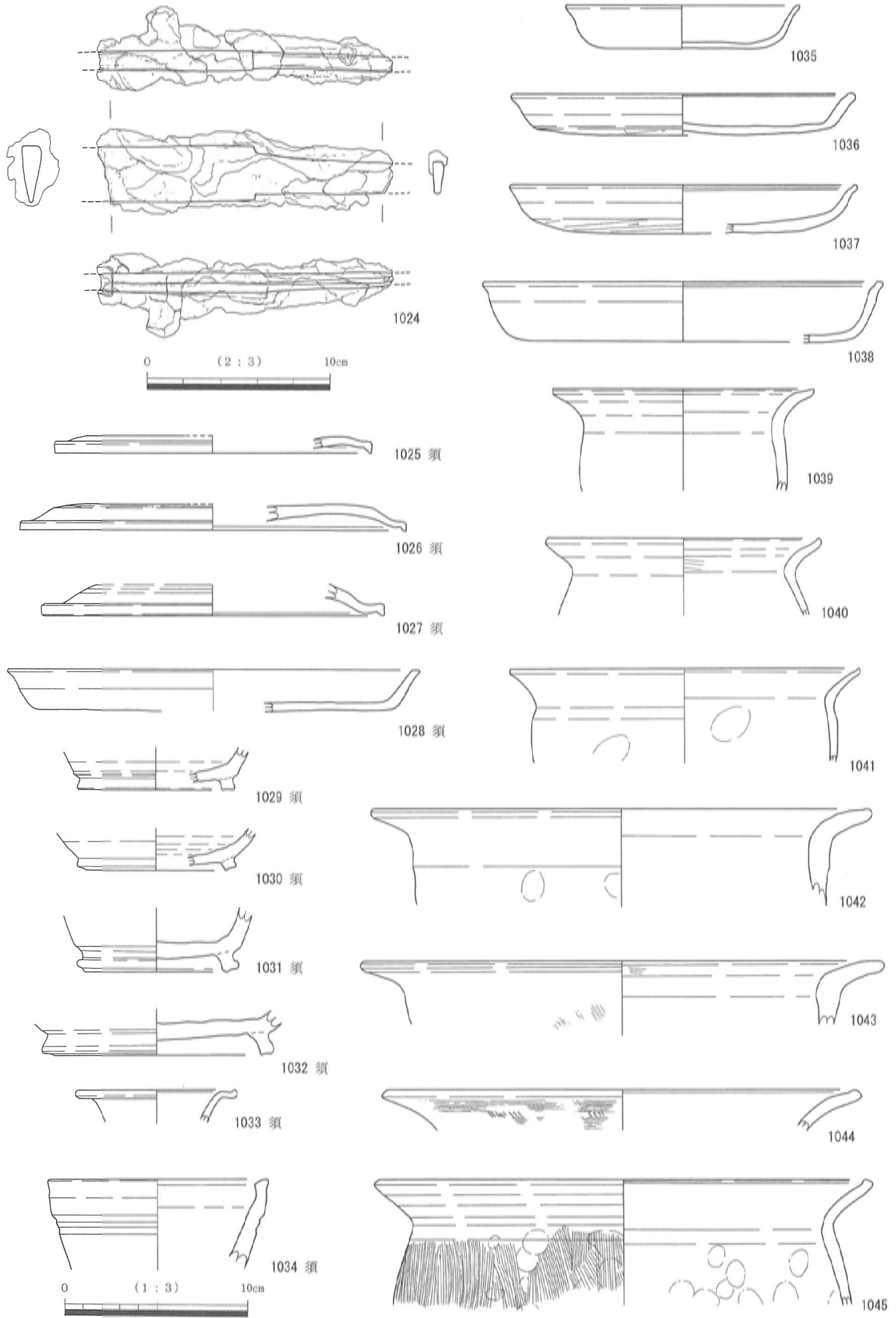
北部に位置する。不整円形で、南北約2.7m、東西約2.8m、深さ約0.5mである。埋土に多量の礫を含む。



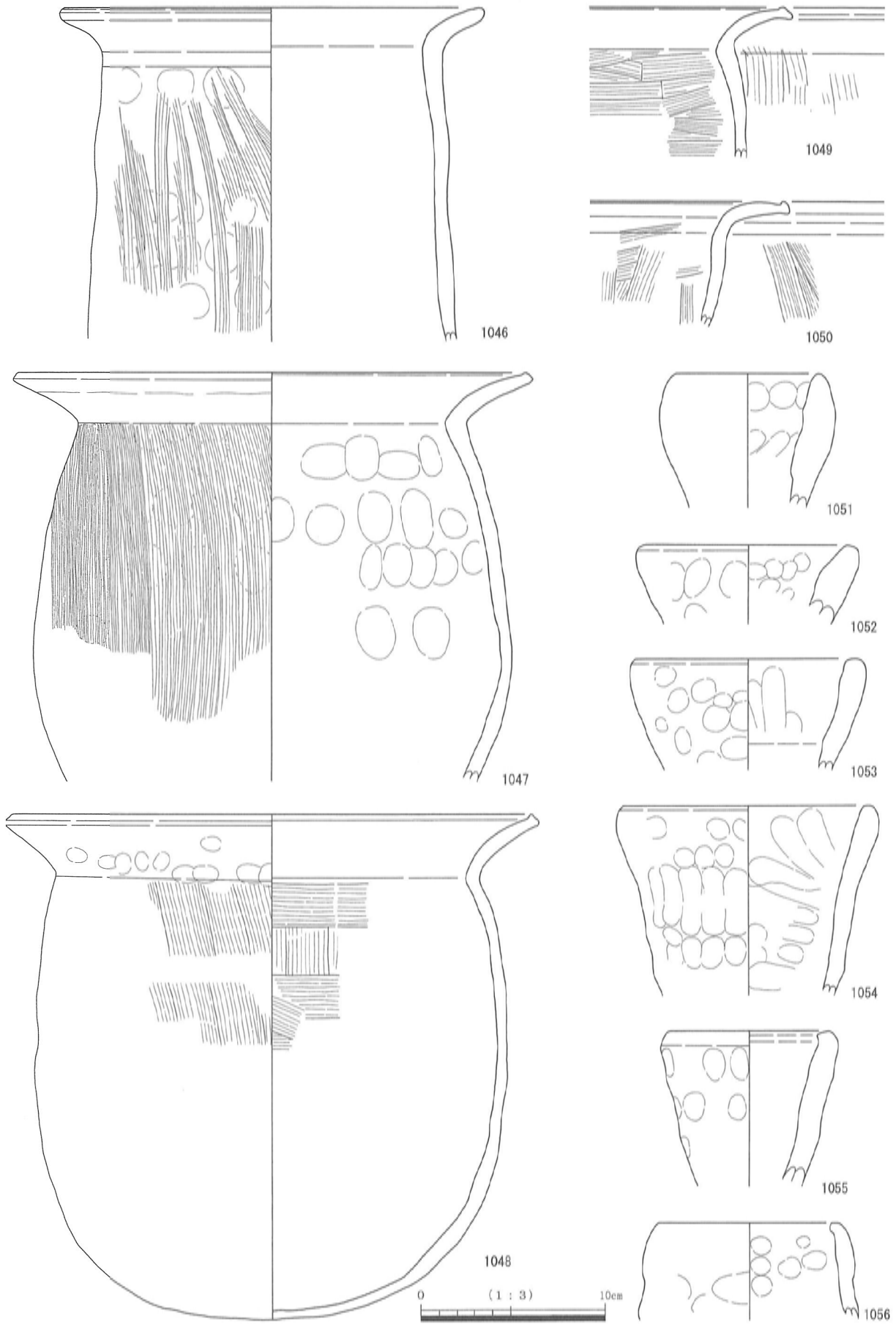
第315図 ピット72・74・78 土坑96・99 出土遺物



第316図 土坑98・99 平面・断面図



第317図 土坑98 出土遺物(1) (2/3 = 1024)



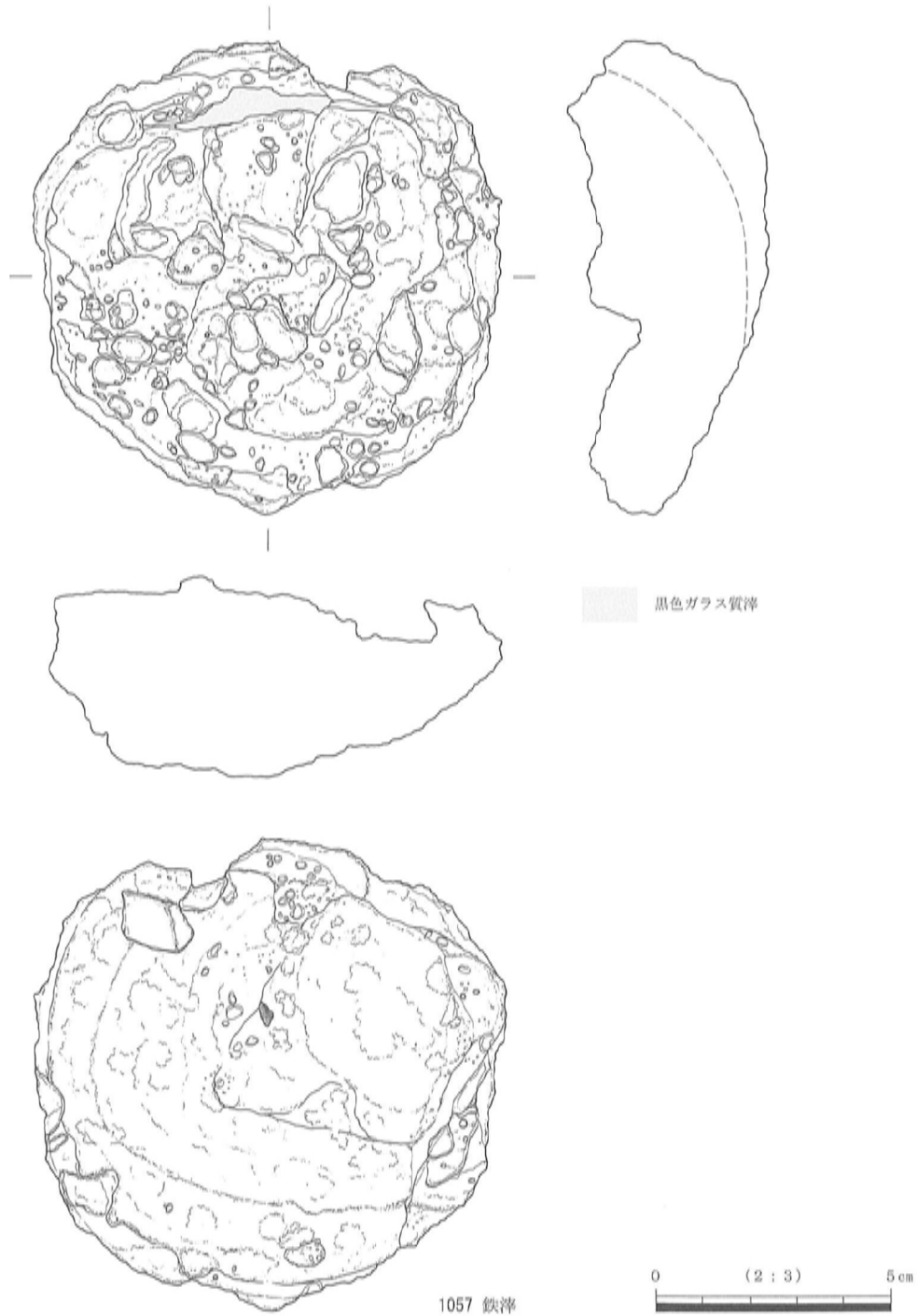
第318図 土坑98 出土遺物(2)

遺物は、ほぼ完形の須恵器杯A、半分程度遺存している土師器杯Cのほか、須恵器鉢などの小片、焼土片が出土している。8世紀前葉～中葉のものと思われる。

土坑98 (第295・316～318図 図版124・217・218・242)

中央部に位置する、隅丸方形に近い不定形の大型土坑で、南北約3.4m、東西約4.5m、深さ約0.2mである。同じく古代の遺物を含む土坑99に切られている。

比較的多くの遺物が出土したが、すべて小破片である。須恵器も含むが土師質が多く、土師器甕、製塩土器が目立つ。甕、製塩土器共に複数個体の破片である。刀子も1点出土している。8世紀中葉～後



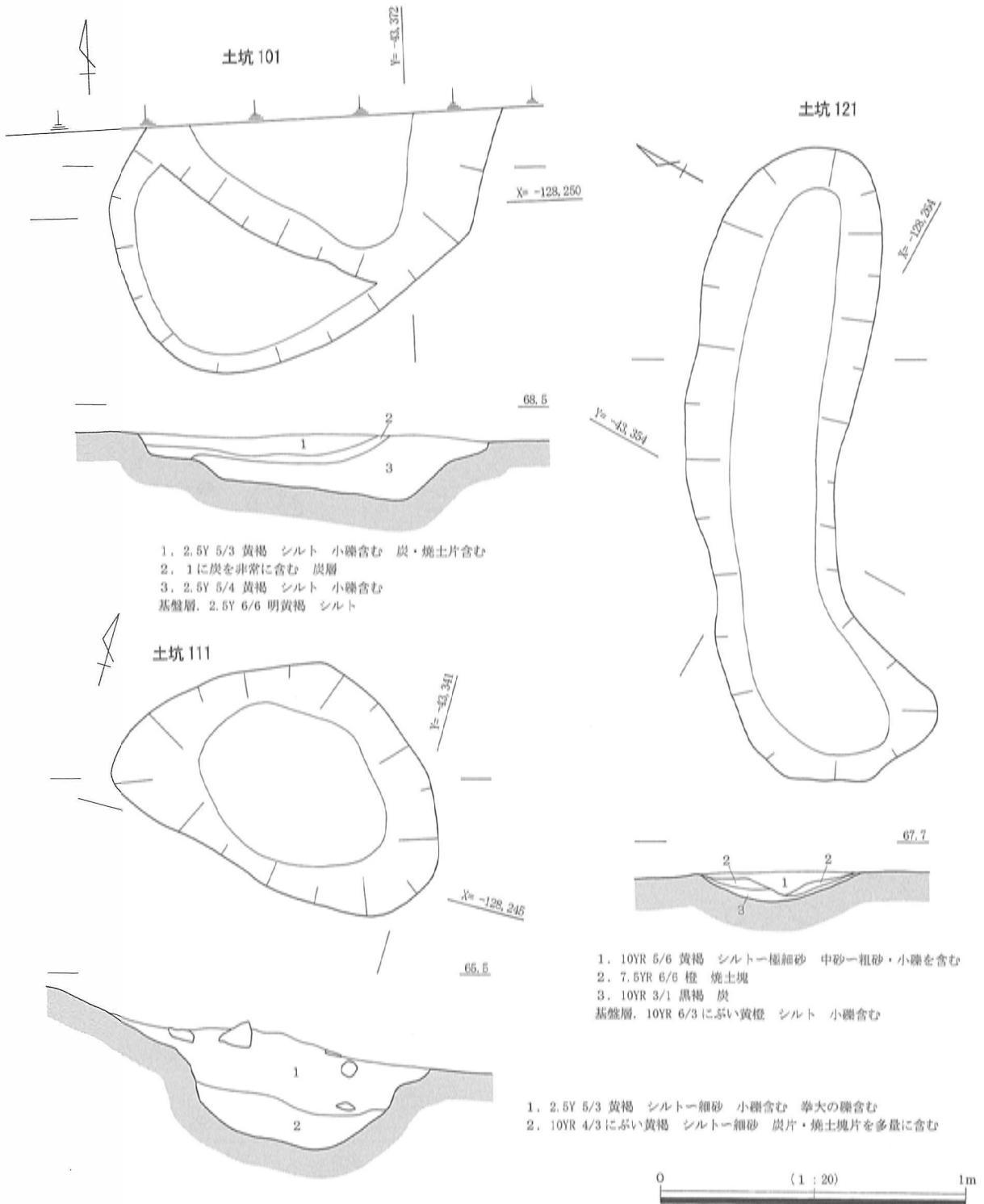
第319図 ピット75 出土遺物 (2/3)

葉のものと思われる。

土坑99 (第295・315・316図 図版124)

中央部に位置する。不定形で、南北約2.4m、東西約1.7m、深さ約0.5mである。壁の立ち上がりは緩やかで、播鉢状である。埋土は2層で、上層に多量の礫と遺物が含まれる。8世紀の遺構である土坑98を切っている。

遺物は、須恵器甕、土師器甕などの破片がある。須恵器甕の体部片が目立つ。詳細な時期は不明であ



第320図 土坑101・111・121 平面・断面図

るが、古代の遺構であると考えられる。

土坑100 (第314図)

中央部に位置する。楕円形で、長径約2.0m、短径約1.7m、深さ約0.2mである。多くの礫を含む。遺物は、土師器杯Aの小片1点のみである。

土坑101 (第320図)

中央部に位置する。北部分が調査用筋掘りにかかり、全形が確認できない。遺存部分の東西長約1.2mで、深さ約0.2mである。埋土の中層が薄い炭層で、上層に炭、焼土片を含む。

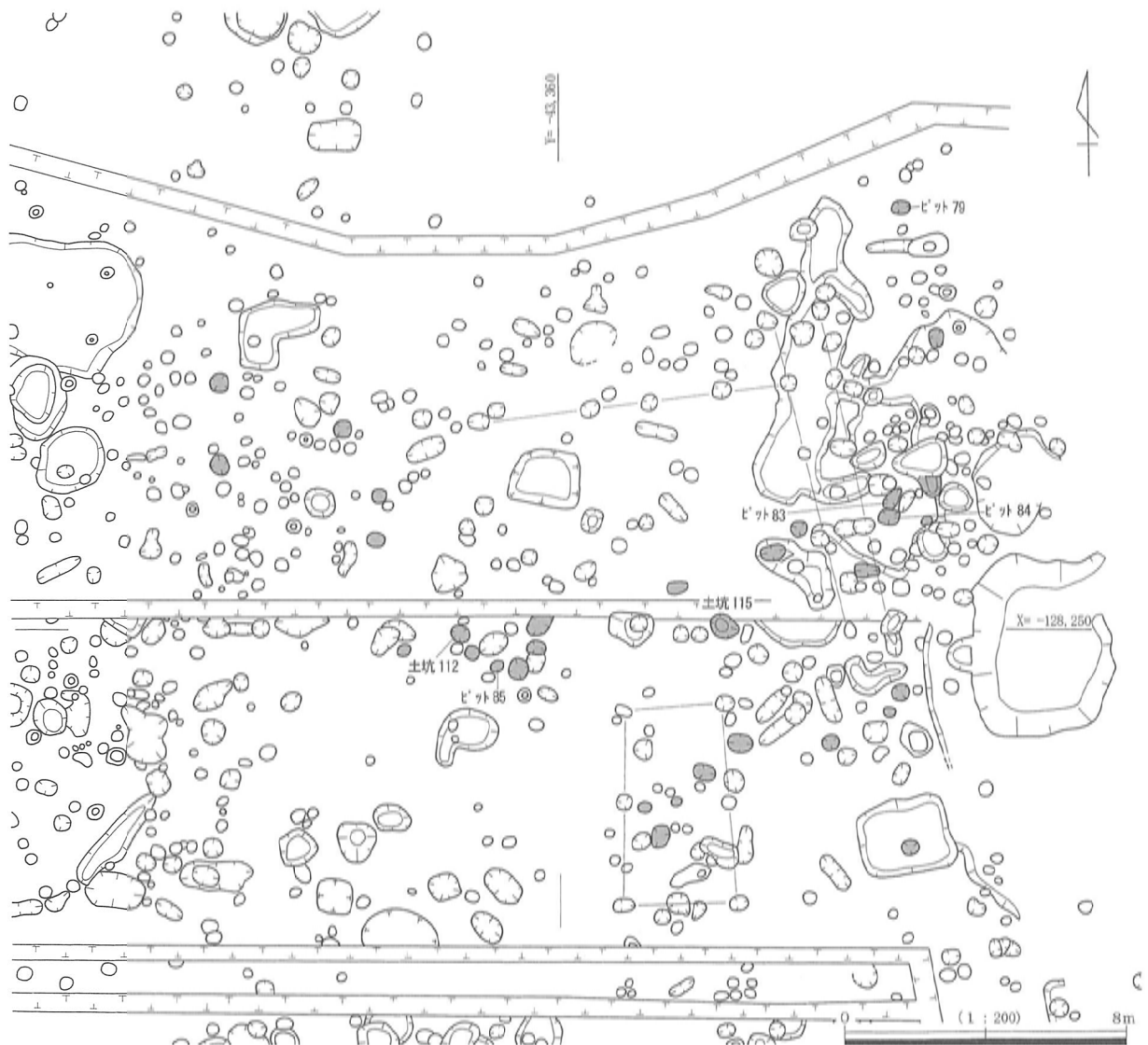
遺物は、須恵器小片などが出土したのみである。

土坑103 (第324・325図 図版124・220)

中央部に位置する。径約0.7mの円形で、深さ約0.4mである。北よりの埋土上部から完形の土師器皿が出土した。土師器は、12世紀中葉～後葉のものと思われる。

土坑107 (第326図)

中央部に位置する。長径約0.8m、短径約0.7mの楕円形で、深さ約0.6mである。礫を多く含む。木の根による攪乱が著しい。



第321図 土坑112・115と同様な埋土をもつ遺構 平面分布図

瓦器の細片、焼土片が出土した。

土坑108 (第324・325図 図版124・220)

中央部に位置する。長径約0.6m、短径約0.5mのやや歪な円形で、深さ約0.4mである。土坑の北端部分、検出面と同じレベルで、完形の瓦器椀1個と土師器小皿2枚が出土した。埋土の上部に含まれていたと思われる。いずれも、やや傾いているが正置の状態で、瓦器椀の上に皿2枚が重なっている。13世紀後葉のものである。

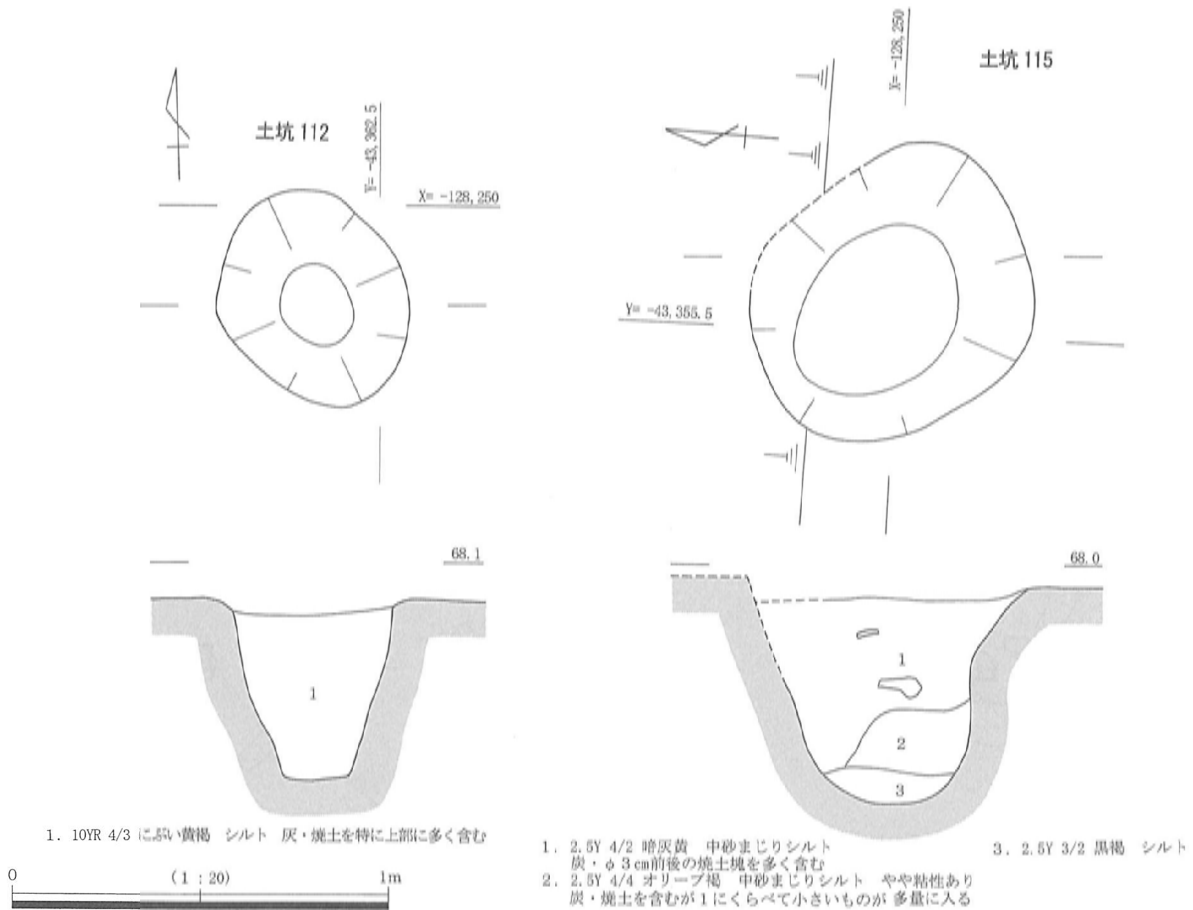
土坑109 (第326図)

中央部の、川合裏川段丘面にいたる崖の肩部分に立地する。やや歪な楕円形で、長径約1.5m、短径約0.9m、深さ約0.3mである。礫を多く含む。

遺物は、瓦器、東播系須恵器鉢、瓦質脚付羽釜などの小片が出土している。瓦器は13世紀代のものがある可能性がある。

土坑110 (第295図)

中央部の川合裏川段丘面にいたる崖の肩部分に立地する。楕円形で、南北約3.0m、東西約2.0mである。礫を非常に多く含む。



第322図 土坑112・115 平面・断面図



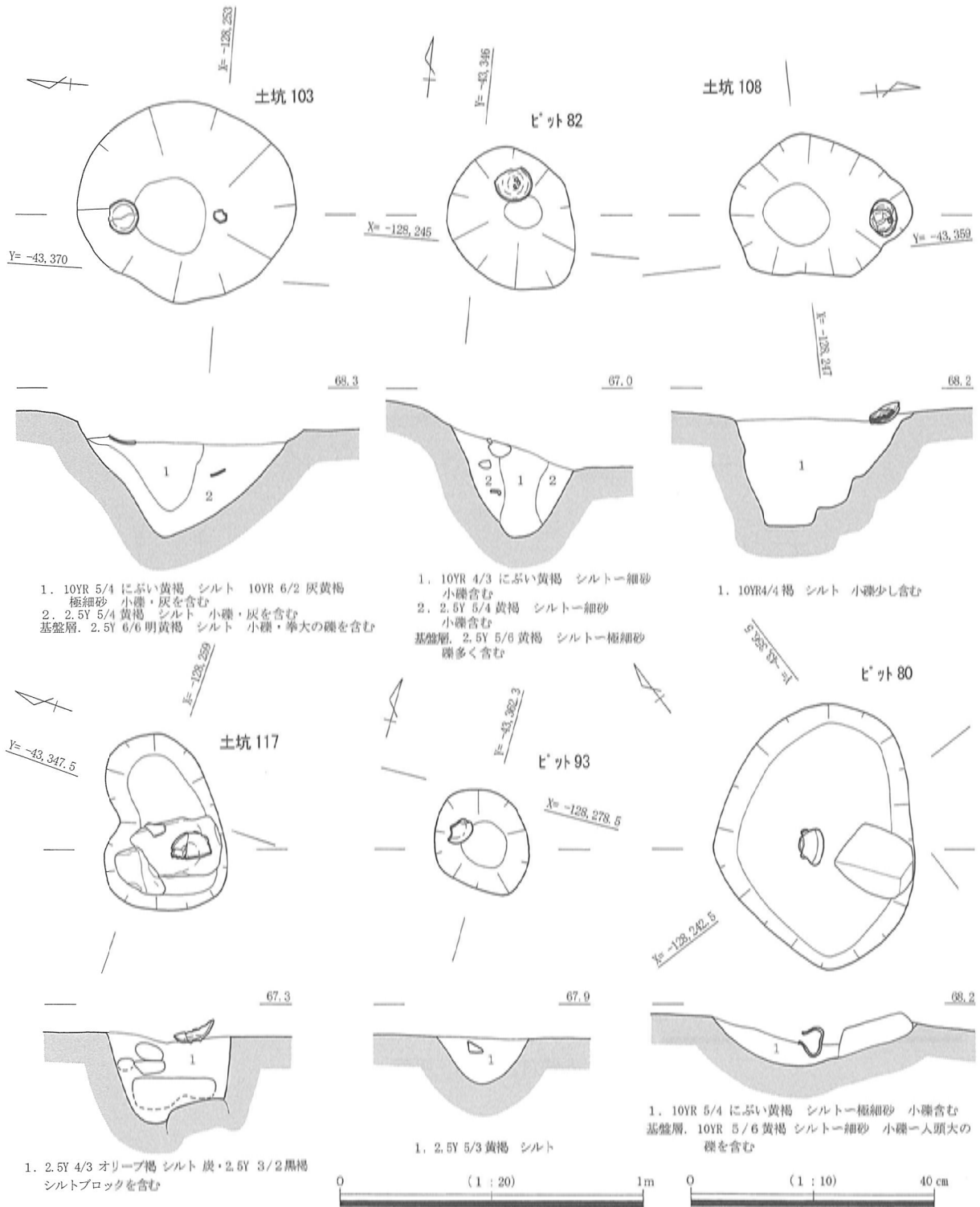
第323図 ピット83・84 出土遺物

遺物は、土師器皿、瓦器、瓦質土器、常滑焼甕、焼土片が出土している。13～14世紀代のものである。

土坑111 (第320図)

中央部の段丘崖際に立地する。長径約1.1m、短径約0.7mの楕円形で、深さ約0.2mである。

埋土に炭、焼土塊を多量に含む。



第324図 ピット80・82・93 土坑103・108・117 平面・断面図 (ピット80のみ1/10)

土坑112 (第321・322図 図版124)

中央部に位置し、楕円形で、長径約0.6m、短径約0.5m、深さ約0.5mである。遺物は出土していない。

同様な埋土をもつ遺構が周辺に約30基みられる。おおよその土色、土質は、10Y R 4/3にぶい黄褐色、シルト～細砂(小礫含む)である。焼土・炭片を含むものが多い。いずれにしても、他の遺構の埋土とは容易に判別できる特徴的な埋土である。形態、規模も同様なものが多い。

埋土に焼土、炭を含むが、これらの遺構のなかに被熱痕跡が認められるものは全く存在しない。周辺で火を使う作業がおこなわれたことも想定されるが、該当する明瞭な痕跡は認められない。

根石の可能性のある石をもつピット85もこの埋土であるが、大半の遺構は、規模、断面の状況などから柱穴とは考え難いものである。

土坑113 (第295図)

中央部に位置する。楕円形で、長径約0.8m、短径約0.4m、深さ約0.5mである。底面に平らな石を2個重ねて置いており、これらが根石であれば柱穴であると思われる。

遺物は、瓦器の小片が出土している。

土坑115 (第321・322図)

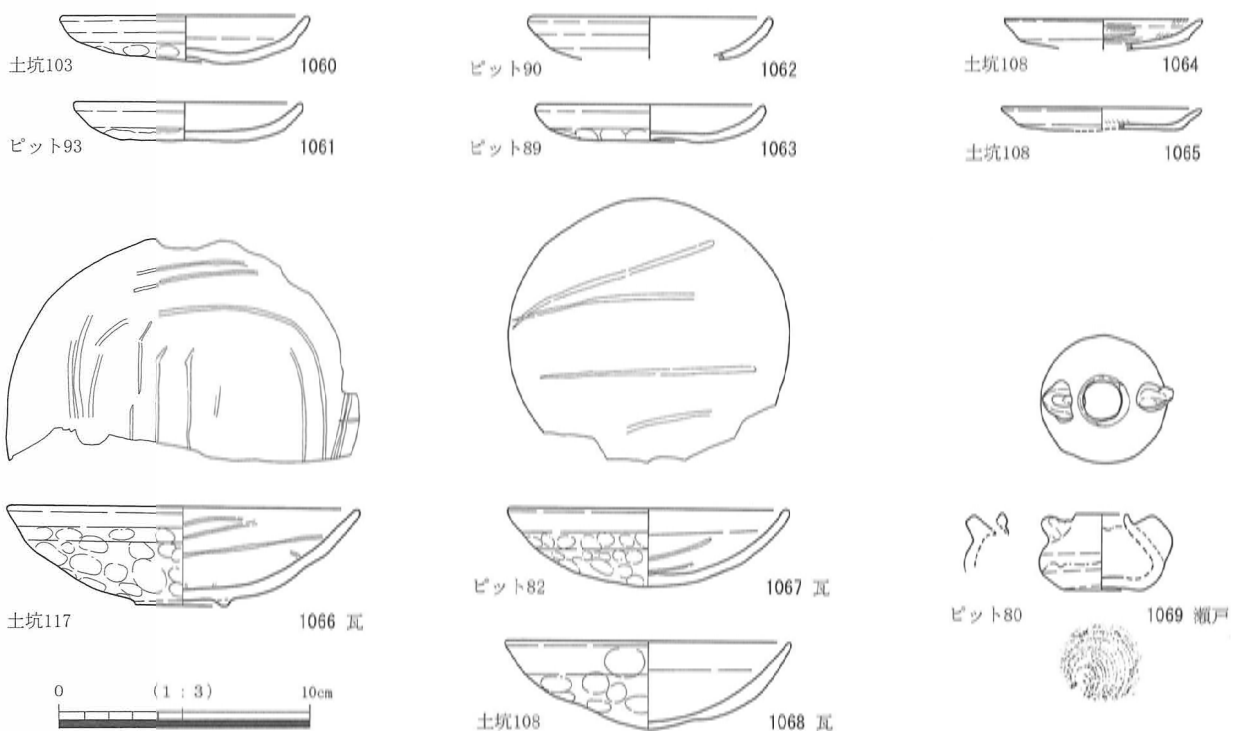
中央部に位置する、径約0.7m～0.8mの楕円形で、深さ約0.6mである。土坑112と同様の特徴的な埋土である。

遺物は、土師器、瓦器の小片が出土したのみである。

土坑116 (第295・337図 図版249)

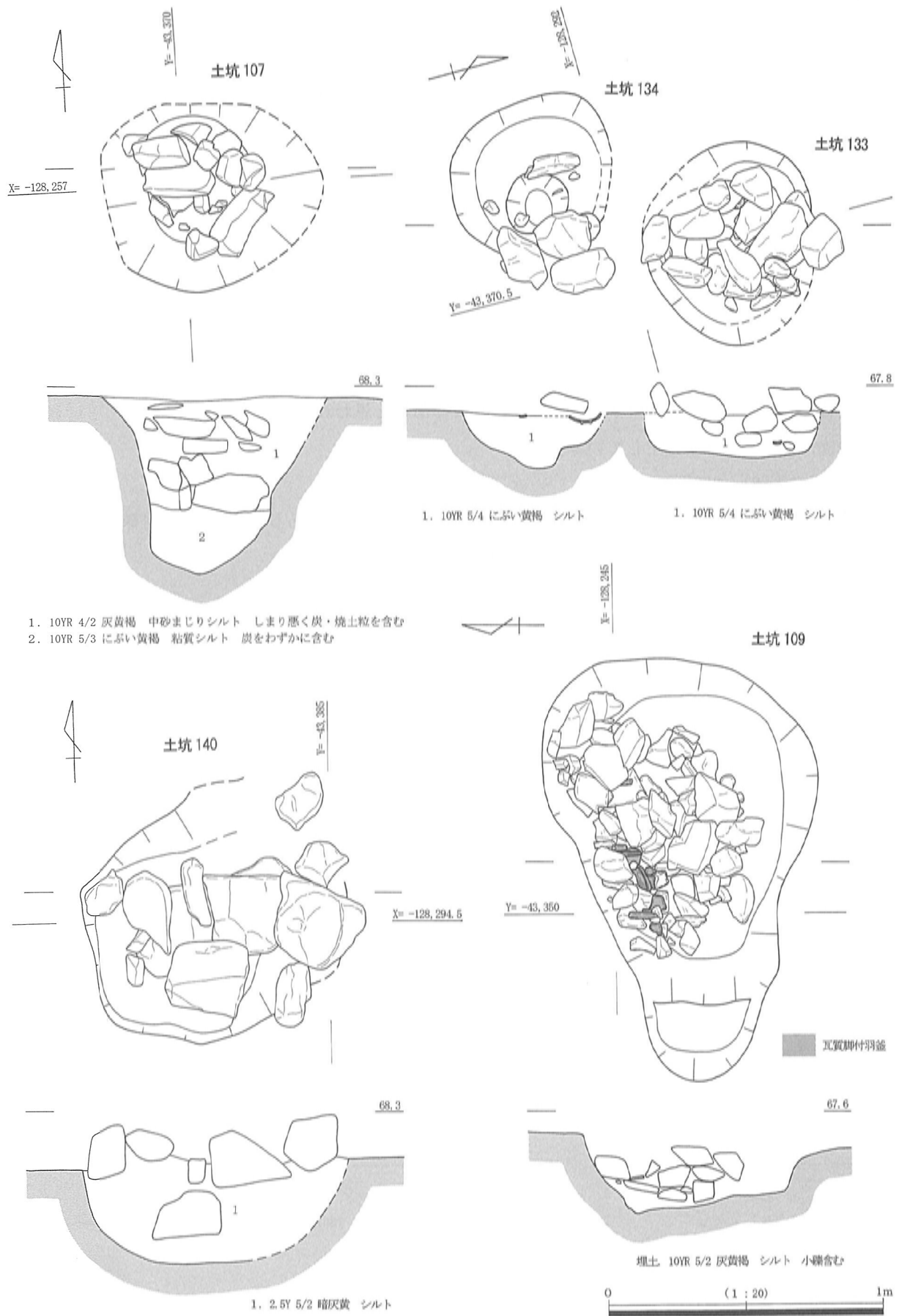
中央部の川合裏川段丘面にいたる崖の肩部分に位置する。隅丸方形で、南北約5.0m、東西約4.2m、深さ約0.4～0.7mである。

遺物は小破片がほとんどで、土師器、瓦器、常滑焼鉢、備前焼播鉢、龍泉窯系連弁青磁碗などの他、砥石2個、刀子、鑄造鉄製品がある。おおよそ13世紀代のものである。

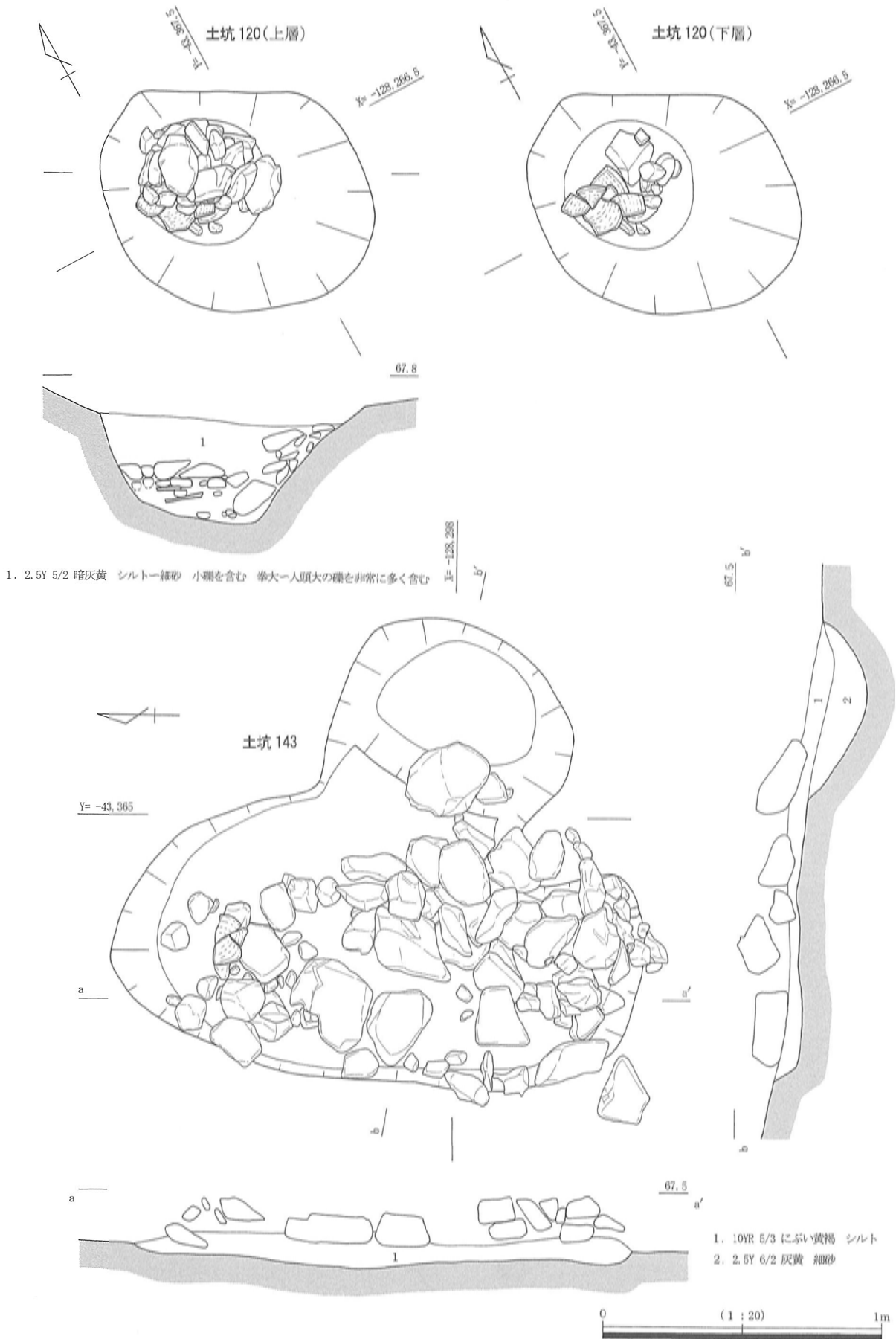


第325図 ビット80・82・90・93 土坑103・108・117 その他の遺構 出土遺物

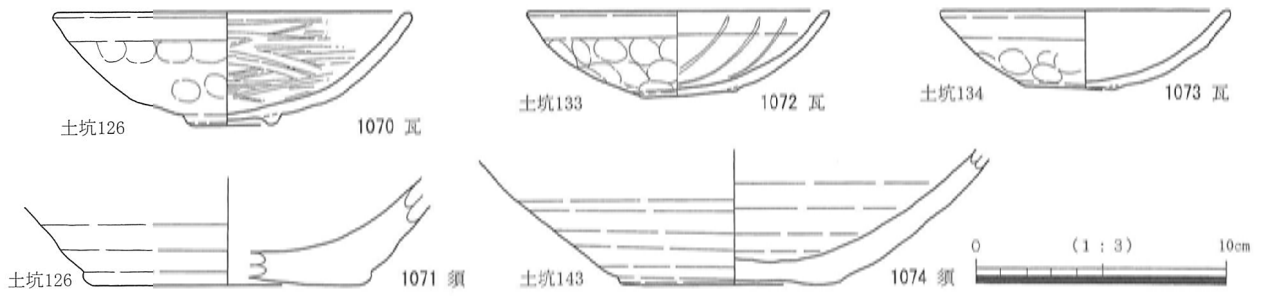
第3節 丘陵上東部(q域)



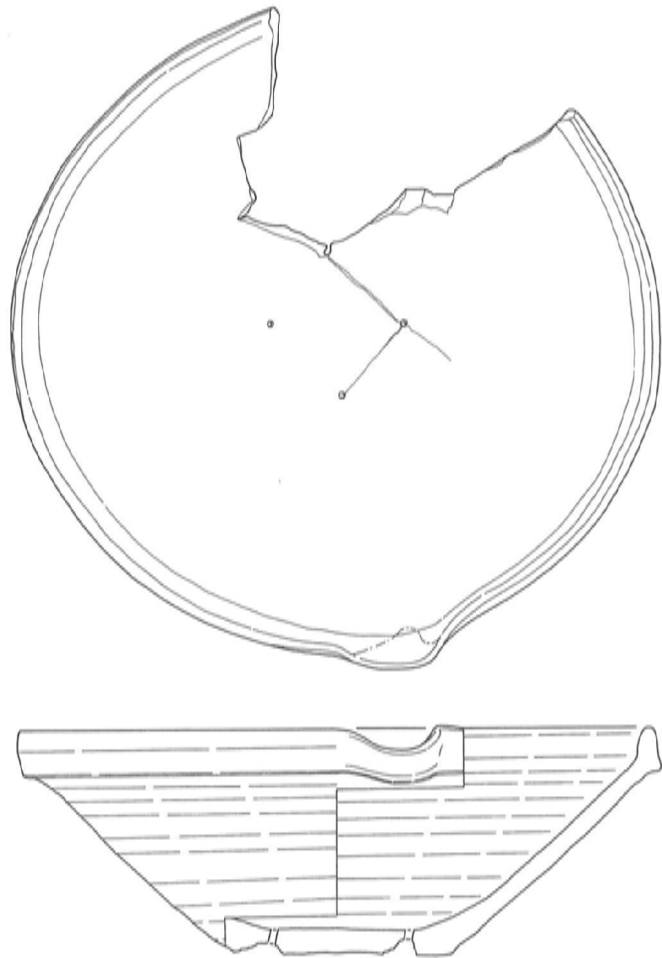
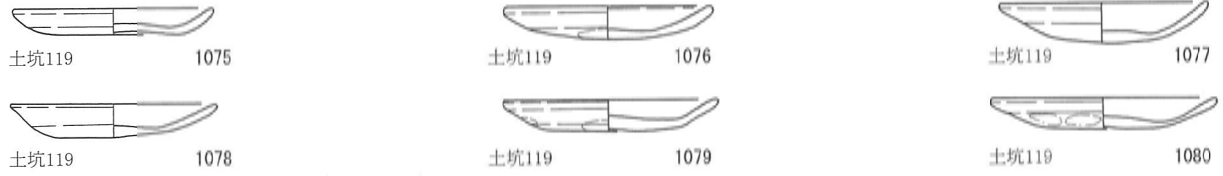
第326図 土坑107・109・133・134・140 平面・断面図



第327図 土坑120・143 平面・断面図



第328图 土坑126·133·134·143 出土遺物



第329图 土坑119·120 出土遺物

土坑117 (第324・325図 図版124)

中央部に位置する。長径約0.6mの楕円形で、深さ約0.3mである。検出面と同じレベルで瓦器椀が出土した。埋土の上部に含まれていたものと思われる。

また、底面で根石の可能性ある礫を検出した。東側に隣接する土坑を切っている。瓦器椀は13世紀前葉～中葉のものと思われる。

土坑119 (第295・329・330図 図版219)

中央部に位置する。輪郭を明確にできず、複数の遺構が切り合っているのか不明である。埋土は細砂混じりシルトで、粘土ブロック、炭、焼土を含む。

完形に近い土師器皿が南北に並んで出土した。土師器、瓦器、連弁青磁碗、陶器などの小片も多く出土している。14世紀前葉のものと考えている。

土坑120 (第295・327・329・330図 図版125・219)

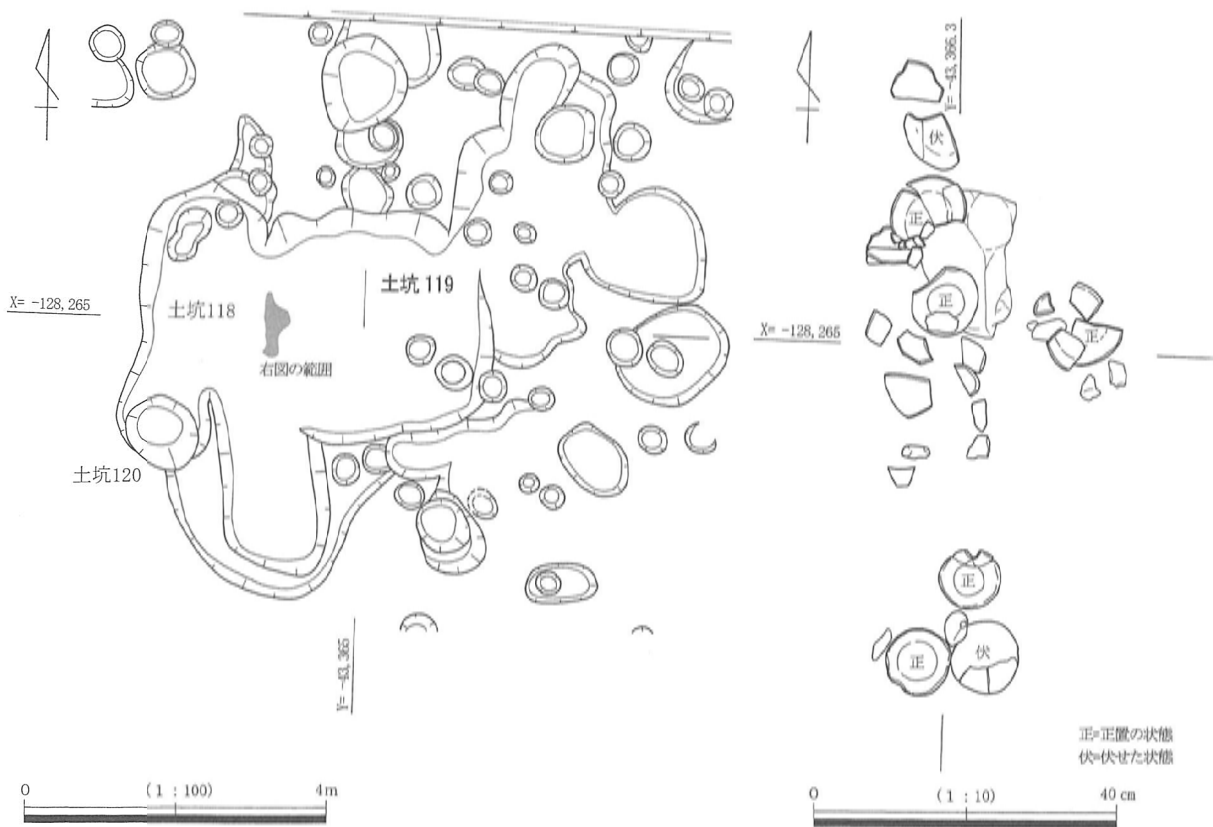
中央部に位置する。楕円形で、長径約1.0m、短径約0.8m、深さ約0.4mである。埋土の下部に多量の礫と東播系須恵器鉢破片を含む。

須恵器鉢は80%以上復元でき、底部4箇所に穿孔がある。孔の直径は0.3cmであるが、外面に径2cm前後の抉りがある。穿孔は焼成後におこなわれたと考えられる。

遺物は、須恵器鉢以外に、瓦質脚付羽釜、瓦器、土師器煮炊具の小片がごく少量出土している。13世紀代のものと思われる。

土坑121 (第320図)

中央部に位置し、長さ約2.1m、幅約0.6mの長細い形状で、深さは約0.1mである。埋土に多量の焼土塊を含む。遺物は出土していない。



第330図 土坑119 平面図

土坑123 (第295図)

南部に位置する。歪な楕円形で、長径約2.4m、短径約1.4m、深さ約0.6mである。埋土上部に、炭、焼土がまとまってみられた。遺物は出土していない。

南西に隣接する部分で、基盤層上面が南北約0.4m、東西約0.5mの範囲で赤色硬化している。土坑自体には被熱痕跡はみられないが、側で火が使われた可能性がある。

土坑124 (第295図)

南部に位置する。楕円形で、南北約2.5m、東西約2.1m、深さ約0.1mである。

遺物は、土師器の小片が出土したのみである。

周辺には同様な規模の土坑125・126などが近接して存在する。

土坑125 (第295図)

南部に位置する、南北約3.1m、東西約2.2m、深さ約0.3mの不定形の土坑である。

遺物は、13～14世紀と思われる青磁碗片が出土している。

同様な規模の土坑124・126などが近接して存在する。

土坑126 (第295・328図)

南部に位置する。南北約3.1m、東西約2.2m、深さ約0.3mの不定形土坑である。

遺物は、瓦器椀、陶器甕などの小片が出土した。瓦器椀は13世紀頃のものと思われる。

同様な規模の土坑124・125などが近接して存在する。

土坑128 (第295・332図 図版220)

南部に位置する。複数の東西溝に切られており、全形は不明であるが、南北2.3m、東西3.0m程度の楕円形かと想定される。深さは約0.3mである。

完形の土師器皿が複数出土した。東西溝からも同様な土師器皿が出土しており、本来は土坑内に含まれていたものである可能性が高い。土師器皿以外には瓦質土器の小片が出土したのみである。土師器皿は14世紀中葉～15世紀前葉のものと思われる。

ピット96に切られている。

土坑133 (第326・328図 図版125)

南部に位置し、径約0.6m～0.7m、深さ約0.2mである。埋土の比較的上部に礫が集積する。

遺物は、土師器皿・煮炊具、須恵器の小片が出土した。13～14世紀のものと思われる。

同様に礫を含む土坑134が南西に隣接する。

土坑134 (第326・328図 図版125・219)

南部に位置する。円形で、径約0.6m、深さ約0.2mである。検出面と同じレベルに礫が数点みられ、埋土上層から完形の瓦器椀が出土した。礫は東部、瓦器椀が北東隅に位置する。

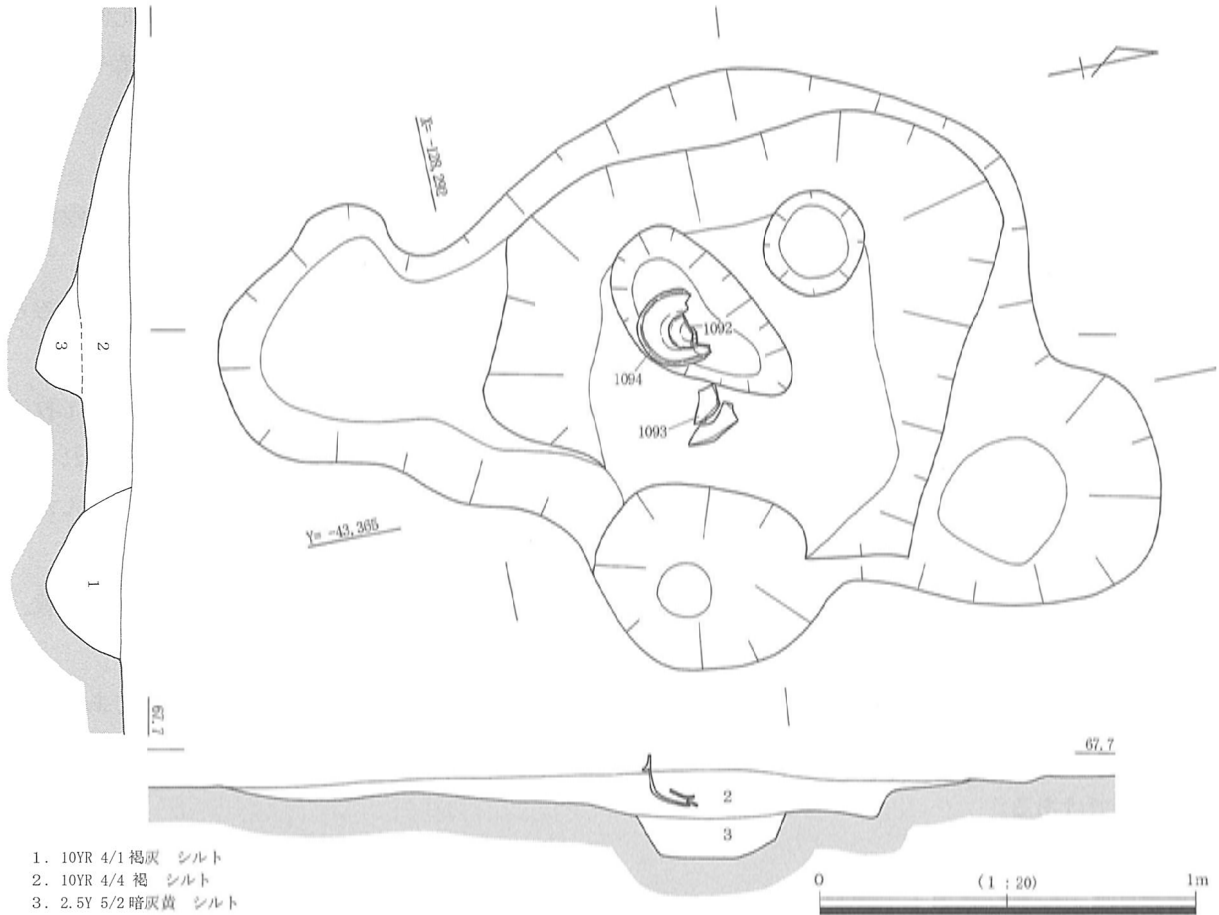
遺物は、完形の瓦器椀のほか、20%程度遺存している瓦器椀、土師器鍋片が出土している。13世紀後葉～14世紀のものと思われる。

北東に隣接して、同様に礫を含む土坑133がある。

土坑135 (第295・331・332図 図版125・221)

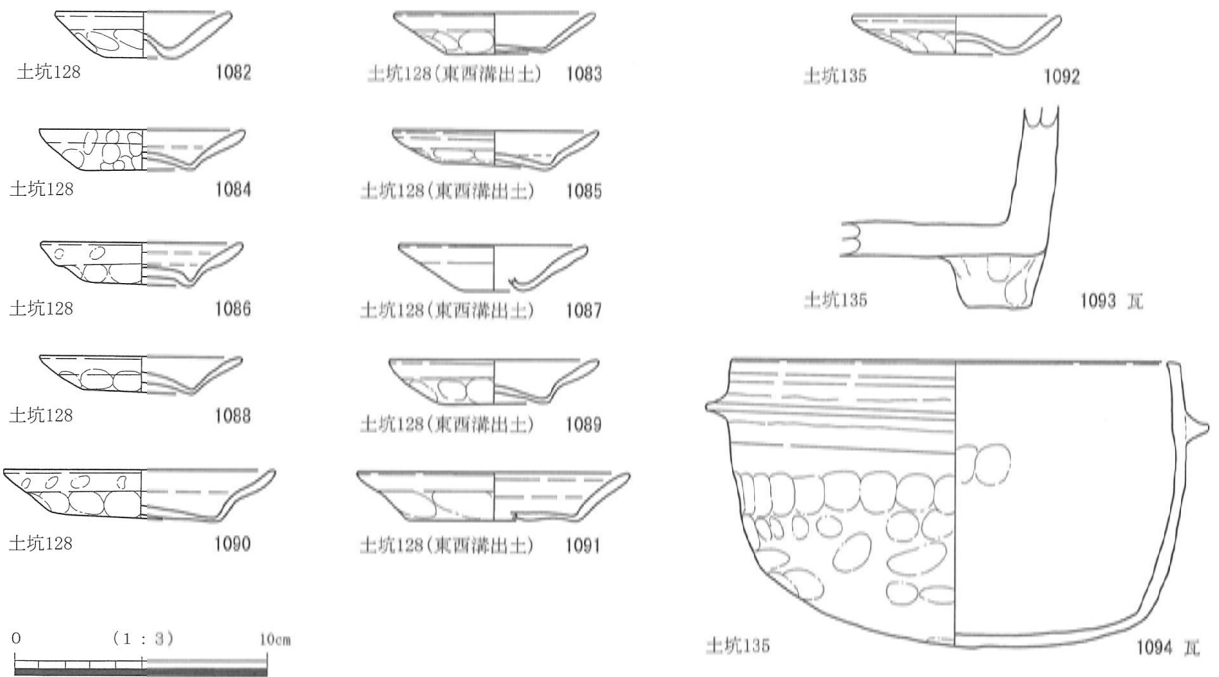
南部に位置する、不定形の土坑で、南北約2.5m、東西約1.6m、深さ約0.2mである。複数の遺構が切り合っている可能性もある。

中央部で瓦質羽釜が正置の状態出土し、さらにその内底面上で土師器小皿が正置の状態出土した。



- 1. 10YR 4/1 褐灰 シルト
- 2. 10YR 4/4 褐 シルト
- 3. 2.5Y 5/2 暗灰黄 シルト

第331図 土坑135 平面・断面図



第332図 土坑128・135 出土遺物

土坑がやや深くなる部分に位置するが、これらは埋土上層に含まれていた。羽釜、皿ともに北側半分を欠いている。これらの東側では瓦質土器火鉢の破片が出土している。土師器皿は、14世紀中葉～15世紀前葉のものと思われる。

土坑136 (第295・309・310図 図版123・216)

南部に位置する。長方形で、南北約1.3m、東西約0.8m、深さ約0.2mである。全体的に埋土の上位に多くの角礫が存在していた。

基盤層には小さな礫が多く含まれているが、埋土にはみられない。埋め戻す際に土を選別していると思われる。

土坑検出面以上の礫を除去した段階で、南西隅と北西部分で土師器皿が出土した。北西部で、1枚ほぼ完形のものが正置の状態出土した。南西隅出土のものは破片で、2、3個体分であると思われる。外面が上になっているものが多い。埋土中からも土師器皿が出土した。北西部では東西に4枚並んだ状態で出土している。両端のものは逆さまの状態、中央2枚は正置の状態である。

遺物は、土師器小皿の完形が7枚、25%程度遺存するもの1枚、大皿の50%程度遺存するもの1枚、焼土の小片が出土している。14世紀中葉～後葉のものと思われる。

墓9と礫のまとまり方が似ている。墓9は、釘と完形の土師器皿が出土しているため、墓であると判断した。土坑136も墓である可能性があるが、時期が墓9とは異なるため、一概に同種の遺構と考え得るか疑問ではある。

土坑140 (第326図)

南部に位置する。不定形で、長さ約1.0m、深さ約0.4mである。木の根による攪乱のため東側の輪郭が不明瞭である。主に埋土の上位に礫の集積がみられた。

遺物は出土していない。

土坑142 (第295・312・313図 図版123・216)

川2の肩部分に立地する。南北約2.1m、東西約1.1m、深さ約0.2mである。基盤層に礫を含むため、底面には礫による凹凸がみられる。

土師器皿が出土しているが、出土位置などは不明である。小皿は約70%、大皿が約25%程度遺存している。12世紀中葉～後葉のものと思われる。

土坑143 (第327・328図 図版125)

南部に位置する。長径約1.9m、短径約1.0mと、長径約0.9m、短径約0.6mの東西に接する二つの楕円形部分からなる。主に西部の埋土上位に礫が集積している。

遺物は、須恵器鉢片、瓦器、土師器の小片が出土した。

土坑146 (第295図)

川2の肩部に位置する、南北約2.8m、深さ約0.2mの方形の土坑である。東側は攪乱で失われている。底面は比較的平らである。

遺物は、須恵器、瓦器、土師器煮炊具片が出土している。

焼土坑56 (第295・333・334・336図 図版122・221)

川合裏川段丘面にいたる崖の上部を削り込んで築いている。南北約3.1m、東西約2.9m、壁の高さは最も高い部分で約1.8mである。この崖の下半は、大きく削平を受けて本来の地形よりも傾斜が急になっており、焼土坑の東端部分も削平を受けている可能性がある。

底面が非常に平らで、その平面形は南北約2.4m、東西約1.9mの南が尖る卵形である。壁は、西側以外、底面から約0.5mの高さまでほぼ直立する。東部分も北、南と同様の直立した壁が続いていたと思われる。崖の奥側で壁が高くなる西側では、緩やかに立ち上がった後、直立した壁になる。西側の壁の上にはさらに崖の斜面が続く。土坑上の崖斜面は壁と比べるとやや緩やかではあるが、崖上から土坑に降りることが困難な程度の急傾斜である。

壁に被熱痕跡がみられる。北東部、壁下部の直立部分で特に顕著で、赤変して焼土化している。壁上部も赤変しているが淡く、直立部分との違いは明瞭である。南、西側はほとんど赤変していない。底面上には炭片が非常に多くみられる。

埋土は埋められたものか、崖上から落ち込んだものか不明である。壁の直立する部分が埋まった高さである底面より約0.5m上で、完形の瓦器椀が逆さまの状態出土している。同様な高さで数点の礫もみられ、下部を埋めた後に何らかの作為がなされたとも想定される。しかし、崖上には非常に多くの礫、土器が集積していたため、ここから落ち込んだものである可能性もある。

同様な遺構である焼土坑57・58がそれぞれ南側、東側に存在する。焼土坑57は底面のレベルが焼土坑56と同じで、南側に近接している。焼土坑58は焼土坑56の東側、つまり崖の下方にこれも近接して存在する。特に焼土坑58とは切り合い関係の存在も想定されるが、その有無は確認できなかった。また、大きく削平されている崖下部には、他にも同様な遺構が存在した可能性を考慮に入れておく必要がある。

焼土坑57 (第295・333・335・336図 図版122・221)

川合裏川段丘面にいたる崖の上部を削り込んで築いている。東西約2.5m、南北約2.1m、壁の高さは最高で約1.5mである。この崖の下半は大きく削平を受けて本来の地形よりも傾斜が急になっており、焼土坑の東端部分も削平を受けている。

底面が非常に平らで、その平面は南北約1.8m、東西1.4m以上である。壁は西側以外が、底面から約0.5mの高さまでほぼ直立する。東部分もより遺存状態のよい焼土坑56の状況から、北、南同様の直立した壁が続いていた可能性が高い。崖の奥側で壁が高くなる西側では、緩やかに立ち上がった後、直立した壁となっている。

西側は壁より上にさらに崖の斜面が続いている。墓上の崖斜面は、壁に比べるとやや緩やかではあるが、崖上から焼土坑に降りることが困難な程度の急傾斜である。

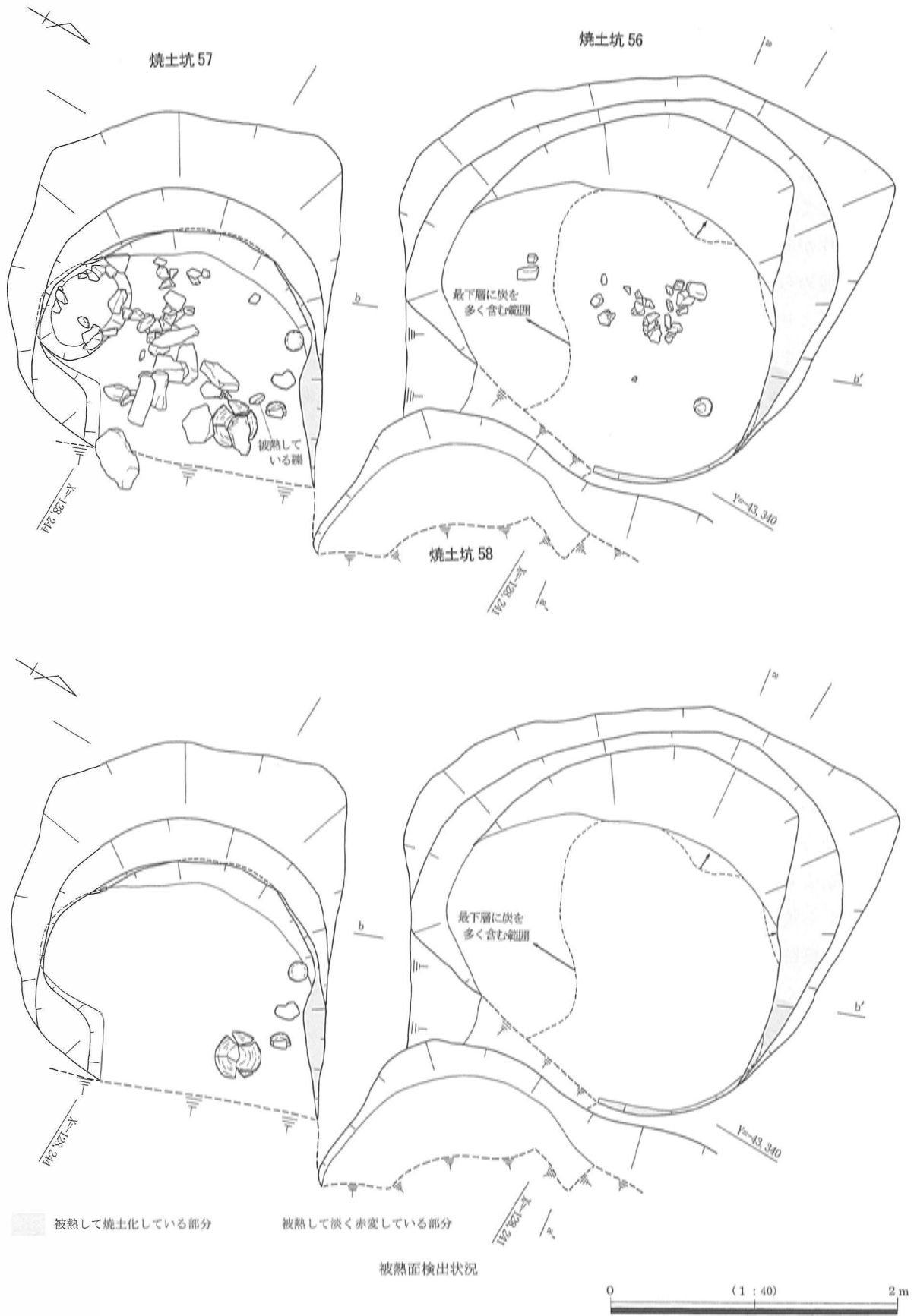
壁に被熱痕跡がみられる。壁下部の直立部分で特に顕著で、赤変して焼土化している。底面上には炭片が非常に多くみられる。南端部の楕円形の窪みは、最下層の炭片を多く含む層を除去した際に検出した。炭層で埋まっている。

埋土は埋められたものか、崖上から落ち込んだものか不明である。礫が含まれているが、崖上に非常に多くの礫、土器が集積しており、ここから落ち込んだものである可能性が高い。底面で出土した礫の一つに被熱痕跡がみられた。埋土上層からは1095の土師器皿が出土している。

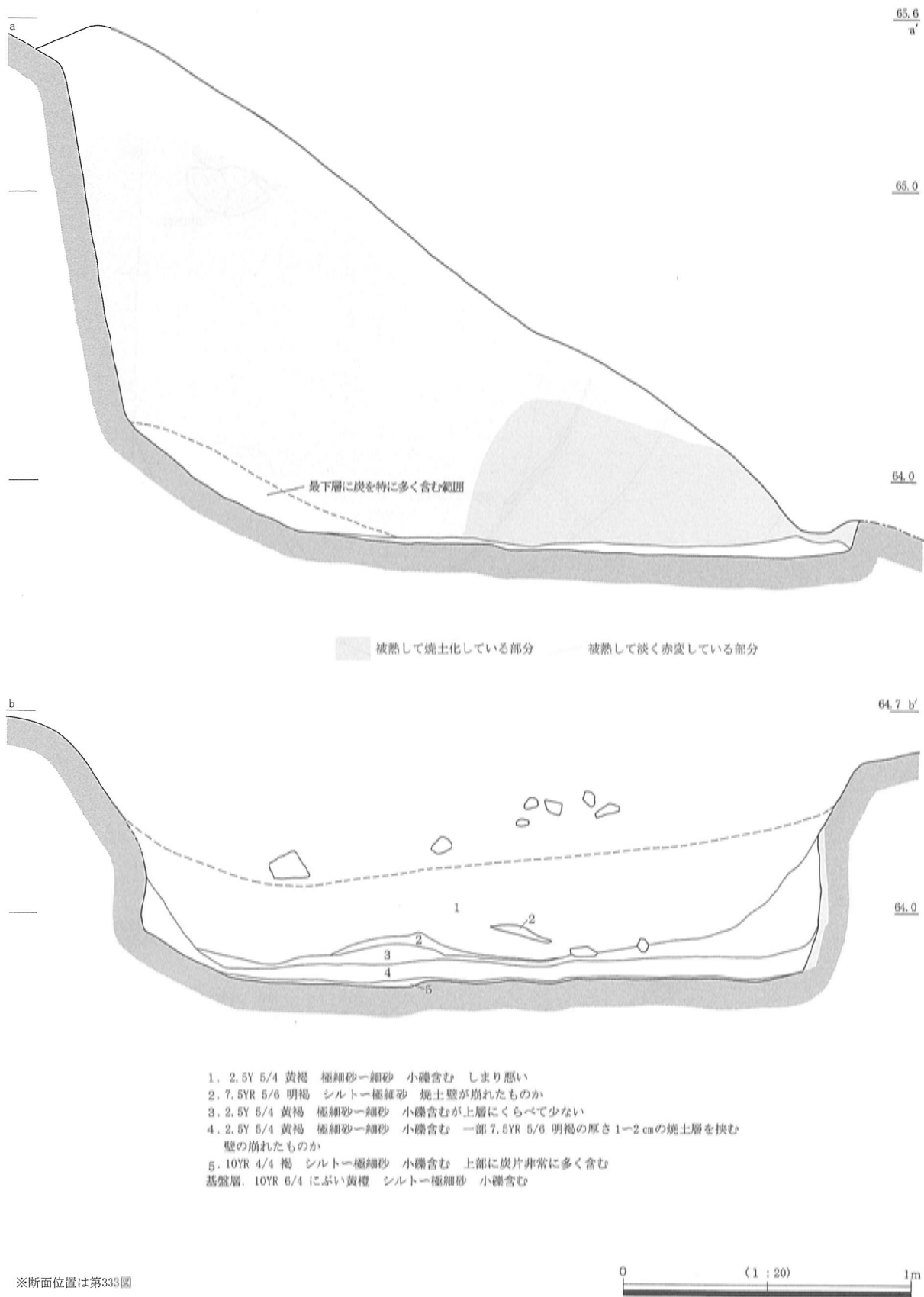
北部分の底面近くで骨、土器が出土した。中央に骨、西側に完形の瓦器椀、東側に土師器皿と、東西一列に並んでおり、土師器皿の南東には完形の須恵器鉢がある。

土器はすべて正置の状態である。いずれも、底面の、炭を多く含む赤黒いシルト～細砂層の薄層の上に載っている。土器自体には被熱した痕跡がみられないことから、遺構の被熱が終了してから置かれたと考えられる。須恵器鉢は使用痕跡が認められるものである。内部に骨片はみられなかった。

骨片は、平らで南北に長く、南北約16cm、東西約12cmで、非常に薄い。安部みき子氏に鑑定を依頼し、

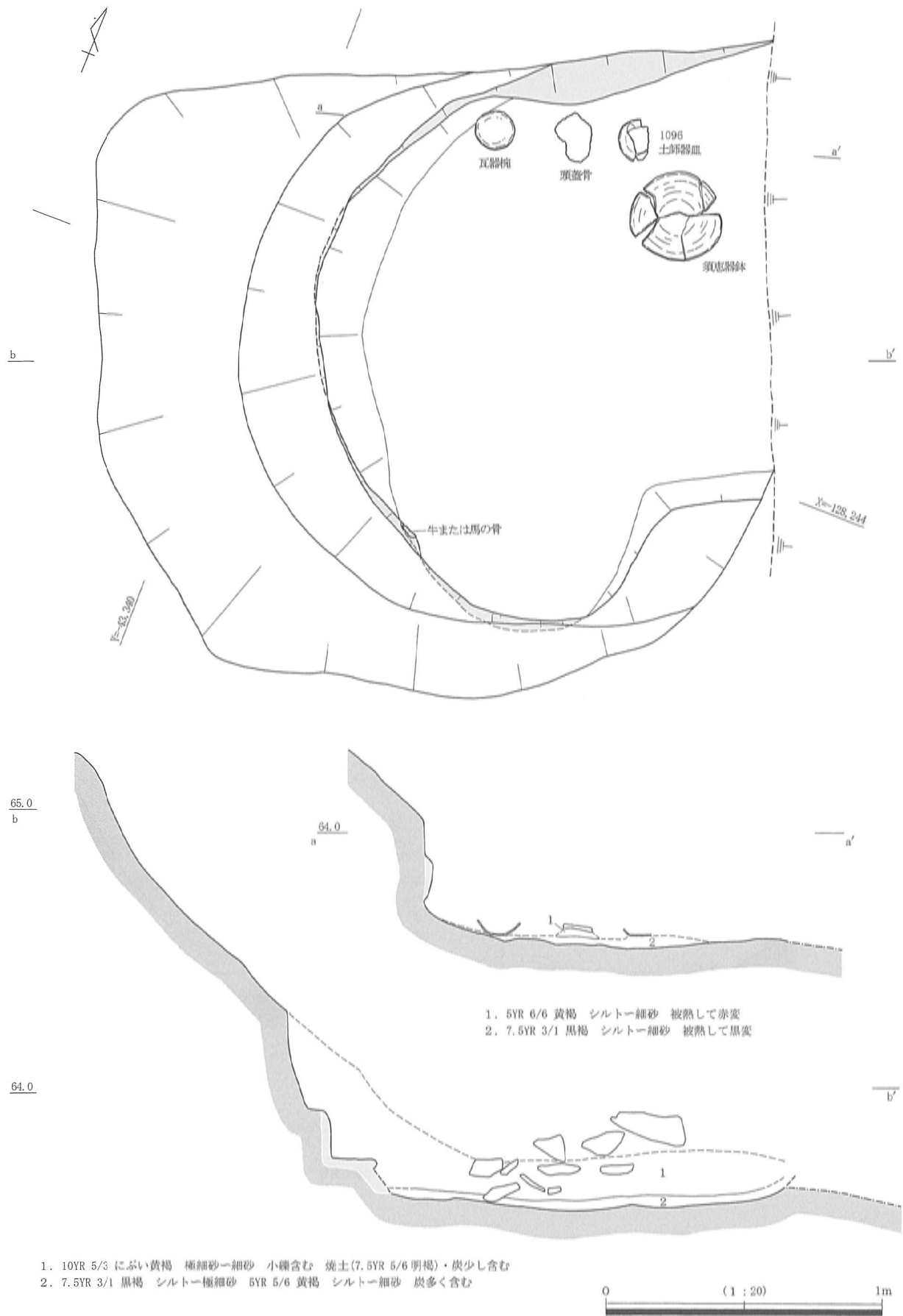


第333図 焼土坑56~58 平面図



※断面位置は第333図

第334図 焼土坑56 断面・立面図



第335図 焼土坑57 平面・断面図

頭蓋骨であるとの見解を得ている。ただ非常に遺存状態が悪く、被熱しているかどうかは不明である。

南西隅の直立する壁の上部で、長さ約6cmの骨片が出土した。馬または牛の骨で、弱い被熱を受けている。遺構が被熱する以前に紛れ込んだのであろうか。

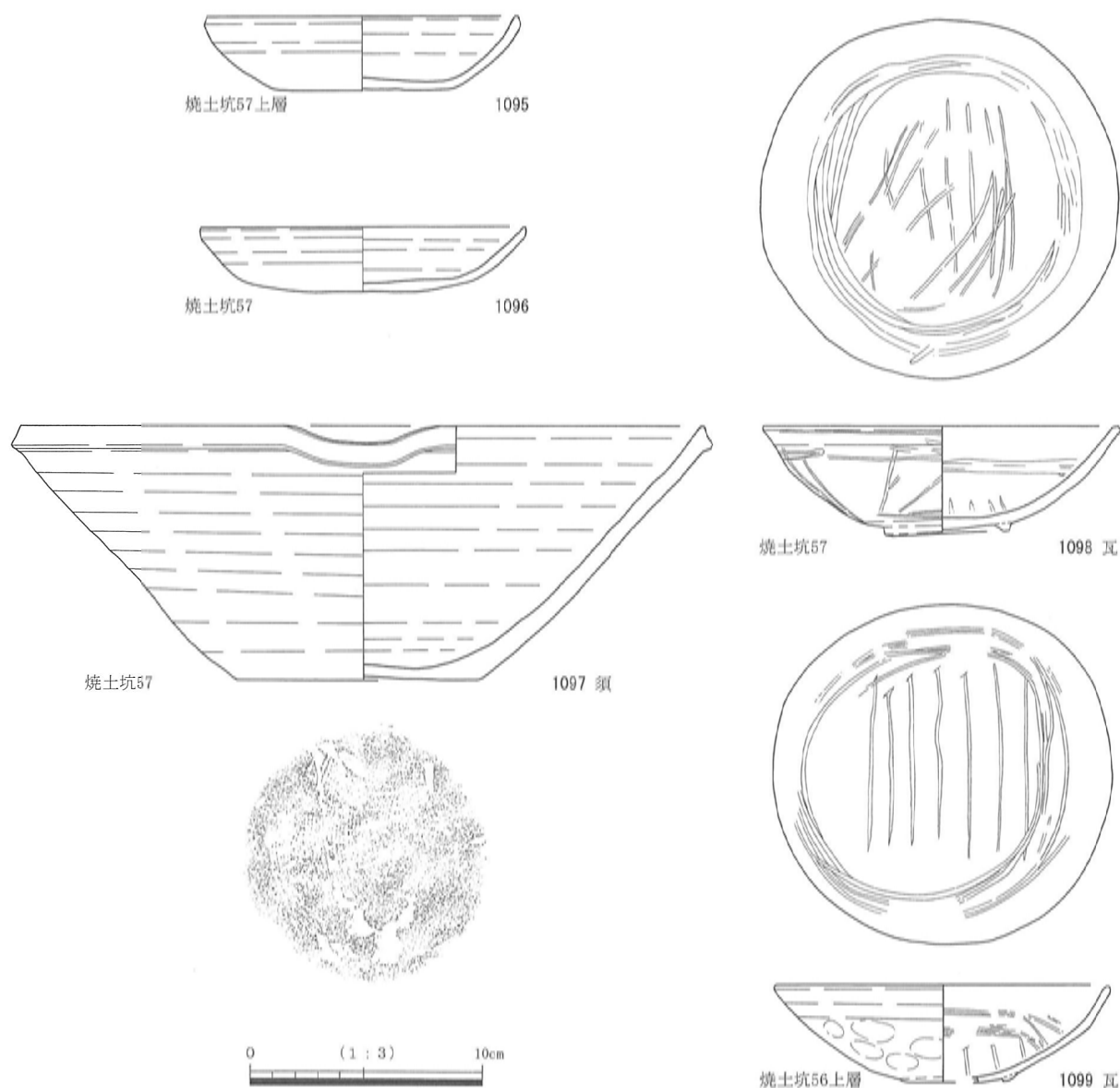
骨が出土し、遺構が被熱していることから、火葬をおこなったことが想定される。しかし、骨が被熱しているかどうかは不明であるため、土坑自体を被熱させ、そこに土葬をおこなった可能性も否定できない。

焼土坑56が北側、焼土坑58が北東側に存在する。焼土坑56は底面のレベルが焼土坑57と同じで、北側に近接している。また、削平された崖下部には他にも同様な遺構が存在した可能性がある。

遺物の時期は、12世紀中葉～後葉と思われる。

焼土坑58 (第295・333図 図版122)

川合裏川段丘面にいたる崖に築かれている。崖の下半は大きく削平を受けており、西端のごく一部を残して大部分が失われている。壁は、遺存している高さ約0.6mで、南側では直立しており、西側ではやや傾斜がついている。底面は非常に平らで、薄い炭層がみられた。



第336図 焼土坑56・57 出土遺物

焼土坑56・57が西側、つまり崖の上位に築かれており、焼土坑56の下に位置する。被熱痕跡は確認できなかったが、焼土坑56・57と共通する状況がみられ、同種の遺構である可能性が高い。焼土坑56と近接しており、切り合っていることも想定されるが、確認はできなかった。

焼土坑56・57は崖の奥側、つまり西側は高い壁となっているが、焼土坑58については不明といわざるをえない。周囲は削平が著しく、これ以外にも同種の遺構が存在した可能性もある。

遺物は出土していない。

包含層は、土坑98周辺以外では、丘陵上の多くの部分のそれと質が異なる。

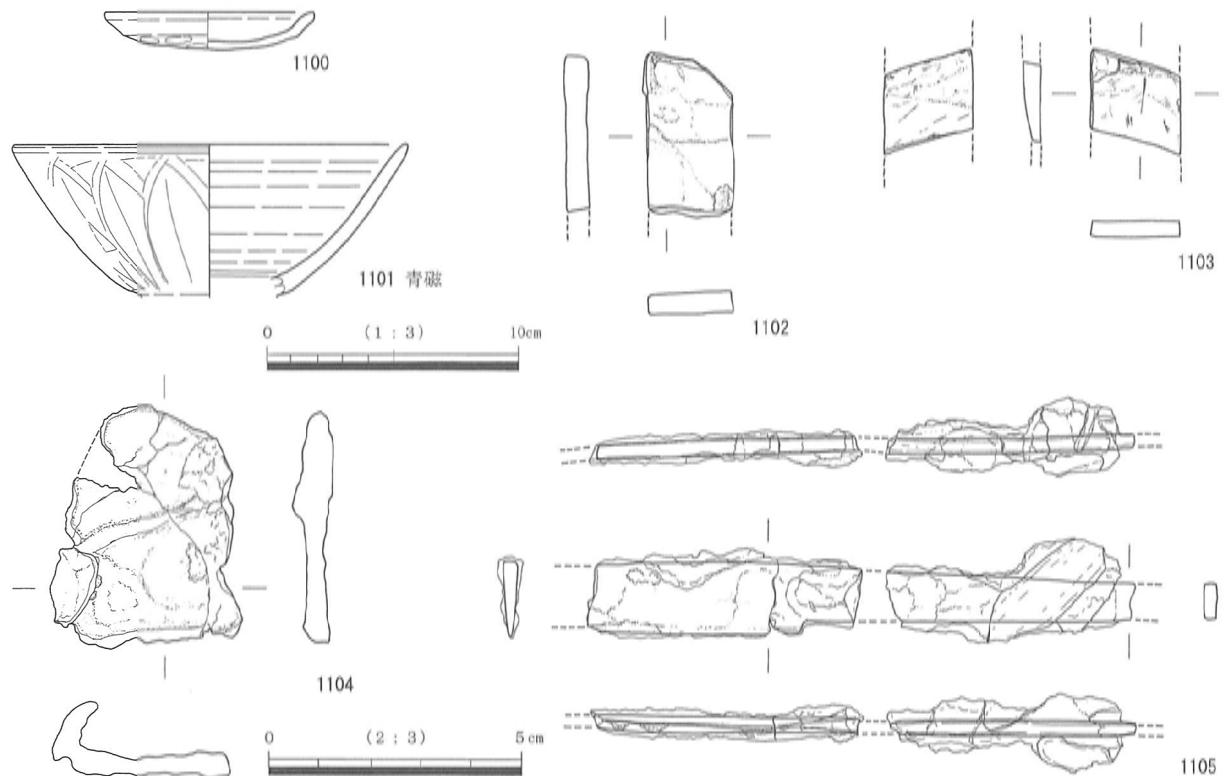
土坑98周辺とそれ以外に遺存している包含層の層位関係は、上下関係の有無も含めて不明である。前者からは古代の遺物が多く出土しているが、遺構分布から考えて当然のことと思われ、一概に古い包含層であるということとはできない。

また、中央東部、柱列7・8の北部を中心とした部分、不定形の土坑状に落ち込んでいる部分を中心に、灰を多く含んでいる可能性がある層が広がっていた。

周辺にはこれと同様な土質の埋土をもつピットも幾つかみられる。焼土坑56～58、または、土坑112・115などの焼土を含む特徴的な埋土をもつ遺構群との関係が想定される。

土坑98周辺以外に存在する包含層からは、比較的多くの遺物が出土した。瓦器、土師器、瓦質土器、灰釉陶器、山茶椀、須恵器鉢、常滑焼、瀬戸焼、備前焼、輸入陶器、青磁、白磁などがある。やや時期幅はあるが、13世紀代を中心とするものである。

全体的に包含層が比較的良好に遺存していた。ただ、調査直前に植木が移植されたため、攪乱が著しい。それらの多くはピット状で、遺構と同様な埋土をもち、遺構との判別が非常に困難である。それは特に中央部で顕著で、平面図に掲載している遺構群のなかにも、本来遺構ではないものが多数含まれている



第337図 土坑116 出土遺物 (2/3 = 1104・1105)

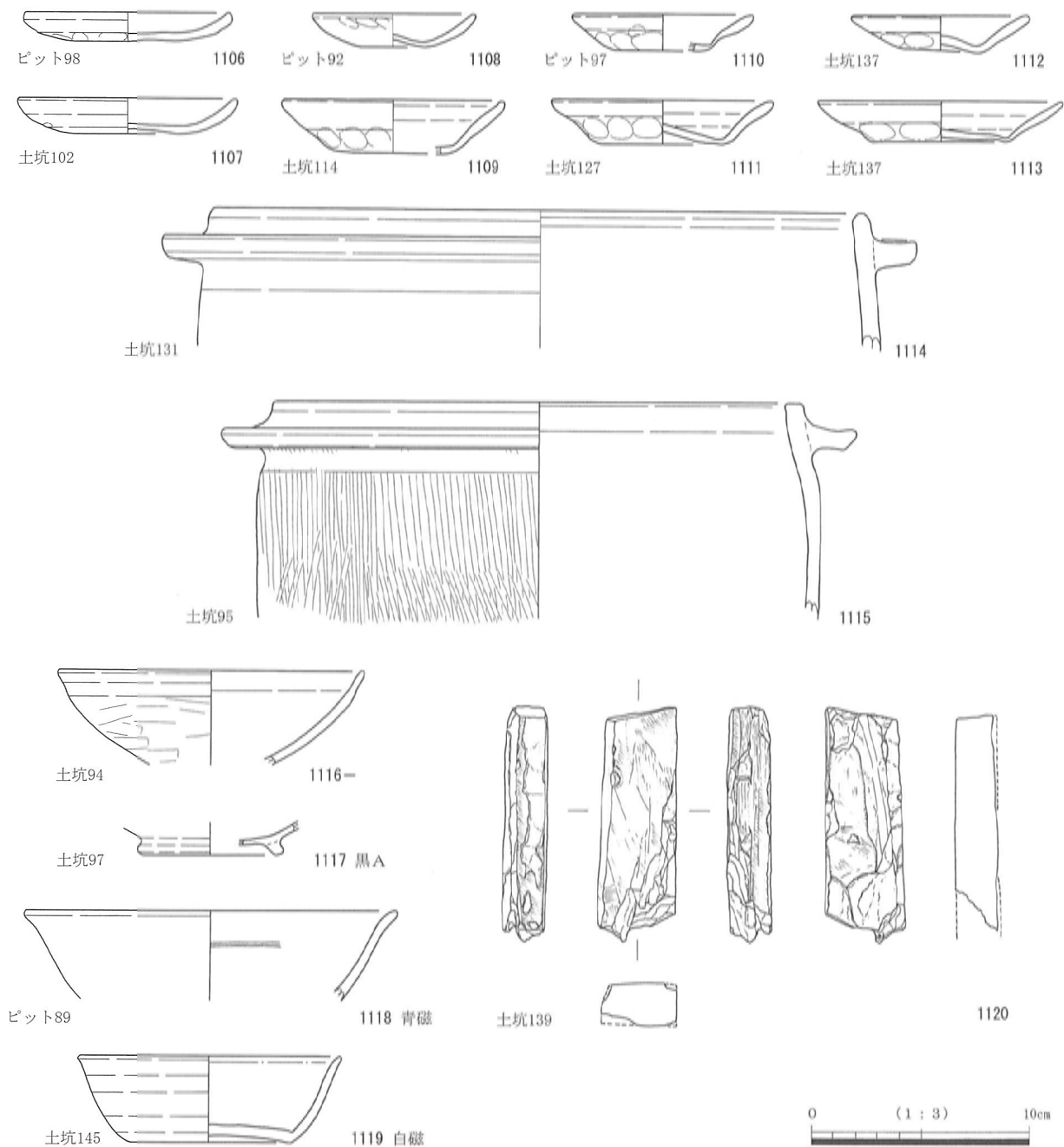
可能性がある。

また、南半分は、竹藪であったため、根による攪乱が著しい。中央部西端の墓10周辺では全く遺構を検出していないが、この周囲、南北約38m、東西約5mの範囲は、調査時に基盤層を0.2m程度掘りすぎており、遺構を検出し得ていない。

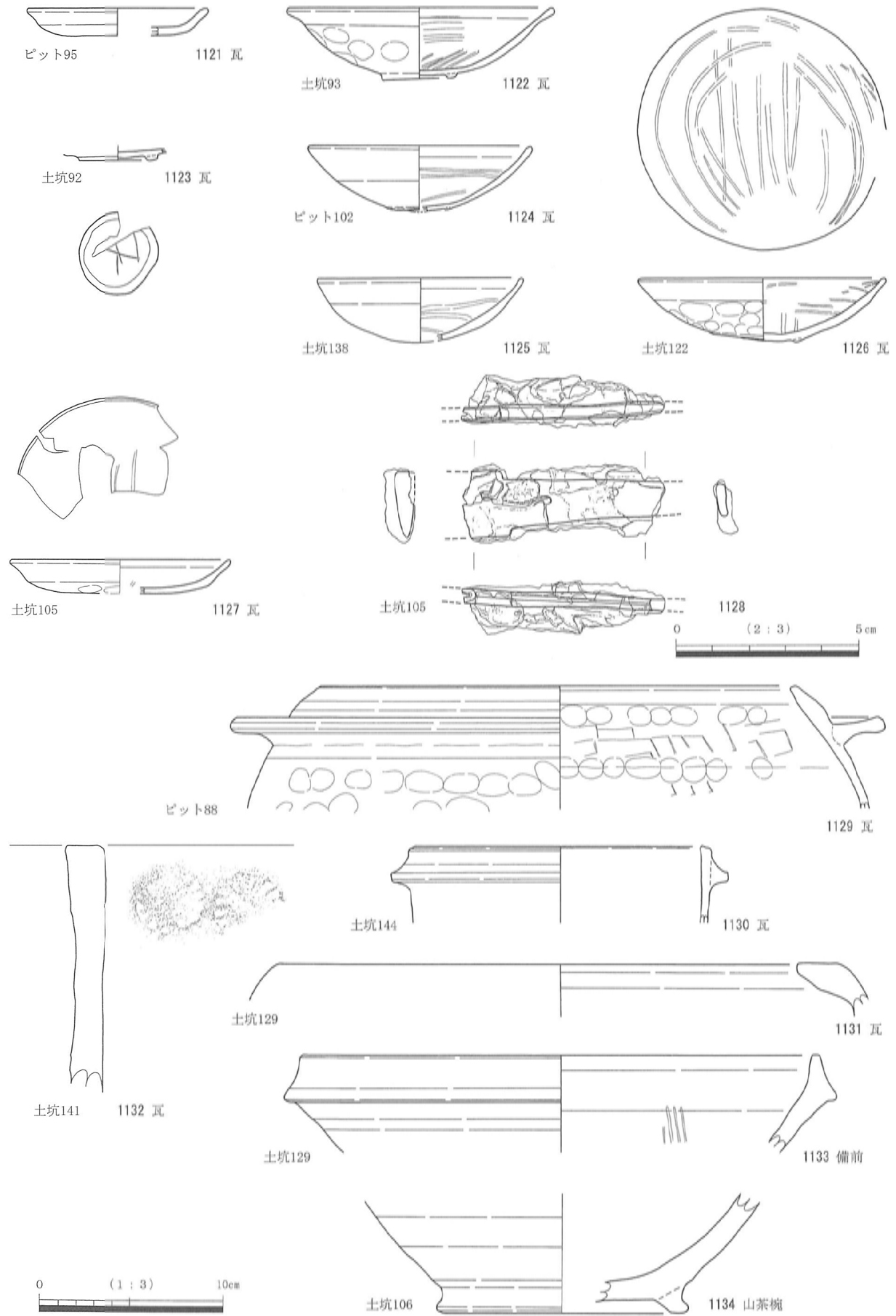
小結

8世紀と12世紀後葉～15世紀前葉の遺構が展開している。

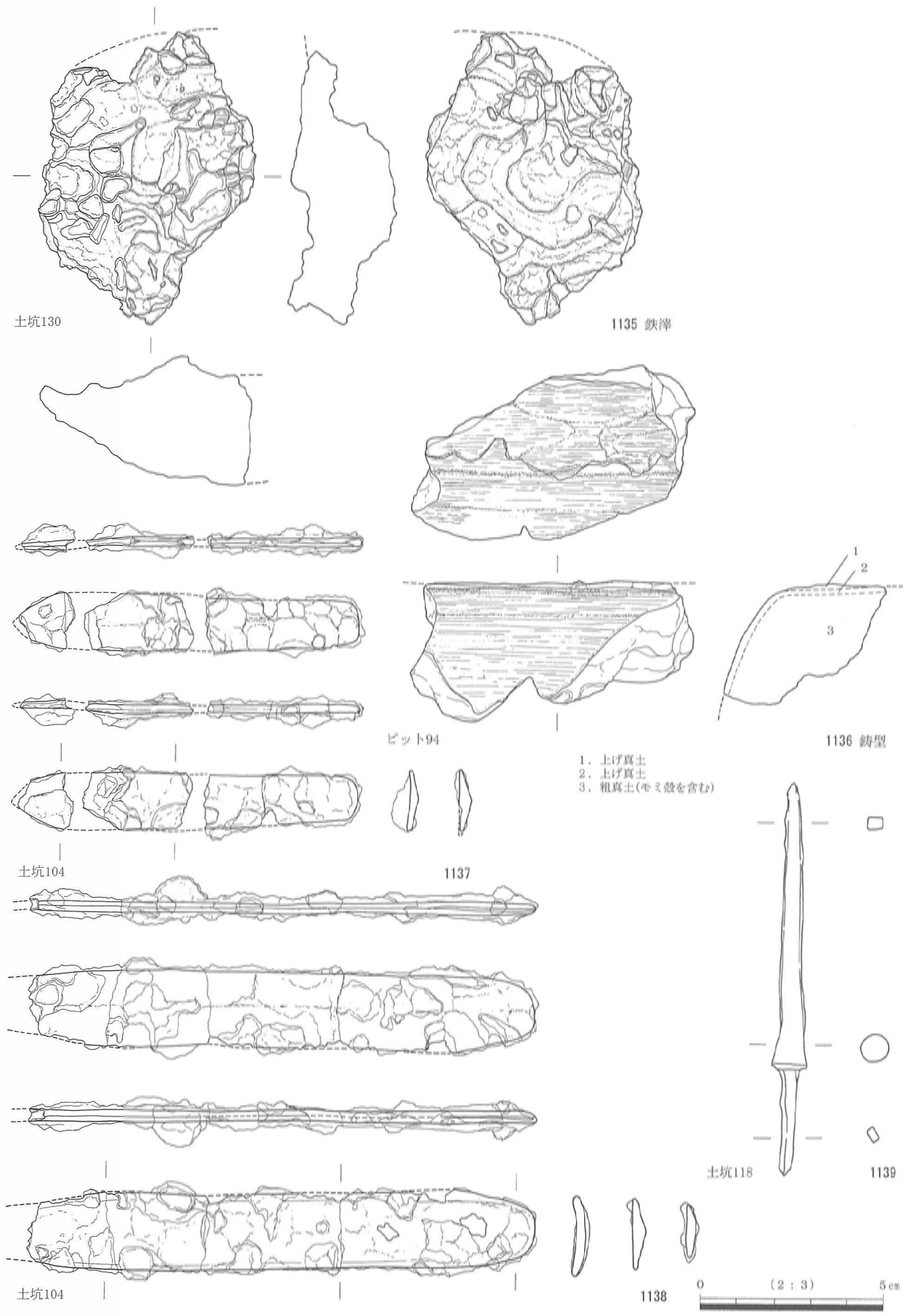
建物は2棟を復元し得たのみであるが、根石の可能性のある礫をもつピットが複数みられ、復元した以外にも建物が存在した可能性はある。



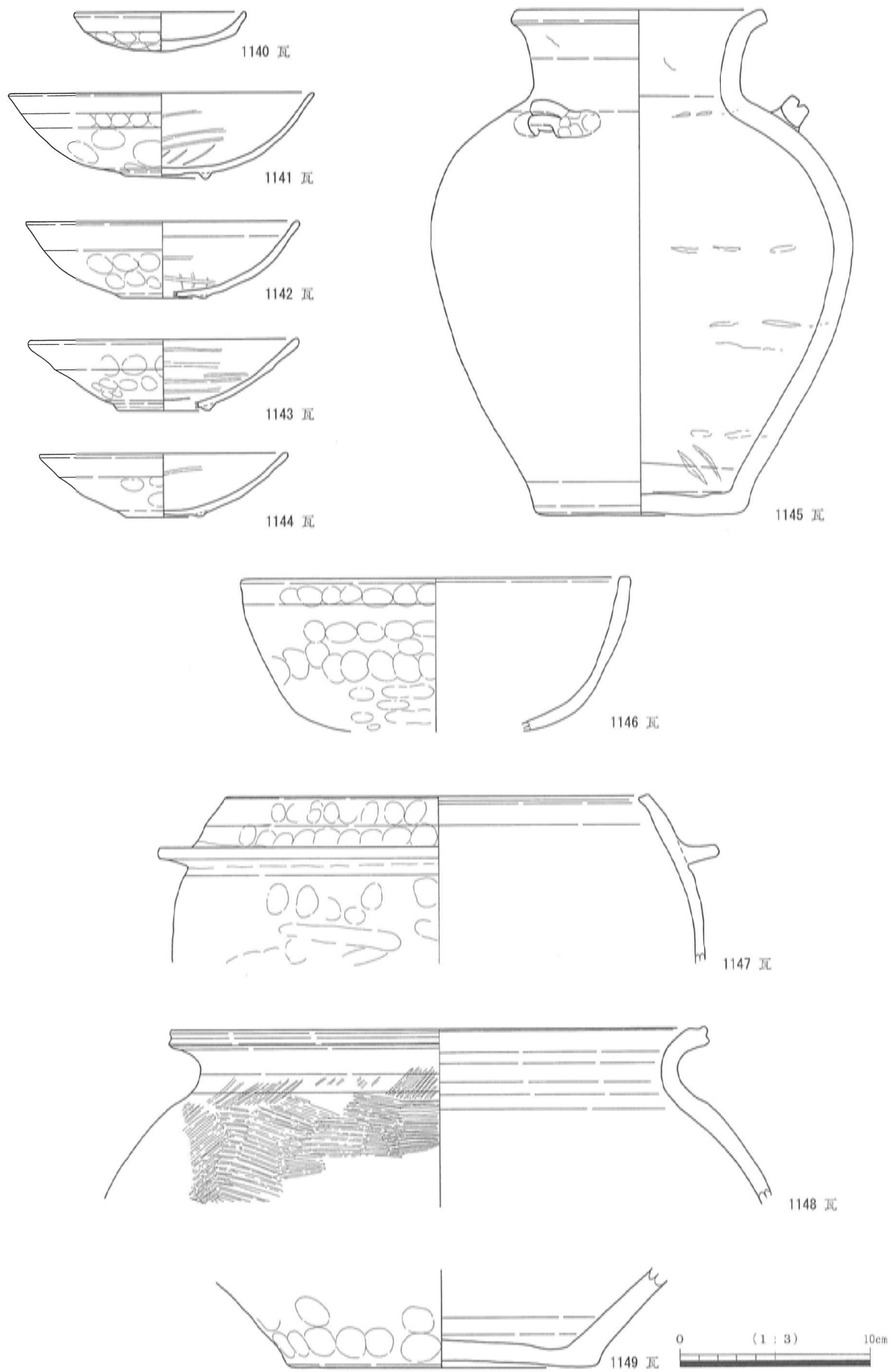
第338図 その他の遺構 出土遺物



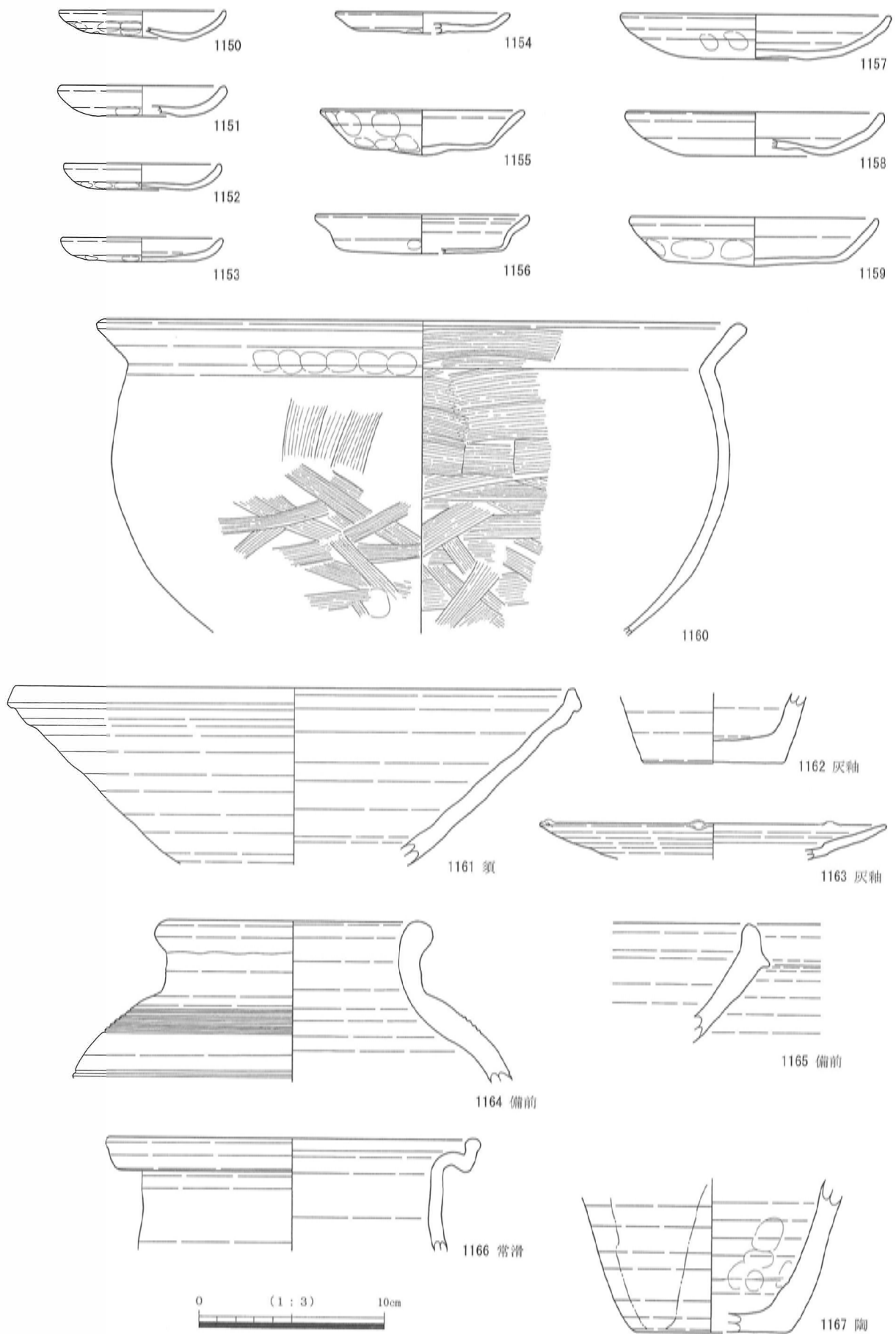
第339図 その他の遺構 出土遺物 (2/3 = 1128)



第340図 その他の遺構 出土遺物 (2/3)



第341図 段丘崖肩部集積遺物(1)



第342図 段丘崖肩部集積遺物 (2)

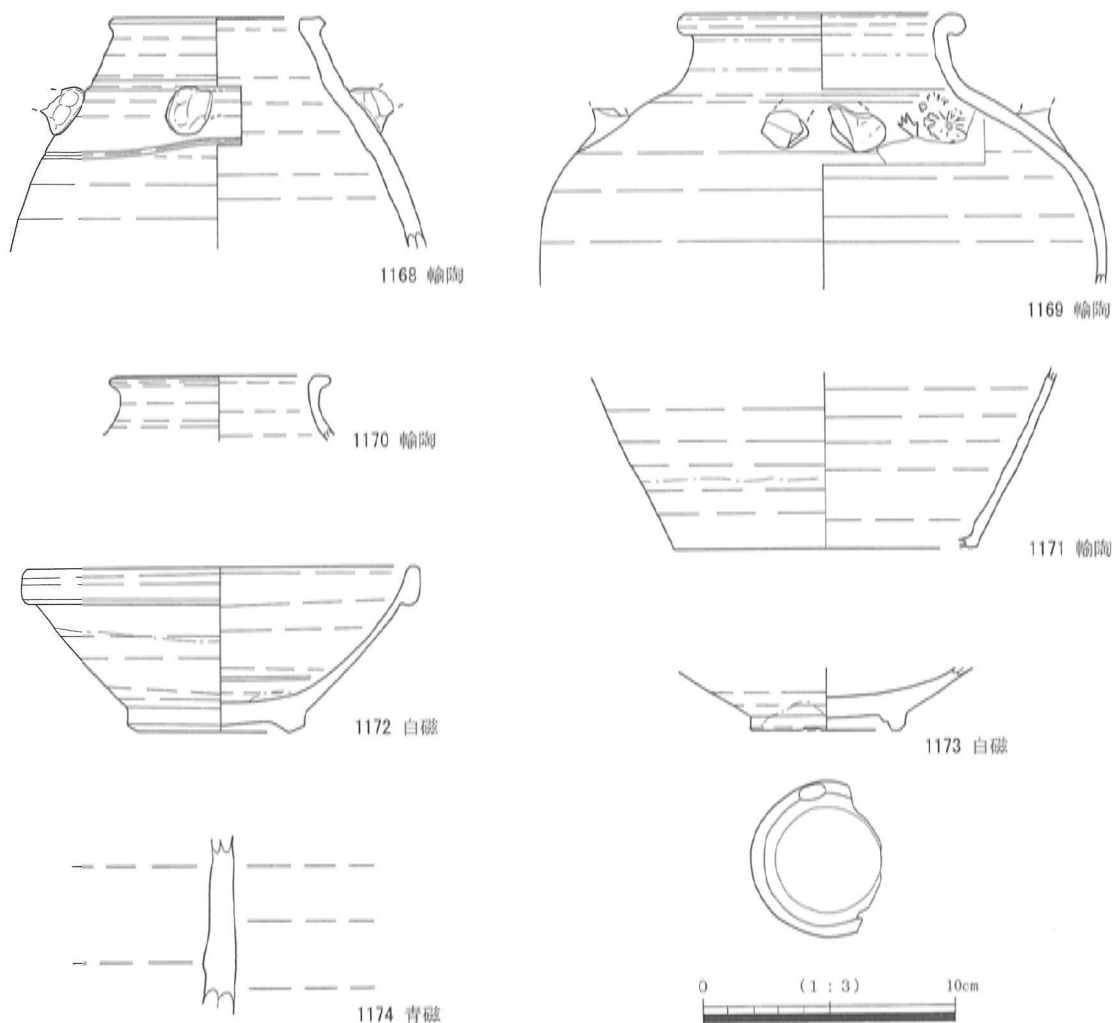
古代の遺構群は、北西部分にのみ存在する。建物116は古代のものである可能性があるが詳細不明である。土坑、ピットなどがみられ、大型の土坑98からは、土師器甕、製塩土器などが出土している。

墓9、焼土坑56~58など、墓、火葬遺構である可能性をもつもののほとんどが、12世紀中葉~13世紀のものである。礫を伴う墓9は、一段高いp域にいたる崖の直下に立地する。焼土坑56~58は、川合裏川を見下ろす丘陵肩部に、近接して立地している。崖を削り込んで築かれたものである。

高麗青磁皿等が出土した墓10は、詳細な時期が決め難く、他よりやや古い時期のものである可能性がある。川2肩部に立地するが、東側に同様な形状の土坑142があり、あたかも並んでいるような位置関係である。ただし、土坑142は、特徴的な遺物の出土もなく、性格不明とせざるを得ない。

12~13世紀代の建物は、他にも存在している可能性があるものの、建物117、1棟を復元し得たのみである。

焼土坑56~58の西側、段丘崖の肩部分には、多量の遺物の集積がみられた。崖に向かって傾斜しながら複数層が堆積しており、多量の礫とコンテナ約10箱分の遺物が含まれていた。すべて破片で、瓦器椀、土師器皿・鍋・羽釜、瓦質甕・羽釜・鉢・盤、須恵器鉢、灰釉陶器段皿、常滑焼甕、備前焼播鉢、青磁碗(連弁・刻花紋)、白磁碗・皿、輸入陶器壺、金属製品などである。11世紀のものも少数含まれてい



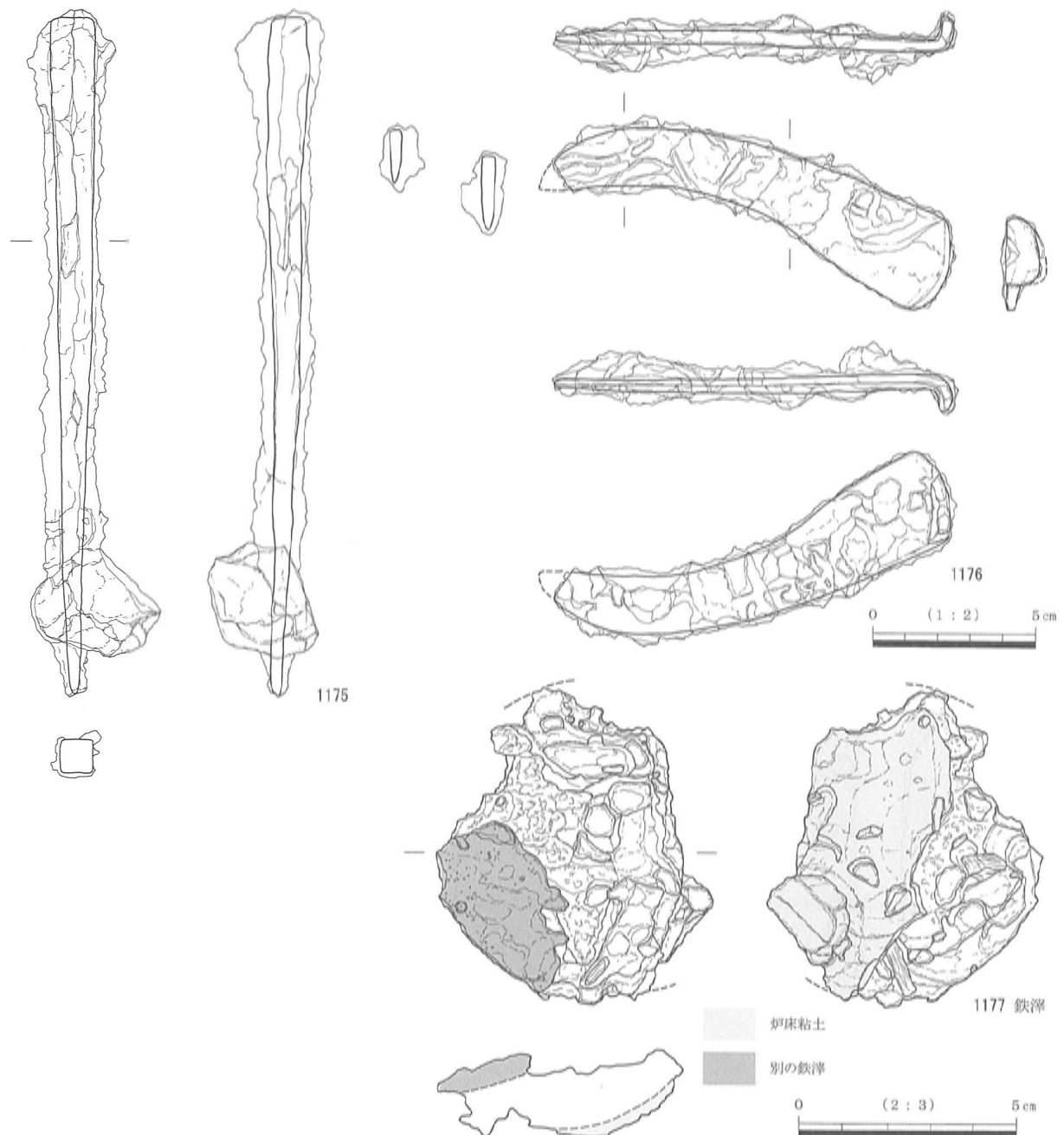
第343図 段丘崖肩部集積遺物(3)

るが、主として12世紀後葉～14世紀のものであり、特に13世紀のものが多くを占める。異なる時期のものが混じり合っている出土状況から、13～14世紀のある時期にこの状態になったと思われる。古い遺構、堆積を破壊して造成がおこなわれた可能性も考えられる。

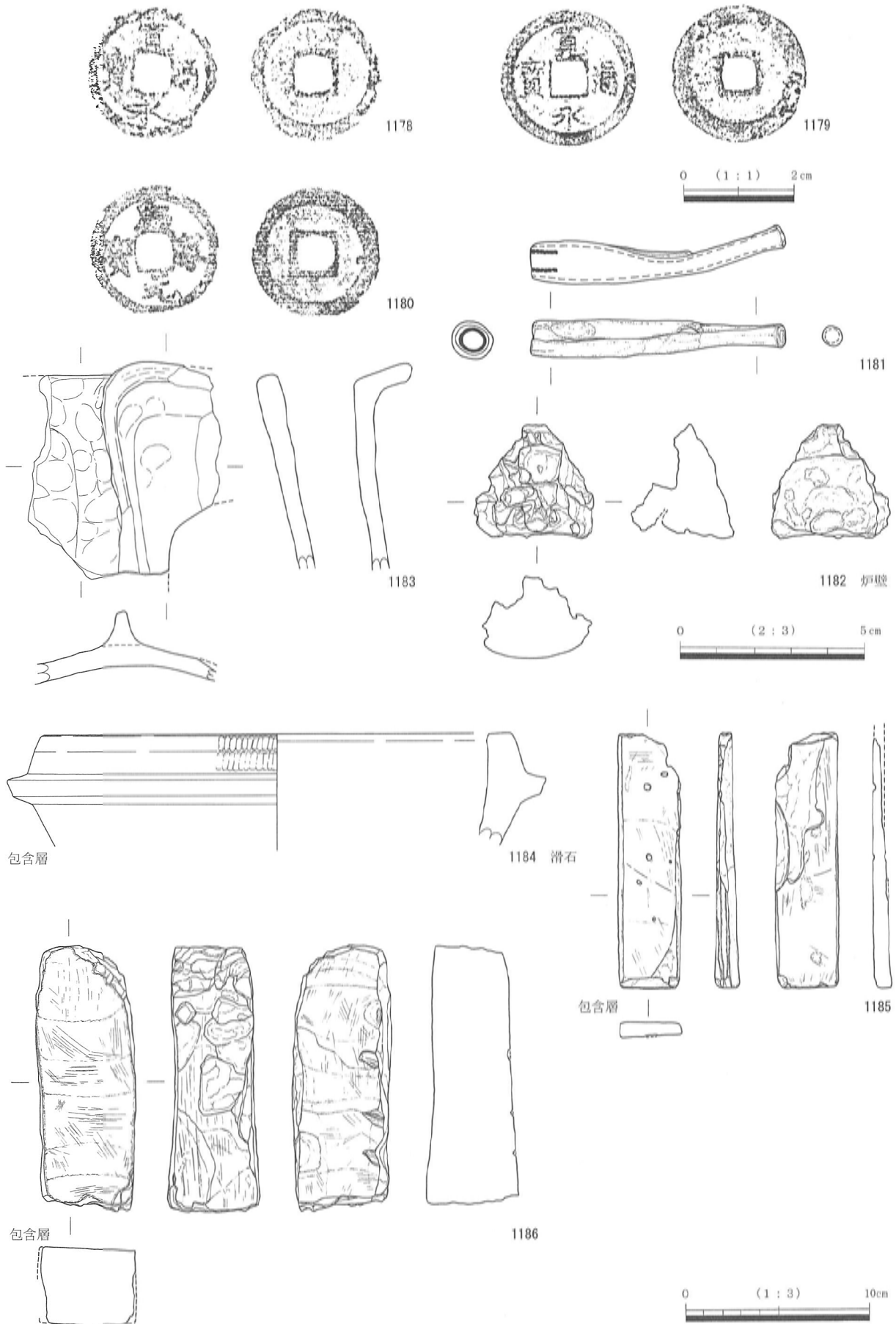
南端の川2肩部においてもコンテナ5箱分の、13世紀代の遺物がまとまって出土している。土師器鍋、瓦質脚付羽釜、須恵器鉢・甕、青磁連弁碗、白磁口禿皿などであるが、これらは出土状況から廃棄されたものと考えられる。

詳細な時期を確認できた数は少ないものの、13～14世紀の遺構も全体に展開している。建物は存在したかどうか不明で、具体的な土地利用は不明である。

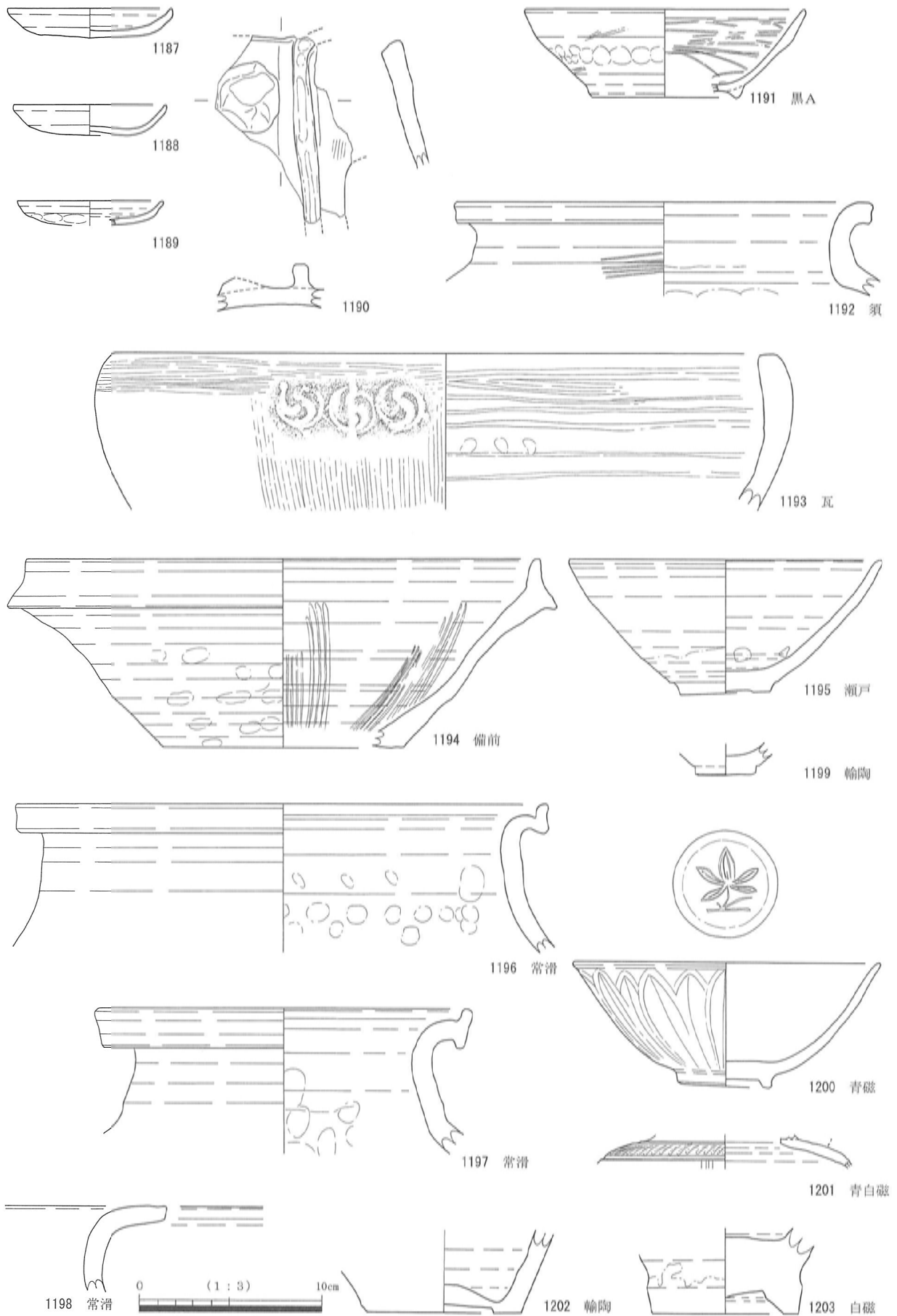
中央部には、土坑112・115など特徴的な埋土をもつ遺構群が約30基分布している。ほとんど遺物が出土していないが、少量出土した遺物はこの時期のものである。焼土、炭を含むものが多いが、被熱痕跡



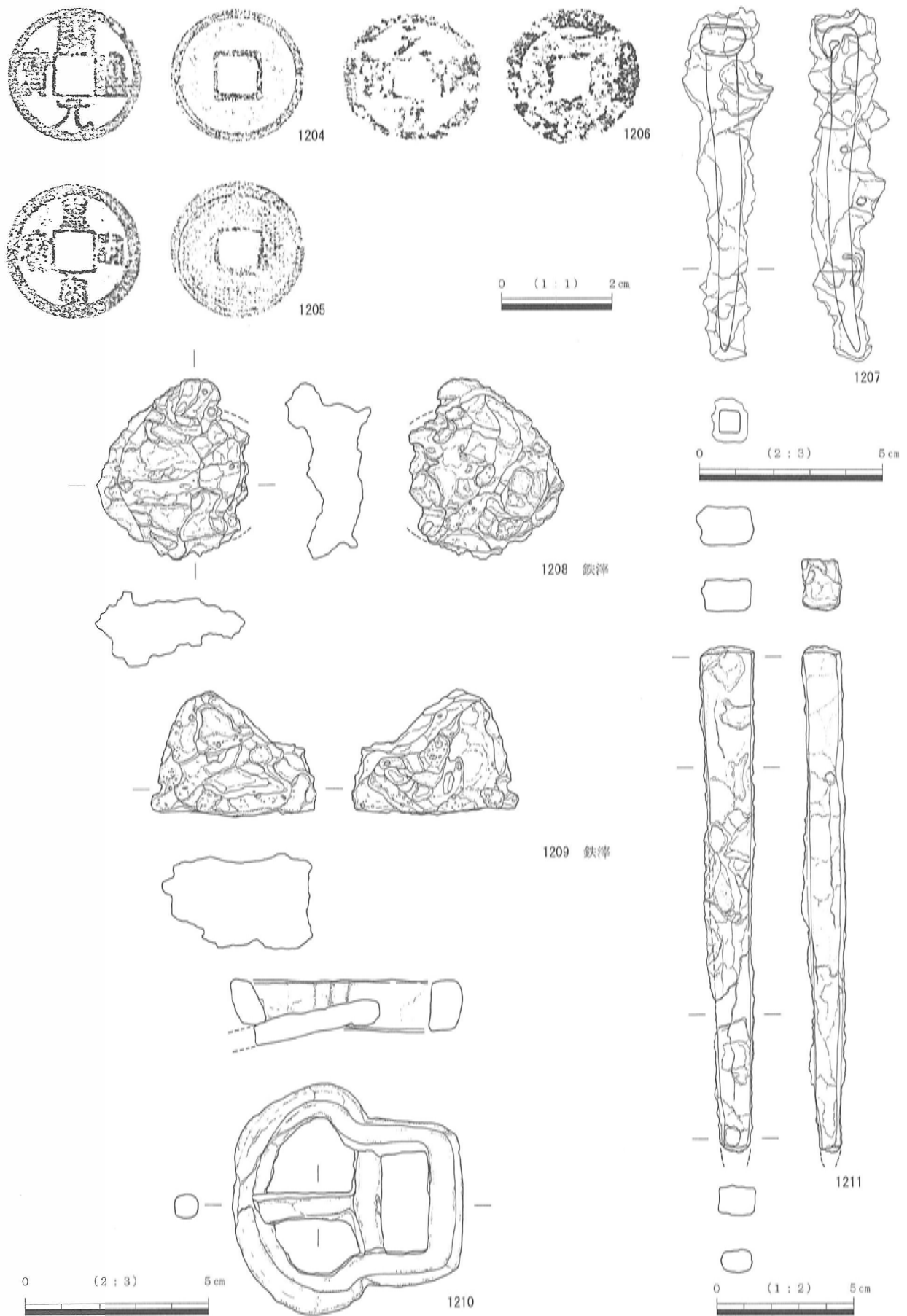
第344図 段丘崖肩部集積遺物(4) (1/2 = 1175・1176 2/3 = 1177)



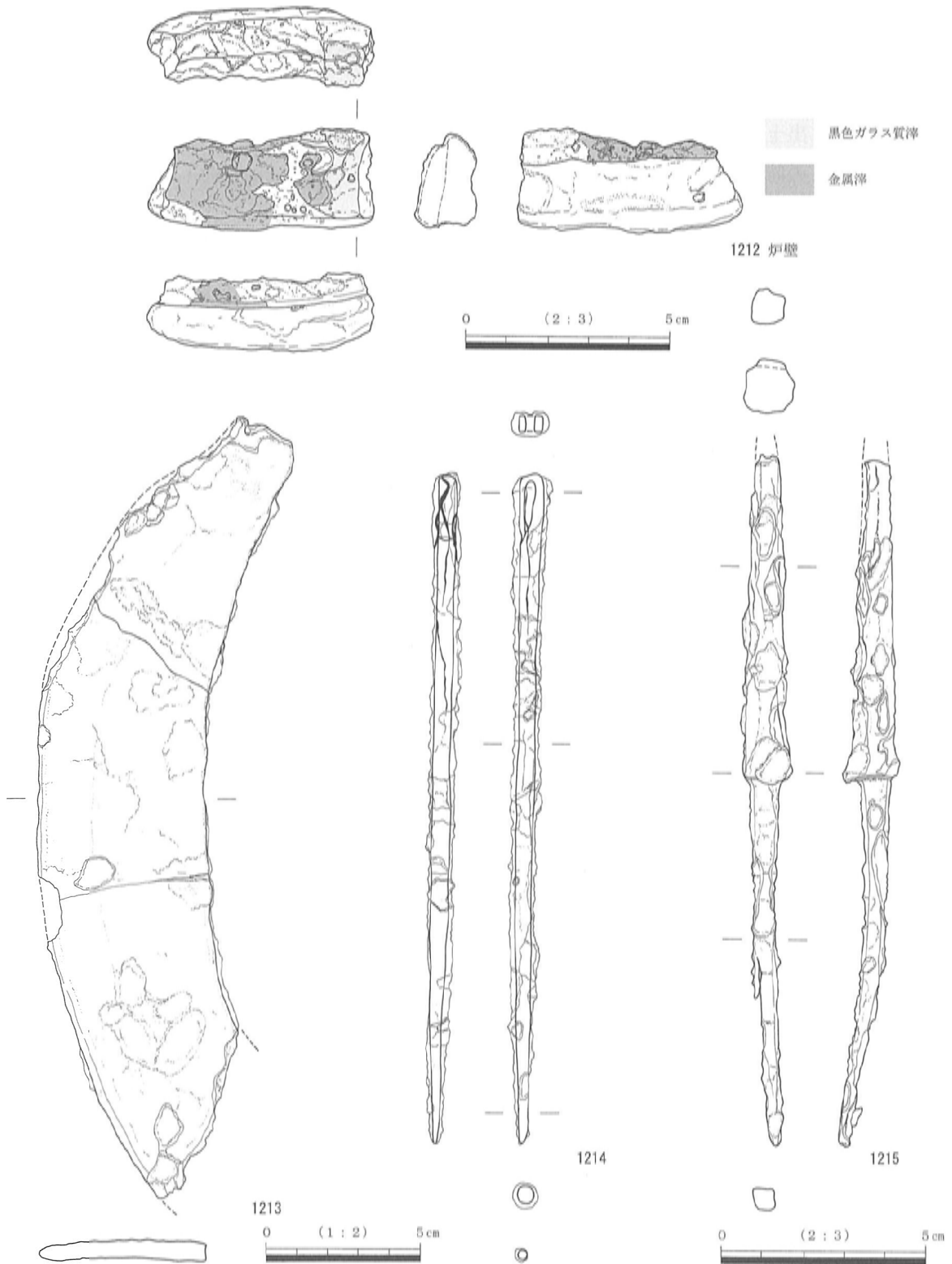
第345图 包含層・近世作土層等 出土遺物 (2/3 = 1181・1182 1/1 = 1178~1180)



第346図 包含層 出土遺物



第347図 包含層 出土遺物 (1/2 = 1211 2/3 = 1207~1210 1/1 = 1204~1206)



第348図 包含層 出土遺物 (1/2 = 1213・1214 2/3 = 1212・1215)

が認められるものはない。火を伴う作業がおこなわれていたことが想定される。しかし、周辺で骨は全く出土しておらず、周囲で鋳造、鍛冶などの作業痕跡を示す遺構も確認していない。

14～15世紀の遺構は、中央部から南部にかけて展開している。井戸8からは14世紀後葉～15世紀前葉の遺物が多量に出土した。深さ5.2m以上の大規模な井戸である。建物が伴うかどうかは不明であるが、柱列6～8がこの時期のものである可能性がある。また、南部で土坑128・135・136など完形の土器を伴う遺構を検出している。

西側は高さ約2.5mの崖で、その上はo域、p域である。p域には14～15世紀と思われる遺構群がみられ、火葬関係の遺構である可能性がある。o域には焼土坑群が展開しているが、時期は不明である。南側は深さ約4.4mの川2で、対岸は丘陵上中部のj域である。東側、北側は川合裏川段丘面にいたる高低差約6.3mの段丘崖となっている。

全時期を通じて、丘陵上のみならず、遺跡全体のなかでも特異な土地利用がなされていた可能性が高い。

註

- 1) 森本朝子・片山まび 「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案－生産地編年を視座として－」『博多研究会誌』第8号 2000

第2章 川合裏川段丘面

序節

川合裏川は、勝尾寺川の支流である。南流し、調査地の南東で勝尾寺川に合流する。合流点手前の段丘面を西岸、東岸共に調査した。西岸段丘面の西側は約8m、東岸段丘面の東側は約1.8mの高低差をもつ段丘崖で、それぞれ丘陵上地区、扇状地地区と接している。西岸は現流路の際までが調査地に含まれており、上下2段の段丘面を調査した。現在の川合裏川はコンクリートの護岸が施されているが、下段の段丘面にはそれ以前のものと思われる、浸食または旧流路と思われる地形が認められる。東岸も2段の段丘面が存在するが、下段は現代の削平が著しく、確認調査をもって調査終了とした。

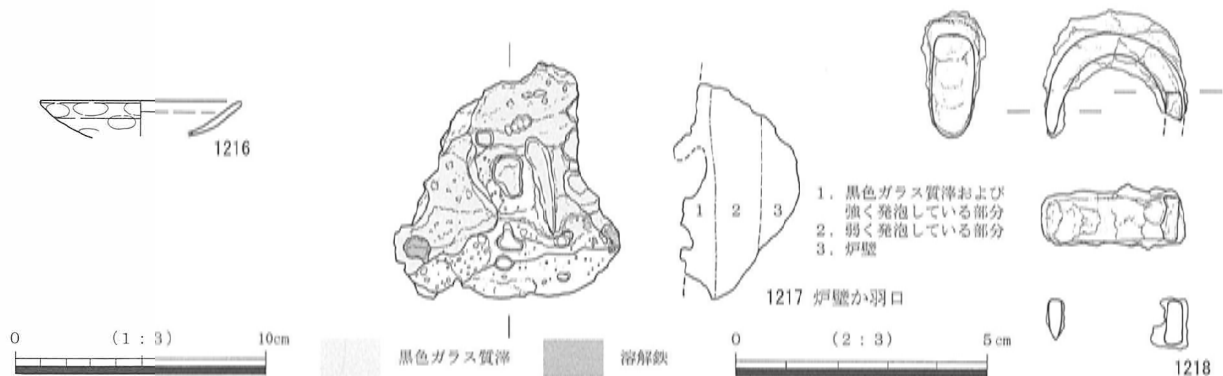
層序

西岸段丘面上段の層位は、現代水田作土層、近世水田作土層の可能性のある層、および包含層である。包含層は、北東部の一部ではシルトであるが、大部分ではシルト質細砂で、粗砂、小礫を含むものである。他地区と同様、部分的に遺存しているのみである。基盤層は、礫を非常に多く含むシルトである。

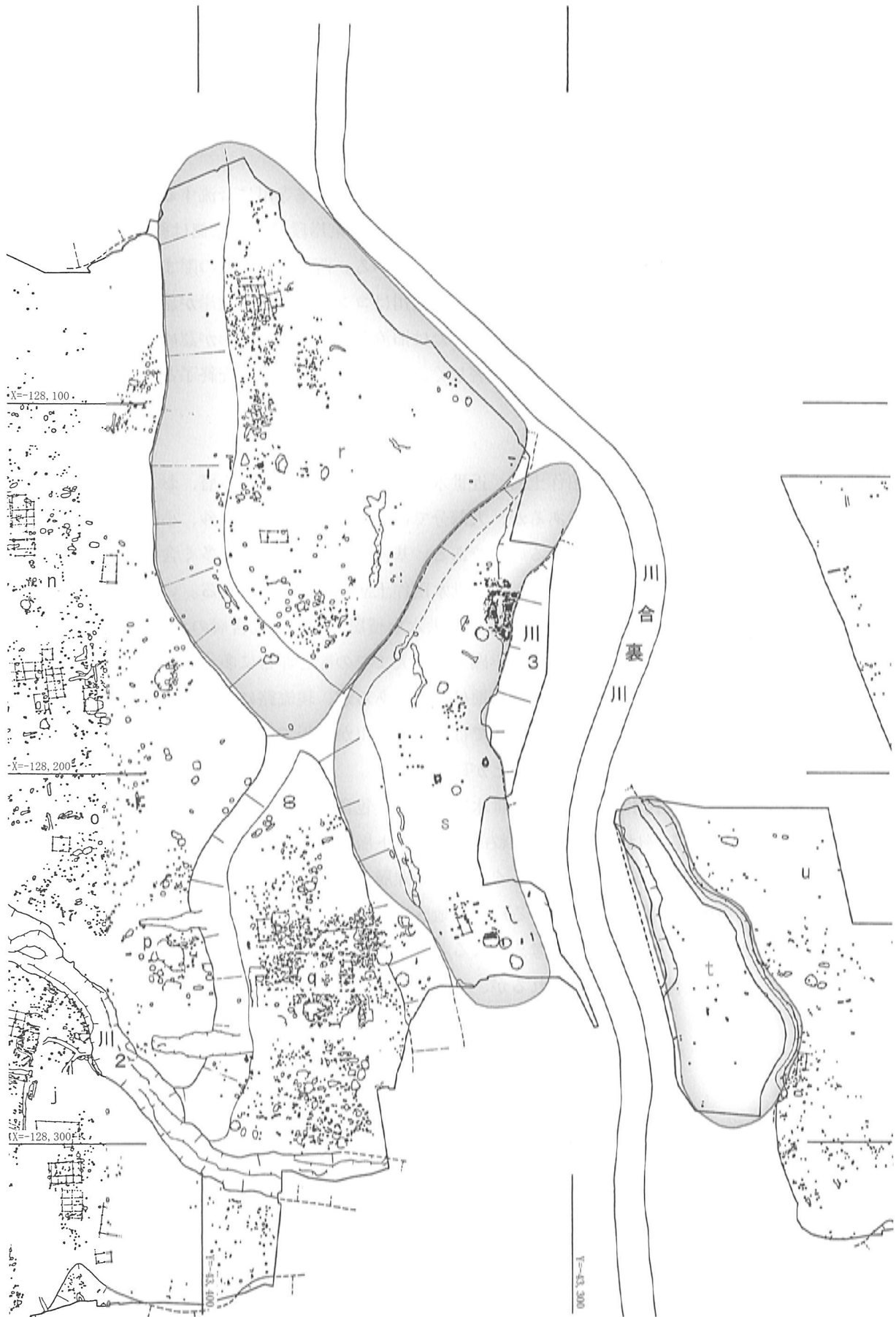
西岸段丘面下段の層位は、現代水田作土層、近世水田作土層、包含層からなる。いずれの層も砂質が強く、少なくとも包含層と砂礫層である基盤層は、洪水堆積層である。包含層の土質は、10YR 4/3にぶい黄褐色のシルト質細砂（中砂～粗砂・小礫・10cm大までの礫を非常に多く含む）である。約30cmと、比較的厚い堆積である。また、堆積した時期は不明であるが、現流路に接する部分には、細砂～粗砂の堆積が顕著であった。護岸工事以前の地図では、川合裏川が若干ではあるが部分的に蛇行しており、西岸の調査区内の一部も流路部分であったことが確認できる。

東岸段丘面の層位は、現代水田作土層、近世水田作土層、包含層からなる。包含層はシルトで、一部にのみ遺存していた。基盤層は、最上層が比較的薄いシルト層であるが、以下が砂礫層である。シルトは川合裏川に沿う形で分布しており、おそらく下層の砂礫層も含めて、川合裏川に伴う堆積層であると考えられる。段丘崖の崖面中位に、隣接する扇状地地区に存在する縄紋時代の包含層がみえており、この段丘面は縄紋時代以降に形成されたと考えられる。

段丘崖では、一部に近世盛土層がみられるが、大部分では時期不明の細砂～粗砂層を除去すると基盤層となる。



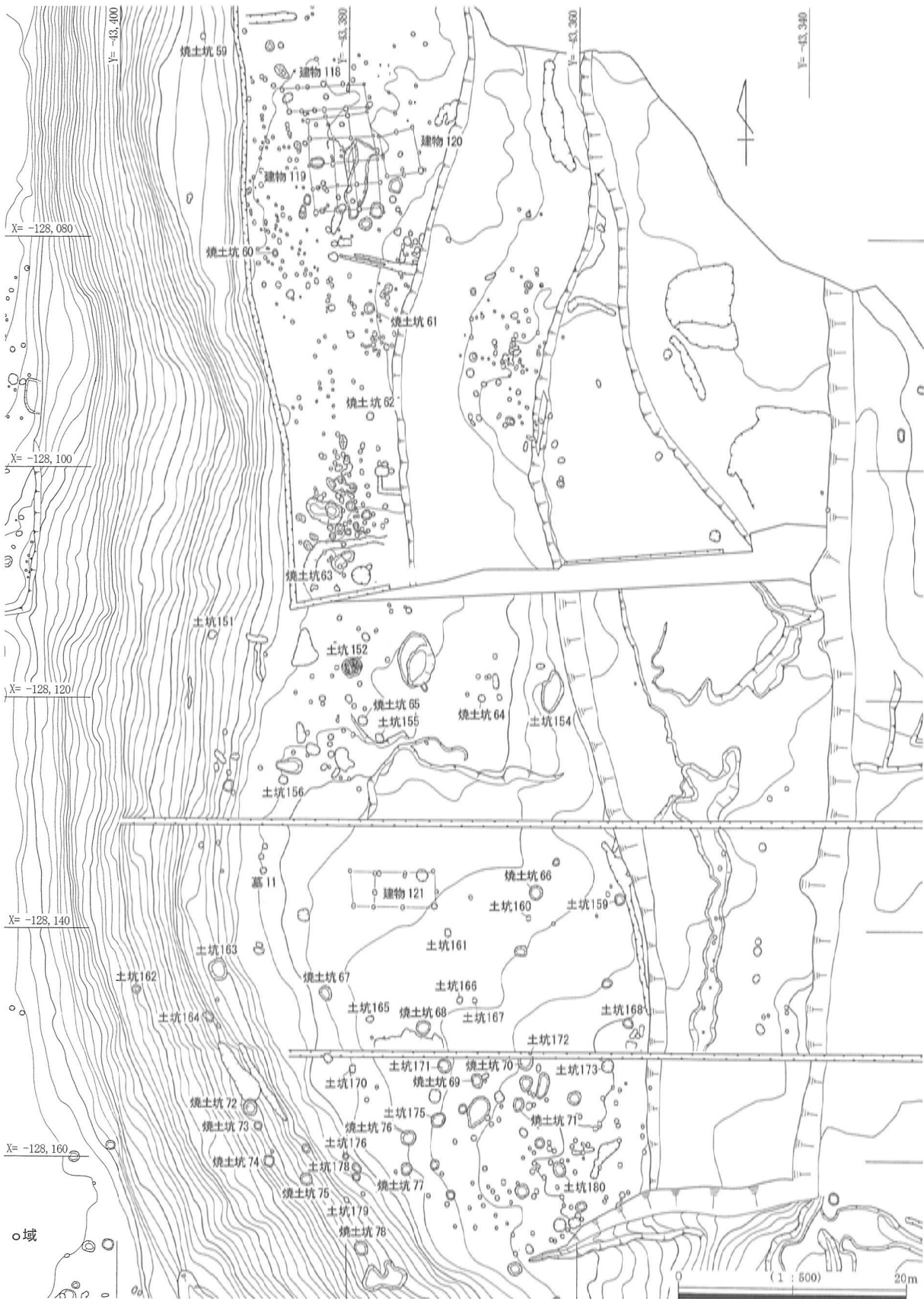
第349図 川3（川合裏川旧流路） 出土遺物（2/3 = 1217・1218）



第350図 川合裏川段丘面 全体図 (1 : 1,500)

第1節 西岸

第1項 r域 (付図8・9)

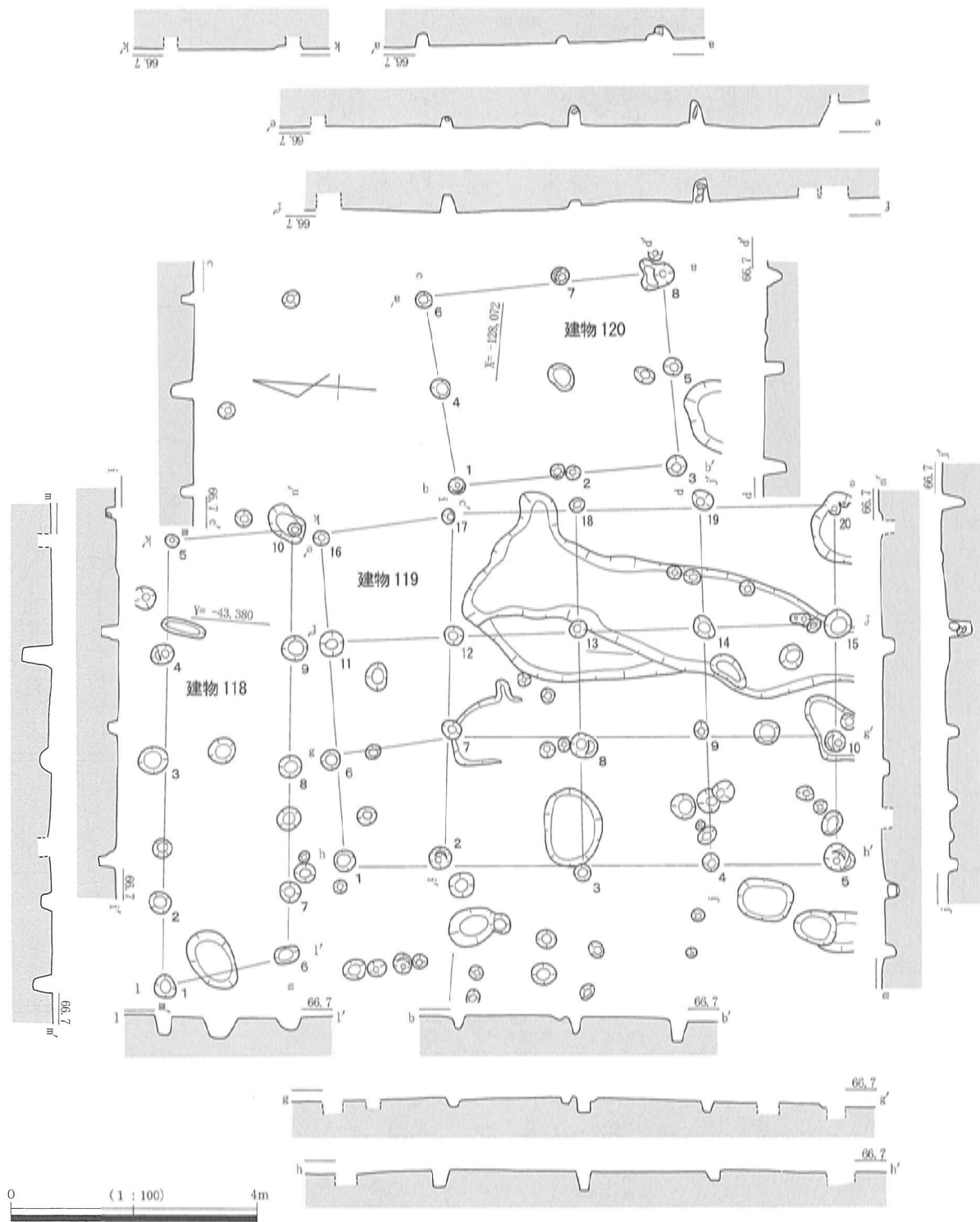


第351図 r域 平面図

川合裏川段丘面西岸の上段部分である。西側の丘陵上と地形を画す崖は、高低差約8mである。崖は南北方向に伸びているが、r域の南端部で東に方向を変え、段丘面下段のs域に至る崖と一体となる。s域と地形を画す崖は、後世の造成により南端部以外ではほとんど形状を留めていないが、s域との高低差は3m程度であったと思われる。北東側は、川合裏川と接する。

北西側は調査地外で、東側に口を開ける東西方向の小規模な谷である。

主な遺構に、建物4棟・墓1基・焼土坑20基・埋土に炭を多く含む土坑群などがある。



第352図 建物118~120 平面・断面図

建物118 (第351・352図 図版129・131)

段丘面北部に立地する。東西4間×南北1間、約7.0m×2.1m、約14.7㎡である。主軸方向は、 $N-3^{\circ}-W$ である。平面形がやや歪で、西端の柱間が狭い。柱穴7には礫が入っており、根石である可能性がある。

南に隣接する建物119とは方向軸がほぼ同じで、東辺および東から2列目の柱の並びを揃える。西側は建物119より1間長い。建物間の距離は約0.2m~0.6mである。遺物は出土していないが、位置関係から、建物119と同時か、または近い時期のものである可能性が高いと思われる。

建物119 (第351・352図 図版129・131)

段丘面北部に立地する。南北4間×東西3間、約8.1m×5.7m、約46.2㎡の総柱建物である。主軸方向は、 $N-5^{\circ}-W$ である。北部分がやや歪な平面形である。北辺と2列目の東西列が歪みを補正しあっているようにもみえる。柱穴内に礫が入っているものがみられる。柱穴14の礫は柱穴廃棄後に入れられたものと考えられるが、柱穴18は根石である可能性もある。

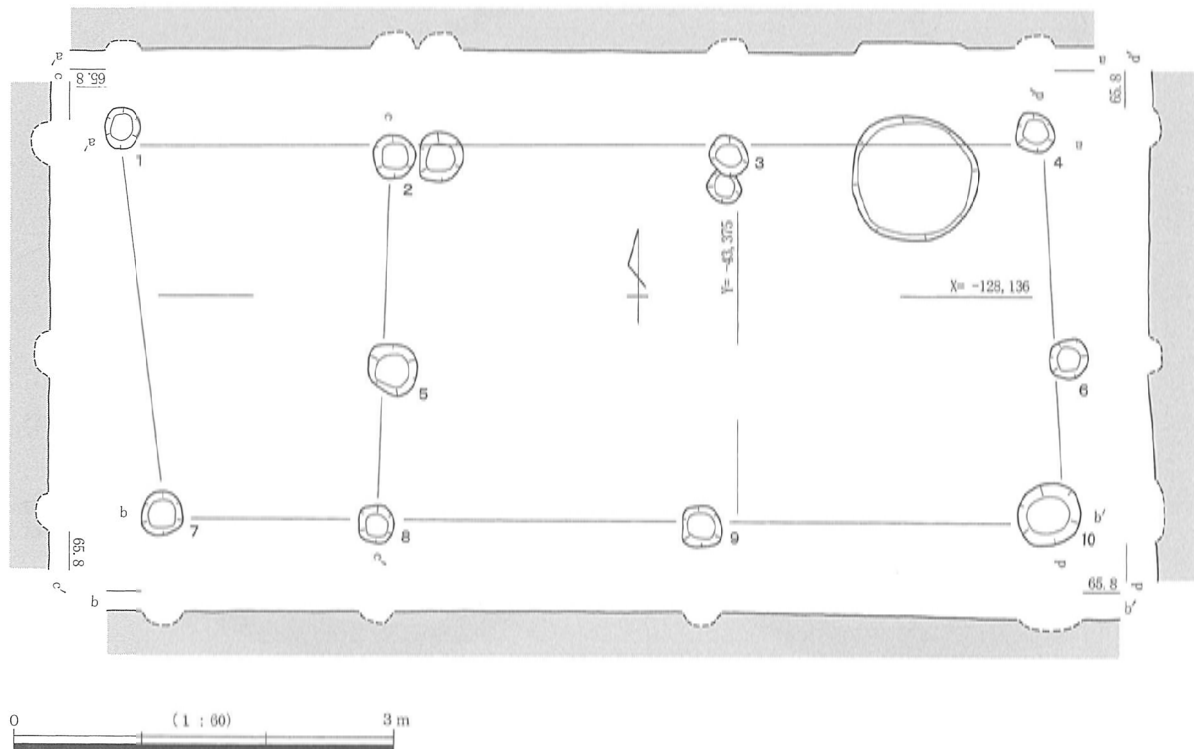
遺物は、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類、須恵器甕などの小片が少量出土している。黒色土器A類碗は小片ではあるが、柱穴2・3・14から出土している。10~11世紀のものである可能性が考えられる。

北側に隣接して、建物118が、東側に建物120がある。

建物120 (第351・352図 図版129・131)

段丘面北部に立地する。南北2間×東西2間、約3.8m×3.1m、約11.8㎡である。主軸方向は、 $N-8^{\circ}-W$ である。西側に建物119が隣接する。

遺物は、小片が少量出土したのみで、黒色土器A類、土師器皿、須恵器などがある。10~11世紀のものである可能性がある。



第353図 建物121 平面・断面図

建物121 (第351・353図 図版130)

段丘面南部に立地する。東西3間×南北2間、約7.3m×3.0m、約21.9㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。周囲に建物は復元できず、単独で存在した可能性がある。

遺物は、土師器の小片などが出土したのみである。

墓11 (第351・354・355図 図版131・226)

段丘崖斜面直下に立地する。包含層掘削中に確認したため、遺構の輪郭は不明瞭であるが、検出し得た範囲では隅丸方形で、1辺約0.4m~0.6m、深さは約0.2mである。羽釜または甕と思われる土師器が正置の状態でごえられており、内部には頭蓋骨などの骨片がみられた。

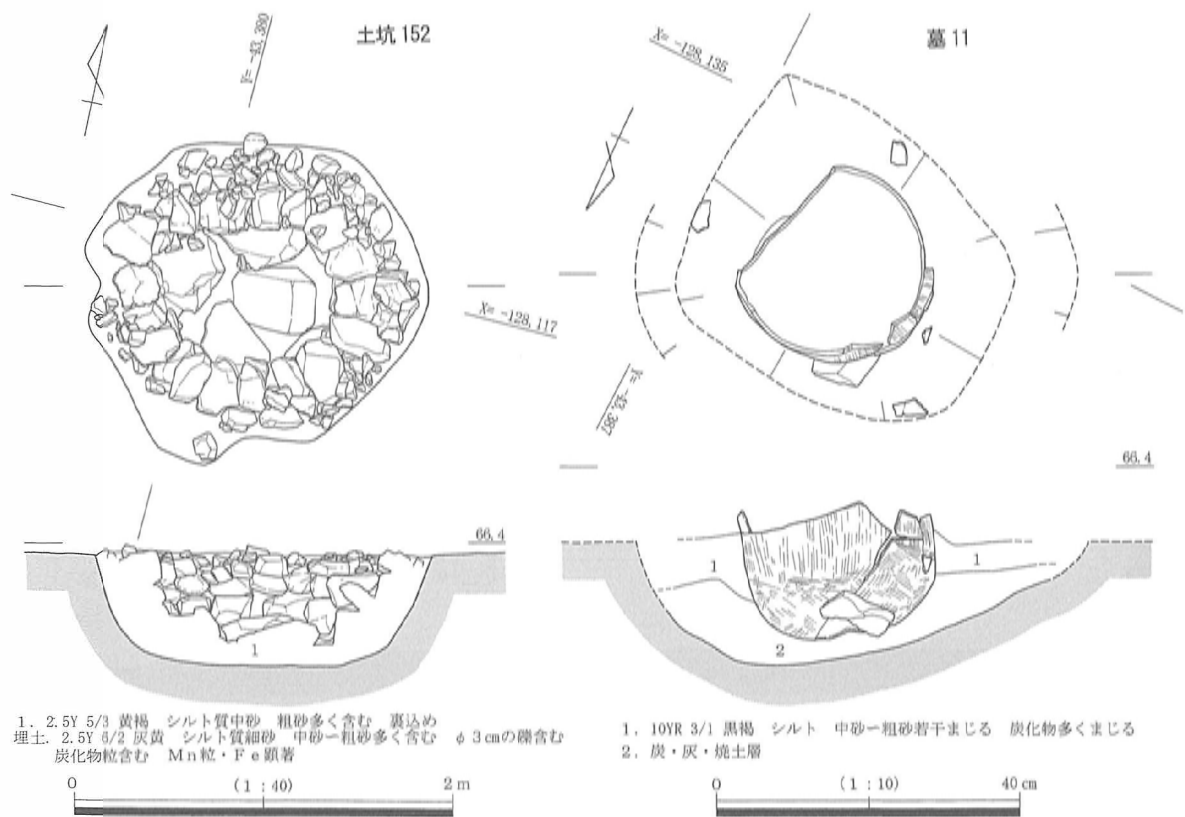
埋土には炭化物を多く含むが、被熱痕跡は認められなかった。火葬墓であると考えられる。

土師器は体部のみで、上部がほぼ水平に欠けている。本来よりこの状態であった可能性もあるが、近世作土層の攪拌によって上部が失われた可能性も否定できない。また、底部も欠損している。土器は、部分的に礫で固定されている。井本伸廣氏によると、礫はホルンフェルスで、遺跡内に通常みられるものである。

土器は、遺跡内で出土している鍔が狭く口縁部の短い長胴形の羽釜に、体部の形、器壁の厚さ、ハケメなどが類似している。煤が付着しており、煮炊きに使用していたものを骨蔵器に転用したと考えられる。土坑内からは他に土師器皿の小片が出土しており、10世紀後葉~11世紀前葉のものである可能性がある。

土坑147 (第356図 図版131)

段丘面に立地する。隅丸方形で、南北約1.3m、東西約1.0m、深さ約0.3mである。底面は平らで、壁は垂直に近い。底面に厚さ約4cm~10cmの炭層があるが、壁、底面ともに被熱痕跡は認められなかった。



第354図 墓11 土坑152 平面・断面・立面図

北東部で建物119の柱穴20などと切り合っているが、前後関係は不明である。

遺物は出土していない。

土坑148 (第357図)

段丘面に立地する。円形で、径約0.5m、深さ約0.1mである。下層は炭層である。被熱痕跡は認められなかったが、削平を受けていると思われ、焼土坑である可能性がある。

遺物は、細片がわずかに出土している。

土坑151 (第351図)

段丘崖の下部に立地する。楕円形で、長径が約0.8m、短径が約0.6m、深さが約0.2mである。埋土は、2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質細砂(粗砂~小礫多く混じる、径約10cm大の礫若干混じる、炭化物粒・焼土粒多く入る)である。被熱痕跡は認められなかった。

遺物は出土していない。

土坑152 (第351・354・355図 図版131・226)

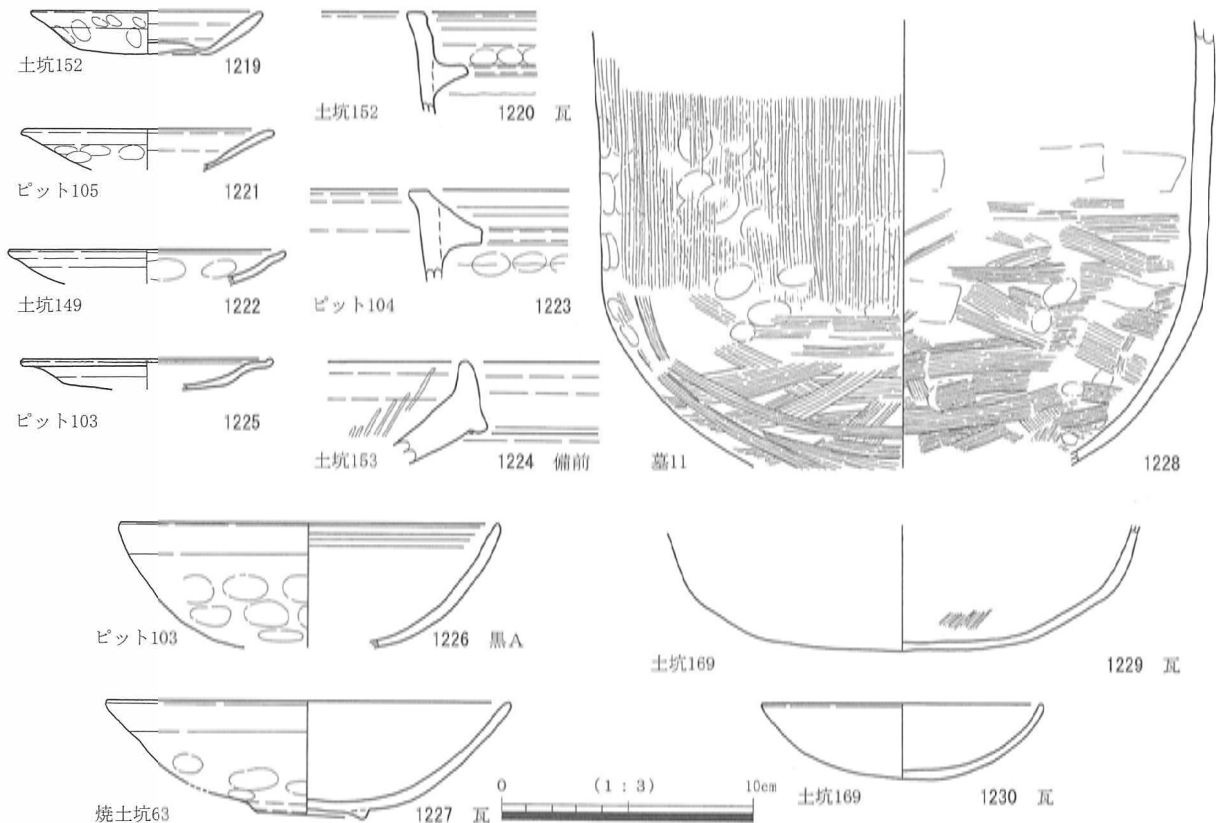
段丘面に立地する。不整円形で、径約1.8m、深さ約0.6mである。底面に大型の礫を敷き、壁にも礫を積み上げる。内側に面を揃える意識が認められるが、東側はあまり整っておらず、底の礫面も平らとはいえない。

遺物は、土師器皿、瓦質羽釜片が出土している。土師器皿は14~15世紀のものと思われる。

土坑154 (第351図)

段丘面に立地する。南北に長い不定形で、南北約3.7m、東西約2.0mである。多くの礫が集積しているが、意図的に配置した状況は認められない。

遺物は、細片がわずかに出土している。



第355図 墓11 土坑152 焼土坑63 その他の遺構 出土遺物

土坑155 (第351図)

段丘面に立地する。楕円形または隅丸方形で、南北約0.8m、東西約0.7m、深さ約0.1mである。

埋土に炭を多く含み、シルト、灰、炭がラミナ状に重なっている。基盤層に礫を非常に多く含み、底面に多くの礫が現れている。被熱痕跡は認められなかったが、削平されていると思われ、焼土坑である可能性もある。

遺物は出土していない。

土坑156 (第351図)

段丘崖直下の段丘面に立地する。円形で、径約0.7m、深さ約0.1mである。埋土は、シルト、炭、灰、焼土塊が混じったものである。被熱痕跡は認められなかった。基盤層に礫を多く含む。

遺物は出土していない。

土坑157 (第358図)

段丘崖直下の段丘面に立地する。円形で、径約1.0m、深さ約0.2mである。埋土には炭化物粒、礫を多く含むが、炭層と呼べる程度ではない。基盤層に小礫を多く含んでおり、底面、壁などに小礫が多く現れている。壁、底面共に顕著な被熱痕跡は認められなかったが、焼土坑である可能性もある。

遺物は出土していない。

土坑158 (第356図)

段丘面に立地する。楕円形で、南北約0.7m、東西約0.6m、深さ約0.1mである。包含層掘削中に検出した。埋土に炭を多く含み、灰、焼土もみられるが、被熱痕跡は認められなかった。基盤層に礫を多く含む。

遺物は出土していない。

土坑159 (第351図)

段丘面に立地する。円形で、径約0.9m、深さ約0.4mである。埋土は、10Y R 4/2 灰黄褐色シルト質細砂（粗砂多く含む、炭化物粒・焼土粒・灰多く混じる）である。壁、底面とも被熱痕跡は認められなかった。基盤層には礫を含むが、比較的少ない。

遺物は出土していない。

土坑160 (第351図)

段丘面に立地する。円形または隅丸方形で、径約0.4m、深さ約0.1mである。埋土は、2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質細砂（粗砂～小礫多く含む、炭・焼土多く入る）である。被熱痕跡は認められなかった。基盤層に多くの小礫を含んでいる。

遺物は出土していない。

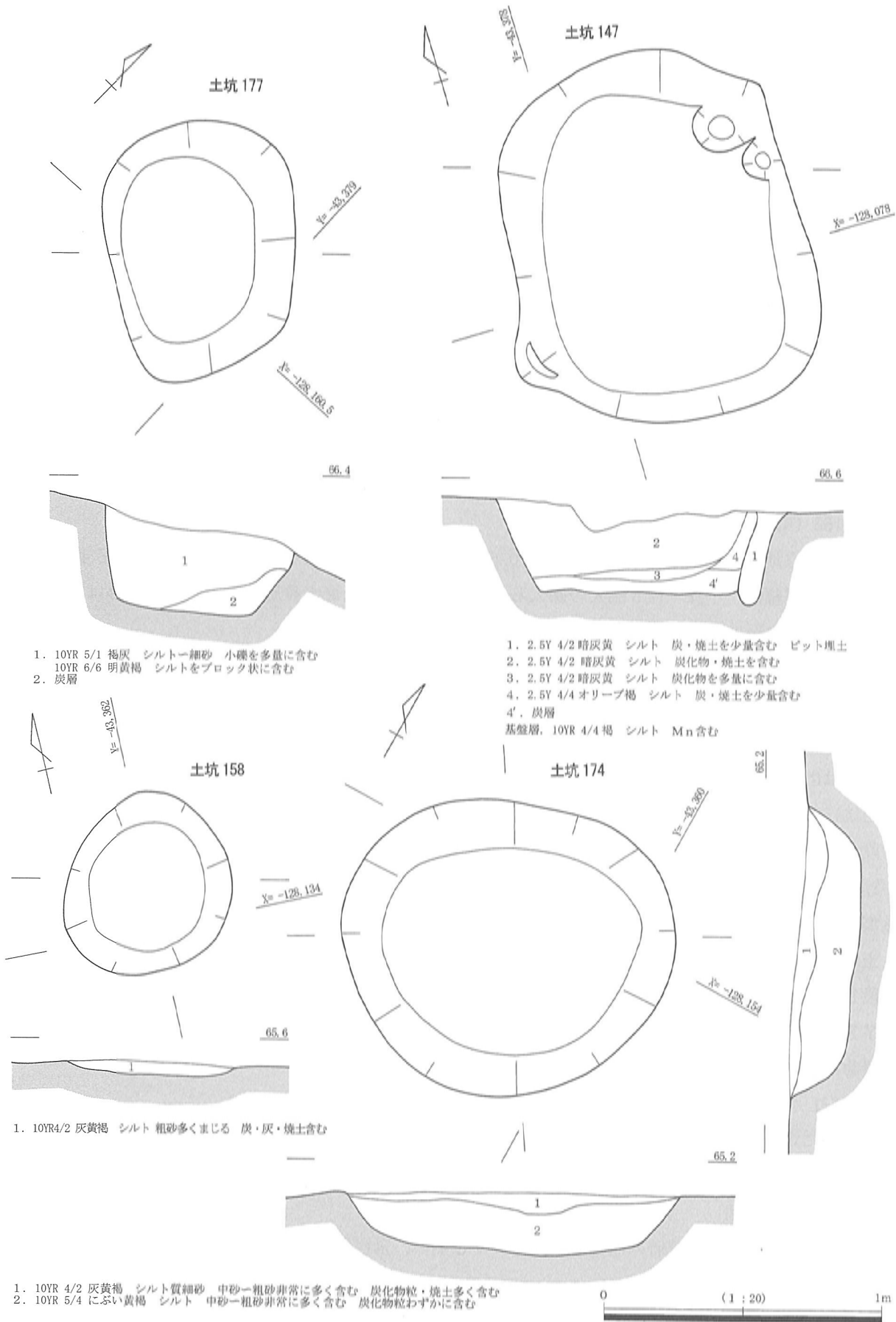
土坑161 (第351図)

段丘面に立地する。楕円形で、南北約0.7m、東西約0.5m、深さ約0.1mである。埋土に炭を多く含むが、被熱痕跡は認められなかった。基盤層に礫を含む。

遺物は出土していない。

土坑162 (第351図)

段丘崖に立地する。円形で、径約0.8m、深さ約0.3mである。埋土は、2.5Y 4/1 黄灰色シルト質極細砂（粗砂・小礫若干含む、炭化物粒・焼土粒入る）である。被熱痕跡は認められなかった。基盤層に礫をあまり含まない。遺物は出土していない。



第356図 土坑147・158・174・177 平面・断面図

土坑163 (第351図)

段丘崖の下部に立地する。楕円形で、南北約1.8m、東西約1.5m、深さ約0.2mである。埋土は、10Y R 5/6 黄褐色シルト質細砂(粗砂～小礫多く含む、焼土粒多く入る)である。

遺物は出土していない。

土坑164 (第351図)

段丘崖の下部に立地し、楕円形で、南北約1.0m、東西約0.8m、深さ約0.2mである。埋土は、2.5Y 4/1 黄灰色シルト質極細砂(粗砂・小礫若干含む、炭化物粒・焼土粒入る)である。東側は削平されており不明であるが、炭は遺存部分のみを限りでは特に下半に多い。被熱痕跡は認められなかった。基盤層に礫を含む。遺物は出土していない。

土坑165 (第351図)

段丘面に位置する。楕円形で、東西約0.7m、南北約0.6m、深さ約0.1mである。埋土の主体は焼土で、炭化物粒と灰がその隙間を充填している。被熱痕跡は認められなかった。基盤層に非常に多くの礫を含み、底面に礫が多く現れている。

遺物は出土していない。

土坑166 (第351図)

段丘面に立地する。円形で、径約0.5m～0.6m、深さ約0.1mである。埋土上層は、2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質細砂(小礫・径5cm大の礫入る)、下層が、炭粒・焼土粒層である。被熱痕跡は認められなかった。基盤層に礫を含む。遺物は出土していない。

土坑167 (第351図)

段丘面に立地する。円形で、径約0.4m、深さ約0.1mである。埋土は、炭粒・焼土粒にシルトが混じったものである。被熱痕跡は認められなかった。基盤層に礫を多く含む。

遺物は出土していない。

土坑168 (第351図)

段丘面に立地し、楕円形で、長径が約1.0m、短径が約0.8m、深さが約0.2mである。埋土は、上層が2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質細砂(小礫・径5cm大の礫入る)、下層が、炭粒・焼土粒層である。被熱痕跡は認められなかった。基盤層に礫を多く含む。遺物は出土していない。

土坑170 (第351図)

段丘崖直下に立地する。楕円形で、南北が約0.7m、東西が約0.5m、深さが約0.2mである。埋土は、10Y R 4/2 灰黄褐色シルト(炭粒・焼土粒若干入る)である。

遺物は、出土していない。

土坑171 (第351図)

段丘面に立地する。円形で、径約1.1m、深さ約0.3mである。焼土坑である可能性もある。

遺物は出土していない。

土坑172 (第351図)

段丘面に立地する。調査時の筋掘りと重なってしまい、全容は不明である。焼土坑である可能性もある。遺物は出土していない。

土坑173 (第351図)

段丘面に立地する。円形で、径約1.0m、深さ約0.2mである。埋土は、2.5Y 5/3 黄褐色シルト(中

砂～粗砂多く含む、炭化物多く混じる)である。

遺物は出土していない。

土坑174 (第356図)

段丘面に立地する。円形で、南北径約1.1m、東西径約1.2m、深さ約0.2mである。埋土の上層に炭を多く含むが、壁、底面ともに被熱痕跡は認められなかった。基盤層に小礫を多く含む。

遺物は、土師器の小片が出土したのみである。

土坑175 (第351図)

段丘面に立地する。円形で、径約1.2m、深さ約0.2mである。埋土は、10Y R 4/2 灰黄褐色シルト(炭粒・焼土粒多く入る)である。遺物は出土していない。

土坑176 (第351図)

崖と段丘面の傾斜変換点に立地する。円形で、径約0.5m、深さ約0.2mである。埋土は、10Y R 5/4 にぶい黄褐色シルト(炭粒・焼土粒多く入る)である。

遺物は出土していない。

土坑177 (第356図)

崖と段丘面の傾斜変換点に立地する。隅丸方形で、長辺約0.9m、短辺約0.7m、深さ約0.4mである。埋土下層が炭層で、上層には焼土片を含む。基盤層に小礫を多く含む。

遺物は出土していない。

土坑178 (第351図)

崖と段丘面の傾斜変換点に立地する。円形で、径約0.7m、深さ約0.2mである。埋土は、10Y R 5/3 にぶい黄褐色極細砂(炭・灰・焼土含む)である。被熱痕跡は認められなかったものの、非常に浅いため削平を受けていることが想定され、焼土坑である可能性もある。基盤層に礫を多く含む。

遺物は出土していない。

土坑179 (第351図)

段丘崖下部に立地する。楕円形で、南北約0.5m、東西約0.4m、深さ0.02mである。埋土は炭層である。被熱痕跡は認められなかったものの、浅いため削平を受けていることが想定され、焼土坑である可能性もある。基盤層に小礫を含む。遺物は出土していない。

土坑180 (第351図)

楕円形で、長径約1.3m、短径約1.1mである。多くの礫が集積しているが、意図的に配置された状況は認められない。礫の大きさはほぼ揃っており、土坑154のものに比べると小さい。

遺物は、底面近くから東播系須恵器鉢片が出土している。12～13世紀のものである。

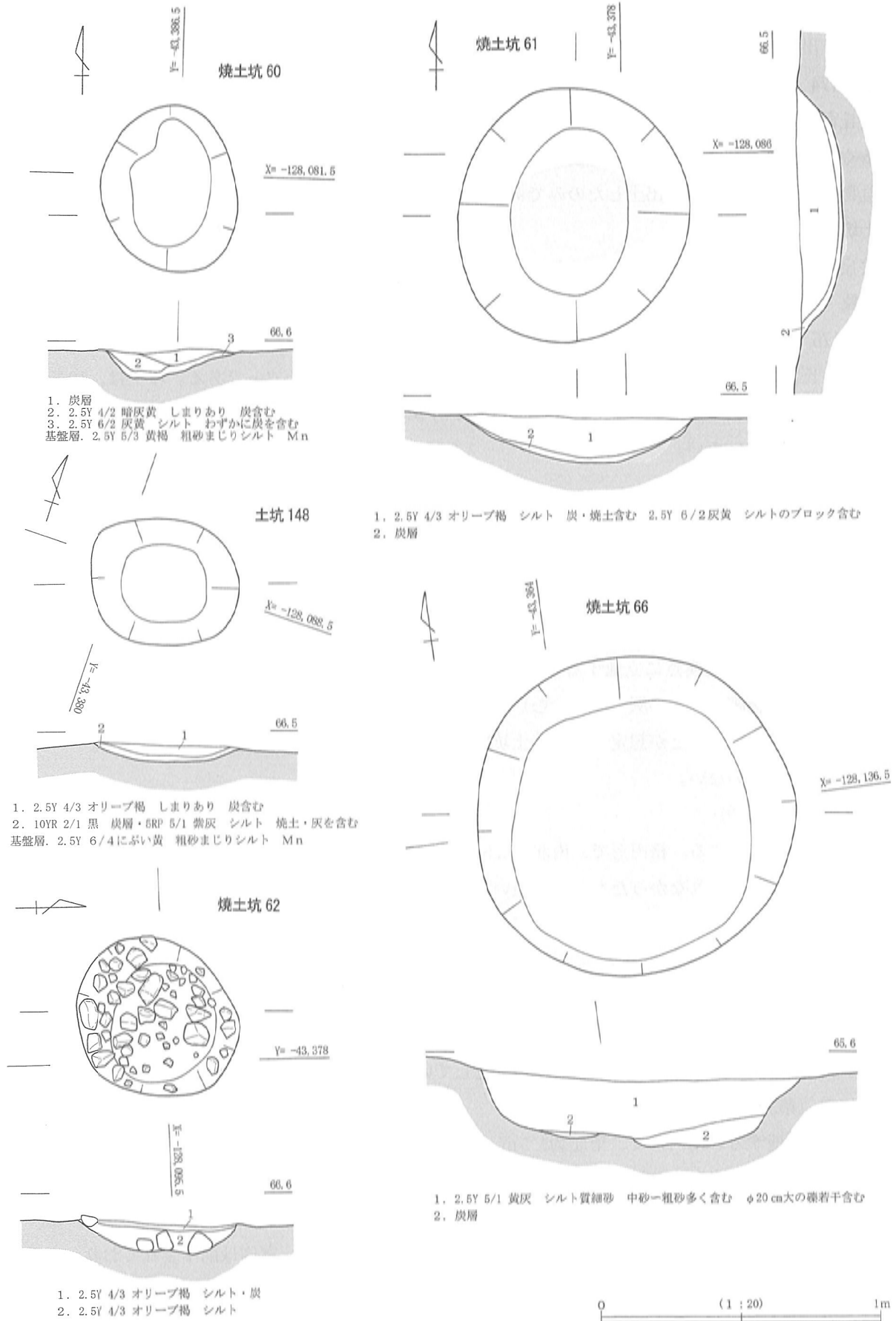
土坑181 (第361図)

段丘崖に立地する。楕円形で、南北約1.5m、東西約1.0m、深さ約0.2mである。焼土坑である可能性もある。遺物は出土していない。

焼土坑59 (第351図)

段丘崖下部に位置する。円形で、径約0.4m、深さ約0.1mであるが、東側は削平されており、上部もその可能性が高い。底面にわずかに被熱痕跡がみられ、焼土粒混じりの薄い炭層がある。

遺物は出土していない。



第357図 土坑148 焼土坑60~62・66 平面・断面図

焼土坑60 (第351・357図)

段丘崖直下に立地する。円形で、径約0.5m、深さ約0.1mである。埋土上層は炭層である。壁の一部に被熱痕跡がみられ、底面も壁ほどではないが、わずかに赤変している。

遺物は出土していない。

焼土坑61 (第351・357図 図版132)

段丘面に立地する。楕円形で、南北約0.9m、東西約0.8m、深さ約0.2mである。埋土の下層は薄い炭層である。壁から底面にかけて赤変している部分がみられ、被熱したと思われる。

遺物は出土していない。

焼土坑62 (第351・357図 図版132)

段丘面に立地する。円形で、径約0.6m、深さ約0.1mであるが、上部は削平されている可能性がある。底面に1辺約10cmの角礫が多数あり、弱い被熱痕跡がみられる。礫上には炭層がある。礫を据え、その上で火を使ったことが想定される。遺物は出土していない。

焼土坑63 (第351・355図)

段丘崖直下の段丘面に立地する。遺存長約1.3m、深さ約0.3mである。土坑150と切り合っていると認められ、全形は不明である。遺物は、瓦器碗が出土している。

焼土坑64 (第351図)

段丘面に立地する。円形で、径約0.6m、深さ約0.1mである。埋土は、上層が2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト質細砂(粗砂～小礫多く含む)、下層が炭層である。壁上部に被熱痕跡がみられる。

遺物は、土師器の小片が出土したのみである。

焼土坑65 (第351図)

段丘面に立地する。円形で、径約0.8m、深さ約0.1mである。上層はシルト、下層が炭・灰・焼土粒層である。壁と底面の一部に被熱痕跡がみられる。基盤層に礫を多く含む。遺物は出土していない。

焼土坑66 (第351・357図)

段丘面に立地する。円形で、径約1.2m、深さ約0.2mである。包含層掘削中に検出した。埋土の下層は炭層である。壁から底面まで被熱して焼土化している部分がみられる。基盤層に小礫を非常に多く含む、壁、底面に多くの小礫が現れている。遺物は、土師器小片が出土したのみである。

焼土坑67 (第351・358図)

段丘崖直下の段丘面に立地する。円形で、径約1.0m、深さ約0.2mである。包含層掘削時に検出した。壁から底面にかけて被熱痕跡がみられ、埋土に炭を非常に多く含む。基盤層に礫を多く含む、壁、底面に多くの礫が現れている。遺物は出土していない。

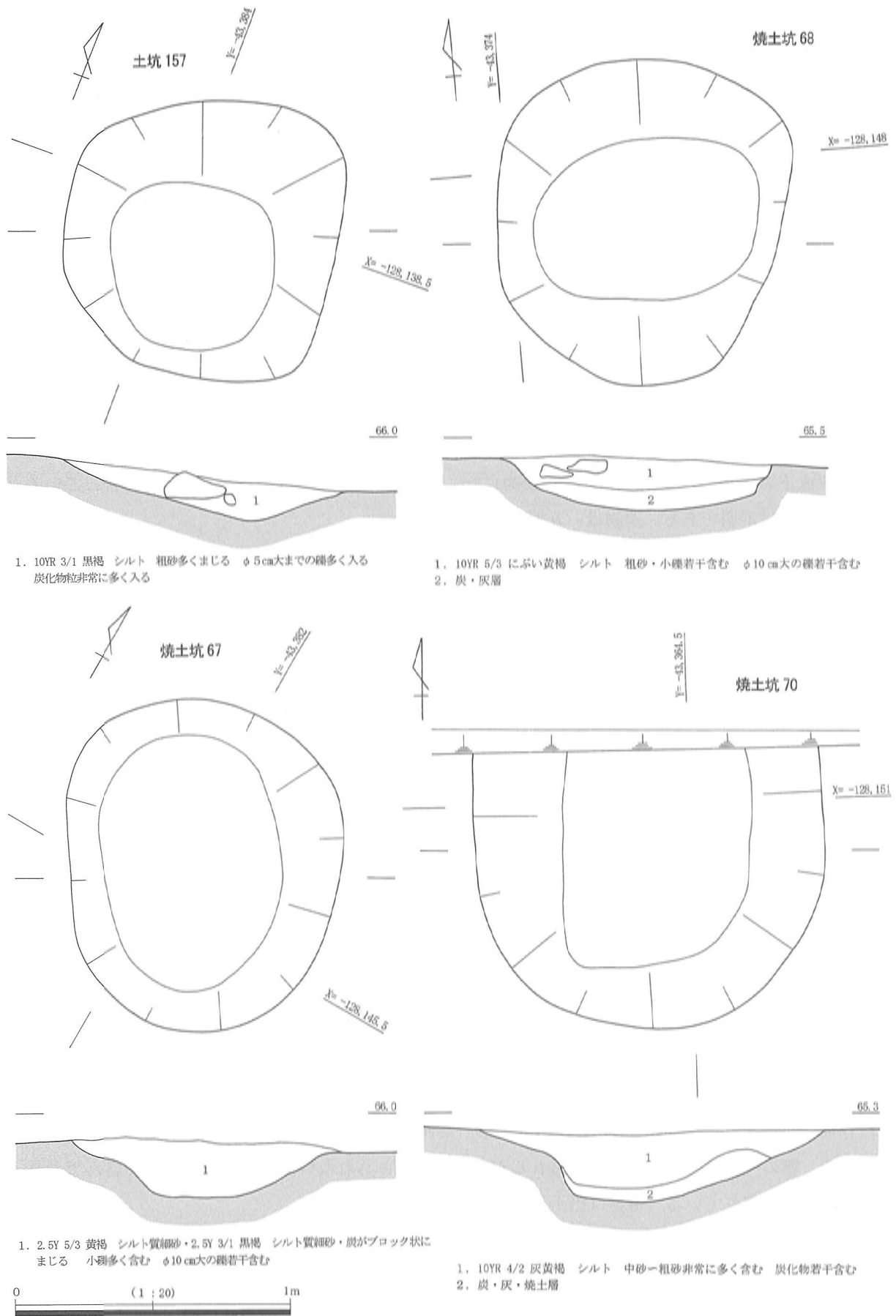
焼土坑68 (第351・358図 図版132)

段丘面に立地する。不整円形で、南北約1.2m、東西約1.0m、深さ約0.2mである。埋土の下層は炭層である。壁の一部に被熱痕跡が認められるが、底面にはみられない。基盤層に礫を多く含んでおり、底面、壁に多く現れている。遺物は出土していない。

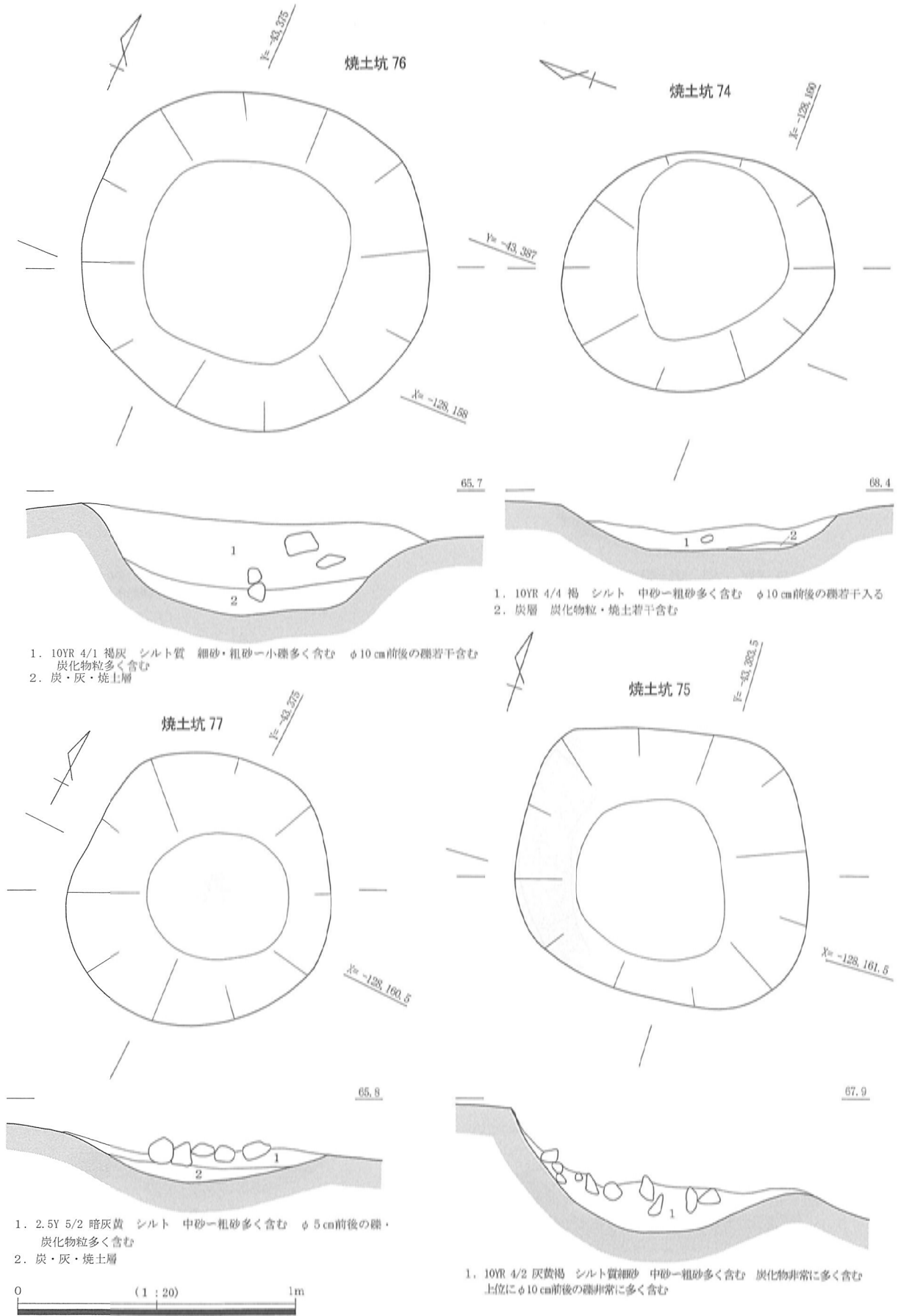
焼土坑69 (第351・360図 図版132)

段丘面に立地する。楕円形で、南北約1.2m、東西約0.9m、深さ約0.2mである。埋土の下層は炭層である。壁から底面にかけて被熱痕跡がみられる。基盤層に小礫を含む。遺物は出土していない。

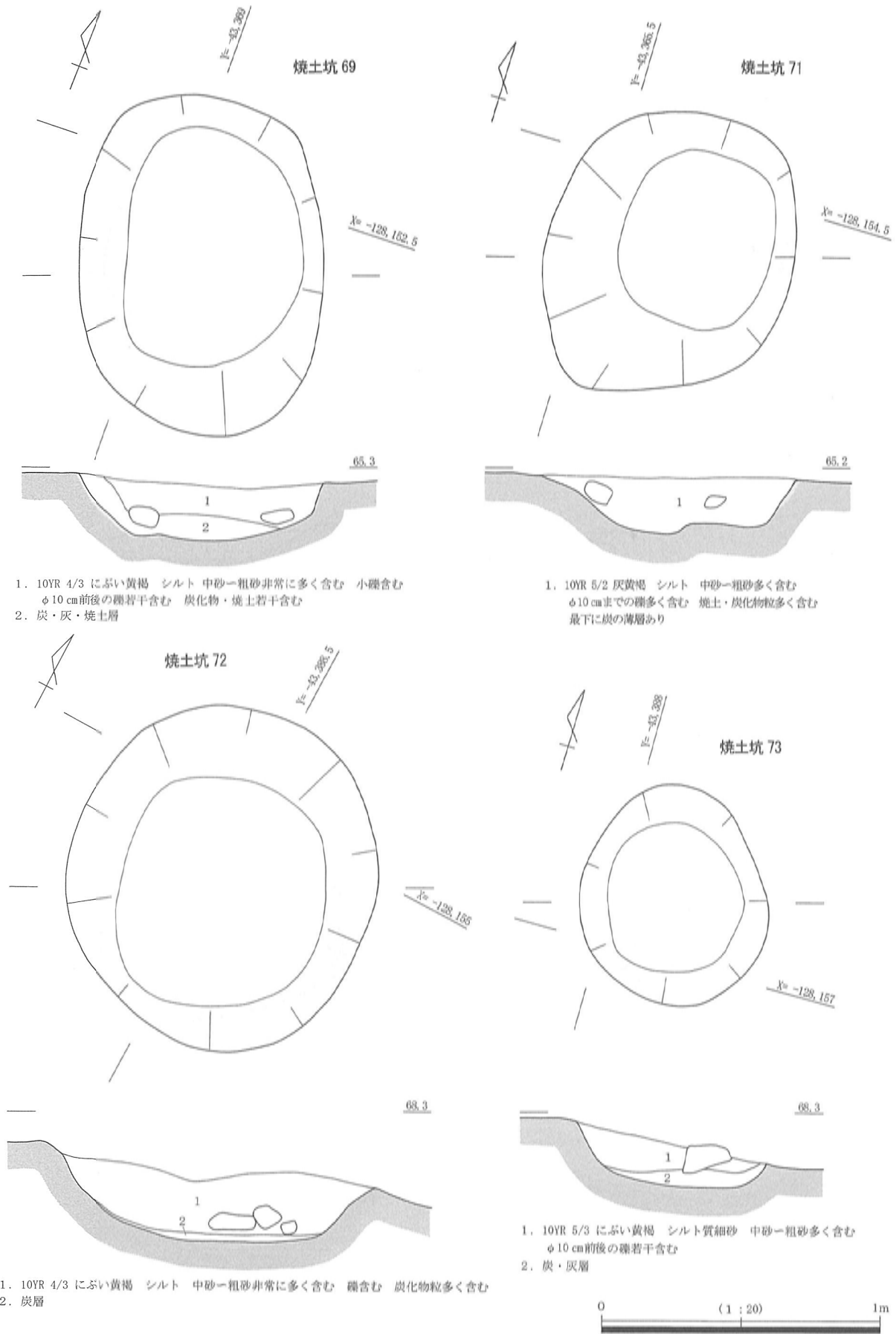
第1節 西岸(r域)



第358図 土坑157 焼土坑67・68・70 平面・断面図



第359図 焼土坑74~77 平面・断面図



第360図 焼土坑69・71~73 平面・断面図

焼土坑70 (第351・358図 図版132)

段丘面に立地する。北側が調査用筋掘りと重なり不明であるが、円形で、径約1.2m、深さ約0.3mである。埋土に小礫を多く含み、下層は炭層である。顕著な被熱痕跡は認められなかったが、形状、埋土から焼土坑である可能性が高いと思われる。基盤層に礫を含んでおり、壁、底面に多くの礫が現れている。遺物は出土していない。

焼土坑71 (第351・360図)

段丘面に立地する。円形で、南北径約1.0m、東西径約0.9mで、深さ約0.2mである。埋土の最下に薄い炭層がある。壁、底面ともに被熱痕跡がみられ、特に壁はよく焼けしまっている。基盤層に礫を多く含んでいる。遺物は出土していない。

焼土坑72 (第351・360図)

段丘崖に位置する。円形で、径約1.2m、深さ約0.2mである。埋土に若干礫を含み、下層は炭層である。壁の下半と底面に被熱痕跡がみられ、特に壁は焼けしまっている。基盤層に小礫を含む。

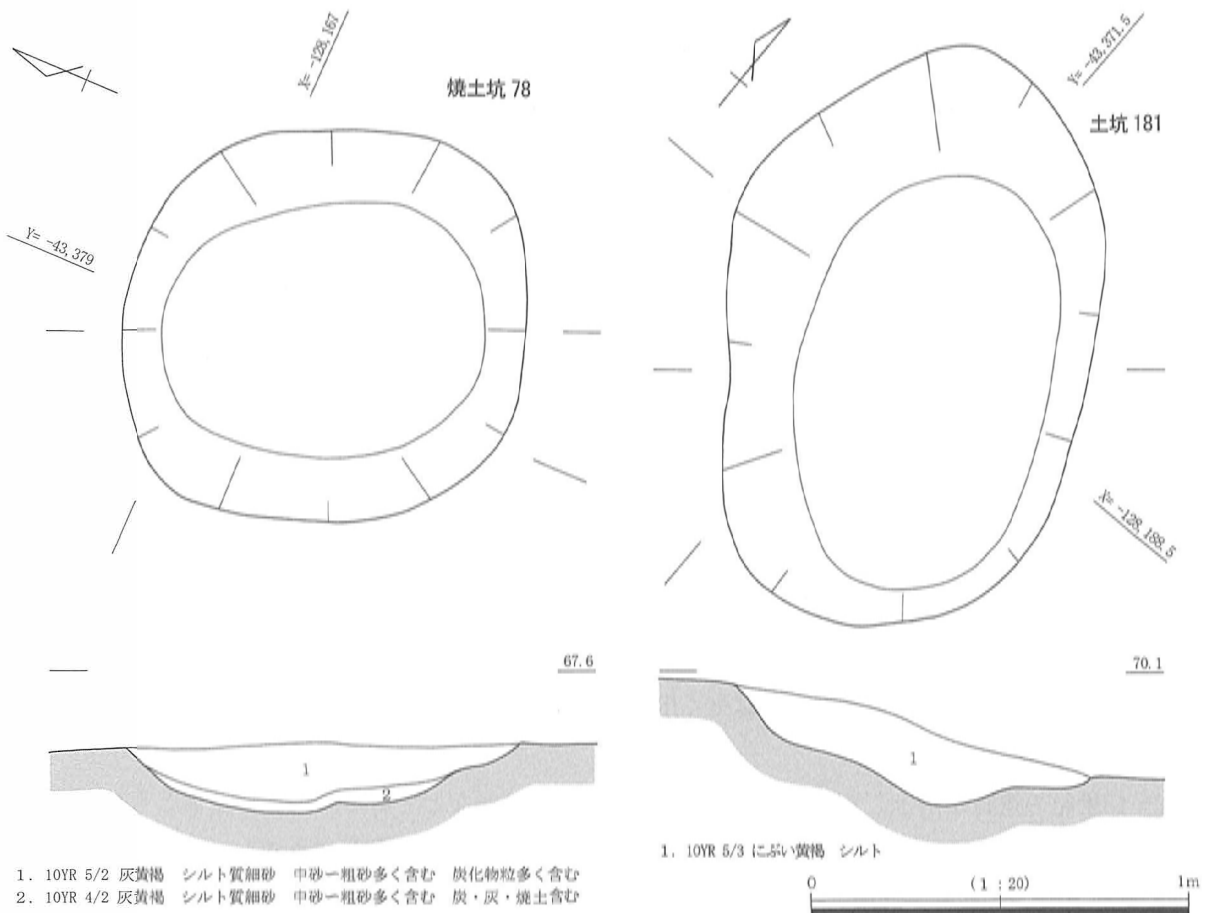
遺物は、須恵器小片が出土した。

焼土坑73 (第351・360図)

段丘崖に立地する。円形で、径約0.7m、深さ約0.2mである。埋土の下層は炭層である。壁から底面の一部に被熱痕跡がみられる。基盤層に礫を含む。遺物は出土していない。

焼土坑74 (第351・359図)

段丘崖に立地する。楕円形で、南北径約0.9m、東西径約0.7m、深さ約0.1mである。壁の被熱痕跡



- 1. 10YR 5/2 灰黄褐 シルト質細砂 中砂-粗砂多く含む 炭化物粒多く含む
- 2. 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質細砂 中砂-粗砂多く含む 炭・灰・焼土含む

第361図 土坑181 焼土坑78 平面・断面図

は不明瞭であるが、底面では比較的顕著である。埋土の下層は炭層である。基盤層に礫はあまり含まれていない。遺物は出土していない。

焼土坑75 (第351・359図)

段丘崖下部に立地する。隅丸方形で、1辺約1.1m、深さ約0.3mである。埋土に礫を非常に多く含むが、埋め戻す際に入ったものと思われる。壁に被熱痕跡がみられる。基盤層に小礫を含む。遺物は出土していない。

焼土坑76 (第351・359図)

崖直下の段丘面に立地する。円形で、径約1.2m、深さ約0.4mである。埋土の下層は炭層である。壁に若干の被熱痕跡がみられる。基盤層に小礫を多く含む。

焼土坑77 (第351・359図)

段丘崖の直下に立地する。円形で、径約1.0m、深さ約0.1mである。底面に被熱痕跡がみられる。上層に礫を多く含む、下層は炭層である。基盤層に礫を多く含む。遺物は出土していない。

焼土坑78 (第351・361図)

段丘崖下部に立地する。径約1.1m、深さ約0.2mである。埋土の下層は炭層である。底面の一部に被熱痕跡がみられる。基盤層に小礫を含む。遺物は出土していない。

包含層は、段丘面部分では西半分にのみ遺存していた。東半分では少数の遺構を検出したのみで、本来より遺構が希薄な部分であった可能性もあるものの、棚田造成時の削平の影響を大きく受けていると思われる。西半分でも、包含層が遺存している範囲は、棚田造成時に削平を免れた各棚田の東部に限られ、棚田の段下など遺構が希薄な部分が、大きく削平されている可能性が高い。段丘崖は、北部では現代表土を除去した段階で基盤層が現れる。南部では、近世の盛土層を除去した段階で基盤層が現れる。

包含層、近世の層出土遺物には、黒色土器A類椀、罎が狭く口縁部が短い土師器羽釜など10～11世紀代のものが若干みられるほか、14～15世紀前葉ものが多く含まれている。瓦器はあまりみられない。北部の包含層から、鋳造用羽口片が1点出土している。

小結

出土遺物が少なく、時期不明の遺構が大半である。

北部に位置する建物118～120は、その位置関係から、同時に存在したか、または近い時期のものであると考えられる。詳細な時期は不明であるが、黒色土器A類、「て」字状口縁土師器皿などの小片が出土しており、これらであえて推測するならば、10～11世紀代の可能性がある。

墓11は、土師器（おそらく羽釜）を骨蔵器にした火葬墓である。10～11世紀代のものである可能性がある。段丘崖直下に位置し、他に類似する遺構を検出していない。墓11には被熱痕跡はみられない。r域には多くの焼土坑が存在するが、骨は全く出土しておらず、火葬をおこなったものではないと考えられる。

12～13世紀の遺物が出土した遺構も若干存在する。土坑180などである。遺物、遺構ともに少数であるため断定はできないが、この時期に土地利用がおこなわれていた可能性はある。

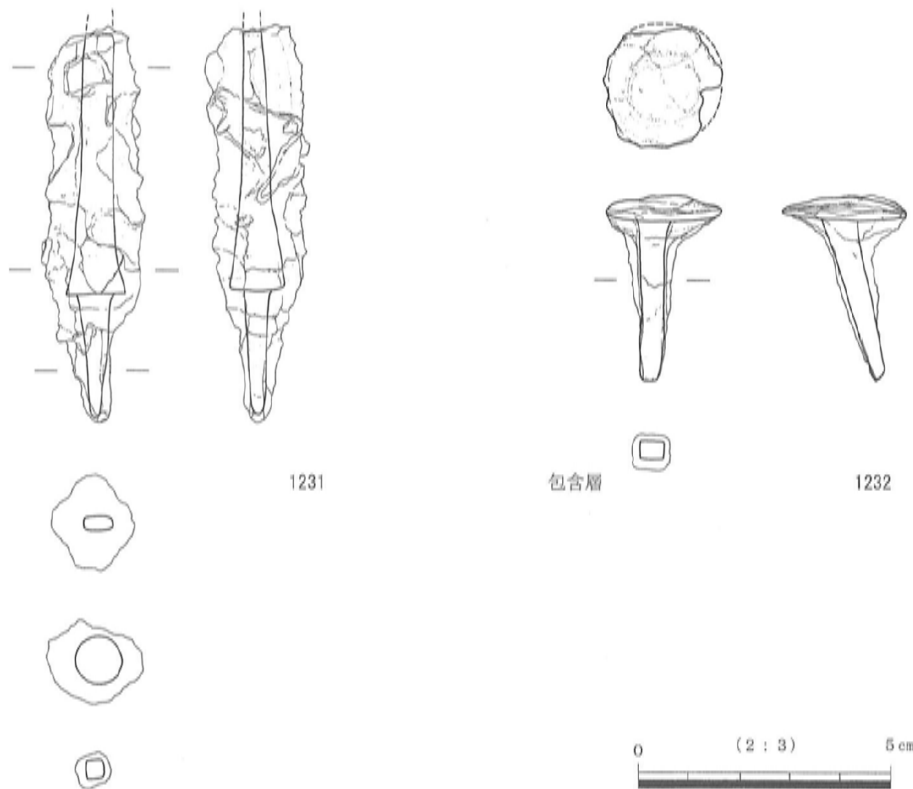
14～15世紀代の遺物が出土した遺構も若干存在する。土坑152などである。包含層からも14～15世紀の遺物が多く出土しており、土地利用がおこなわれていた可能性がある。

建物121は時期が不明である。周辺では他にピットなどは検出しておらず、単独で存在した可能性が高い。o域の建物115同様、焼土坑群の側に単独で存在しており、これに伴う小屋であったことも想定される。

焼土坑群は、遺物の出土がほとんどなく、時期が不明である。多くのものが円形である。壁から底面にかけて被熱痕跡がみられ、下層が炭層であるものが多い。上層は埋め戻し土であると思われ、礫を多く含むものもみられる。基盤層に礫が多く含まれているため、その底面に礫が現れているものが目立つ。

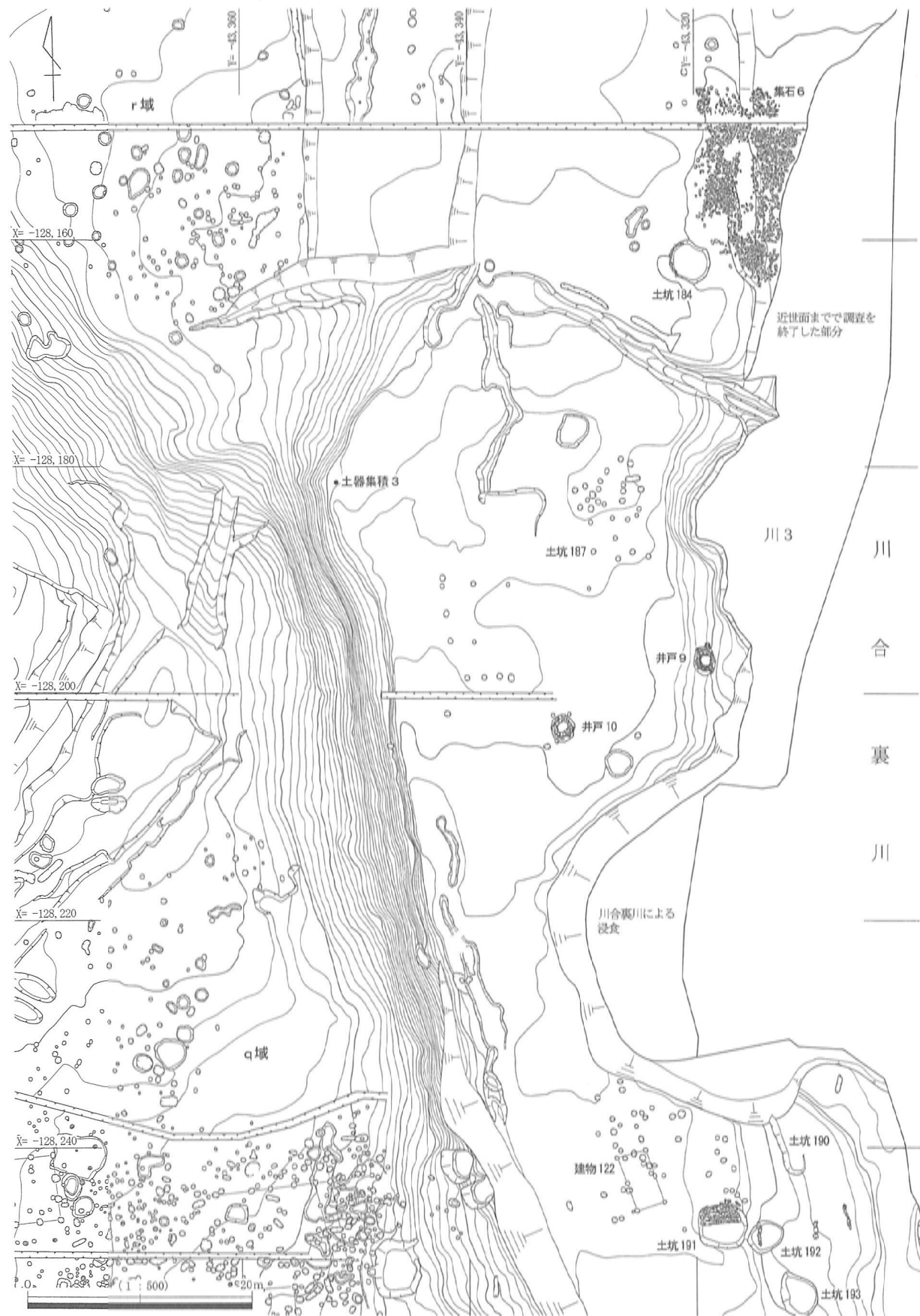
埋土に炭、焼土粒を含むが、被熱痕跡のみられない土坑も多く存在している。円形または楕円形で形状は焼土坑とあまり変わらないが、焼土坑群に比べて小規模なものが多い。非常に浅いものも多く、削平を受けた焼土坑の下層の炭層部分のみが遺存しているものも多く含まれている可能性がある。ただし、すべてが焼土坑であるとは断定できない。土坑147はその遺存状況から削平の影響をあまり受けていないと思われるが、隅丸方形で、壁が垂直に近く、多くの焼土坑とは形状を異にする。遺存状態が良好であるのに関わらず、被熱痕跡は全く認められない。埋土も焼土坑群のものに比べて、灰を多く含んでいる可能性が考えられるが、シルト質が優勢である。焼土坑か否かの検証が難しいものが大半であり、その割合は不明であるものの、明らかに焼土坑ではない、別の性格の土坑も存在していると思われる。しかし、その具体的な性格については、焼土坑との関係が想定されるものの、不明とせざるを得ない。

焼土坑、炭を多く含む土坑共に、r域全体に分布しているが、特に南部の段丘崖から段丘面にかけての部分に多い。段丘崖上の丘陵上東部地区には、丘陵肩に沿って焼土坑が存在している。特にo域には多くの焼土坑群が展開している。これらの多くが時期のわからないものであるが、形状、埋土、被熱の状況などが酷似しており、同じ性格の遺構であると考えられる。



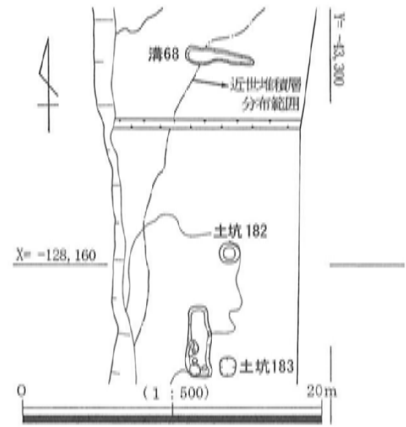
第362図 包含層・近世作土層 出土遺物 (2/3)

第2項 s域 (付図9・10・16)

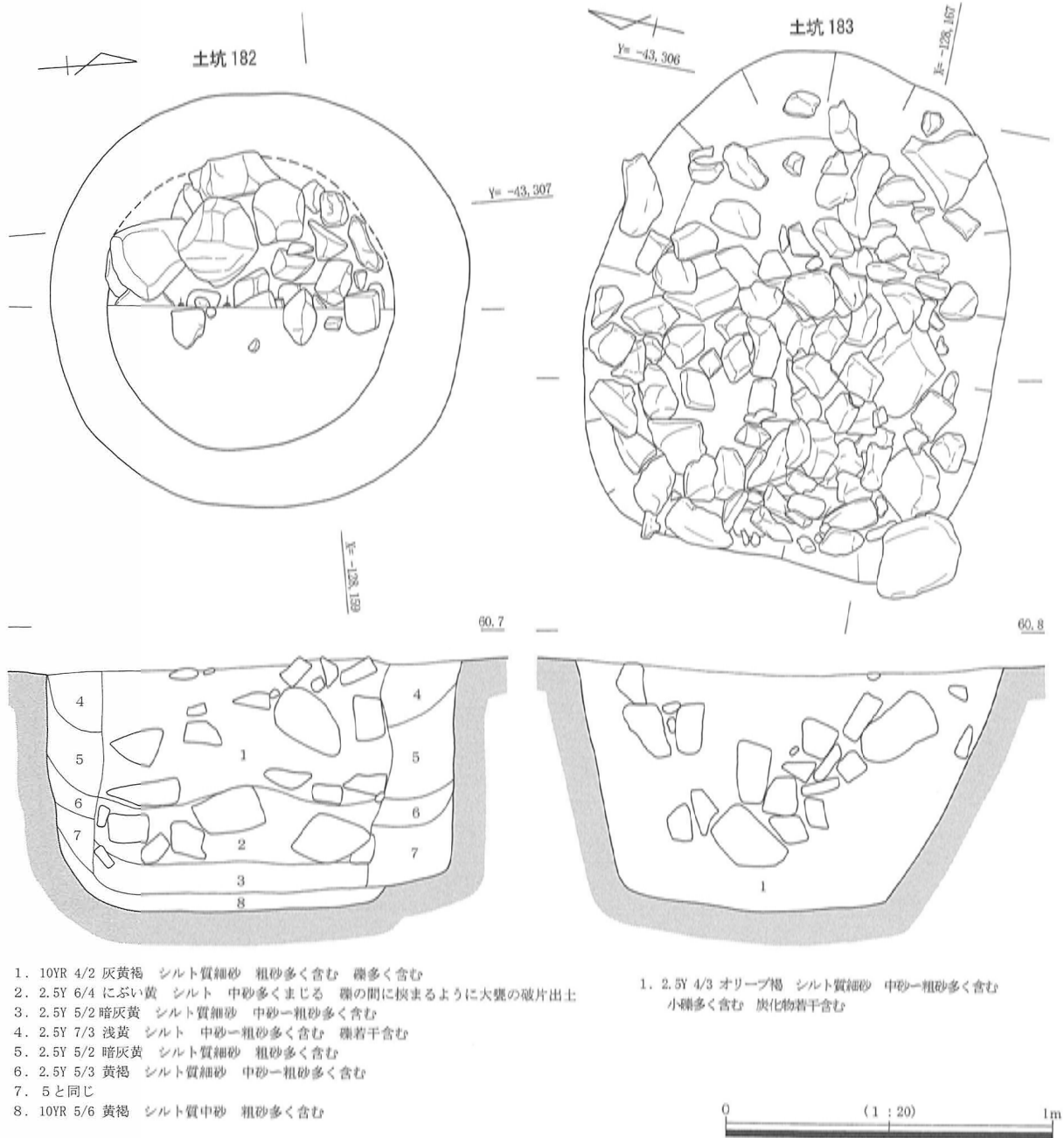


第363図 s域 平面図

川合裏川段丘面西岸の下段部分である。東側は川合裏川、西側は崖である。崖は、北部分で段丘面上段（r域）と、南部分で丘陵上（q域）と地形を画している。段丘面上段からの崖は南端部以外を削平され、棚田の段差としてその名残りを留めているのみである。段差は南北方向であるが、崖は南西から北東方向へと伸びていたと想定される。丘陵上にいたる崖は高低差約8mである。崖の下部は近世以降に大きく削平を受け、本来よりも傾斜が急になっている。川合裏川沿いには、コンクリート護岸工事以前の旧流路、または浸食と思われる部分がみられる。



第364図 s域 近世面 平面図



第365図 土坑182・183 平面・断面図

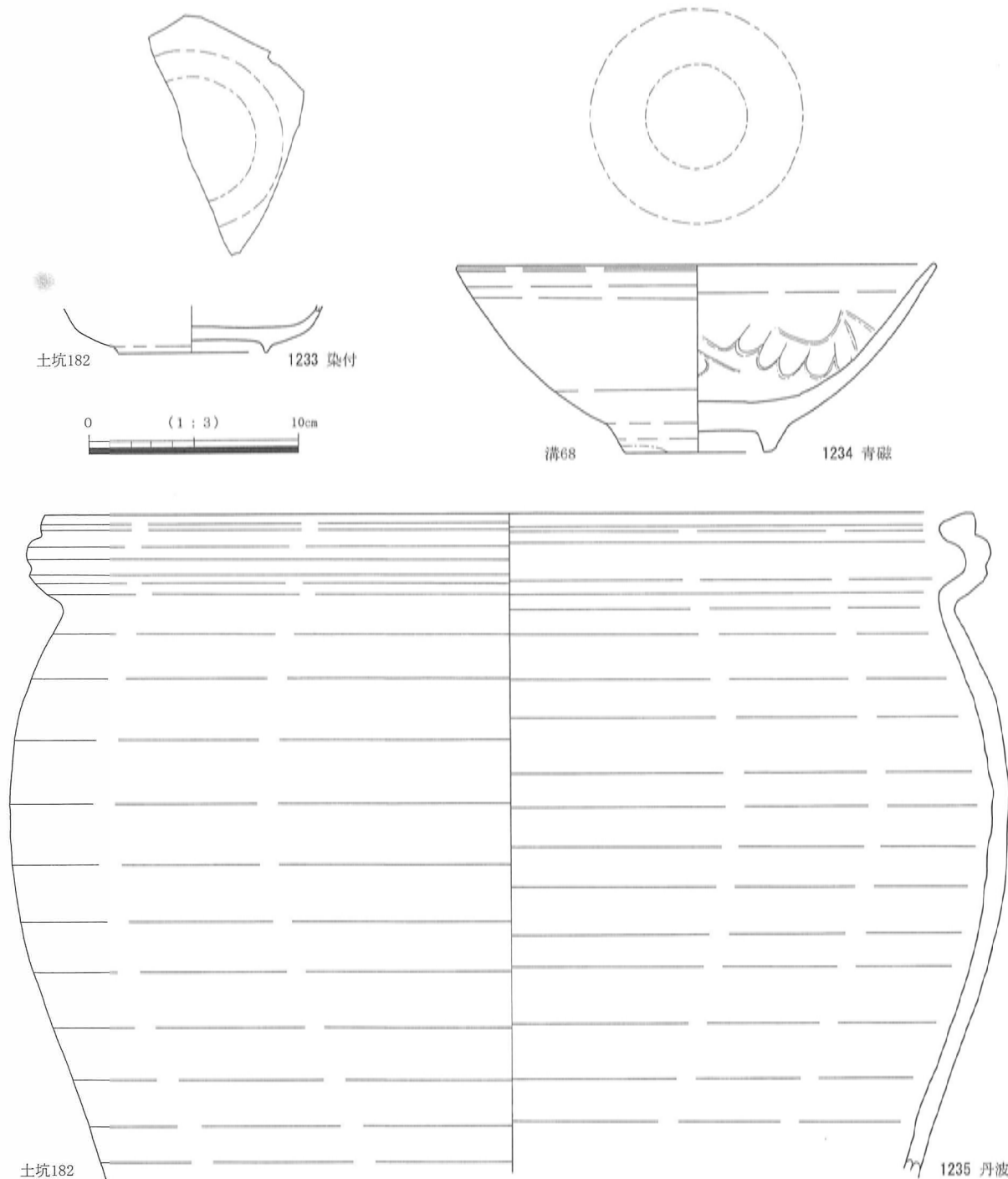
東端部の川合裏川沿いに堆積した砂質シルトの上面が、近世以降に生活面となっており、いくつかの遺構を検出した。この面を近世面、基盤層上面の遺構面をここでは中世面として記載する。

近世面

土坑182 (第364・365・366図 図版132)

円形で、径約1.3m、深さ約0.7mである。内径約0.9mの掘り方があり、杵が存在したことが想定される。内部埋土には礫が多く含まれており、埋め戻されたと思われる。

遺物は、丹波焼甕のほか、染付碗、唐津焼、丹波焼播鉢、瓦などの小片が出土した。



第366図 土坑182 その他の遺構 出土遺物

土坑183 (第364・365図 図版132)

楕円形で、東西約1.5m、南北約1.3m、深さ約0.7mである。埋土に礫を多く含む。遺物は、網目紋染付、土師器などの小片が出土している。

中世面

主な遺構に、建物1棟・井戸2基・土坑・集石・土器集積などがある。

建物122 (第363・367図 図版133)

南部の段丘崖際に立地する。南北2間×東西1間、約5.0m×2.7m、約13.5㎡である。主軸方向は、N-18°-Wである。基盤層は砂層である。遺物は、土師器煮炊具、土師器の小片が出土したのみである。

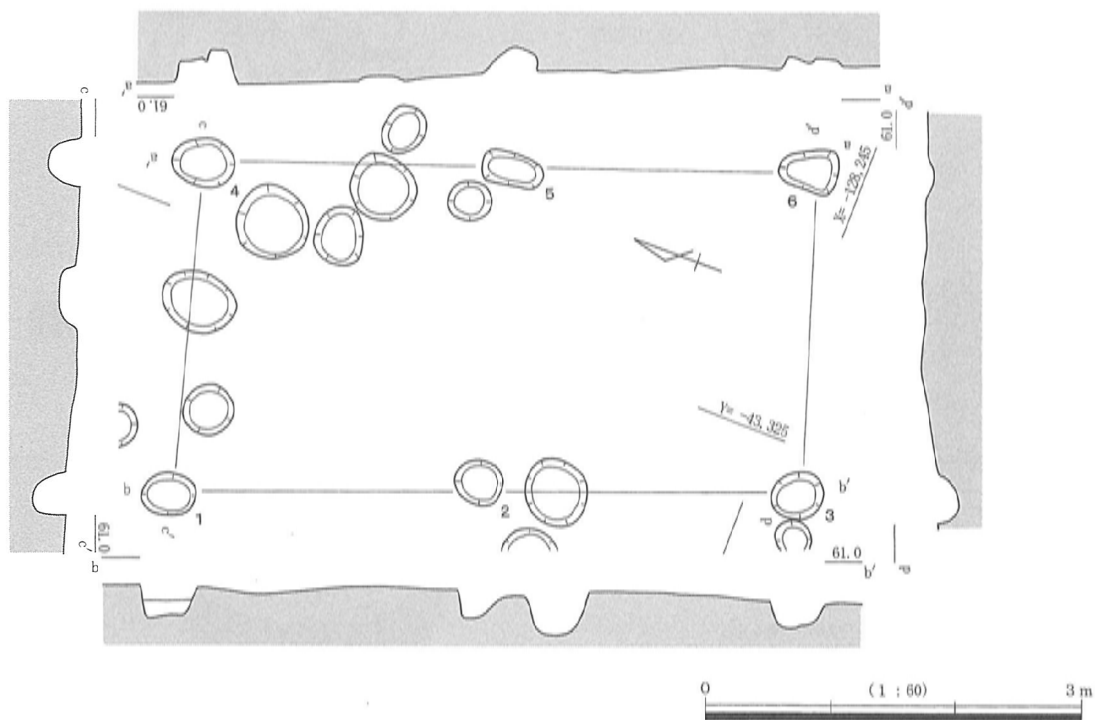
井戸9 (第363・368・369図 図版133・226・227)

中央部東寄りの川合裏川へと下がる斜面に立地する、石組みの井戸である。楕円形で、長径約2.5m、短径約1.9m、石組み内の長径約1.3m、短径約1.0m、深さ約1.4mである。東側は削平されて上部が失われている。基盤層は礫層であるが、下部が湧水層の砂層に達している。礫で埋め戻されている。

遺物は、完形に復元できた土師器羽釜のほか、土師器皿、瓦質羽釜・甕、須恵器、備前焼播鉢、連弁青磁碗などの小片が、埋土から出土している。土師器羽釜は、出土時には小破片の状態であった。備前焼播鉢は掲載したもの(1239)よりも古手の小破片も出土している。石組み裏込めからは、瓦器椀、土師器煮炊具の小片が出土した。瓦器は、井戸10出土の古手のものに近いと思われる。

井戸10 (第363・368・369図 図版133・227)

井戸9から約12m南西の段丘面に位置する、石組みの井戸である。円形で、南北約2.4m、東西約2.0m、石組み内の径約1.0m、深さ約1.7mである。石組みには、井戸9のものよりも、比較的大きな礫を使用している。基盤層は、礫を多く含む砂礫～シルト層であるが、最下部が砂～シルトの湧水層に達し



第367図 建物122 平面・断面図

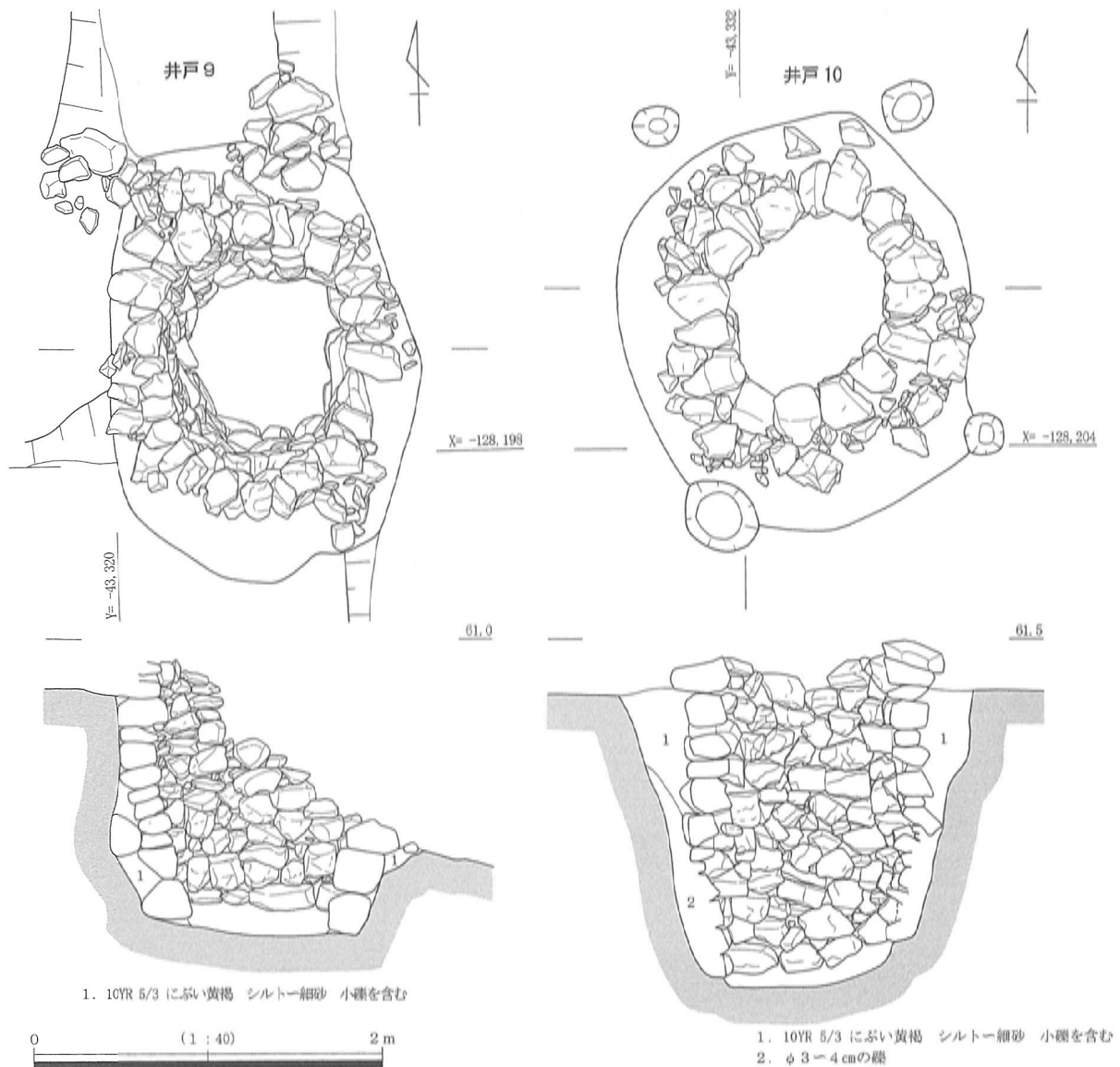
ている。周囲に4基のピットがあり、覆い屋であることも想定される。

遺物は、石組み裏込め部分からは、土師器皿、溶解炉、釘の小片の他、焼土塊などが出土している。埋土からは、瓦器椀の他、土師器皿・鍋、須恵器甕、瓦質脚付羽釜、鑄造金属製品などの小片が出土している。特に底付近からは、瓦器椀、瓦質羽釜、土師器煮炊具、連弁青磁碗、鑄造鉄滓などの小片が出土している。瓦器椀は高台のあるものとなないものがみられる。裏込め出土のものは13世紀後葉～14世紀中葉、埋土出土のものは14世紀代のものと思われる。

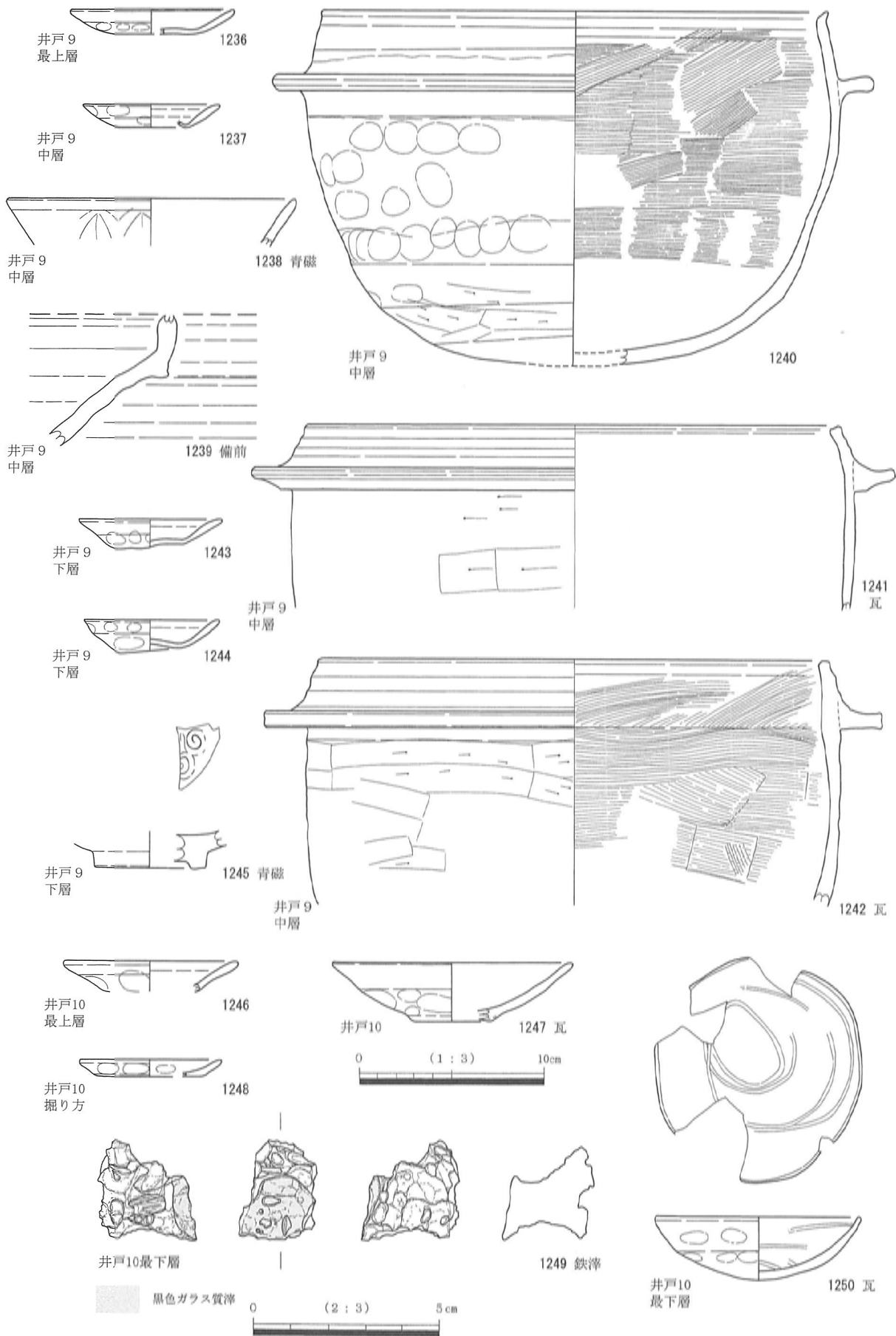
土坑184 (第363・370・371図)

北部に位置する。楕円形で、長径約3.7m、短径約2.8m、深さ約0.4mである。埋土に多量の礫を含む。部分的に壁に石を積み上げている箇所がみられ、本来壁全体に石を積み上げていたものが崩れた可能性もある。

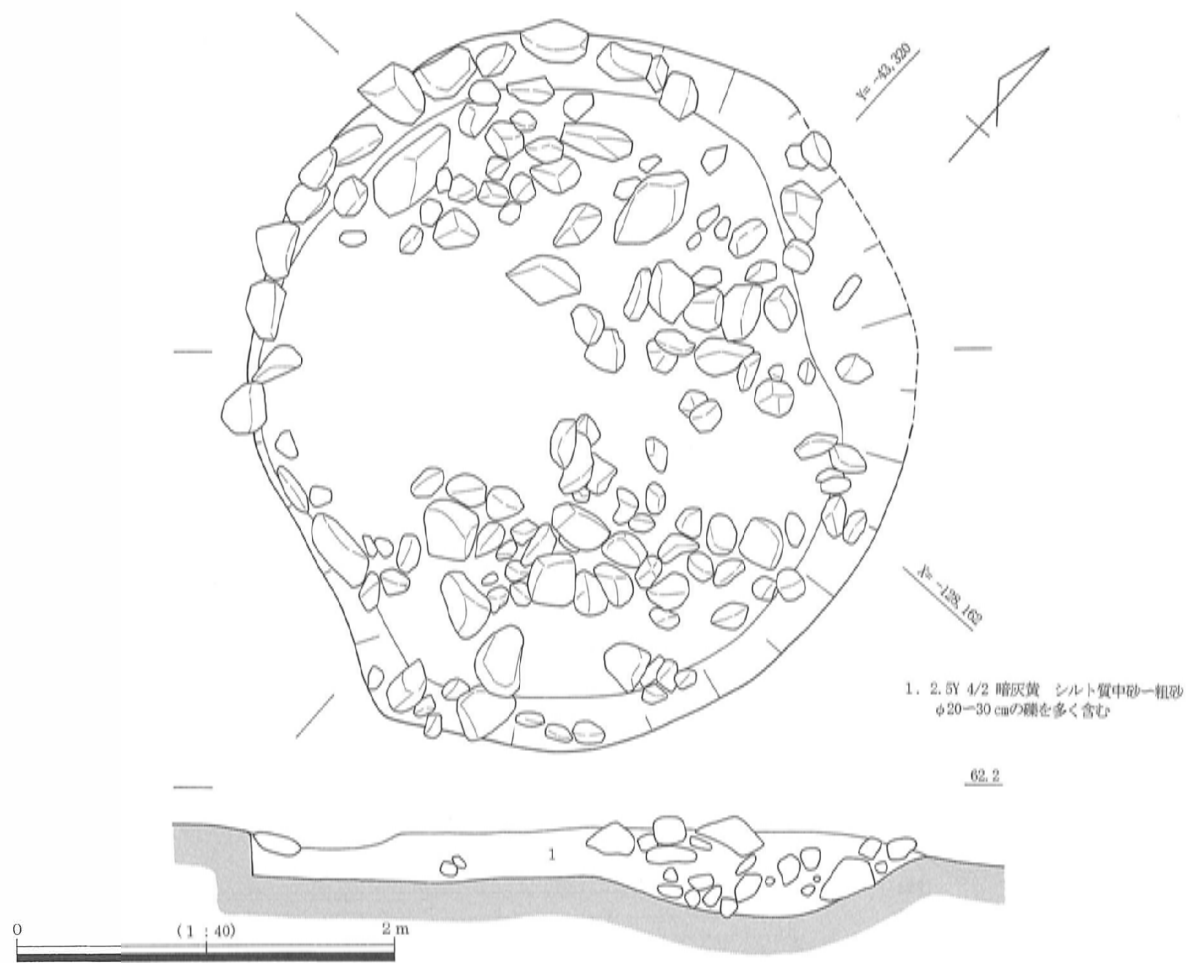
遺物は、土師器皿、瓦器椀、瓦質脚付羽釜、東播系須恵器鉢、陶器甕、連弁青磁碗、白磁皿の小片、鍛冶鉄滓などが出土している。瓦器椀は図示したものを以外にも何個体かの小片があるが、退化した高台をもつものである。13～14世紀のものと思われる。



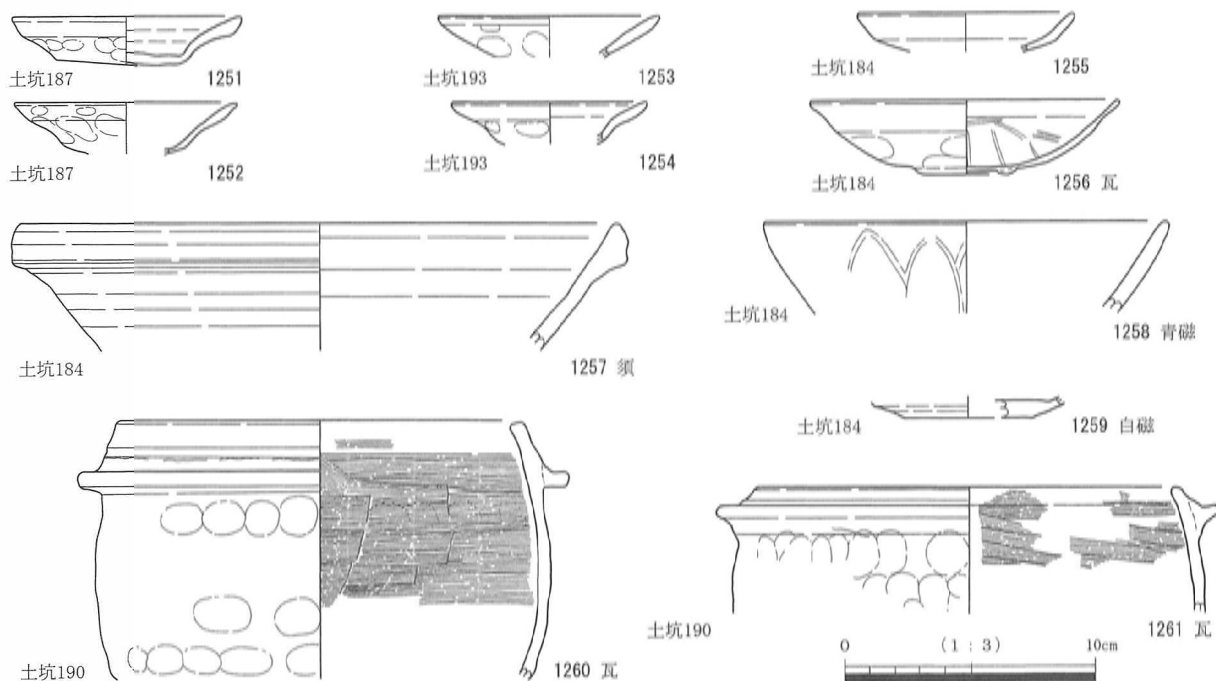
第368図 井戸9・10 平面・立面図



第369図 井戸9・10 出土遺物 (2/3 = 1249)



第370図 土坑184 平面・断面図



第371図 土坑184・187・190・193 出土遺物

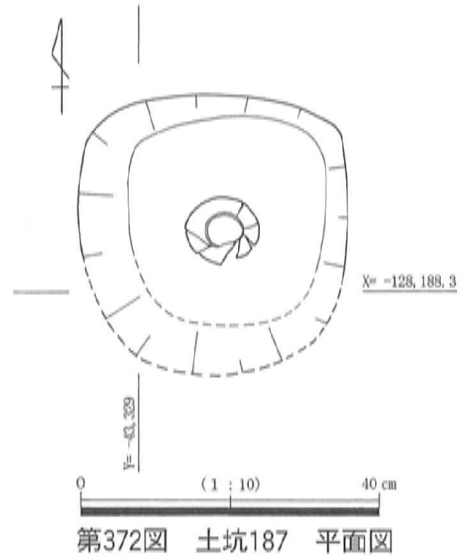
土坑187 (第363・371・372図 図版228)

中央部に位置する。円形で、径約0.3m、深さ約0.2mである。完形の土師器皿が、埋土の上部から正置の状態出土した。他に破片も出土している。15世紀のものと思われる。

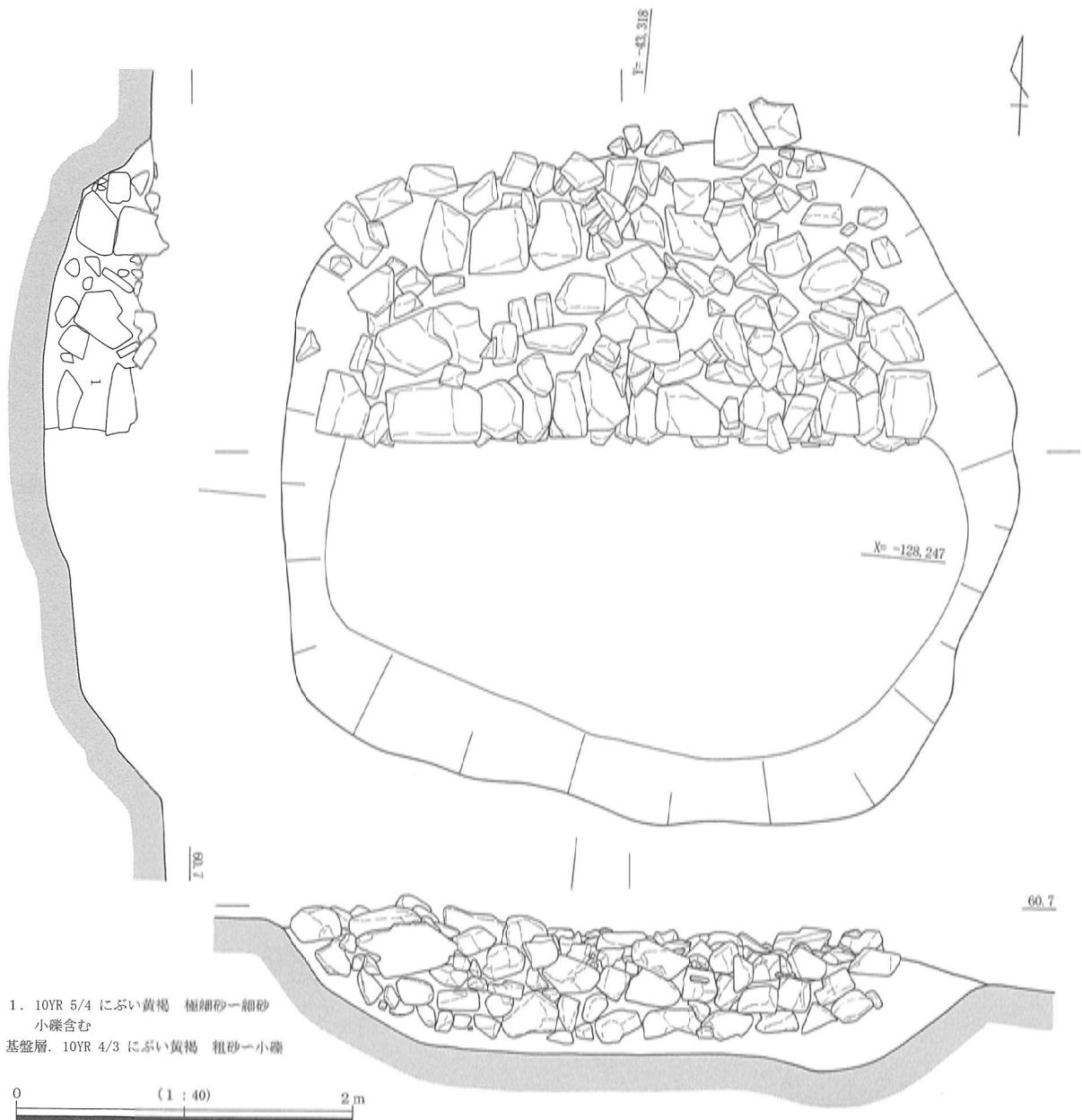
土坑190 (第363・371図 図版133・228)

南部に位置する。南北に長い溝状であるが、北側は川合裏川の浸食によって失われている。残存長南北約5.7m、東西約1.8m、深さ約0.6mである。礫を埋土に多く含む。

遺物は、煮炊具の破片が多く出土している。瓦質羽釜・受口状口縁の鍋、土師器鍋、常滑焼甕、須恵器甕などの破片がある。



第372図 土坑187 平面図



1. 10YR 5/4 にぶい黄褐 極細砂-細砂
小礫含む
基盤層. 10YR 4/3 にぶい黄褐 粗砂-小礫

第373図 土坑191 平面・断面・立面図



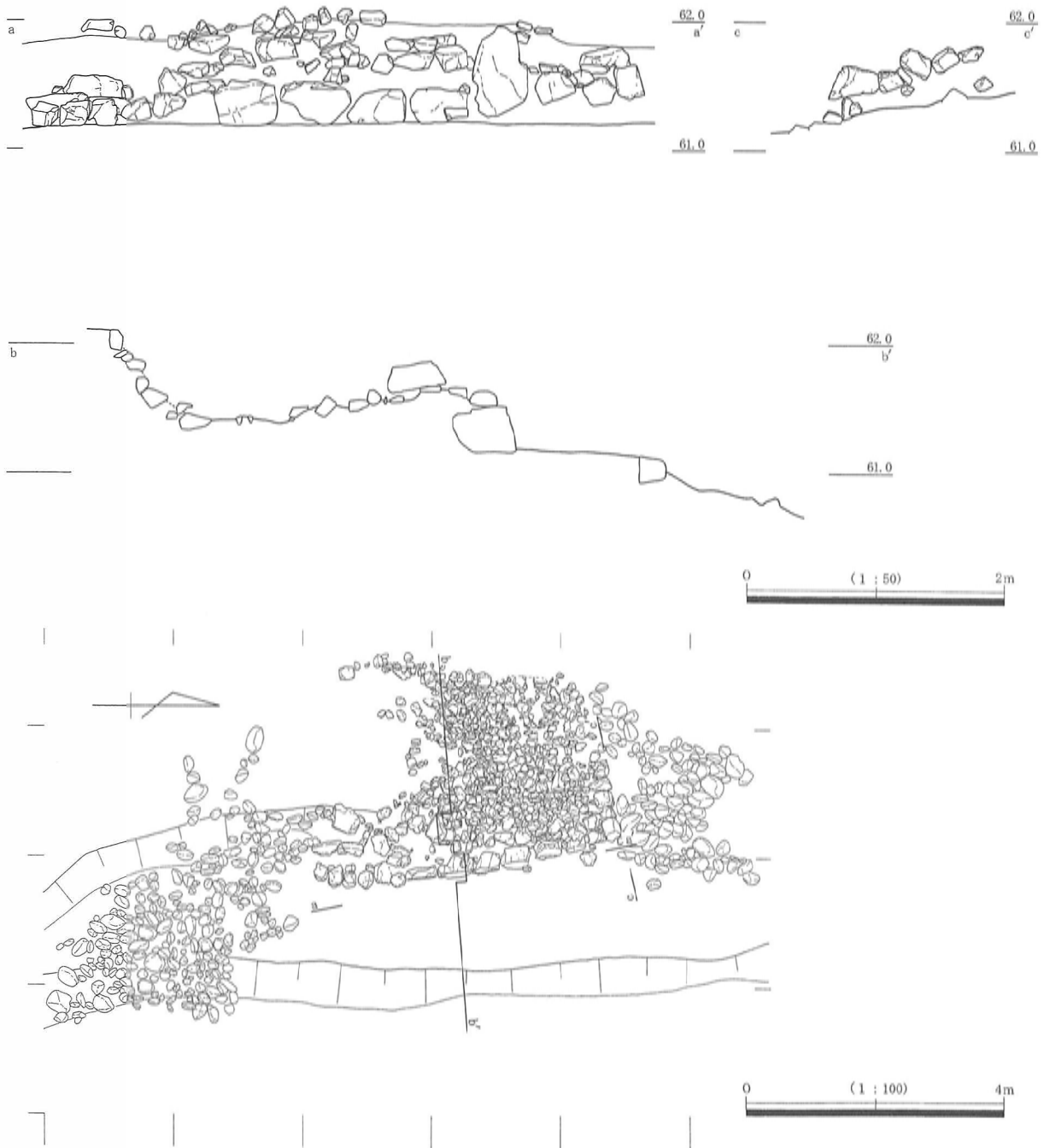
第374図 集石6上層 平面図(1)

土坑191 (第363・373図 図版133・134)

南部に位置する、内部に石組みを伴う大型の土坑である。平面隅丸方形、または円形で、南北約4.0m、東西約4.3m、深さ約0.7m~0.8mである。土坑の壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

土坑中央部に、南向きに面を揃えて比較的大きな礫を積んでいる。面はほぼ垂直で、以北に礫の集積がみられる。北端部には、土坑中央部同様に南向きに礫面が揃う部分もみられるが、それ以外の部分では、礫を並べたり積み上げたりしていない。礫は、土と混じりあっている状態である。南側の礫面部分でも、礫が土坑底面に接しておらず、土と共に構築しているのがわかる。

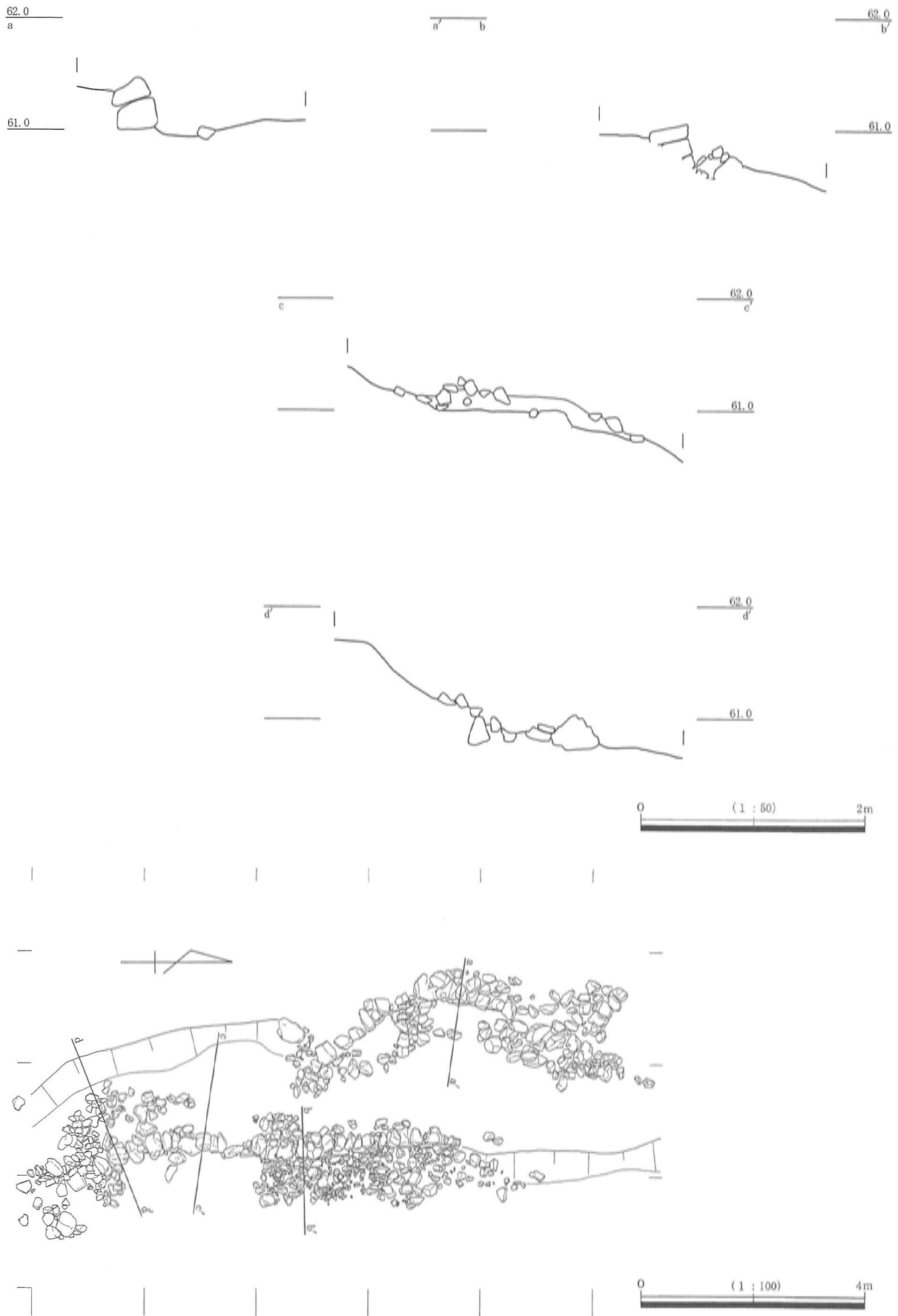
南半にも少数の比較的大きな礫がみられた。しかし、北半部のように構築されたものではなく、埋土



第375図 集石6上層 平面・断面・立面図(2)

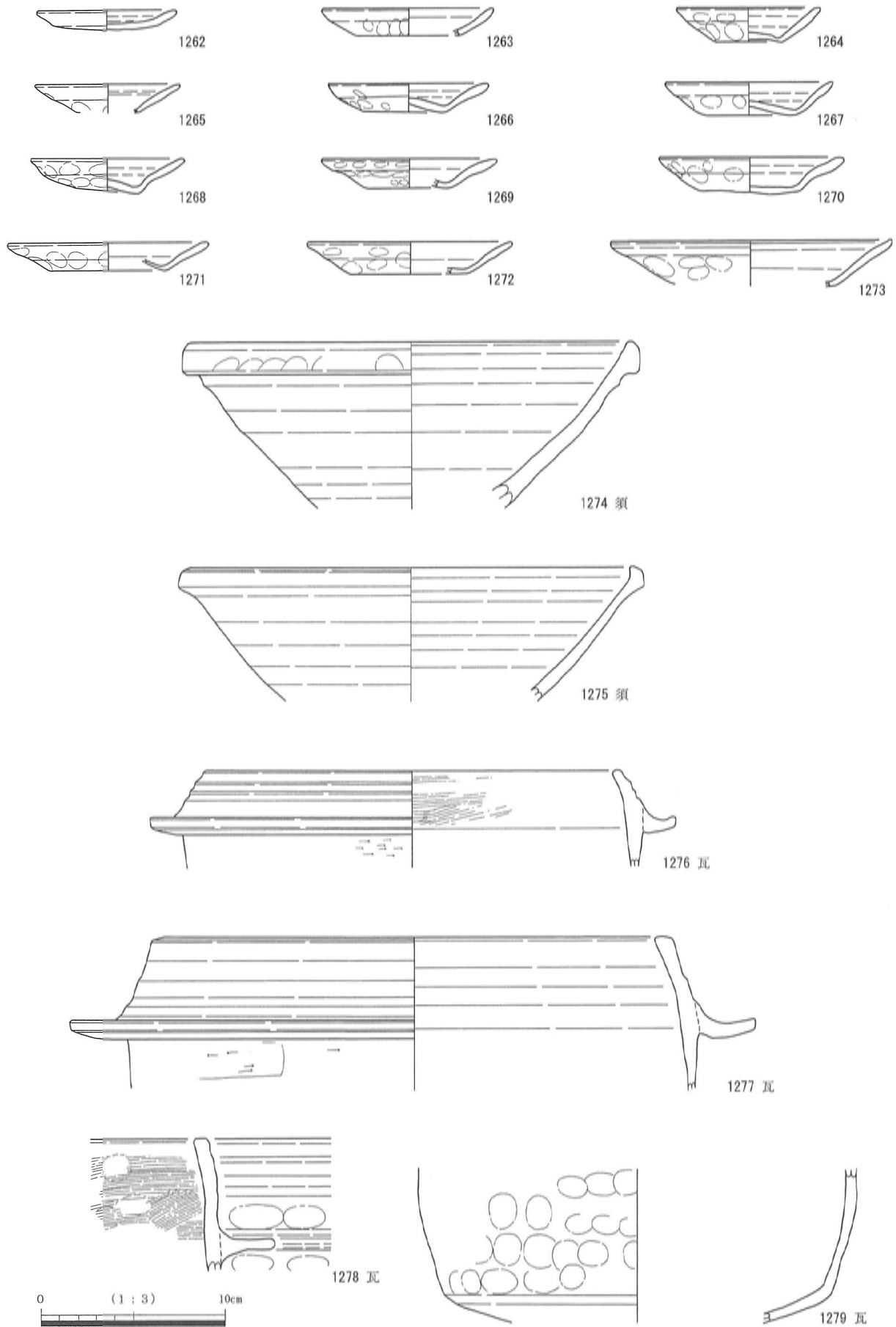


第376図 集石6下層 平面図(3)

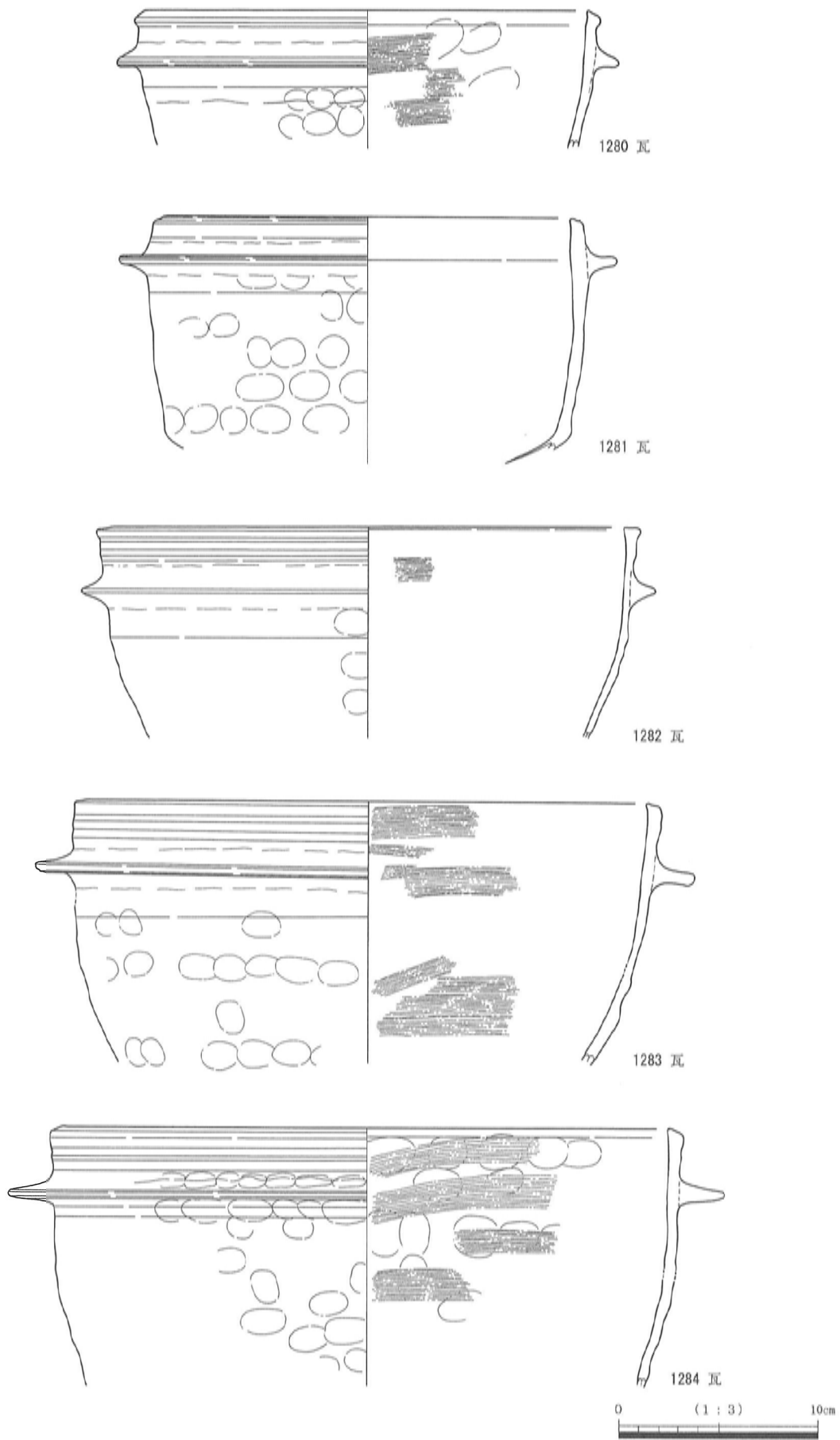


第377図 集石6下層 平面・断面図(4)

第1節 西岸(s城)



第378図 集石6 出土遺物(1)上層



第379図 集石6 出土遺物(2)上層

に含まれている状態である。遺構が機能していた時には、南半が空いた状態であったことも想定される。遺物は、北半の礫集積部分から瓦器などの小片がごくわずかに出土したのみである。

土坑192 (第363図 図版133)

土坑191の南東に隣接する。やや歪な円形で、径約3.0m、深さ約0.4mである。中央やや西寄りに礫が数点、南北方向に並ぶ。遺物は出土していない。

土坑193 (第363・371図 図版133)

土坑191・192の南東に位置する。歪な楕円形で、南北約4.2m、東西約3.1m、深さ約0.6mである。礫を埋土の下部に多く含む。

遺物は、土師器皿、常滑焼甕など少量の破片が出土したのみである。14~15世紀のものである。

土坑194 (図版133)

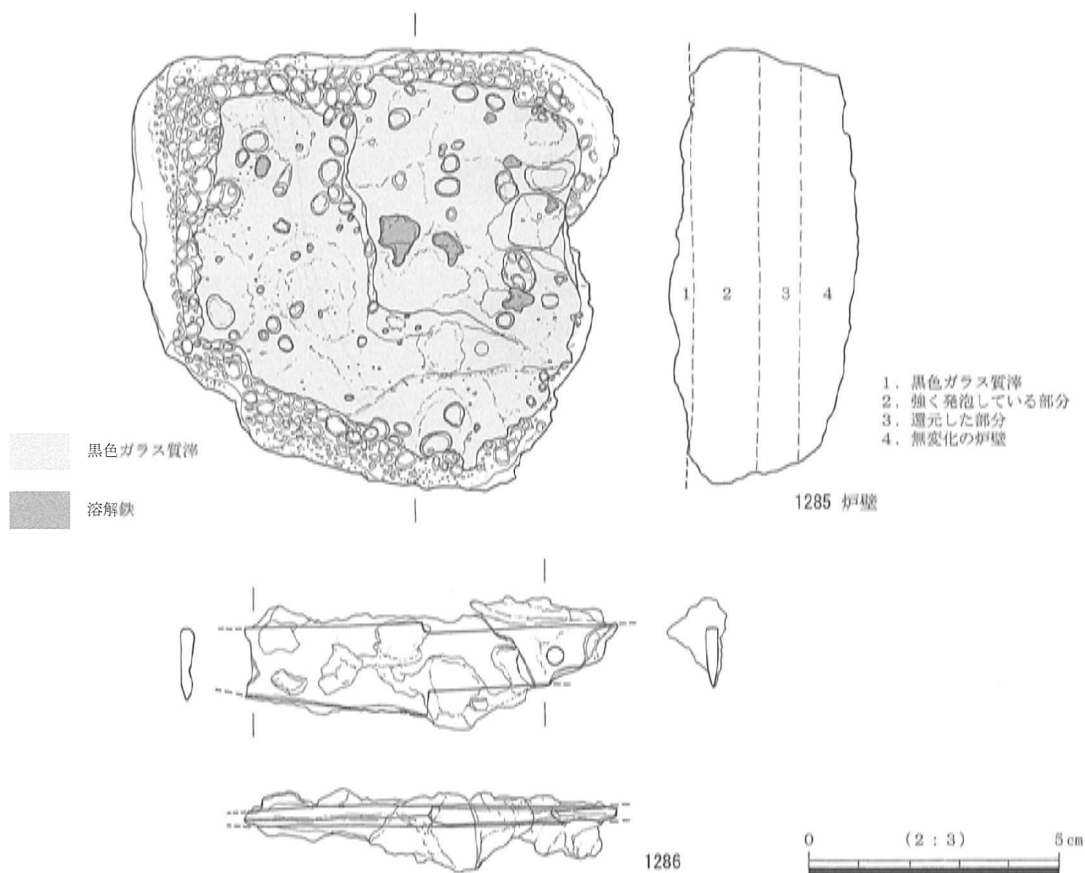
南端部に位置する。南の調査地外に続いており、全形は不明であるが、長さ4.8m以上、深さ約0.3mである。埋土に礫を含む。

遺物は出土していない。

集石6 (第363・374~381図 図版134・135・228・229・246)

川合裏川に向かって低くなっていく地形の変化点に立地する、集石遺構である。東側では近世以降の層を除去していないため全容は不明であるが、南北約18.0m、東西9.0m以上、高低差1.5m以上である。

東側の川合裏川沿いの地形的に低い部分へと、2段の段差を設け、中段面を作り出している。礫のみで構築しているわけではなく、旧地形の造成を伴うものである。全体的に礫の分布に規則性はみられない。ただ、上段面から中段面への段には、礫を東向きに面を揃えて並べている部分が、南北約4.8mの



第380図 集石6 出土遺物(3) 上~下層(2/3)

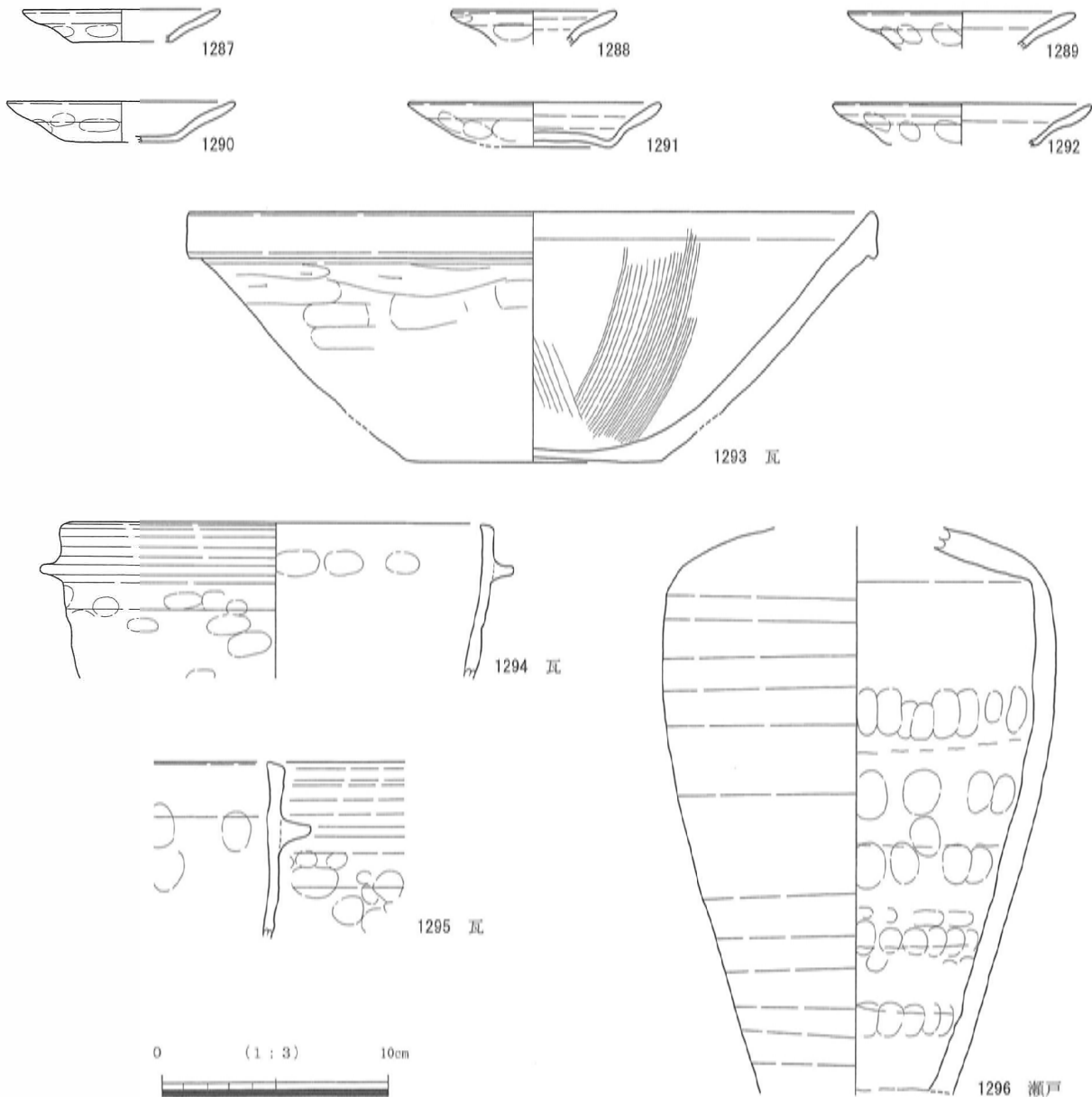
長さでみられる。さらにその部分の北端には、北向きに面を揃えた礫の並びが直角にとりつき、西に約1.3m伸びている。

表面の礫を除去すると、さらに下に礫の並びが確認できる部分があり、古い段階の段が存在した可能性がある。上段から中段への段、中段から下段への段共に、礫を東向きに積み並べている部分が見られる。前者は南北長約4.0m、後者は南北長約7.0mである。

上層、下層共に、大部分で礫の置き方に規則性が認められないため、個々の礫がどの段階に属するものかの判断は非常に難しい。遺物は、上層、下層のものをわけて掲載しているが、明確な時期差はみられない。

位置的にみて、川合裏川の旧流路に対して構築されたものと思われる。中段部分には礫がなく、非常に平らな面となっているが、これはこの遺構の機能を考える上で重要であると思われる。

遺物は、上層からは土師器皿、瓦質羽釜のほか、土師器煮炊具片、瓦質播鉢、須恵器鉢、瀬戸焼、陶

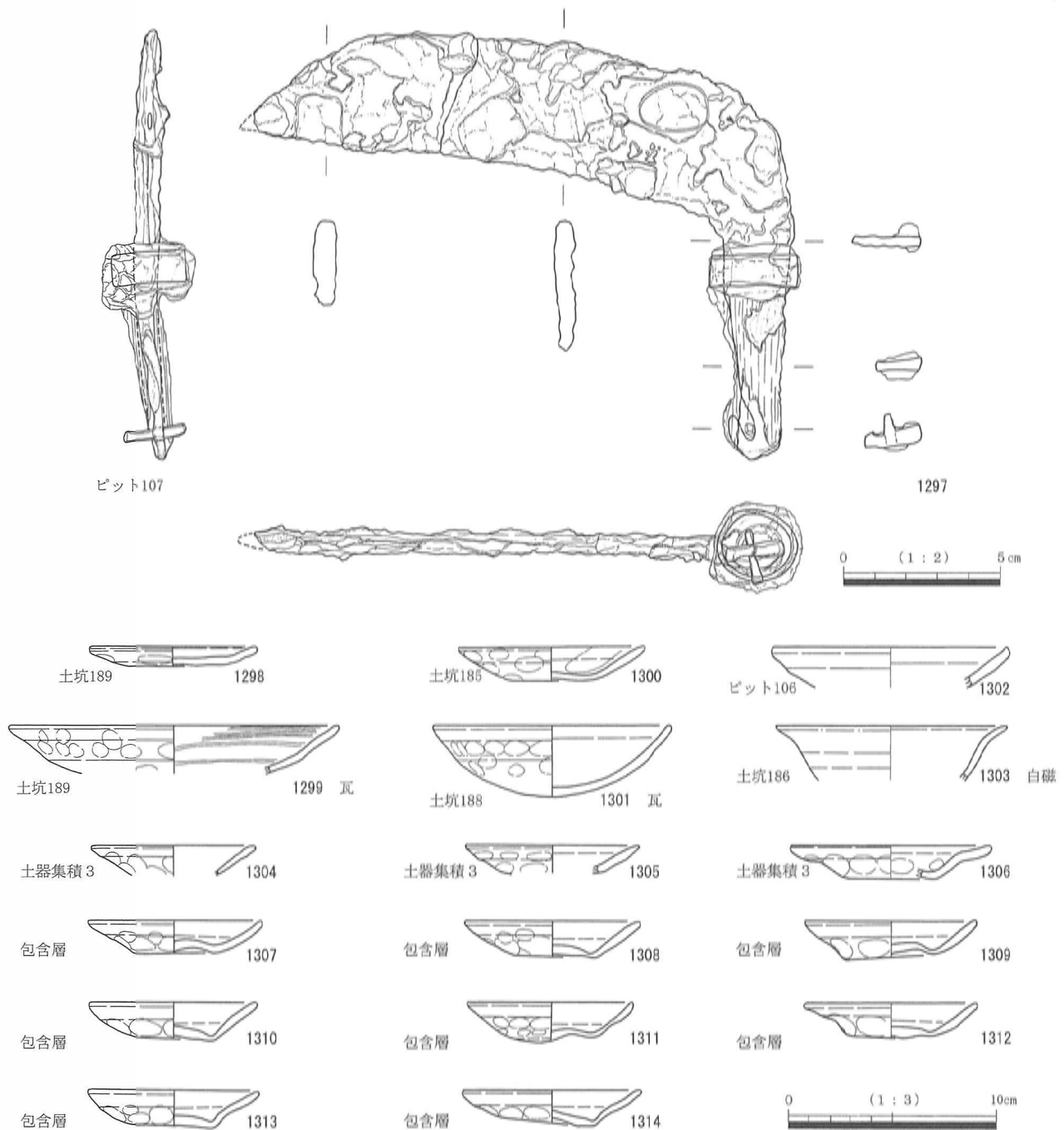


第381図 集石6 出土遺物(4)下層

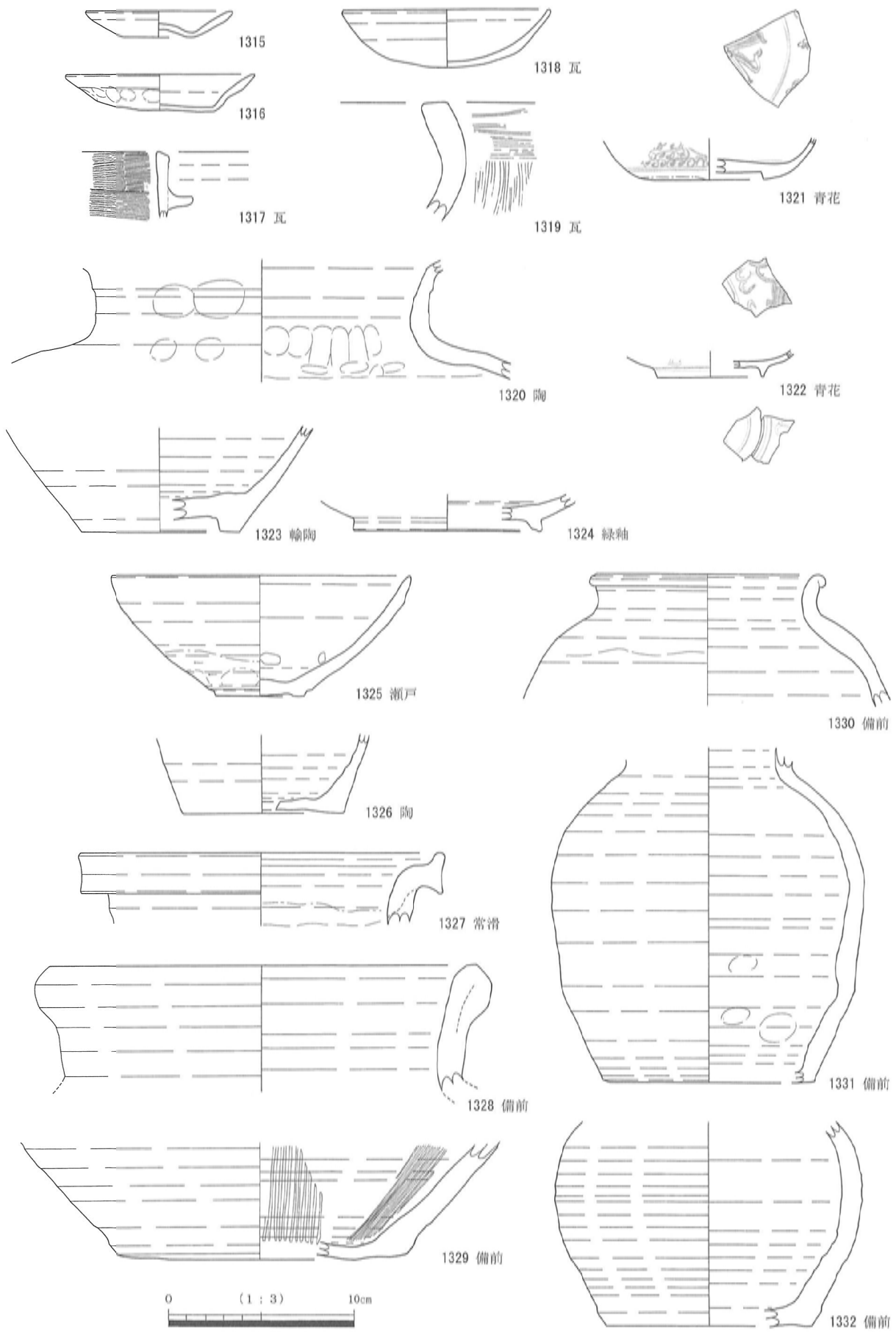
器播鉢などの小片が、下層からは土師器皿、瀬戸焼瓶子、瓦質播鉢のほか、瓦質羽釜、須恵器、陶器、瓦器椀、土師器羽釜、釘などの小片が出土している。瓦質播鉢は、上・下層のものが接合した。ただし、下層出土のものが破片の多数を占める。瀬戸焼瓶子は、口縁部、底部を欠くが、体部はほぼ完形の状態出土した。また、上、下いずれに伴うものか不明であるが、雷紋青磁碗、鑄造用溶解炉、刀子も出土している。上・下層共に14世紀中葉～15世紀前葉または中葉までのものである。

土器集積3 (第363・382図)

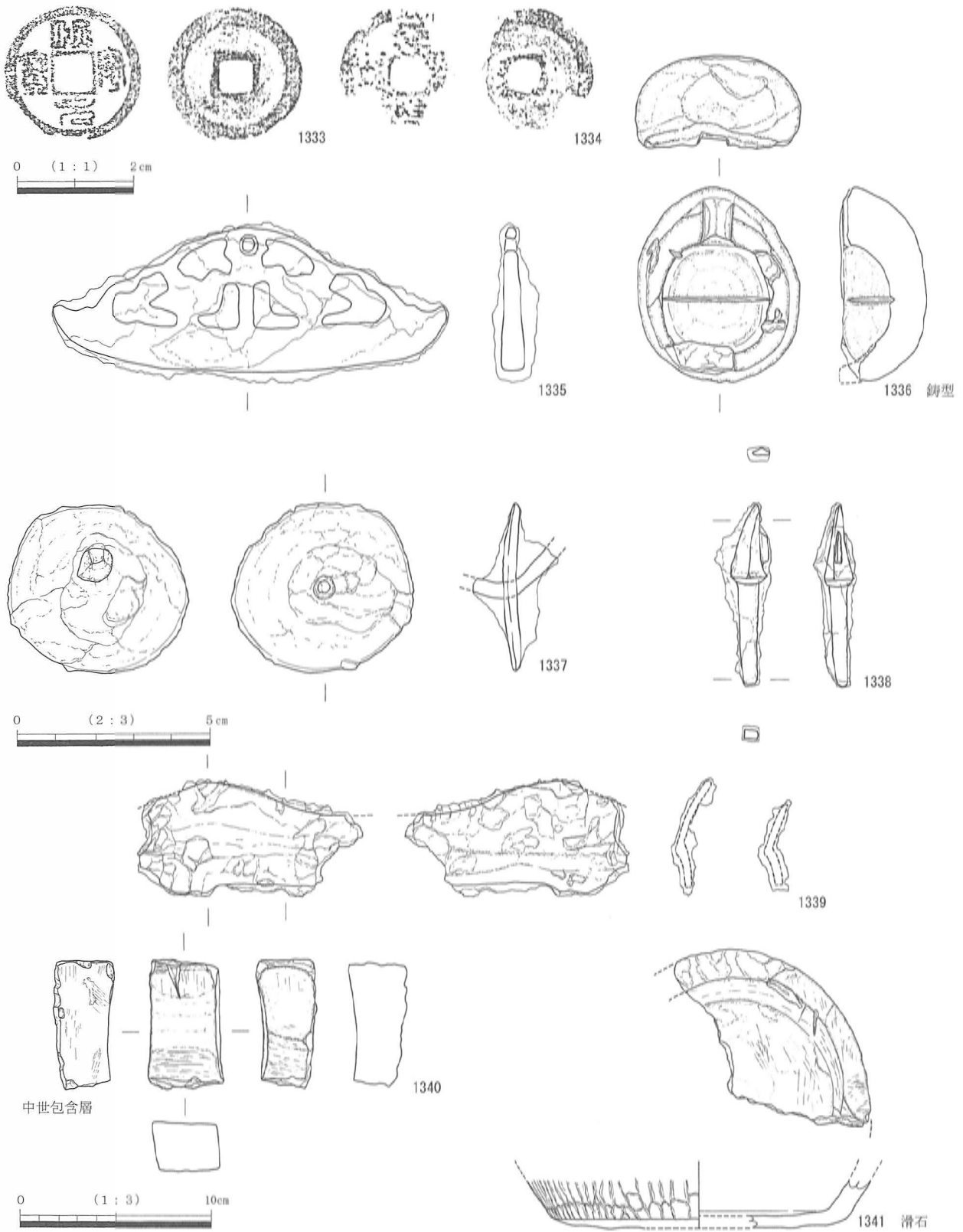
包含層掘削中、多数の土師器皿の細片がまとまって出土した。遺構である可能性があるが、詳細は不明である。14～15世紀のものである。



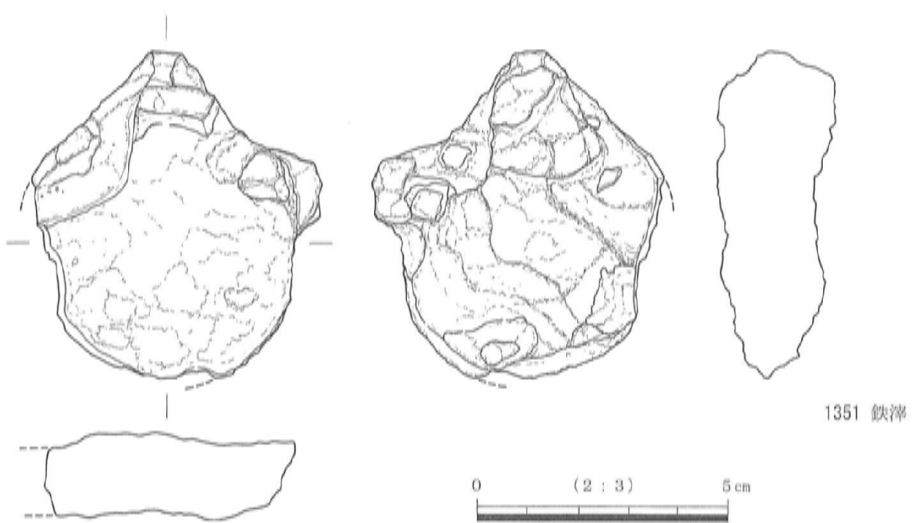
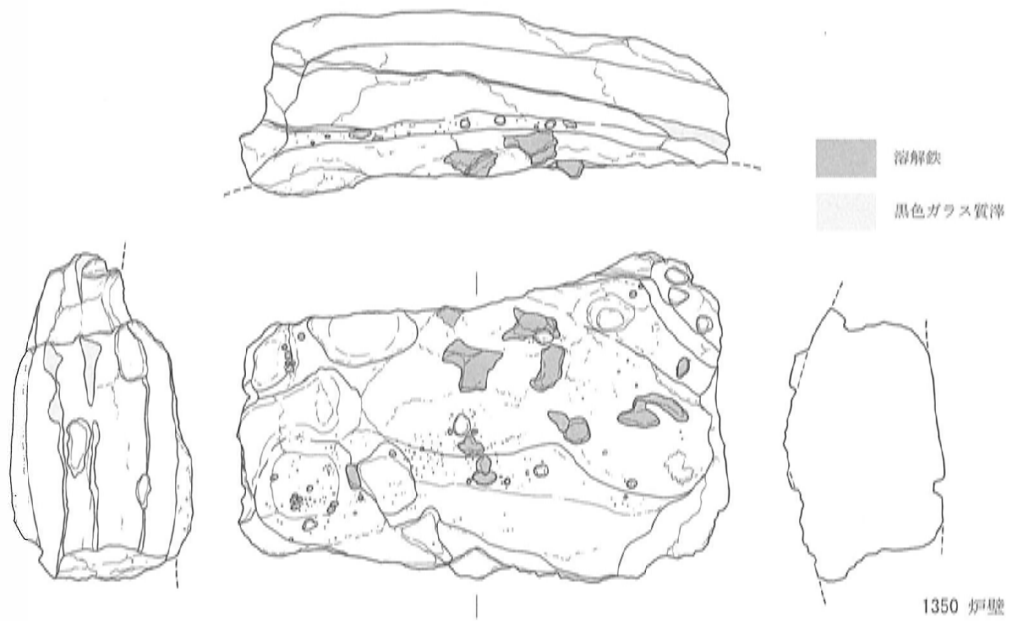
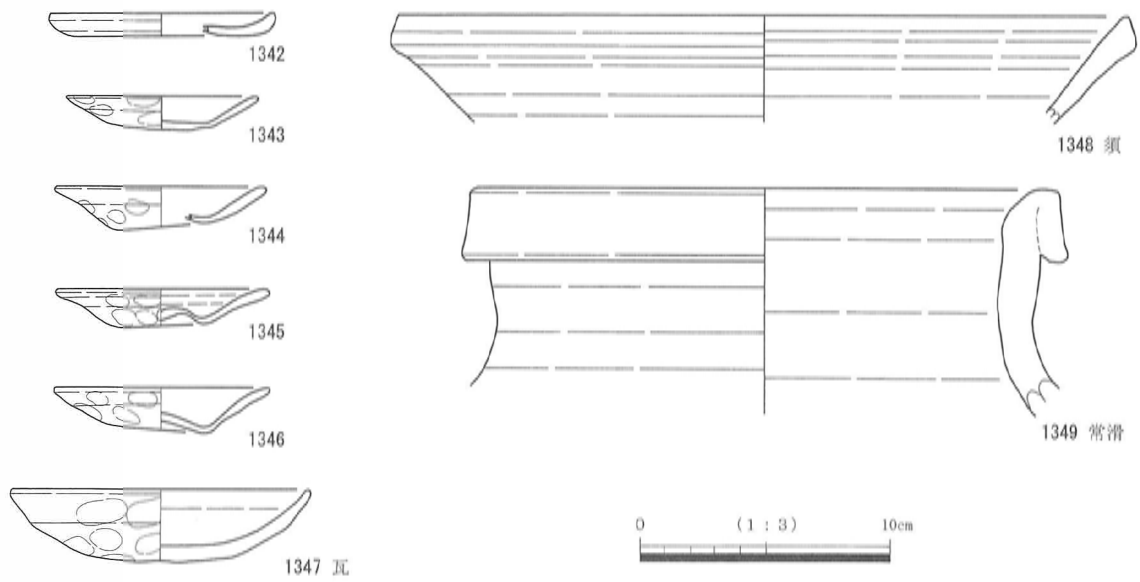
第382図 その他の遺構 中世包含層 出土遺物 (1/2 = 1297)



第383図 近世作土層等 出土遺物



第384図 中世包含層・近世作土層 出土遺物 (2/3 = 1335~1338 1/1 = 1333・1334)



第385図 中世包含層 出土遺物 (2/3 = 1350・1351)

北部では、包含層は集石6周辺にのみ遺存していた。それ以外の部分は棚田造成時に削平されており、本来存在していた遺構が失われた可能性もある。中央部から南部にかけては、段丘崖直下と東端の川合裏川による浸食を受けた部分を除いて、比較的良好に包含層が遺存していた。

包含層中には礫が非常に多く含まれていた。図示していないが、基盤層上面において、それらが列状に並ぶ箇所や、一定の範囲に集中している箇所などがみられた。多くは時期、性格共に不明であるが、井戸9の北西に帯状に分布する礫群は、その分布状況から井戸を埋める礫と一連のものとみられる。おそらく礫群はすべてが同一の性格のものではなく、何らかの構築物を構成していたものもあると思われるが、造成に関連するものが少なからず存在している可能性は高い。

特に集石6周辺と中央部分において、包含層から多量の遺物が出土した。第382図の1307～1314は、集石6付近の包含層からまとまって出土したものであるが、完形のものも多くみられ、器形はほぼ同様である。中央部は、近世作土層と包含層を同時に掘削したため、個々の遺物が帰属する層が不明ではあるが、非常に多くの遺物が出土した。井戸9・10周辺ではおもに14世紀後葉～15世紀前葉のものが、それより北部分では、最終段階の瓦器など、13～14世紀のものが比較的目立つ。14～15世紀の遺物は、土師器、瓦質土器などに加えて、備前焼壺・甕・播鉢などの陶器類、青花など、その種類が豊富である。そのほか中央部分の包含層から、図示していないが、比較的多くの釘と、鑄造用炉壁片3点が出土している。炉壁のうち1点は内面が泡立っているものである。

小結

s域には、主に13～15世紀代の遺構が展開している。ただし、北部は前述したように削平を受けており、南部は時期不明の遺構がほとんどであるため、正確な遺構分布を把握できる状況ではない。

13～14世紀の遺構は、南部にも存在している可能性があるものの、確認し得た限りでは北部から中央部北半にかけて分布している。詳細な時期を決め難いものが多いが、13世紀中・後葉～14世紀代のものが多いと思われる。石組み井戸が2基ある。ただし、これらに伴う建物は検出していない。

14～15世紀の遺構は、南部にもある可能性が高いが、確認し得た限りでは北部と中央部北半に分布している。集石6には川合裏川の旧流路に対して設けられた足場、護岸などの機能が想定される。この時期に土地利用がおこなわれていたことがわかるが、住居などを伴う生活空間であったかどうかは、他に顕著な遺構がなく、不明である。14世紀後葉～15世紀前葉が中心的な時期であると思われる。

第2節 東岸

第1項 t域 (付図13)

川合裏川段丘面の東岸である。西側はもう一段低い段丘面を経て、川合裏川となる。東側は高低差約1.8mの崖で、崖上は扇状地地区のu域である。北に向かって徐々に高くなっているが、極めて平坦な地形である。

墓12 (第386~388図 図版137・230・246)

段丘崖の直下に位置する。削平を受けている上に、側溝掘削の際に検出したため、遺存状況はきわめて悪い。北部はかろうじて輪郭がつかめたが、南部は確認できなかった。長方形と想定され、長さ0.7m以上、幅約0.5m、深さ約0.2mである。長軸の方向は、段丘崖に沿っている。1層中には比較的大き



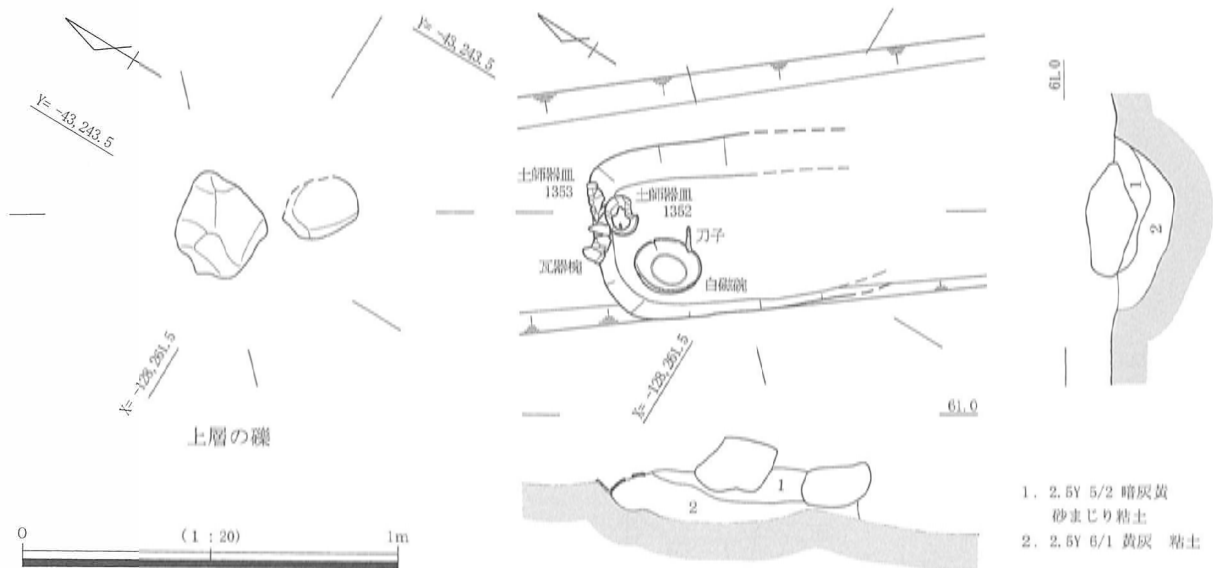
第386図 t域 平面図

な礫が2個存在する。本来礫による上部構造があったことも想定されるが、削平後に落ち込んだ可能性もある。骨は出土していない。

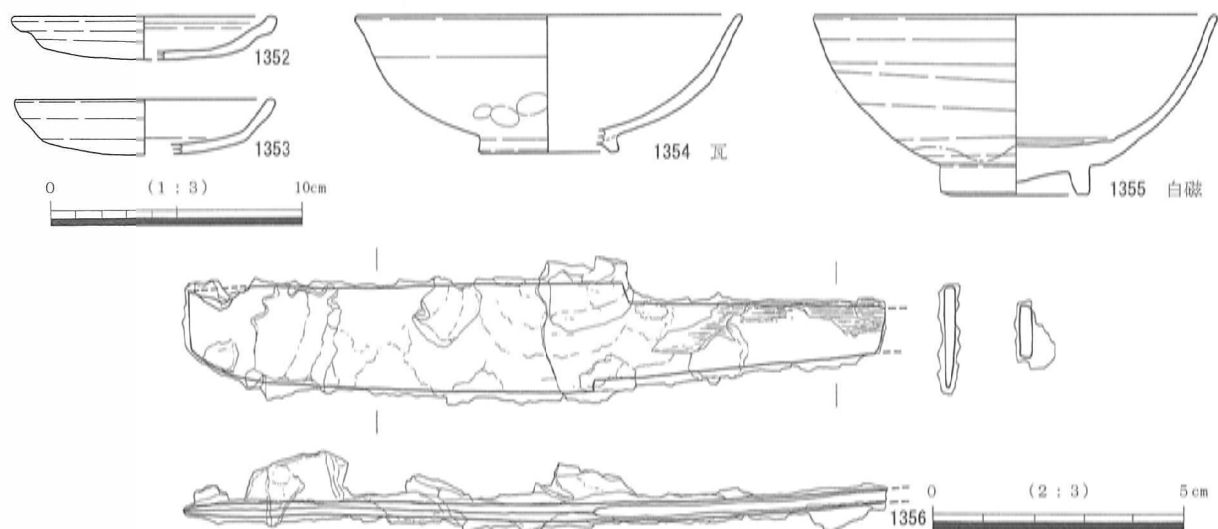
遺物はすべて北端部から出土した。北西隅で完形の白磁碗がやや傾いているものの、正置の状態出土した他、北端中央で逆さまの状態で完形の「て」字状口縁土師器皿が、その北側で土師器皿片が、北西で瓦器碗の破片が出土した。破片の土師器皿と瓦器碗は壁に接しているが、完形の「て」字状口縁土師器皿は、2層内に存在したと思われる。刀子は白磁碗の上位で出土した。11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。

包含層は、南部にのみ遺存していた。特に北端部の削平が著しく、本来は北に向かって高くなっていく地形であったと思われるが、逆に低くなっている。

包含層からは、少量ではあるが、古代末の遺物が出土している。



第387図 墓12 平面・断面図



第388図 墓12 出土遺物 (2/3 = 1356)

小結

遺構は、きわめて少数を検出したのみである。北部では、削平によって本来存在していた遺構が失われている可能性がある。しかし、包含層が遺存していた範囲でもほとんど遺構を検出しておらず、t域は本来より遺構が希薄であったと考えられる。

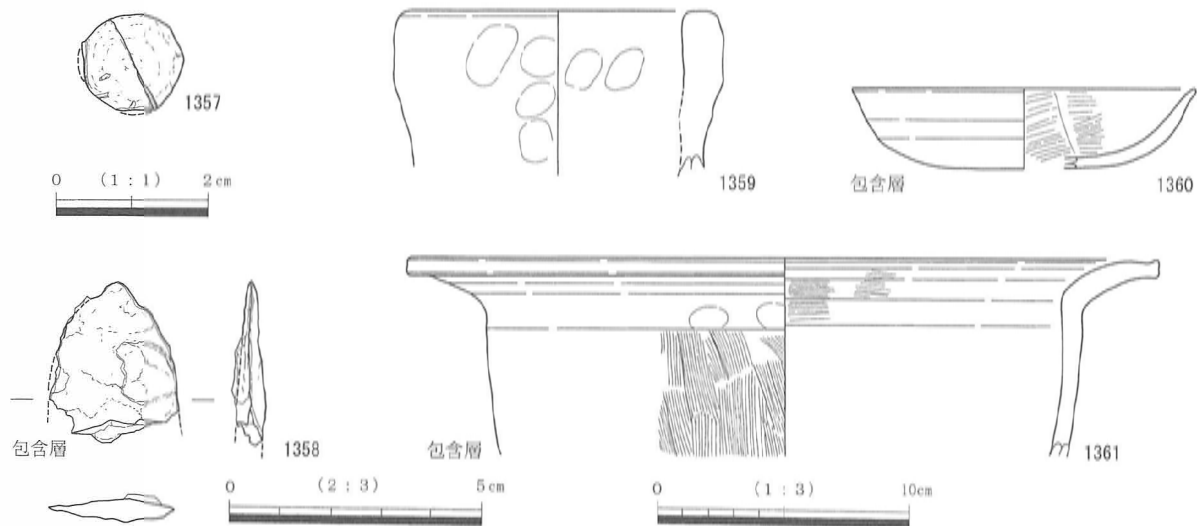
遺物も、ごく少量が出土したのみである。詳細な時期は不明であるものの、包含層出土のものには古代末頃のものが目立ち、瓦器などはあまり含まれていない。時期的には遺跡内で普遍的に出土するものではないため、この時期に何らかの営みがあった可能性はあるが、積極的に評価できる状況ではない。

遺構からは、黒色土器A類などの小片がわずかに出土したのみである。

墓12は11世紀後葉～12世紀前葉のものと考えられる。これは、時期のわかる遺跡内の埋葬遺構のなかで、骨蔵器を据える墓11について古いものである。墓12と同じく、墓墳が長方形で、土器、金属製品をもつ墓は、12世紀中葉～13世紀前葉のものが多い。また、墓11と12以外はすべて丘陵上に立地している。

墓12は、t域中央やや南寄りの、段丘崖直下に立地する。段丘崖の高さは約1.8mで、崖上はu域である。周辺に遺構は少なく、性格の明らかなものに限れば皆無である。u域の、墓から南東にあたる部分に、小規模な建物2棟を復元しているが、時期は不明である。u域は、全体的に棚田造成による削平を受けているが、それを考慮に入れても、土地利用が盛んにおこなわれていたとは考え難い状況である。

遺構、遺物共に極めて少なく、t域は棚田化されるまで、日常的な土地利用はおこなわれなかったと考えられる。墓12は、崖上のu域に遺構が存在する可能性を残すものの、日常の生活空間から離れた場所に単独で存在したことが想定される。



第389図 包含層・近世～現代作土層等 出土遺物 (2/3 = 1358 1/1 = 1357)

第3章 扇状地

第1節 扇状地

調査地全体の東端にあたる。川合裏川段丘面東岸 t 域の東側に広がる、比較的平坦な地形の部分である。調査地外の北側から東にかけては、丘陵状に小高くなっており、その背後には山地地形が続いている。それを開析する谷が、北東方向から調査地に向かって伸びている。本地区は、その谷の開口部に展開する扇状地である。調査で検出した川 4 は、この谷筋を流れ、調査地以南で川合裏川に合流していたと思われる。

北側の丘陵上には、近世に黄檗宗の徳大寺が建っていた。1996年に発掘調査をおこなっているが、その調査範囲南端は、今回の調査地北端と接している。特に南部の丘陵下は、今回報告する u 域と地形的に一連であり、1999年に当センターより刊行した報告書を参照していただきたい。

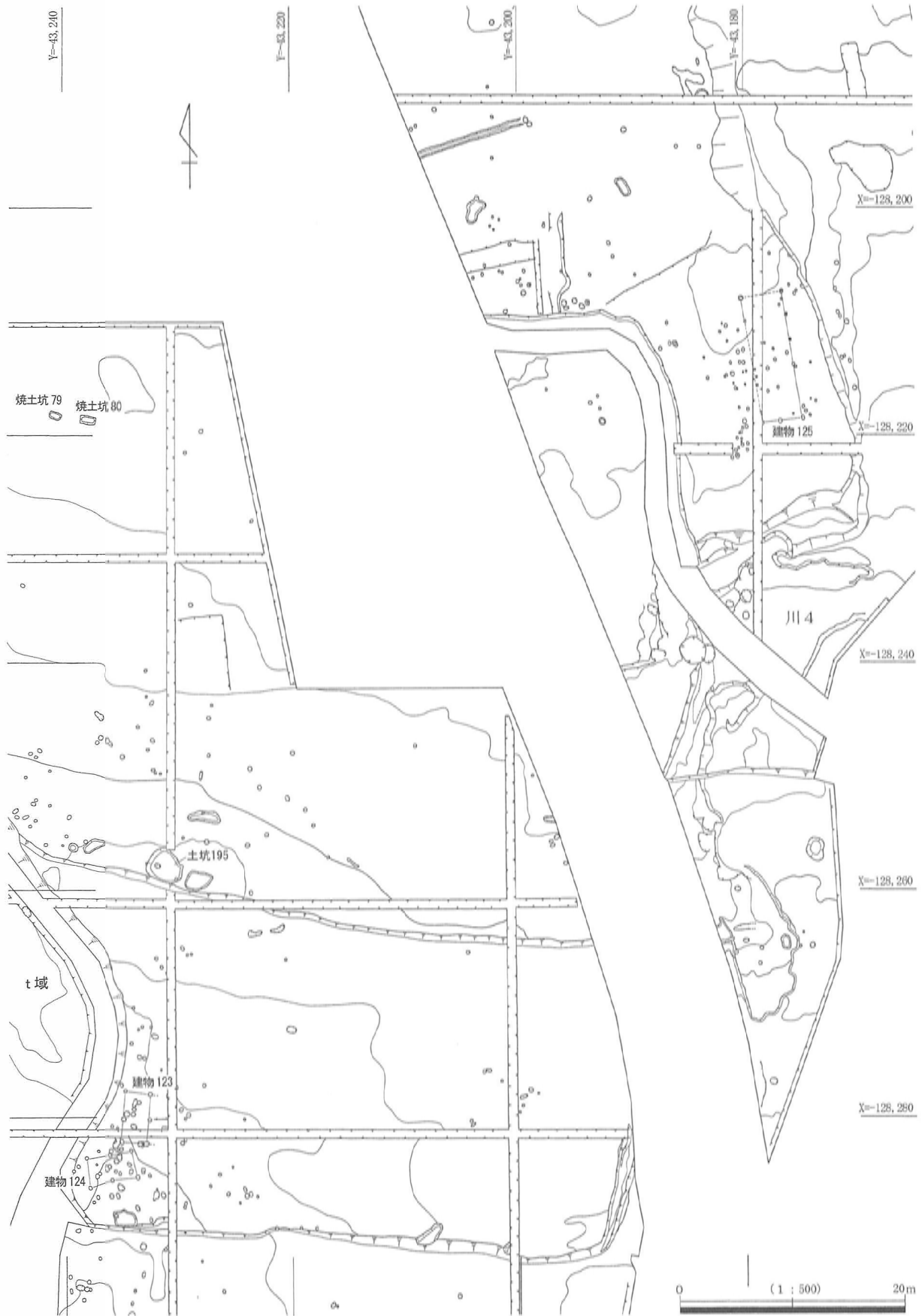
層序

基本層序は、ほとんどの部分で、現代表土、近世作土層（部分的に近世盛土層）、基盤層となっており、古代から中世の包含層は2.5Y 5/1 黄灰色砂混じりシルトで、ごく一部に遺存していた。基盤層は、比較的均質な明黄褐色シルトであるが、部分的に下層の縄紋時代土石流堆積が現れている。



第390図 扇状地 全体図 (1:1,750)

第1項 u城(付図13)



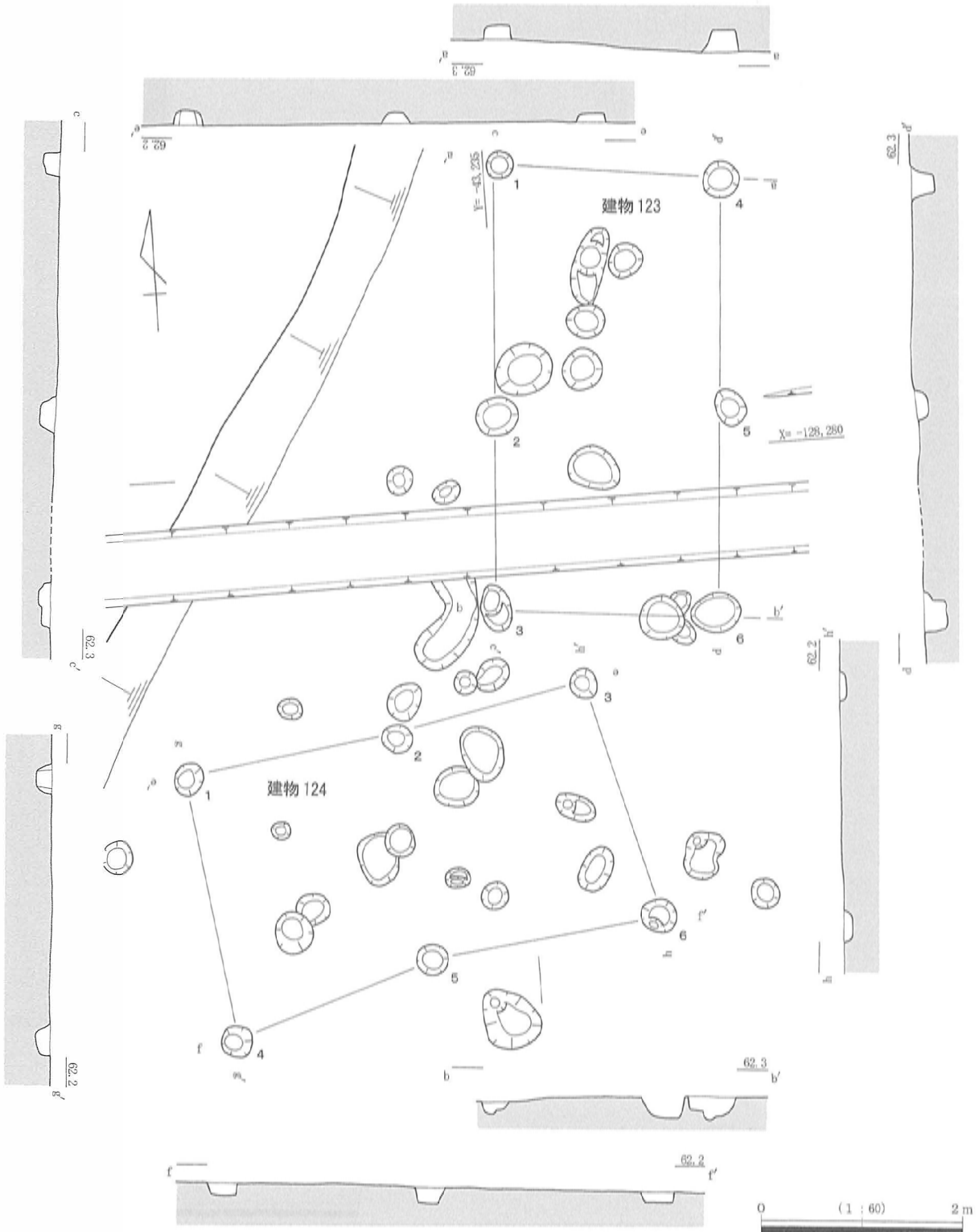
第391図 u城 平面図

主な遺構に、建物3棟・焼土坑2基・ピット・土坑などがある。

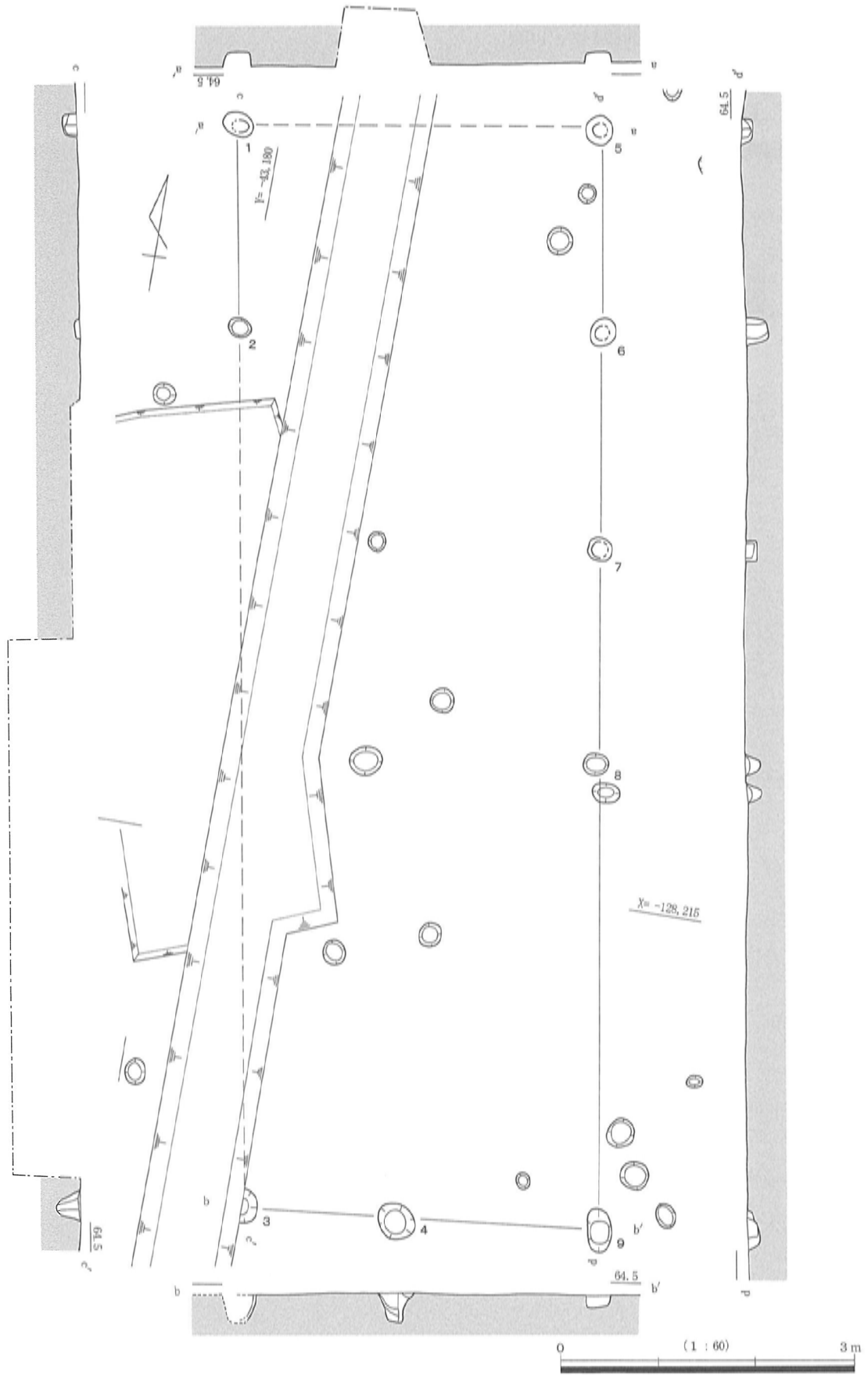
建物123 (第391・392図 図版142・143)

南西部の川合裏川段丘面にいたる、段丘崖際に立地する。南北2間×東西1間、約4.3m×2.2m、約9.5㎡である。主軸方向は、N-3°-Eである。

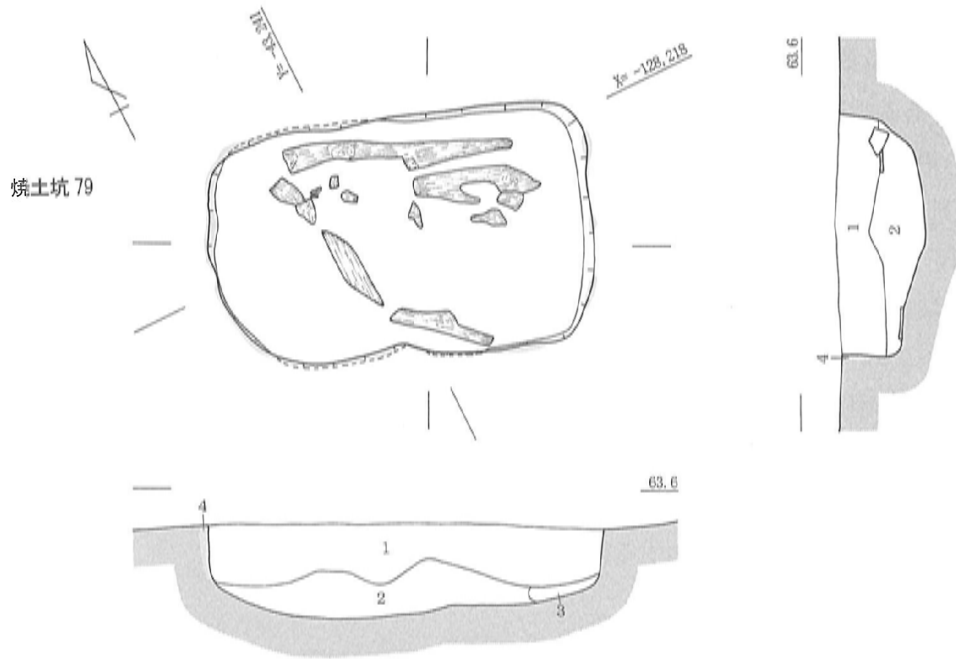
遺物は、出土していない。



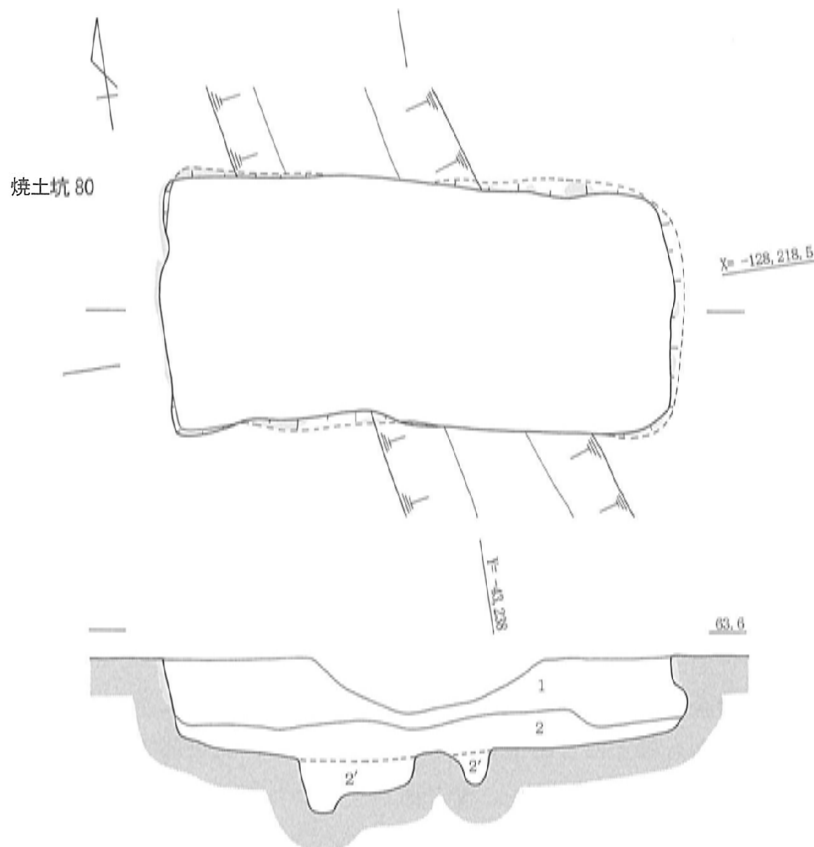
第392図 建物123・124 平面・断面図



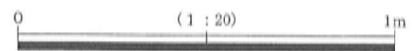
第393図 建物125 平面・断面図



- 1. 2.5Y 6/1 黄灰 シルト 細砂-粗砂 炭・焼土片・2-3cm大の礫を含む
- 2. 2.5Y 3/2 黒褐 粘土 焼土塊・炭粒含む
- 3. 2.5Y 3/1 黒褐 粘土 炭粒含む
- 4. 7.5YR 5/8 明褐 極細砂-細砂 焼土化している (基盤層)



- 1. 2.5Y 4/1 黄灰-2.5Y 6/2 灰黄 シルト 細砂-粗砂含む 3-4cm大の礫・炭・焼土片を含む 包含層に類似
- 2. N 4/0 灰 シルト 細砂-粗砂少し含む 炭片多く含む 焼土片少し含む 1よりシルト質強く、炭片多い
- 2'. 2.5Y 5/2 暗灰黄 シルト 細砂-粗砂少し含む 炭・焼土片少し含む



第394図 焼土坑79・80 平面・断面図

建物124 (第391・392図 図版142・144)

建物123の南に位置する。東西2間×南北1間、約4.4m×2.4m、約10.4㎡である。主軸方向は、N-15°-Wである。遺物は、出土していない。

建物125 (第391・393図 図版142・144)

東半中央部、川4の西岸に立地する。南北4間×東西2間、約11.1m×3.7m、約41.1㎡である。主軸方向は、N-9°-Wである。調査用筋掘りと重なり、西辺の南部分、北辺では柱穴を確認できなかった。東辺では、南の1間が約4.8mで、他の柱間の約2.1m~2.2mに比べて広い。

遺物は出土していない。

土坑195 (第391図)

西半中央部に位置する。円形で、径約0.3m、深さ約0.3mである。中央部に径約0.4mのピット状に深くなる部分がある。埋土に炭片、焼土粒を多く含む。前述した部分的に深くなる箇所も含めて、底面中央には部分的に炭や焼土塊が集中する箇所がみられた。

遺物は出土していない。

焼土坑79 (第391・394図 図版143・144)

西半北部に位置する。長方形で、長辺約1.1m、短辺約0.6m、深さ約0.3mである。壁はほぼ垂直である。壁が赤変、焼土化しており、被熱したことを示している。範囲を図示していないが、焼土化している部分のさらに外側は、2.5YR 4/2 灰赤色に変色している。

平面を検出した際、両長辺の中央部分で、焼土化した壁が途切れ、外側に土坑埋土の上層がはみ出ている状況がみられた。1~2層内には、厚さ3cm~4cm、長いもので長さ61cmの細長い炭が含まれていた。遺物は出土していない。

東側に隣接して、方向軸がほぼ揃う焼土坑80が存在する。

焼土坑80 (第391・394図 図版143・144)

焼土坑79の東に位置する。長方形で、長辺約1.4m、短辺約0.7m、深さ約0.3mである。中央上部が近世の水田に伴う暗渠によって削られている。壁はほぼ垂直である。壁が赤変、焼土化しており、被熱したことを示している。埋土の土質は、包含層に似ている。炭片、焼土片を含むが、焼土坑79のように大きなものはみられない。遺物は出土していない。

土坑79と方向軸が揃っている。

包含層は、ほとんど遺存していなかった。ほぼ全域で近世盛土・作土層を除去した段階で基盤層が現れる。ごく一部分にみられた包含層も非常に薄く、ほぼ全域が棚田造成による削平を受けたと思われる。ただし、本来より比較的平坦な地形であったことが想定されるため、棚田の段下部分を除いて、極端に激しい削平を受けた可能性は低いと思われる。

遺物は、包含層からも、遺構からもほとんど出土していない。ただし、北東部では棚田造成に伴う近世盛土層から、非常に多くの瓦と焼土塊が出土した。両者あわせてコンテナ20箱程度である。焼土塊の多くは、大きなものは1辺15cm程度で、平らな面をもつものが多く、土壁片の可能性もある。北側の丘陵上には近世黄檗宗寺院の徳大寺が建っていたが、寺院の建物を構成していた部材であることも想定される。しかし、徳大寺遺跡で出土している、「徳大寺」銘軒瓦は含まれていなかった。

小結

遺構は、全体的に非常に少数である。

調査地東端から南端にかけて、南西に向けて流れる、川4を検出した。東岸は調査地外で、幅が20m以上、深さが検出し得た範囲では約0.6mである。北東方向から伸びてくる谷筋から流れ出て、u域南西の調査地外で川合裏川に注いでいたと思われる。

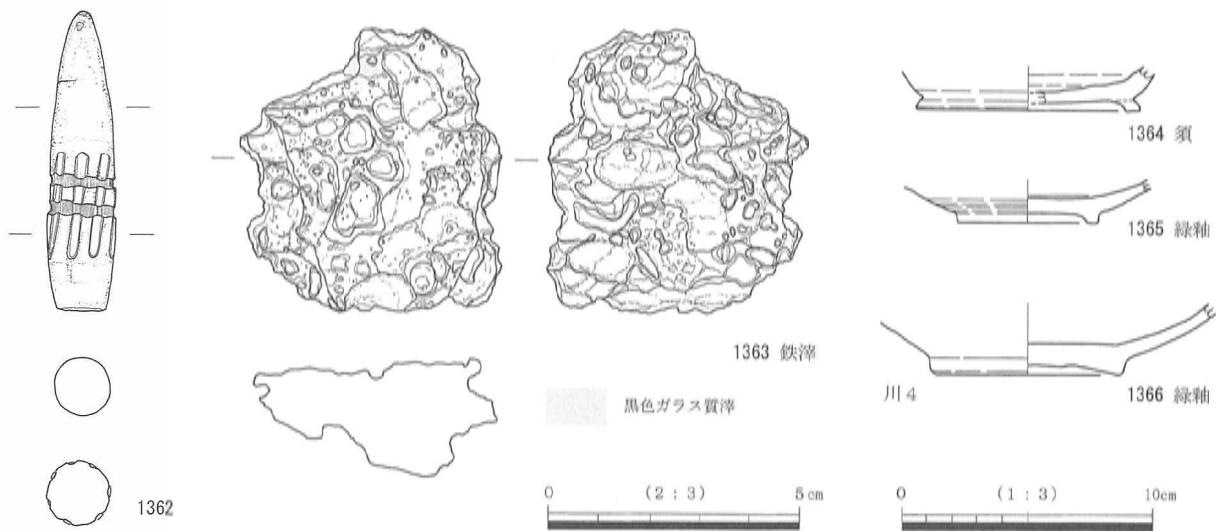
建物は、3棟を復元した。時期は不明である。

建物123・124は、西南部の段丘崖際に立地する。約10㎡と非常に小規模なものである。この周辺には若干ではあるが包含層が遺存しており、遺構が失われる程度の削平を受けた可能性は低いと思われる。

建物125は、東半中央の川4際に立地する。南北方向に細長い、特徴的な建物である。周辺ではピットなどを検出しているが、出土遺物は非常に少ない。建物125単独で存在していた可能性が高い。

北西部で焼土坑2基を検出した。2基は東西に約1.7m離れて位置する。両者共長方形で、焼土坑79からは炭化材が出土している。遺物は出土しておらず、時期が不明であるが、方向軸が揃っており、また形状も類似していることから、同時、もしくは近い時期のものと思われる。

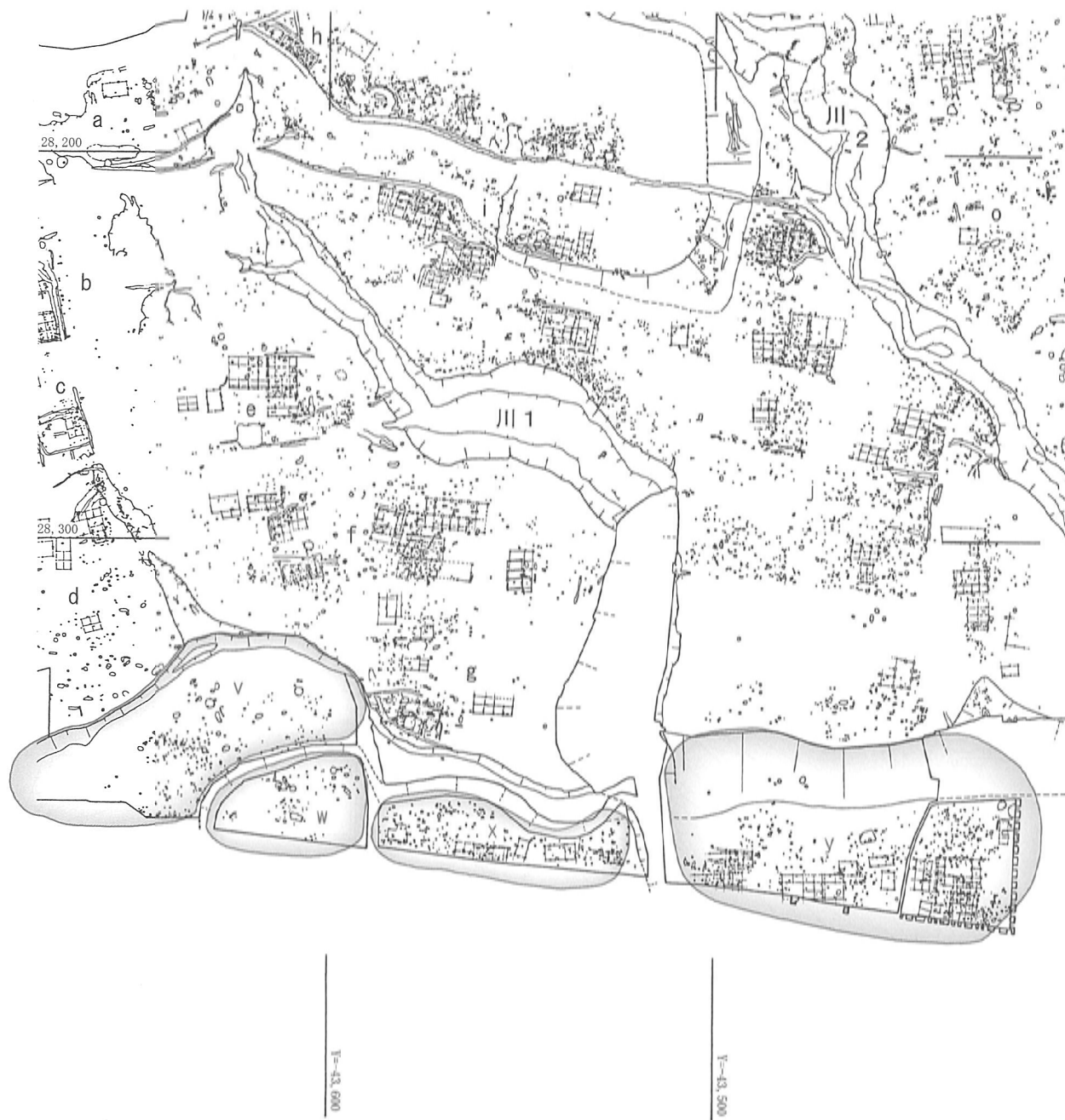
t域では、全体的に遺構、遺物ともに少数で、日常の生活空間として、土地利用がおこなわれていたとは考え難い。



第395図 川4 近世～現代作土層 出土遺物 (2/3 = 1362・1363)

第4章 勝尾寺川段丘面

第1節 勝尾寺川段丘面



第396図 勝尾寺川段丘面 全体図 (1 : 1,500)

第1項 v城(付図3)

勝尾寺川段丘面地区の北西部、地区内で最も標高の高い部分である。北から東にかけては高さ約3mの段丘崖で、崖上は、d・f・g域であり、南東側が、w域である。

層序

上から現代作土層、近世作土層、包含層、基盤層である。作土層は複数層みられ、一部に作土層に伴う整地層もみられる。包含層は南西部にのみ遺存していた。それ以外の部分は棚田造成時に削平を受けたと考えられる。本来存在した遺構が失われた可能性も高い。

主な遺構に、井戸1基・ピット・土坑などがある。

井戸11(第397・399・402図 図版149・231)

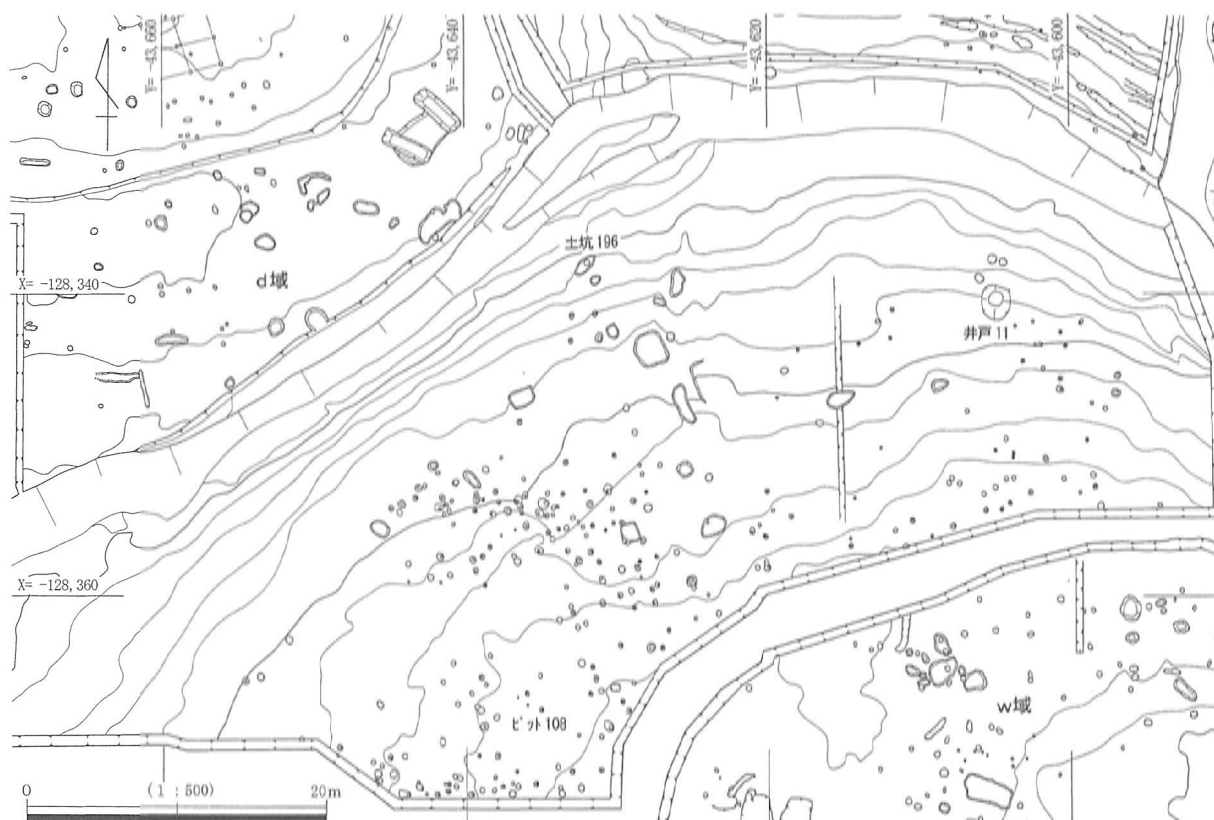
北東部に位置する、素掘りの井戸である。長径約2.2m、短径約1.9m、深さ約2.3mである。最上層部分には礫が落ち込んでいた。

遺物は、須恵器壺体部の比較的大きな破片と、若干の土師器小片のみである。時期がある程度わかるものは、1430の土師器杯小片のみである。平城Ⅲ～Ⅳかと思われるが、この1片で遺構の時期を決めることはできない。

ピット108(第397・399～401図 図版149)

南西部に位置する。直径約0.2m、深さ約0.1mである。ピット内から、三彩小壺がやや傾きながらも正置の状態出土した。蓋で密閉されており、中にはガラス玉などが入っていた。

三彩陶器は壺、蓋共に完形である。表面の剥離が著しく、釉が一部に遺存しているのみである。壺に



第397図 v城 平面図

は、濃緑色、黄緑色、白色の釉が確認できる。白色釉が遺存している部分が最も面積が広く、濃緑色はごくわずかに確認できるのみである。底部外面は全体的に白色釉のみがかかっている。内面も、内容物が付着しているため体部上半を確認することができないが、白色釉のみがかかっている可能性が高い。ただし、底部ではうっすらと緑色を帯びている。蓋は、外面の剥離が著しく、白色釉しか確認できない。内面は全体に白色釉がかかっていると思われる。

ガラス玉は、計53点出土した。奈良国立文化財研究所（現奈良文化財研究所）村上隆氏に分析を依頼し、すべて鉛ガラス製であろうとの見解を得ている。銀化しているが、本来は緑色を呈していたとのことである。また、ガラス玉以外にも、蓋の内面に付着した状態の内容物が認められ、これは有機物であろうとの見解である。

土坑196（第397・402図 図版149・231）

北部の段丘崖際に立地する。北東から南西方向に長い楕円形で、長径が約1.7m、短径が約0.8m、深さ0.04mである。

遺物は、土師器杯A・鍋、須恵器杯B・壺・甕などの破片が出土した。平城Ⅲ～（Ⅳ）、8世紀中葉頃のものかと思われる。

土坑197（第399図）

中央やや北よりに位置する。やや歪な長方形で、長辺約1.7m、短辺約1.2m、深さ約0.1mである。埋土に炭を多く含む。遺物は出土していない。

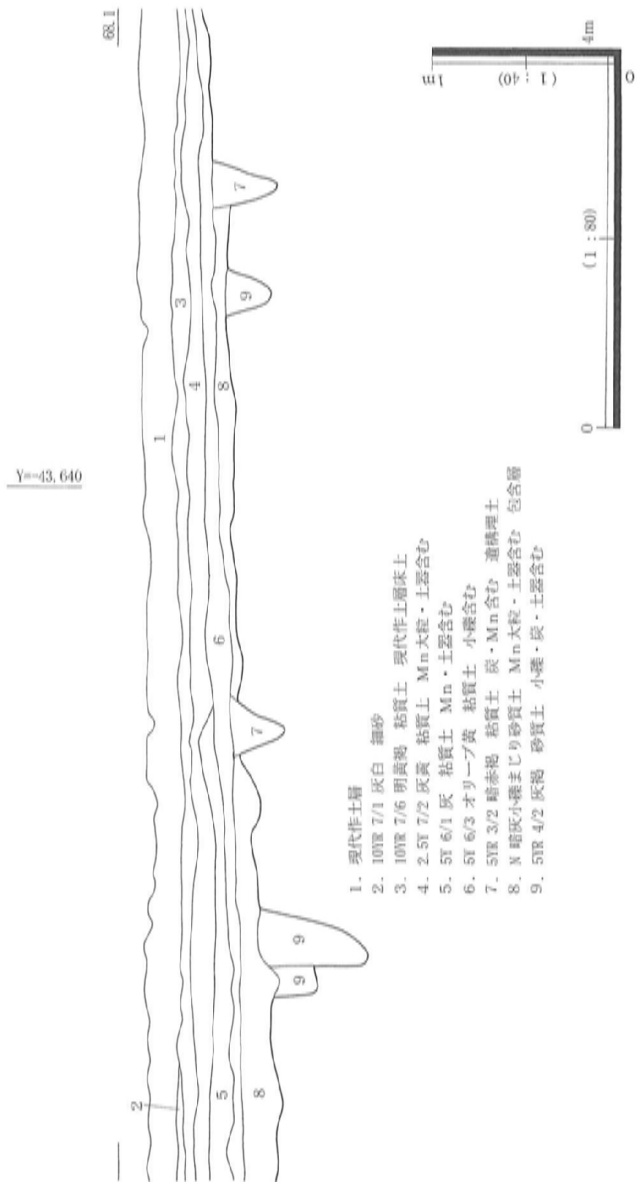
土坑198（第399図）

中央部に位置する。やや歪な方形で、1辺約1.2m、深さ約0.2mである。埋土に炭、焼土片を多く含む。

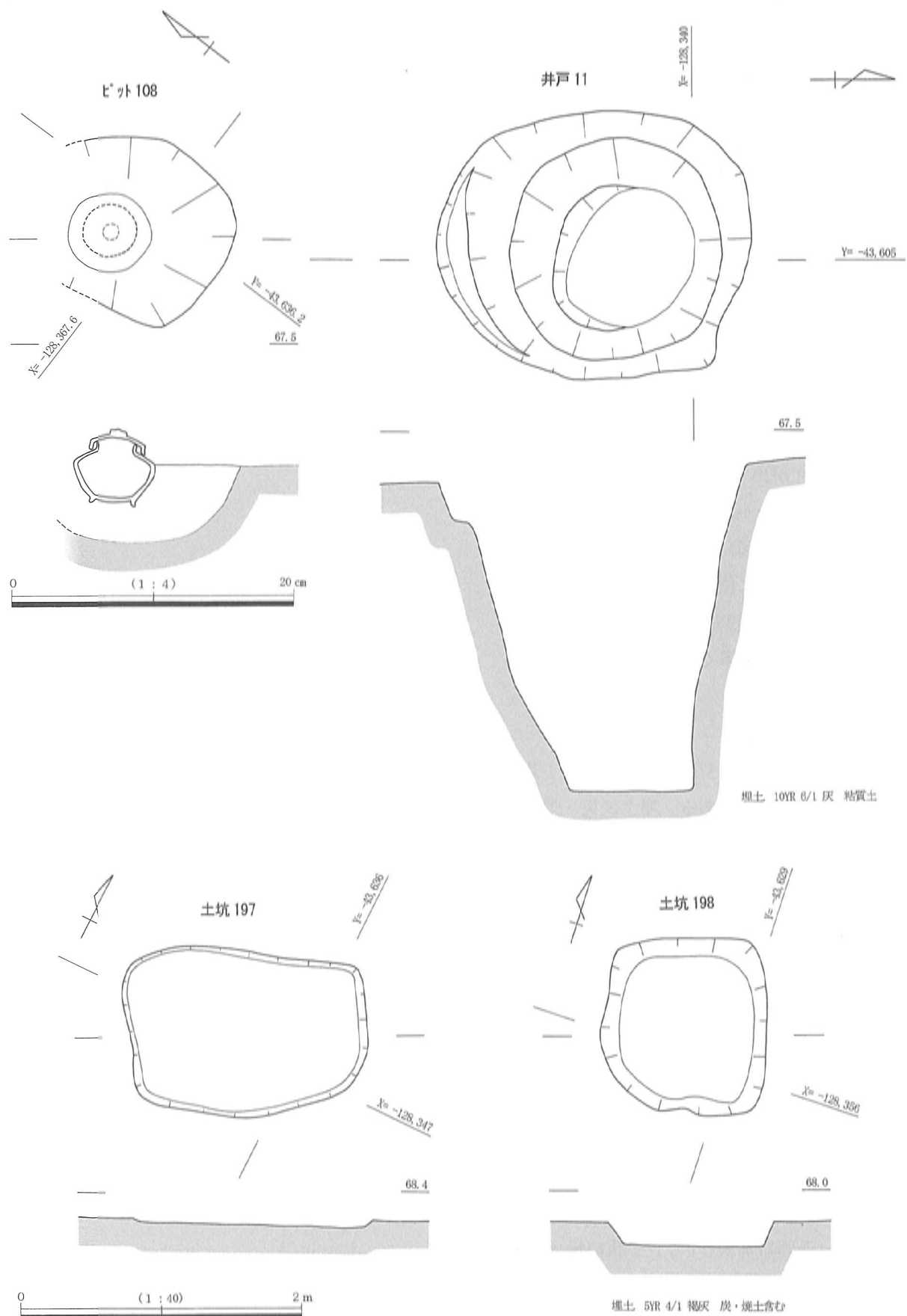
遺物は、須恵器、製塩土器など、細片が少量出土したのみである。

層序の項でも記したが、包含層は南西部にのみ遺存していた。それ以外の部分は棚田造成時に削平を受けていると思われる。南西部以外の部分では本来存在していた遺構が失われた可能性を考慮に入れておく必要がある。

包含層出土遺物には、8世紀前後のものと思われるものから、黒色土器A類碗、鐔が狭く口縁部が短い土師器羽釜、「て」字状口縁土師器皿など、10～11世紀代と思われるものまでがみられる。全体的に、8世紀頃のものと思われる破片が割合としては多く、小片のため図化でき



第398図 X=-128,374.5ライン 断面図



第399図 井戸11 ピット108 土坑197・198 平面・断面図

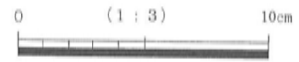
なかったが、製塩土器の可能性のある破片もいくつか含まれていた。第404図の1450、1451は共に、中央西寄りの、ピットを多数検出している部分の包含層から出土したものであるが、この部分では、器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類椀など、10～11世紀代のものと思われる小片が少量ではあるがまとまって出土している。また、作土層からの出土であり本来この場所に属するものかどうか不明ではあるが、比較的小ぶりの羽口の破片も出土している。

小結

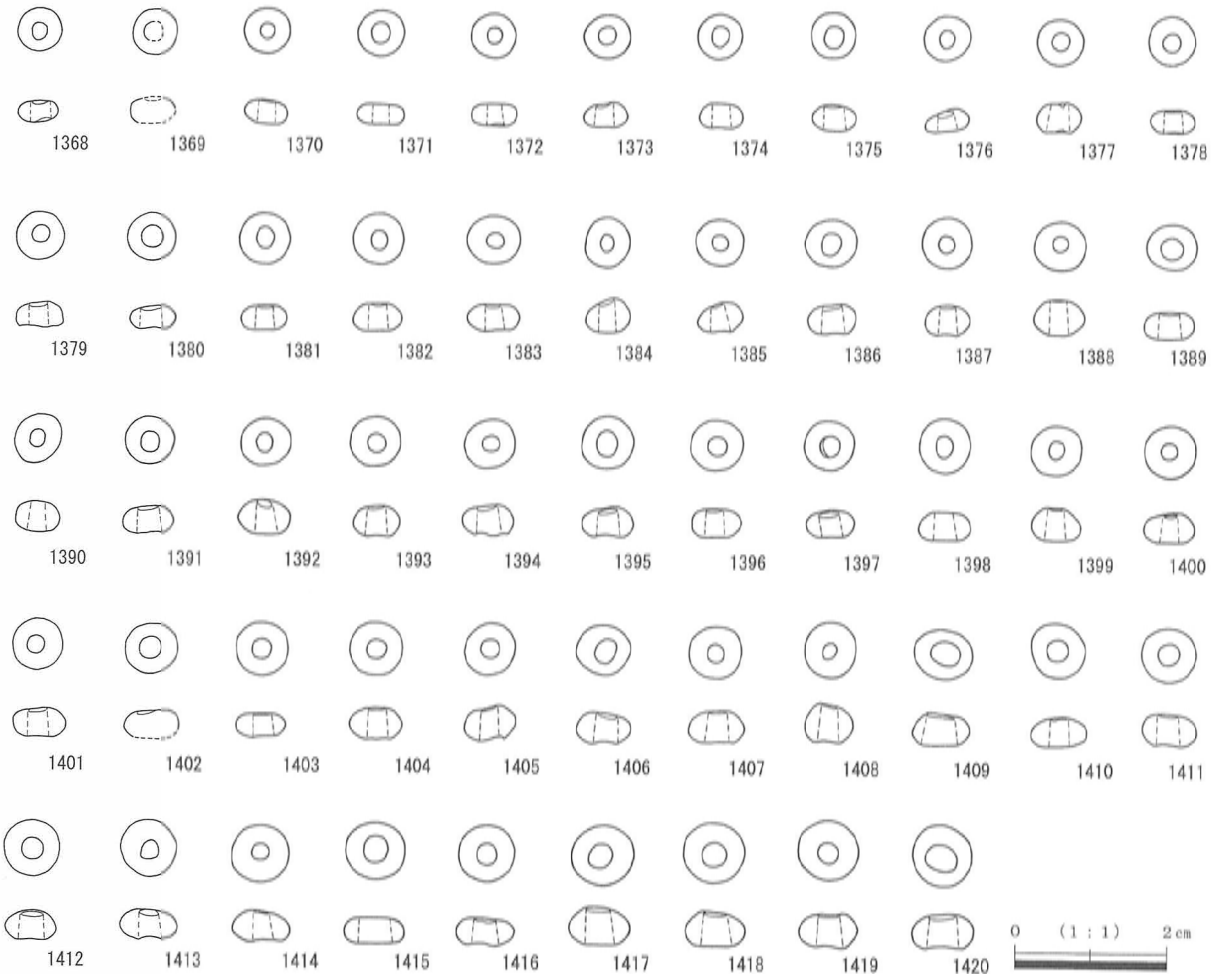
遺構出土遺物の大半は小細片で、ほとんどの遺構の時期が不明である。ただ、個々の遺構の時期は確定できないまでも、全体として捉えれば、土師器、須恵器などの8世紀頃と思われるものから、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類椀などの10～11世紀代と思われるものまでがみられる。包含層出土遺物も同様な状況であり、この時期に土地利用がおこなわれた可能性が高いと思われる。

特筆すべき遺構は、奈良三彩の小壺が出土したピット108である。蓋で密閉された中にはガラス小玉53個と有機物が入っていた。

8世紀代の遺構は、他に、土坑196がある。井戸11からもこの時期のものと思われる遺物が出土しているが、小片であるため詳細は不明である。

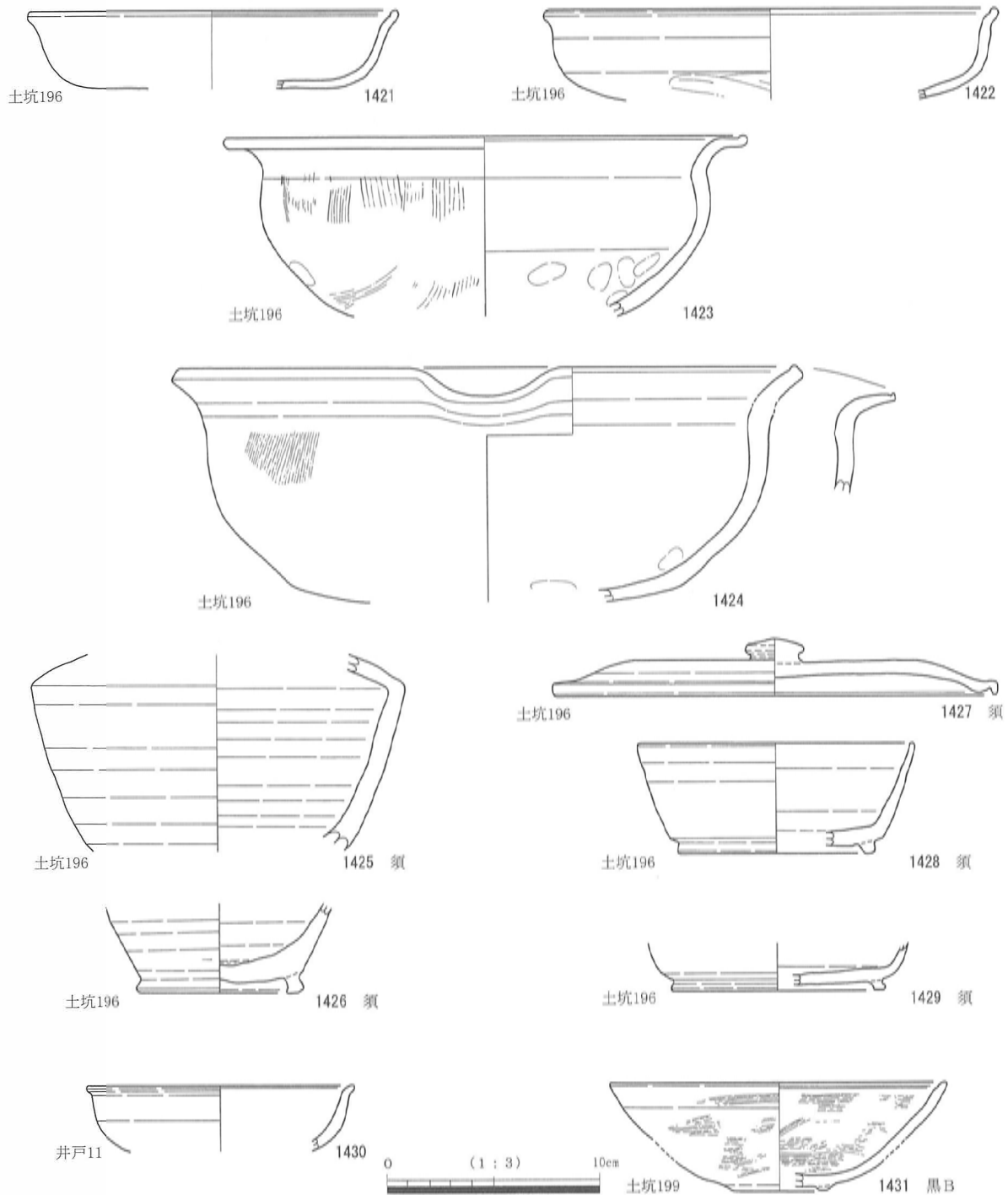


第400図 ピット108 出土遺物(1)



第401図 ピット108 出土遺物(2)(1/1)

ピット108は、出土状況から、小壺内に内容物を入れた上で埋納をおこなったと思われる。性格については、まず地鎮が想定される場所である。しかし、v域では多くのピットを検出しているものの、柱穴である可能性をもつものは少ない。削平を受けている部分では、柱穴が失われた可能性が考えられるが、北部分は急な傾斜の地形であり、建物を建てるには不向きである。南東部も、傾斜している地形であったと想定され、建物が存在した可能性は、否定することはできないものの、比較的低いのではないかと考えられる。地形的に最も適していると思われる南西部では、削平を受けていないが、建物の存在を確認していない。南東に隣接する1段下がったw域では、柱穴はもとより、この時期のものと思わ

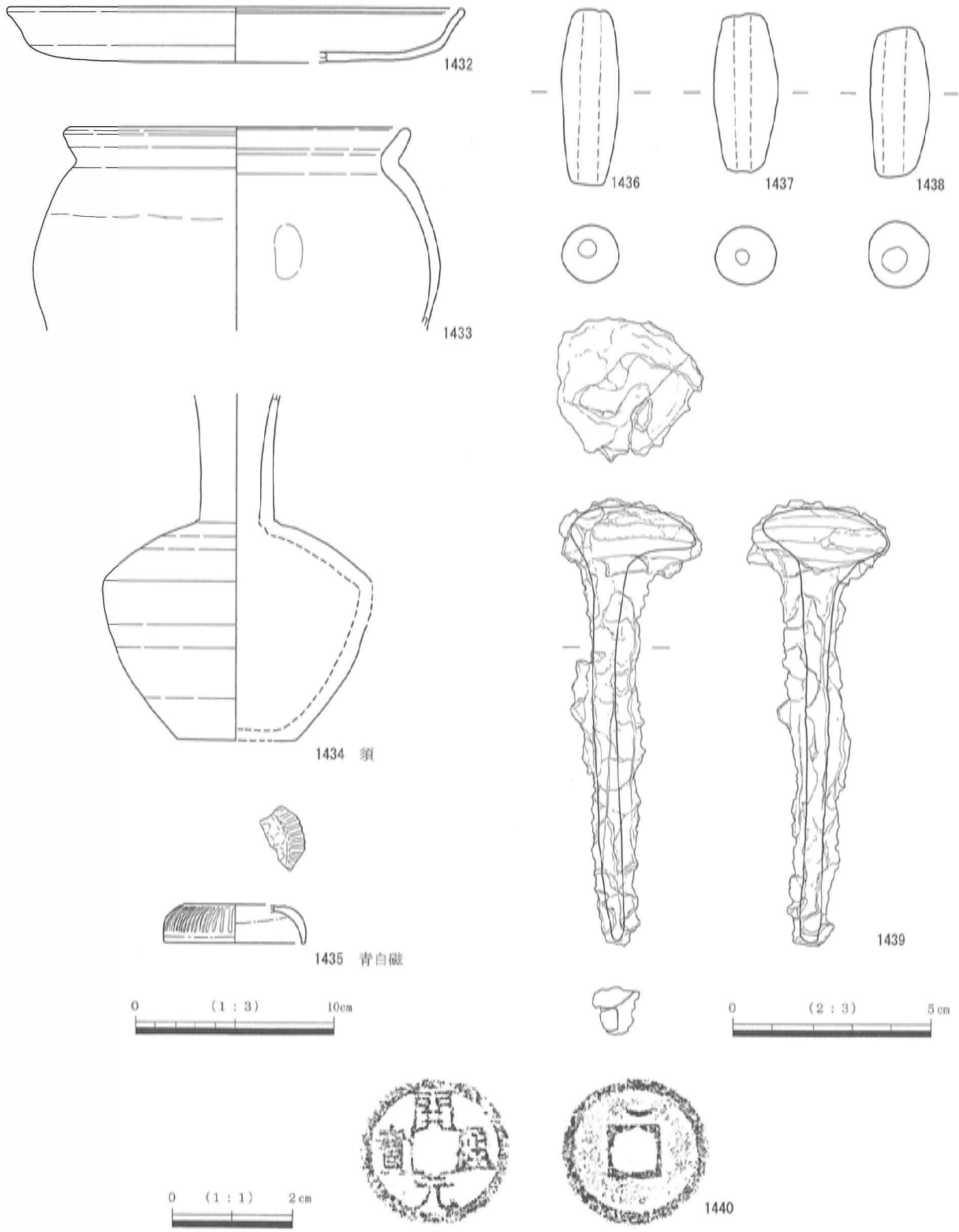


第402図 井戸11 土坑196 その他の遺構 出土遺物

れる遺構さえみられない。ただし、南側の調査地外の状況については不明である。

北東方向の丘陵上、f域には方形掘り方の柱穴をもつ、大型の建物45が存在する。同時期のものであればピット108と関係がある可能性が高いが、残念ながら建物45の時期は不明である。

いずれにしても、遺跡全体をみても8世紀代の遺構はきわめて少ない。この時期の遺構、特にピット



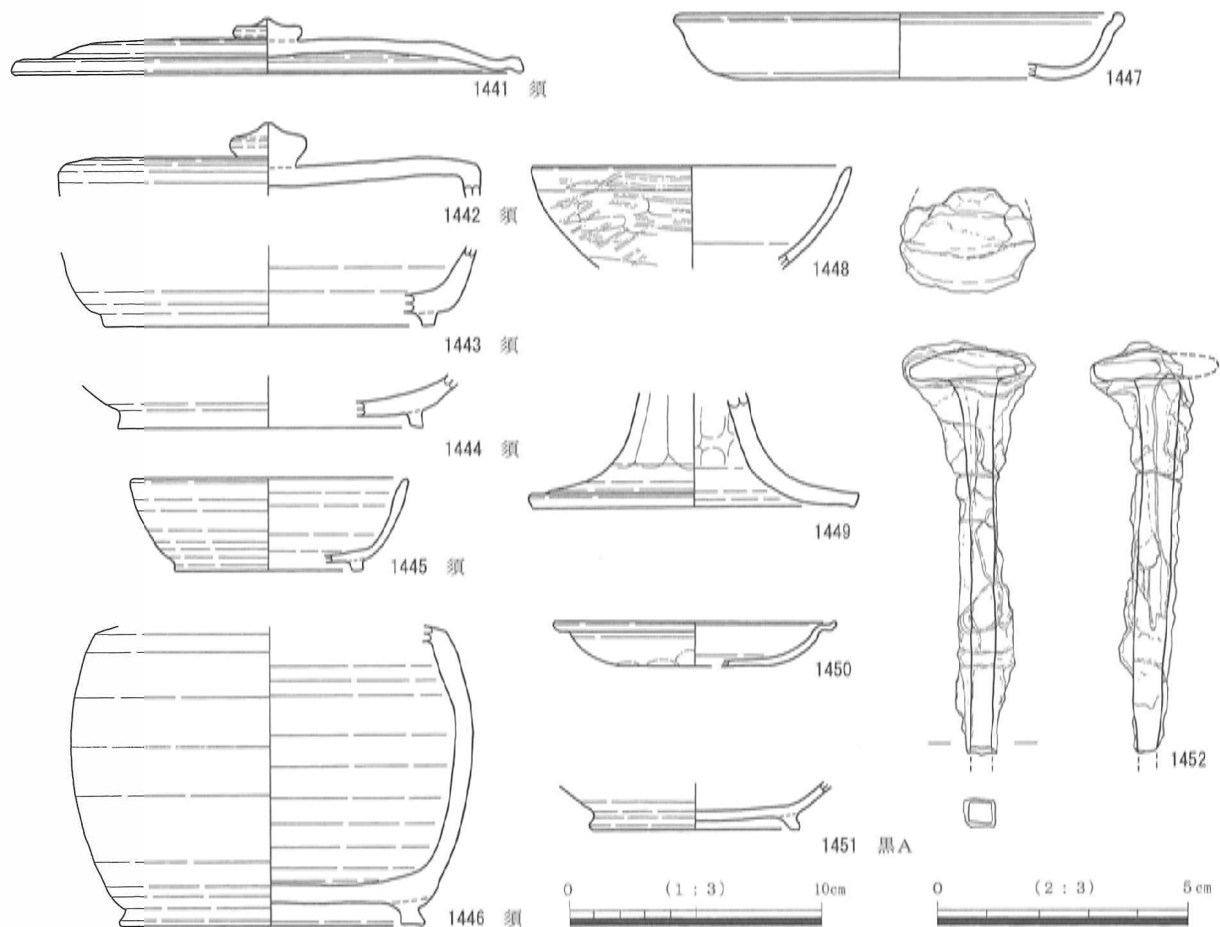
第403図 作土層 出土遺物 (2/3 = 1436~1439 1/1 = 1440)

108がここに存在する意味は、遺跡全体はもちろん、この地域全体をみて考える必要があると思われる。

前述したように、出土遺物から、10～11世紀の土地利用が想定される。勝尾寺川段丘面地区の他域では、程度の差はあるがこの時期に土地利用がおこなわれており、v域でもその可能性はあると思われる。しかし、出土遺物量からみて、生活空間として密度の濃い土地利用がおこなわれたとは考え難い。

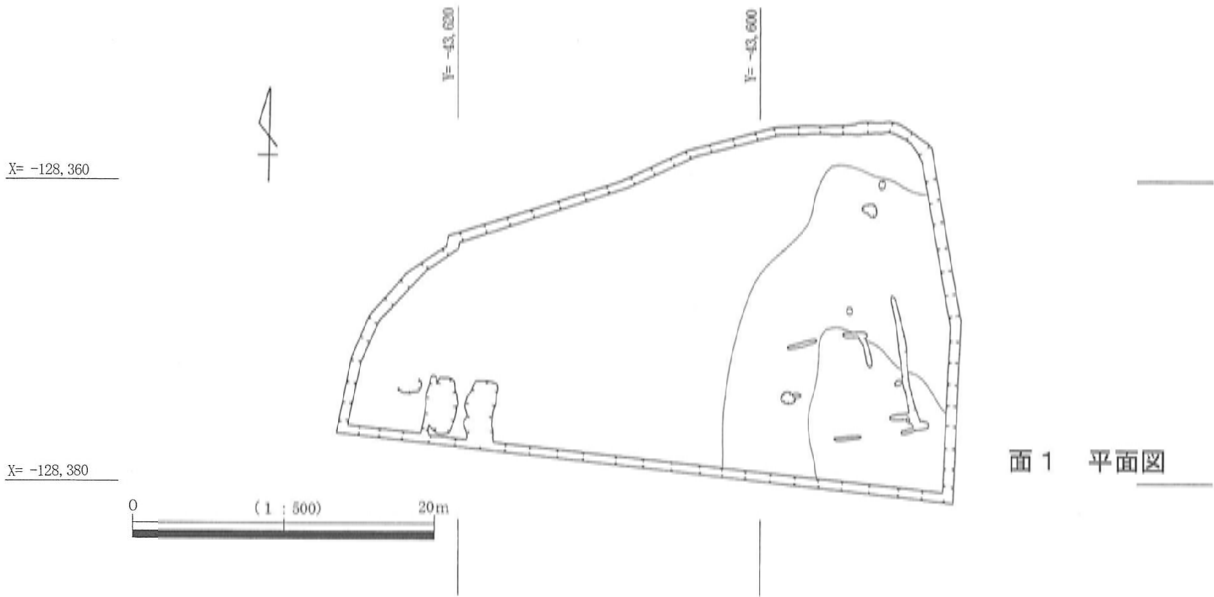
土坑197・198は埋土に炭を多く含む遺構である。時期は不明である。類似する遺構は遺跡全体でみられるが、他地区のもの同様、性格は不明である。

井戸11は、先述したように8世紀代の遺物が出土しているが、遺構の時期については不明とせざるを得ない。周囲には、南東側の一段下がったw域も含めて建物を検出しておらず、丘陵上の建物とセットである可能性も考慮に入れておく必要があると思われる。

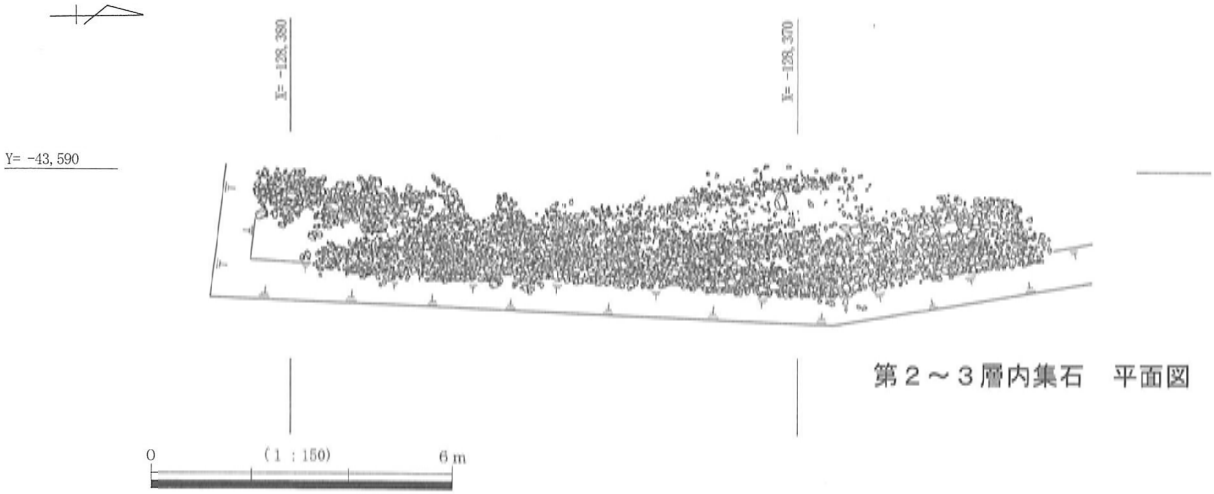


第404図 包含層 出土遺物 (2/3 = 1452)

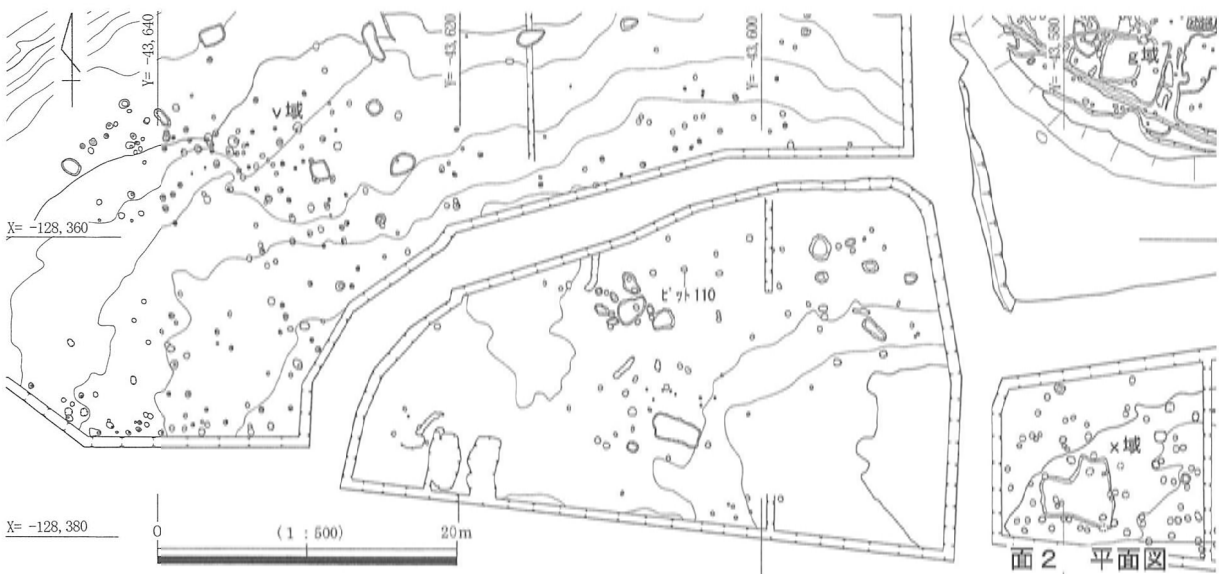
第2項 w域 (付図3・17)



面1 平面図

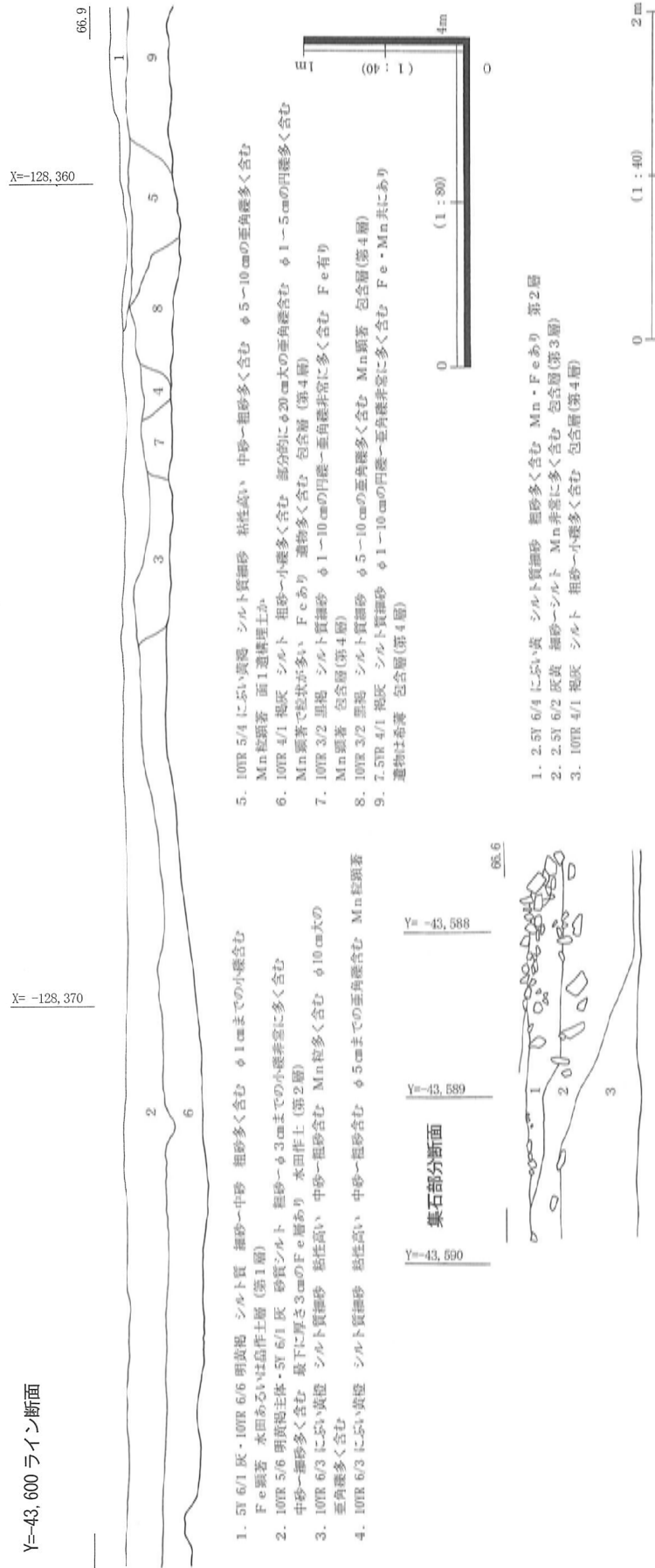


第2~3層内集石 平面図



面2 平面図

第405図 w域 平面図



第406図 Y=-43,600ライン・第2～3層内集石 断面図

北西側のv域から約0.9m下がった、調査地内の勝尾寺川段丘面では上から2段目である。北西側がg域、東側がx域である。

層序

現代水田作土層以下、近世作土層を第1層、時期不明の作土層を第2層、以下の包含層を第3・4層として調査をおこなった。現代作土層を機械で除去した段階で、第1層は北東隅部分にのみ、第2層は東部にのみ遺存していた。第3層は東部にのみ遺存していたが、第4層はほぼ全域に遺存していた。現代作土層を除去した段階で、近世作土層も地形の低い部分にのみ遺存している状況であり、各層の本来の分布範囲は不明である。

東端部では第2～3層中に多くの礫が集積していた。第3層は、東南部の低い部分を中心に堆積したものであると思われる。しかし、その一部に礫を伴うことから、礫と共に整地土として入れられたものである可能性もある。

遺構面として調査したのは、第3層上面と、第4層を除去した基盤層上面の2面である。第3・4層は同時に掘削し、第3層下面=第4層上面の調査をおこなっていない。

前者を面1、後者を面2として報告することにする。

第2～3層に伴う礫群(第405図 図版150)

東端部の第2～3層中に含まれる礫の集積である。w域東側は、一段

低いx域へと至る約0.8mの高低差をもつ崖であるが、この崖の肩に沿って南北方向に細長い形状に設置されている。南、東が調査地外へと伸びているため、全形は不明であり、崖肩の先端部で、東端がどのように処理されていたかも不明である。検出し得た部分で、南北長約1.6m、東西幅約2.5mである。

w域の本来の地形は、西部、北部が比較的平坦で、南東方向に低くなる。地形的に低い部分を嵩上げするために、w域の端、つまりx域にいたる崖の肩部分に、礫を集積したことが想定される。ただし、w域では遺構が希薄であることから、この部分の土地利用のためではなく、東側に隣接するx域のためである可能性も考えられる。

第2・3層の性格は層序の項に記したが、第2層が水田作土層であることが疑問点として残る。東南部の第2層とした部分は、西側部分に比べて深くなっており、少なくともこの部分では、作土層ではなかった可能性がある。

礫間からは磨滅した遺物の小片が出土している。瓦器碗、青磁碗などがみられる。

面1

第3層上面で、東南部に向かって低くなる地形である。先述したように、第3層は東部にのみ遺存している。

主な遺構は、溝・ピット・土坑などである。全体的に、遺構からの出土遺物は小細片のみで、時期のわかる遺構はない。

面2

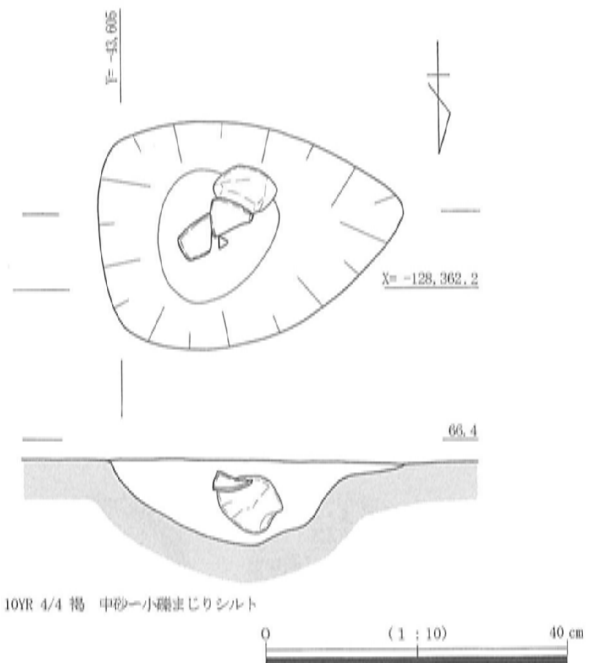
第3・4層を除去した基盤層上面である。東南部にかけて低くなる地形で、ピット・土坑などを検出した。

ピット110（第405・407・408図 図版150・231）

北部に位置する。径約0.3m～0.4m、深さ約0.1mである。埋土中から、拳大の礫とともに、瓦器碗が出土した。

瓦器碗は、破片で出土したが、高台を欠くもののほぼ完形に復元できた。楕円形で、11世紀後葉～12世紀前葉のものである。

第3～4層からは、黒色土器A類、鋳が狭く口縁部が短い土師器羽釜、「て」字状口縁土師器皿、瓦器碗などが出土している。10～11世紀代のものであると思われる。礫群直下の第4層からは、磨滅した小片が出土しており、なかでも須恵器甕、土師器煮炊具などの破片が目立つ。時期がある程度わかるものでは、黒色土器A類碗、鋳が狭く口縁部が短い土師器羽釜などが多く、8～9世紀のものや、瓦器などは少量である。礫群の礫間からは、直下の第4層とは異なる



第407図 ピット110 平面・立面図

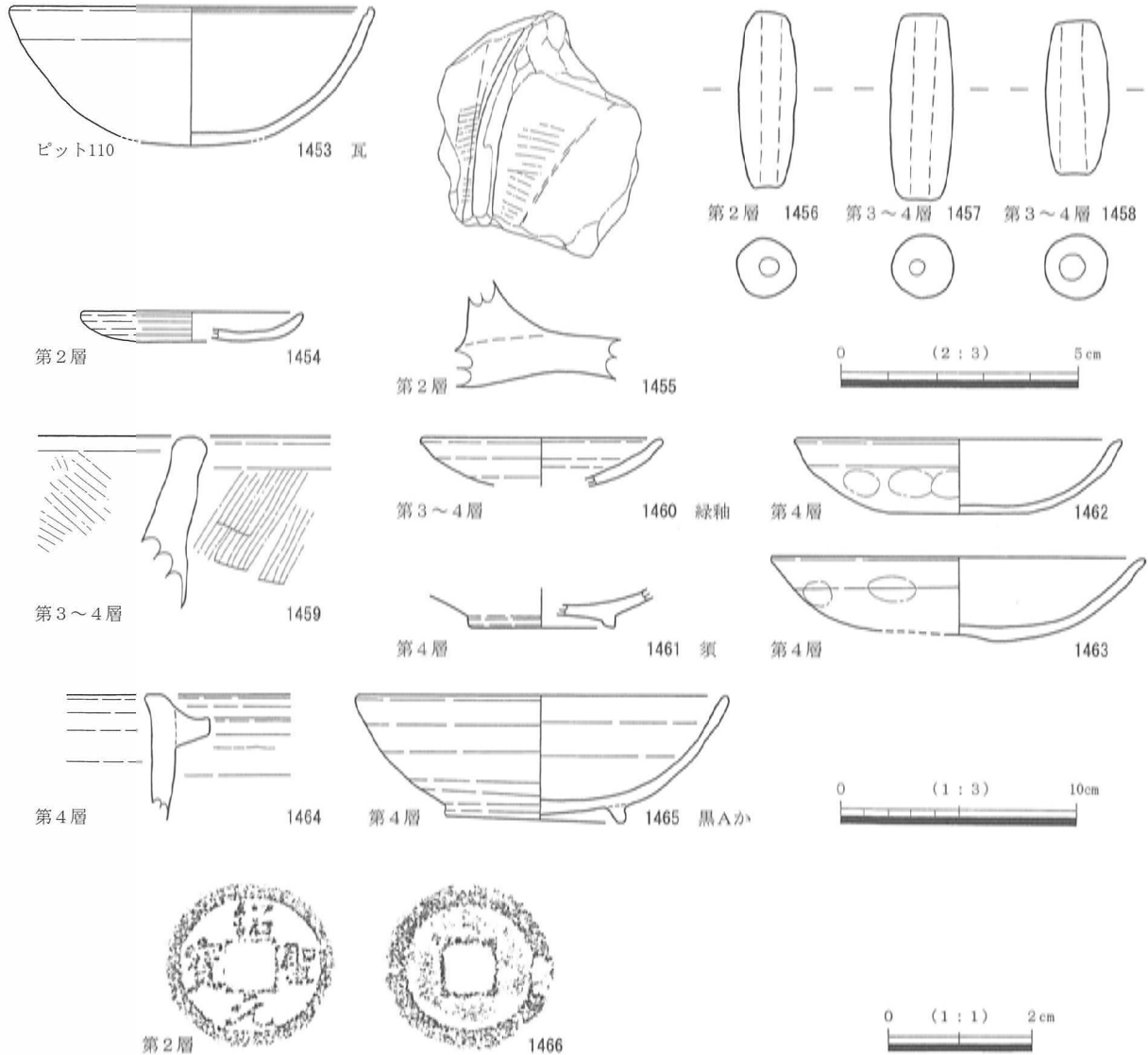
り、瓦器片の出土が目立つ。

小結

遺構は、非常に少なく、出土遺物もきわめて少量である。

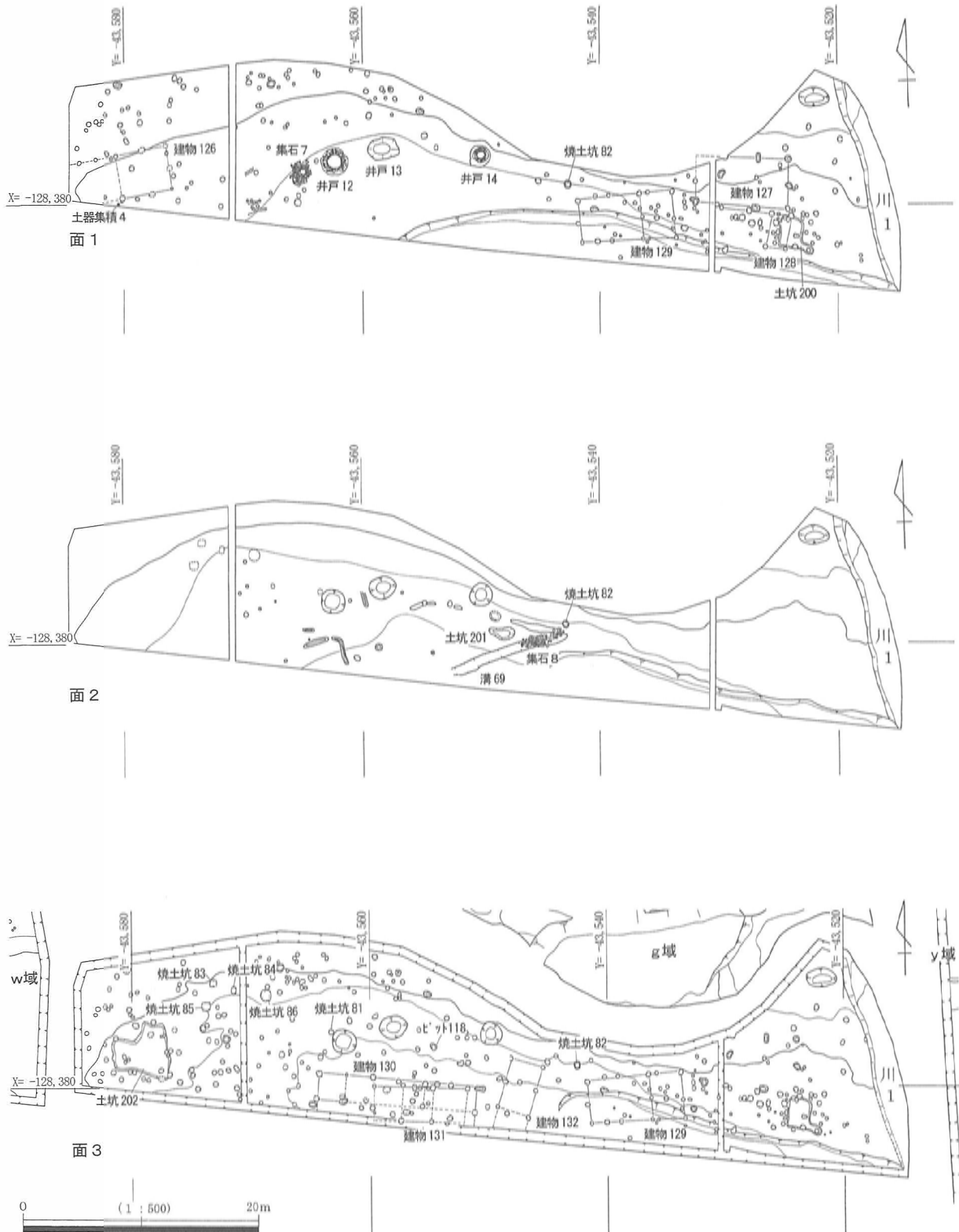
前述したように、第3～4層からは10～11世紀代のものと思われる遺物が出土しているが、第4層からは、主に黒色土器A類、鋸が狭く口縁部が短い土師器羽釜など、なかでも古い時期のもの出土が顕著であり、第3層では瓦器などやや新しい時期のものが目立つ。遺構出土遺物がほとんどないが、面1・2の時期は、これら包含層からの出土遺物の時期にそれぞれ対応していることも想定される。

しかし、どちらの時期においても、遺構は希薄である。第4層がほぼ全域に遺存していることから、w域は削平の影響を受けておらず、検出した遺構の分布状況が本来のものであると思われる。10～11世紀代に何らかの土地利用がおこなわれていたとは考えられるが、密度の濃いものではなかったと想定される。



第408図 ピット110 第2層・第3～4層 出土遺物 (2/3 = 1456～1458 1/1 = 1466)

第3項 x域 (付図3・7・18)



第409図 x域 平面図

西側のw域から約0.8m下がった、勝尾寺川段丘面地区の上から3段目である。北側は、約2.0mと約3.2mの2段の段丘崖となっており、丘陵上(g域)とは約5.2mの高低差がある。東側は、y域である。

層序

現代表土を第1層、近世～近代作土層を第2層、以下の包含層を第4～6層とした。第3層は欠番で存在しない。近世以降を除くと、第4～6層、基盤層の上面で遺構を検出した。付図18の各遺構面の平面図にそれぞれの層の範囲を示している。

以下に、調査の経過に沿って各層と遺構面について記す。

第2層近世～近代作土層を除去した段階で、調査区東半の南端部で大型の土坑を検出した。シルト～粘土で埋まっており、明治初期の地籍図にみられるため池であると思われる。作土層は第2層としてまとめて掘削をおこなったが複数層みられ、いずれかの段階に伴うものと考えられる。ため池内、北端部分で東西方向の石列、南北2列を検出した(図版151)。北列は岸の壁面に石を積んだ護岸であると思われる、南列は断面観察から北側部分が埋まった後に築き直されたものであることを確認している。このため池によって、下層は大きく削平されている。ため池の範囲では、西部に第5層以下が遺存していたものの、中央には包含層が全く遺存しておらず、東部にいたっては基盤層も大きく削られている状況であった。

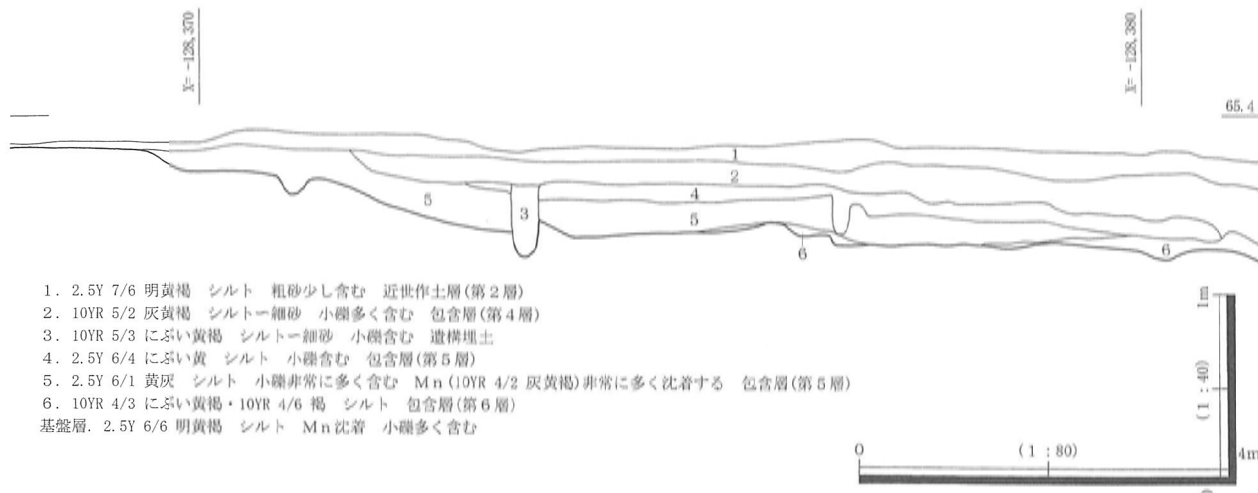
この周辺には第4・5層に伴う礫が多く存在するが、ため池の護岸礫と接している部分があり、一部ではその判別に困難が伴った。

第2層を除去すると、第4層上面である。ただし、水田造成時に削られた北端部分と、ため池で削平された部分には第4層は存在せず、主に基盤層がみえている。

第4層内には多くの礫が含まれている。第4層上面では第411図のように見え、広い範囲にわたってはいるが、散漫ではなく、何箇所かに集中している状況がみられる。第4層中に、地固めなどの目的で集中的に礫を入れたものであると考えている。

第4層上面では、集石7と井戸12～14を確認した。

第4層を除去すると第5層の上面である。この面で検出した遺構の多くは、第4層類似の埋土をもち、第4層上面または途中から掘り込まれた可能性が高い。第4層上面で検出した井戸群の南側では遺構を検出していないが、この範囲では第5層が炭粒を多く含む灰色シルトであったため、遺構検出が困難で



- 1. 2.5Y 7/6 明黄褐 シルト 粗砂少し含む 近世作土層(第2層)
 - 2. 10YR 5/2 灰黄褐 シルト～細砂 小礫多く含む 包含層(第4層)
 - 3. 10YR 5/3 にぶい黄褐 シルト～細砂 小礫含む 遺構埋土
 - 4. 2.5Y 6/4 にぶい黄 シルト 小礫含む 包含層(第5層)
 - 5. 2.5Y 6/1 黄灰 シルト 小礫非常に多く含む Mn(10YR 4/2 灰黄褐)非常に多く沈着する 包含層(第5層)
 - 6. 10YR 4/3 にぶい黄褐・10YR 4/6 褐 シルト 包含層(第6層)
- 基盤層. 2.5Y 6/6 明黄褐 シルト Mn沈着 小礫多く含む

第410図 Y=-43,570ライン 断面図



第411図 礫群 平面図

あった。

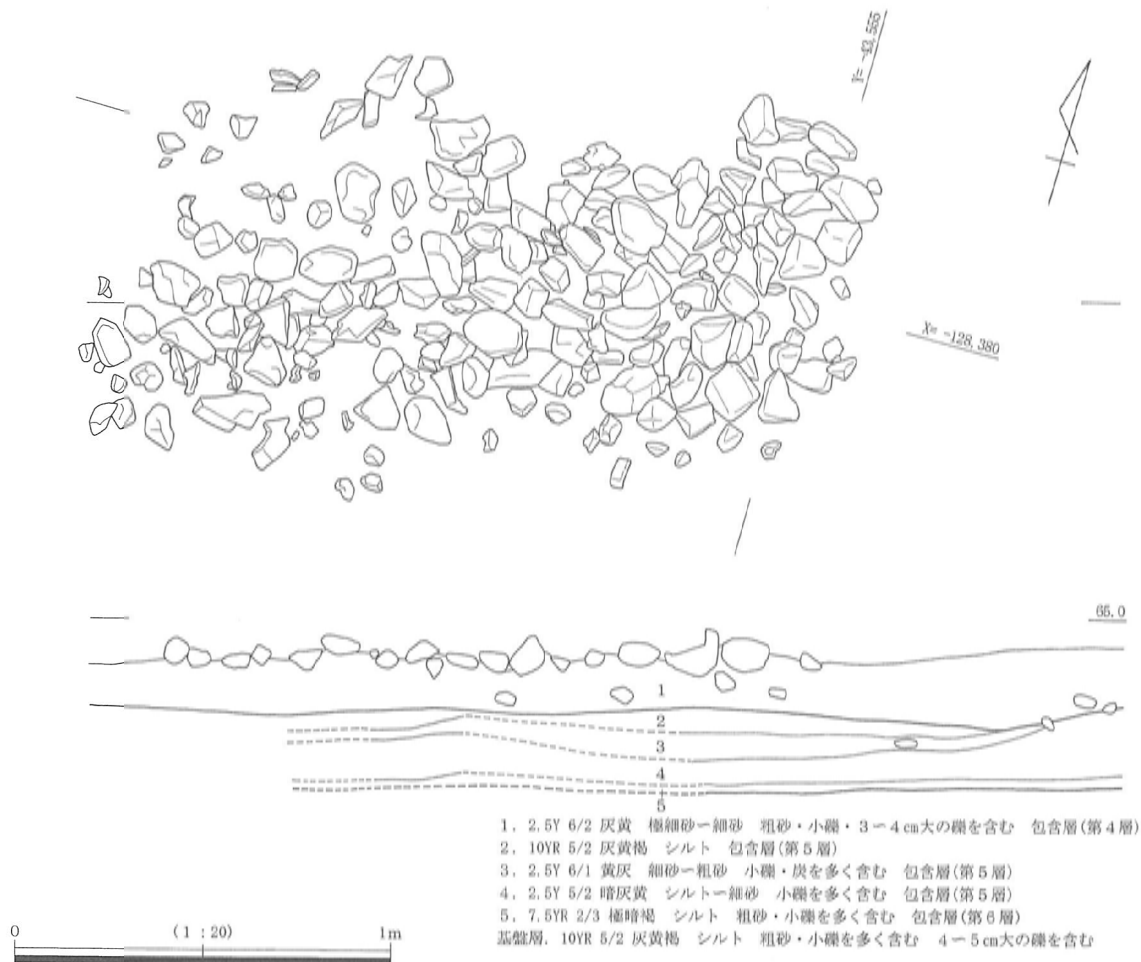
第5層は、比較的薄く、部分的に存在する複数の層の総称である。これらは、地形的に低い部分にのみ存在すること、橙色を呈する土壤化の度合いが低いと思われるものがみられることなどから、一連の整地土層であり、地表面にはなっていないと考えている。

第5層各層はそれぞれ重なりあっている部分も多い。x域は旧地形の等高線に沿う細長い調査区であるため、重なりあった各層について詳細を認識することが困難であった。

付図18の平面図には第5層の分布範囲を3域(a～c)示している。a部分にはシルトに小礫を多く含む比較的厚い層、b部分にはごく薄い黄色シルトが分布する。両者は重なっている部分もあり、aがbの下層である。c部分は最も地形の低い部分であり、炭粒を多く含む層など3層が重なっている。各層は、土色も橙黄色、灰色などバラエティに富んでいる。異なる土を薄く重ねて整地をおこなったことが推察される。

第5層中にも部分的に礫が集積している箇所がみられた。第4層に伴う礫とは異なり、面的に広がっておらず、数条の石列としてまとまっている。第4層を除去した段階、第5層上面で現れていたものもあれば、第5層を掘削中に検出したものもある。第5層各層との対応関係は不明であるが、等高線に沿った形で分布しており、整地時に入れられたものと考えられる。

第5層を除去すると第6層上面で、これは旧地形の地表面であったと考えられる。整地土を除去すると、南に向かって傾斜し、特に中央やや西寄りの部分が低くなる地形が現れる。



第412図 第4層に伴う礫群(部分) 平面・断面図

第6層の上面で検出した遺構は少数であるが、その多くが第5層と類似した埋土をもつ。ただ、西部を中心に検出した焼土坑群は、埋土が第5層と全く異なる。第5層が確実に存在する箇所では焼土坑86のみであるが、第5層を除去しないと確認できない。また、第5層上面が地表面であった可能性は低いと考えられることから、第6層上面で機能していたものと判断した。その他の焼土坑は帰属面が確認できないが、その多くが焼土坑86に隣接する部分に集中しており、焼土坑86同様第6層上面に帰属するものである可能性が高いと考えている。

第6層を除去すると基盤層である。この面で多くの遺構を検出した。ただし、本来上面で検出すべき遺構も多く含まれていると考えられる。

以上が調査の概要であるが、第4層上面、下面で検出した遺構群を面1、第5層下面検出の遺構群を面2、第6層上面で検出した焼土坑群および第6層下面で検出した遺構群を面3として扱うことにする。

主に生活面を形成していたのは、第4層、第6層であると考えている。第5層は、前述したような性格であれば、第4層上面を形成するためのものと考えられる。第4層と第5層の出土遺物の時期に近い



第413図 第5層に伴う礫群(部分) 平面・断面図

ことはこれを裏付けていると思われる。

すべての層がすべての部分に存在していないため、帰属面不明とせざるを得ない遺構が多い。特に北、西、東端部の、近世作土層や第4層を除去すれば即基盤層である部分では、多くの遺構を検出したが、出土遺物によって時期が特定できたものも少ない。帰属面不明の遺構は、面1、面3両者の平面図に表現している。

第4層に伴う礫群(第411~413図 図版151)

大略は、前述した通りである。第412図は、中央部に位置する礫が集積している箇所の一つである。

礫間からは、磨滅した小片が少量出土している。瓦器椀、土師器鍋、瓦質甕、東播系須恵器鉢、白磁、石鍋などで、12世紀後葉を中心としたものである。

第5層に伴う礫群(第411図 図版152)

大略は、前述した通りである。第413図は礫の集積の一つで、中央部に位置する。断面図は、東西に長い礫の集積に対して南北方向のものである。地形は北側が高く、南に向けて緩やかに下がっている。礫より北側には第5層と捉えられる層が基盤層上に3層みられる。礫の集積する部分は、基盤層上面以下の深度まで土坑状に掘り下げられており、この部分とさらに南部分を同一の第5層が埋めている。北側の3層が南側の層に切られている状態である。礫は、掘り窪められた部分とその北肩部分に位置し、第5層の上部に含まれている。

第6層は南側にのみ存在し、北側にはない。北側は地形が高いため、削られたとも推測できる。とすると、その上に薄い整地土を3枚重ね、さらに南側に別の第5層を入れて整地をおこなったことが想定される。礫、土坑状の掘り込みは、北側の整地部分の土留めを目的としたものとも考えられる。

全体的に第5層中の礫の集積は、等高線に並行する列状である。北側から整地をおこない、部分的に土留めをおこなった可能性が考えられる。ただし、これは一部の礫集積でのみ確認したことで、他のものにはトレンチを入れていない。掘り窪められた部分は、第5層を除去した第6層上面で、第5層を埋土にもつ土坑(土坑201)として検出される。他の礫集積部分では明らかに同様なセット関係にある窪みを確認していないが、第6層の上面で検出した遺構の多くは、第5層と同様な埋土をもつものである。

面1

主な遺構に、建物3棟・井戸3基があり、他に、ピット・土坑・集石などがある。

建物126(第409・414・420図 図版153)

西部に位置する。東西4間×南北2間、約7.7m×3.7m、約28.5㎡である。主軸方向は、N-8°-Wである。ただし西側は調査地外に続いている可能性がある。柱間は、約1.4m~2.6mとばらつきがみられる。

柱穴3・7・9は第4層を除去した際に第5層上面で検出した。埋土は第4層と酷似しており、第4層上面から掘削された可能性が高いと思われる。西側では第5層の存在が顕著ではなく、柱穴1・2は、第4層を除去した際に基盤層上面で検出した。柱穴4~6・8は、第5・6層を除去した際に基盤層上面で検出したが、本来第5層上で検出すべきものを見落としていたと思われる。

遺物は、小細片のみである。柱穴1から瓦器椀、土師器小皿、柱穴4から瓦器椀、柱穴5から黒色土器A類椀、瓦器椀、柱穴6から1467の土師器小皿などが出土した。また、柱穴3からは粉痕のある土師

器片が出土した。小片ではあるが、柱穴1・4出土の瓦器椀は新しい様相であり、13世紀中葉以降のものである可能性が高い。

建物127 (第409・415・420図 図版153・233)

東部に位置する。東西3間×南北2間、約7.7m×4.1m、約31.6㎡である。主軸方向は、N-4°-Eである。北西部分は未調査である。

第4層を除去した際に基盤層上面で検出した。この部分には第5・6層が存在せず帰属面が確認できなかったが、出土遺物から時期が想定され、面1に属する可能性が高いと思われる。柱穴9には根石が据えられていた。

遺物は小片のみで、瓦器椀、土師器、須恵器甕、陶器などが出土している。瓦器椀はミガキが粗く、13世紀以降の様相である。

建物128 (第409・416・420図 図版153・154・233)

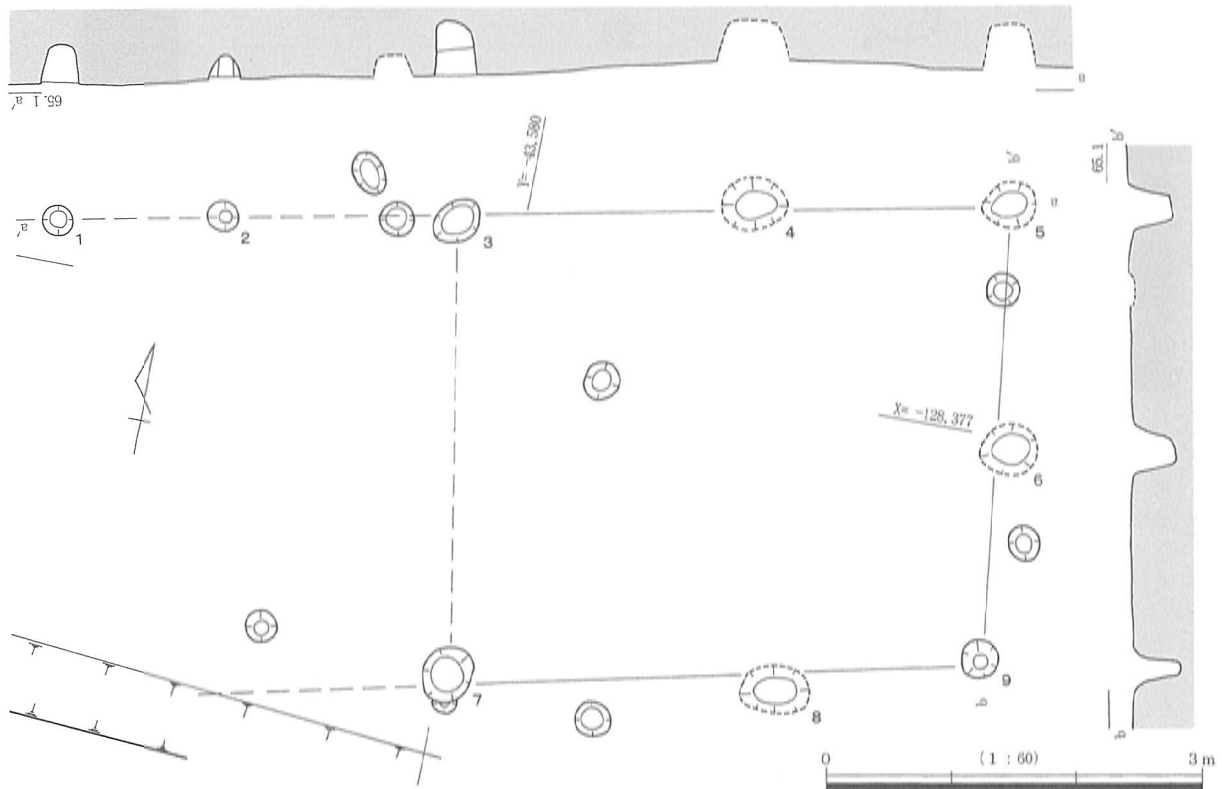
建物127の南に位置する。東西3間×南北1間、約6.1m×2.9mである。主軸方向は、N-10°-Eである。この部分は第4層を除去すれば基盤層で、帰属面は確認できなかったが、出土遺物から、面1に属する可能性が高いと考えられる。

西南部分には、調査時に確認をしたが柱穴が存在しなかった。他の柱穴の深さから、削平で失われた可能性も低い。南側の近世以降のため池で削平されている部分に柱穴が展開していた可能性もあるが、その構造は不明とせざるを得ない。柱穴2には柱根が遺存していた。

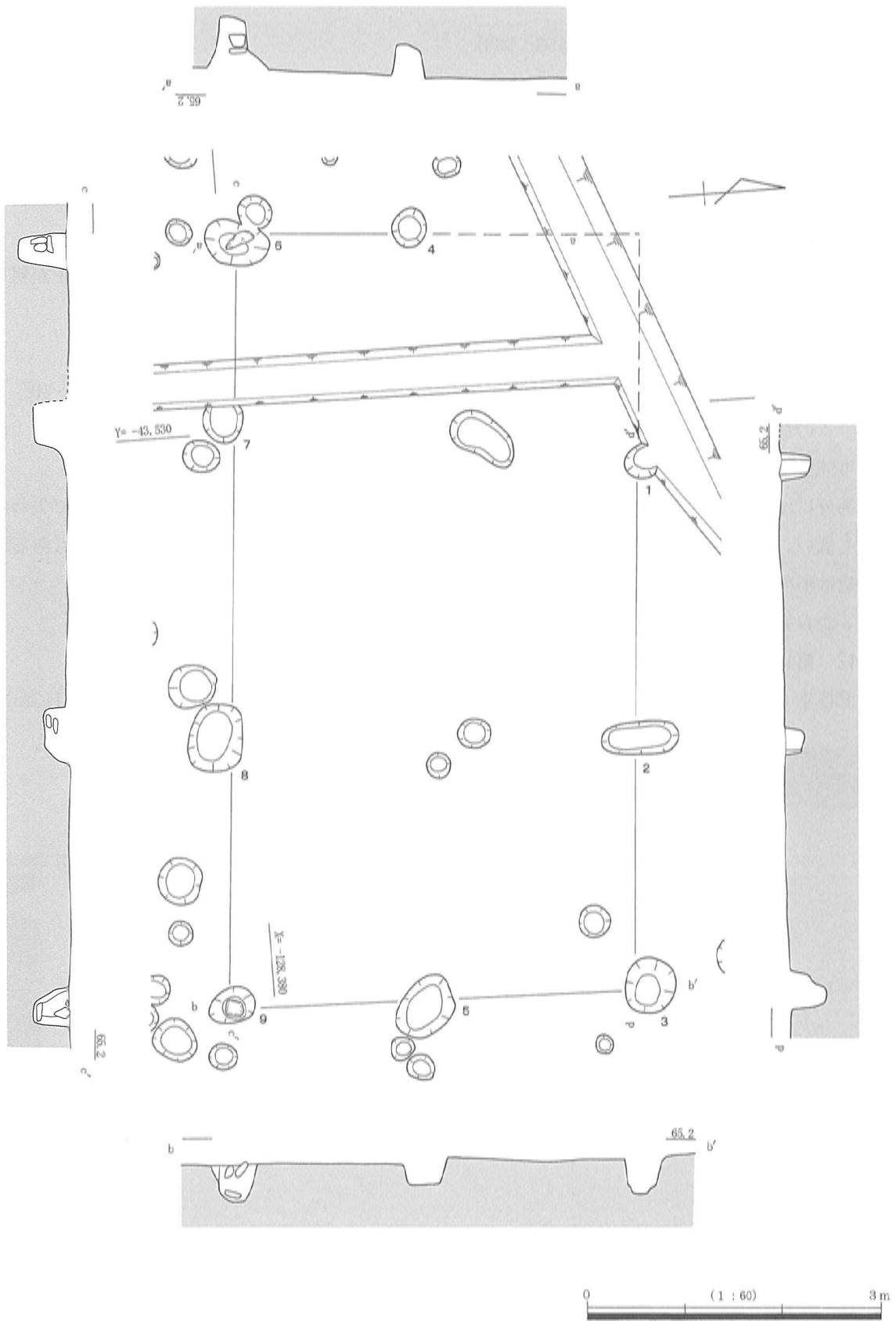
柱穴3から完形の瓦器椀が出土しており、13世紀後葉～14世紀前葉のものである。

井戸12 (第409・411・417・420図 図版154・233)

中央部西寄りに位置する。石組み井戸で、掘り方径約2.3m、石組み内径約1.3m、深さ約1.3mであ



第414図 建物126 平面・断面図



第415図 建物127 平面・断面図

る。近世以降の作土層を除去した際に第4層上面で検出した。

6層には人頭大の礫が十数個含まれていた。

遺物の多くは小片であるが、1層から口禿げの白磁、鉄釘、鉄滓、5層から瓦器椀（1477）、白磁、陶器、6層から瓦質土器、瓦器、底近くから連弁の青磁碗などの小片が出土している。

釘、鉄滓は分析をおこない、結果をIV 第4章に記載している。

井戸13（第409・411・418図 図版154）

中央部に位置する、素掘りの井戸である。長径約2.8m、短径約1.9mと平面規模が大きいのが、深さは約0.9mと比較的浅い。近世以降の作土層を除去した際に第4層上面で検出した。

埋土には非常に多くの礫を含む。

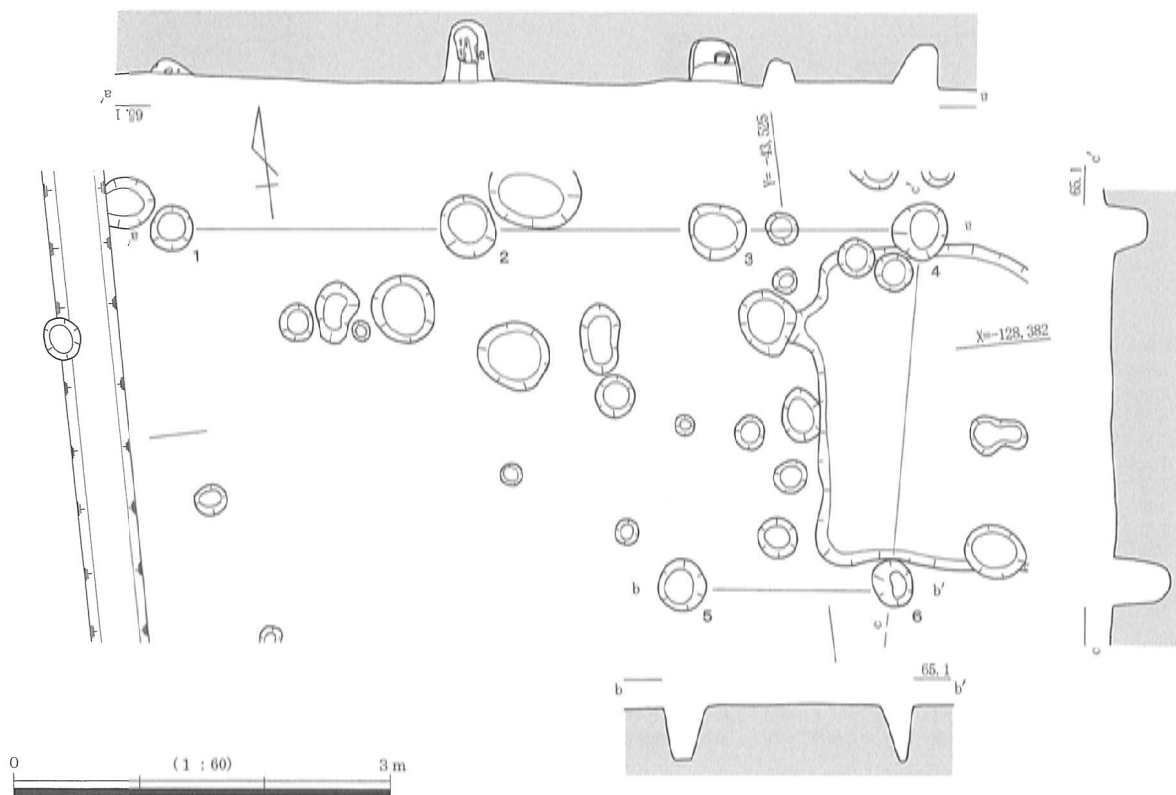
遺物は、少量の細片のみで、1層から瓦器、2・3層から土師器、瓦器が出土している。

井戸14（第409・411・417・420図 図版154・233）

中央部に位置する。石組みの井戸で、掘り方長径約2.5m、短径約2.1m、石組み内径約0.9m、深さ約2.5mである。近世以降の作土層を除去した際に第4層上面で検出した。

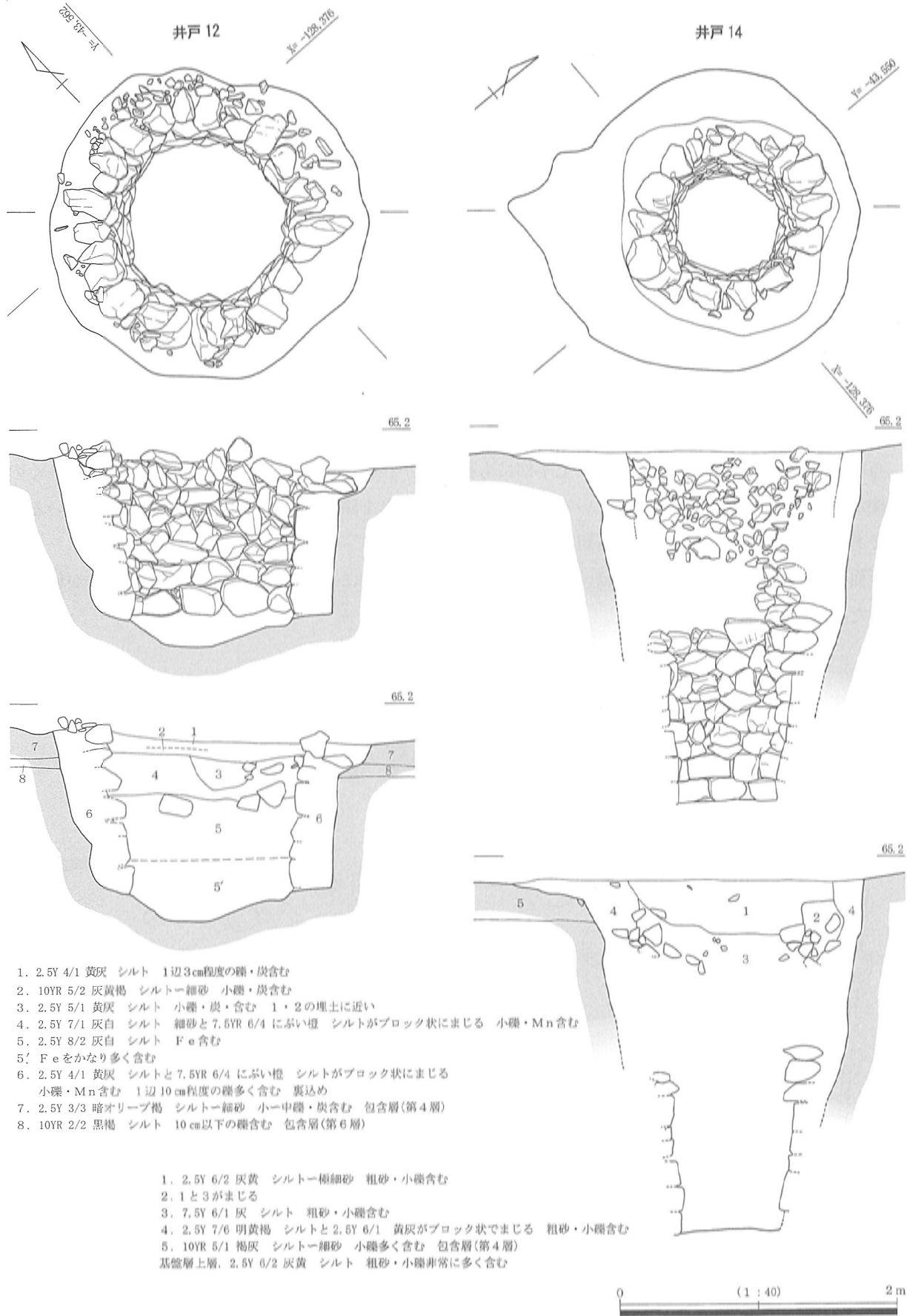
石組みは下半部にのみ存在したが、上半部にも掘り方が存在し、埋土を除去したその壁面に、多くの小礫がみられた。これらは組まれているわけではなく、埋土を除去した掘り方の壁に張り付いている状況である。本来上部にも存在した石組みの裏込めであろうか。

断面図の南壁最下に位置する石は、底面と接する部分が非常に平らで、この面の全体にススが付着していた。



第416図 建物128 平面・断面図

第1節 勝尾寺川段丘面(x域)



第417図 井戸12・14 平面・断面・立面図

遺物は、掘り方から瓦器椀、埋土から瓦器椀、瓦質羽釜、青磁碗が出土している。掘り方出土の瓦器椀は12世紀後葉～13世紀前葉のもの、埋土出土の瓦器椀は13世紀前葉～中葉のものと思われる。

ピット112 (第427図 図版156)

南西部に位置する。径約0.4m、深さ約0.3mである。第4層を除去した際に第5層または第6層上面で検出しており、確実に面1の遺構である。

柱根が遺存していた。樹種はコナラ亜属で、遺存径は18cmである。

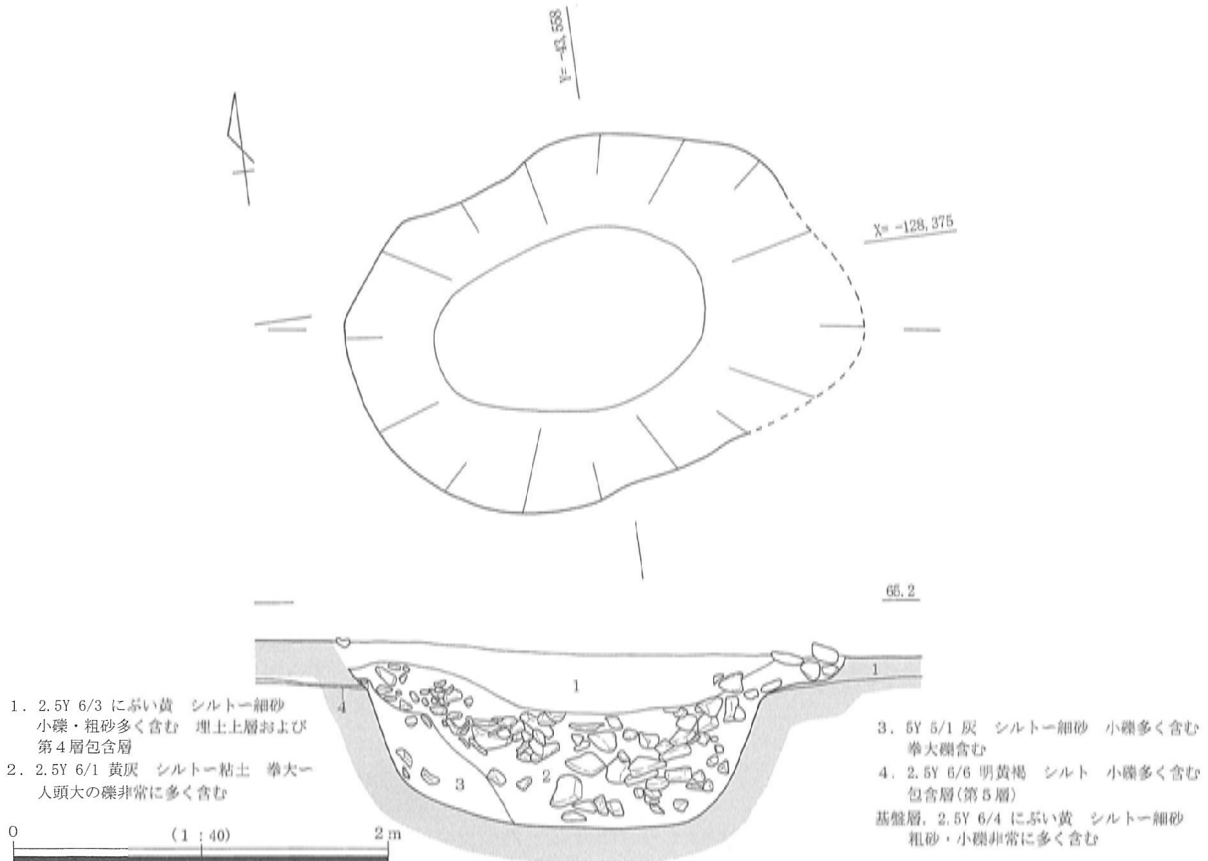
遺物は、和泉型瓦器椀などの小片が出土している。

ピット113 (第427図)

西部に位置する。径約0.3m、深さ約0.4mである。第4層を除去した際に第5層または第6層上面で検出しており、確実に面1の遺構である。

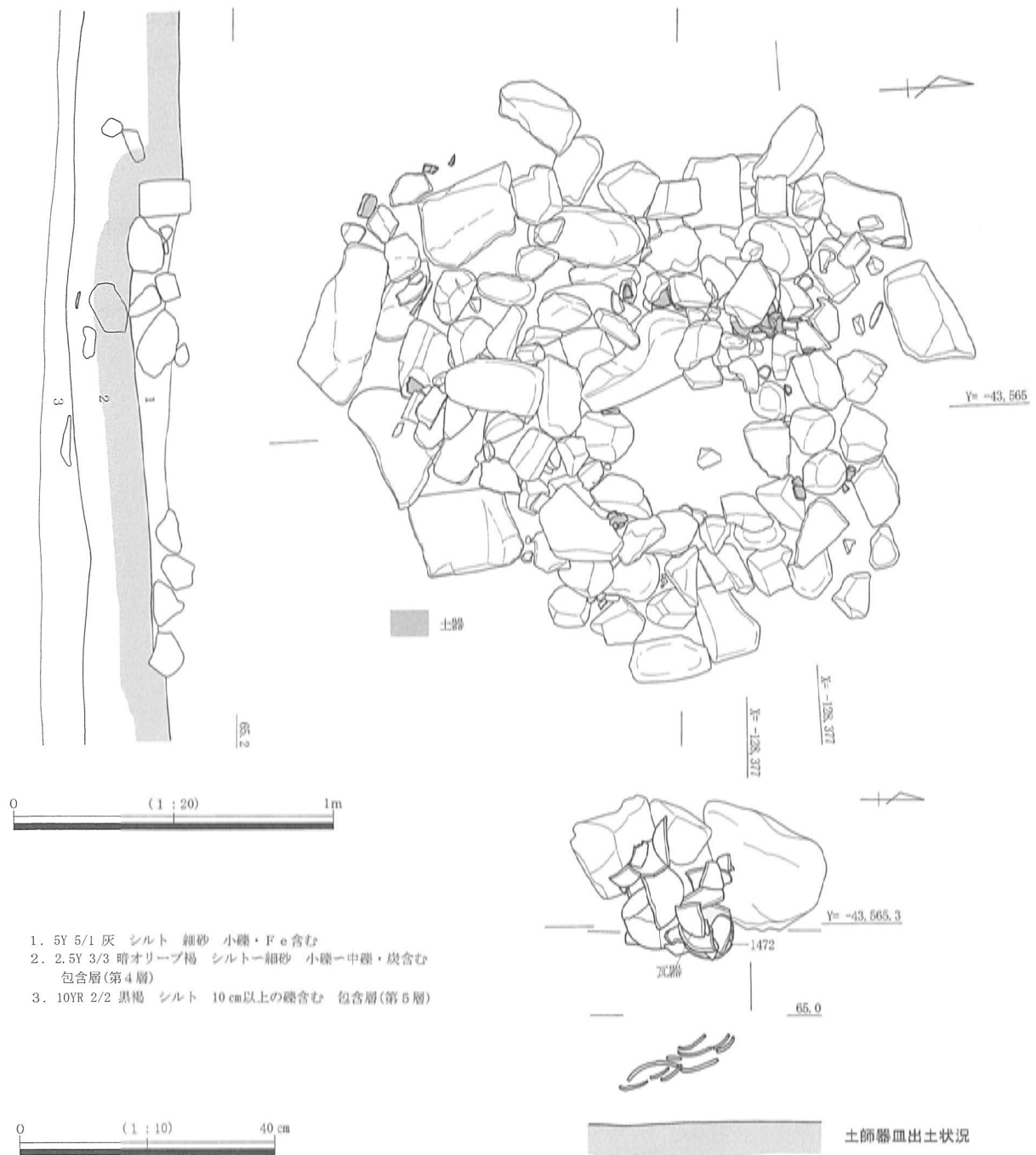
底面に平らな石を置き、その上に柱を載せている。柱根が遺存しており、樹種はヒノキである。

遺物は、出土していない。

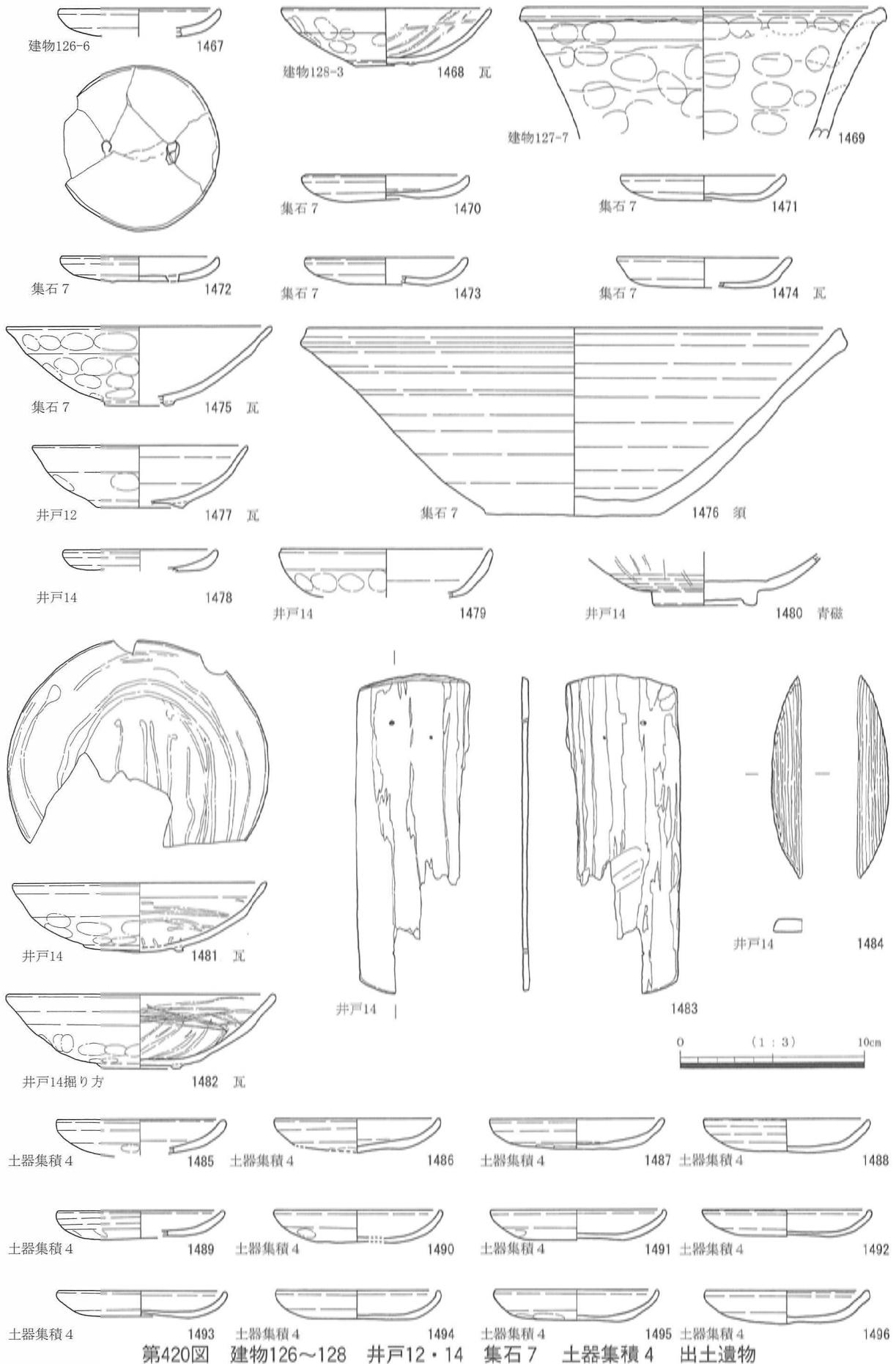


第418図 井戸13 平面・断面図

第1節 勝尾寺川段丘面(x域)



第419図 集石7 平面・断面図



土坑200(第409図)

東部に位置する。南北約2.6m、東西約1.9mの長方形で、東南部分に張り出し部分がつく。深さが、約0.1mである。

この部分には第5層、第6層が存在しておらず、第4層を除去した際に基盤層上面で検出している。帰属面は確認できなかったが、出土遺物の時期から面1の遺構である可能性が高いと思われる。

礫を多く含む。

遺物は、瓦器椀、土師器煮炊具、瓦質羽釜、須恵器などの小片が出土している。瓦器椀の高台は退化しており、13世紀以降のものと思われる。

集石7(第409・411・419・420図 図版154・232)

中央部西寄りに位置する。近世作土層を除去した際、第4層上面で検出した。南北長約2.1m、東西長約1.7mである。直上が作土層となっていたことから、平面およびさらに上部に、石組みまたはその他の構造が存在した可能性がある。

中央やや東寄りに礫の存在しない部分があり、その周囲には比較的小さい礫(1辺20cm程度)が、西半分ではそのさらに外側に比較的大きな礫(1辺40cm程度)が配されている。本来は東半分にも外側に大きな礫があったとすれば、礫の存在しない部分がほぼ中央になる。この部分には、検出した直後、周囲と土色が異なる範囲が正方形にみえていた。現代の表土を重機で掘削した際、この周辺から五輪塔の水輪(1516)が出土している。推測に過ぎないが、水輪の大きさから想定される地輪の大きさは、礫の存在しない部分の大きさとおおよそ同じで、この部分に五輪塔が据えられていたことも考えられる。

北西部分の礫間からは土師器小皿がまとまって出土した。上部の礫を取り除いた段階で出土したが、下にも礫が存在しており、その上に載っていた。第419図の出土状況図では、土器の真下にある礫のみを図化している。

土師器皿は完形に復元できたものが4個体、半分位まで復元できたものが5個体分ある。その他、礫と礫の隙間から磨滅した小片が少量出土しており、瓦器、瓦質脚付羽釜、東播系須恵器鉢などがある。これらはほぼ同じ時期のもので、12世紀中葉～13世紀前葉のものである。土師器皿は、完形のもものがまとまって出土していることから、意図的に置かれたものである可能性もある。

土器集積4(第409・420図 図版232)

南西部に位置する。第4層掘削中に、完形の土師器皿数枚がまとまって出土した。図示した、12枚の完形に近いもの以外に、半分程度遺存しているものが数個体以上出土している。12世紀中葉～後葉のものである。



第421図 溝69 集石8 平面・断面図

面2

溝69 (第409・421・422図 図版155・234)

中央部に位置する。やや振れているが東西方向で、検出長約10.2m、深さ約0.2mである。この部分の第5層は非常に薄く、厳密には帰属面を確認することはできなかった。

面1に帰属するものである可能性もある。

遺物は、瓦器椀、瓦質脚付羽釜、土師器の小片が出土しており、13~14世紀のものである。

集石8が方向を揃えて、北部分の上部に重なっているが、その関係は不明である。

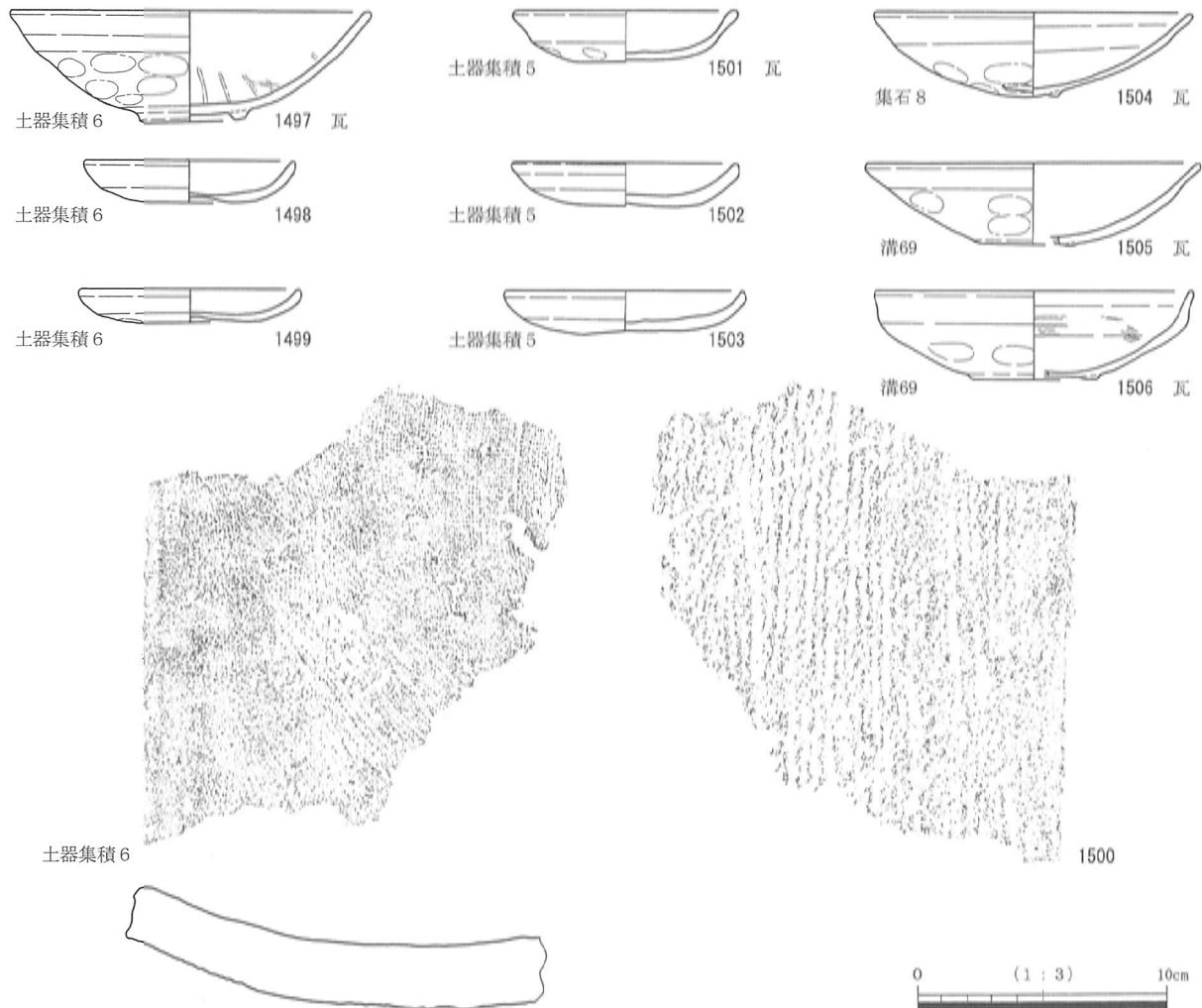
土坑201 (第409図)

中央部に位置する。第5層、それに伴う礫群と一連のものである。詳細は第5層に伴う礫群の項に記述している。

集石8 (第409・421・422図 図版155・234)

中央部に位置する。第4層を除去して検出したが、この部分は第5層が非常に薄く、厳密には帰属面を確認できなかった。面1に帰属する可能性もある。

西側部分は東西約3.8m、南北約1.0mの長方形で、北辺には比較的大きな礫を並べている。西辺、東辺にも大きな礫が配置されているように見えるが、そうであれば南側は削平され、礫が失われたことも想定される。また、東側の礫群は西側のようにまとまっておらず、本来の位置を保っていない可能性も



第422図 溝69 集石8 土器集積5・6 出土遺物



第423図 建物130・131 平面・断面図

ある。

溝69と方向を揃えて重なっているが、関係は不明である。

遺物は、完形の瓦器椀が礫下から出土した。13～14世紀のものである。

土器集積5 (第422図 図版234)

中央部に位置する。第5層中から、土器がまとまった状態で出土した。完形のもの複数みられる。図示したもの以外には、半分程度遺存している土師器小皿4枚、白磁碗底部がある。やや古い様相のものもみられるが、12世紀中葉～後葉のものが中心である。

土器集積6 (第422図 図版234)

中央部に位置する。第4層を除去した際、土器がまとまって出土した。この部分は第5層が非常に薄く、厳密な出土層位は不明である。実測図を掲載したもの以外にもいくつかの破片がみられる。

面3

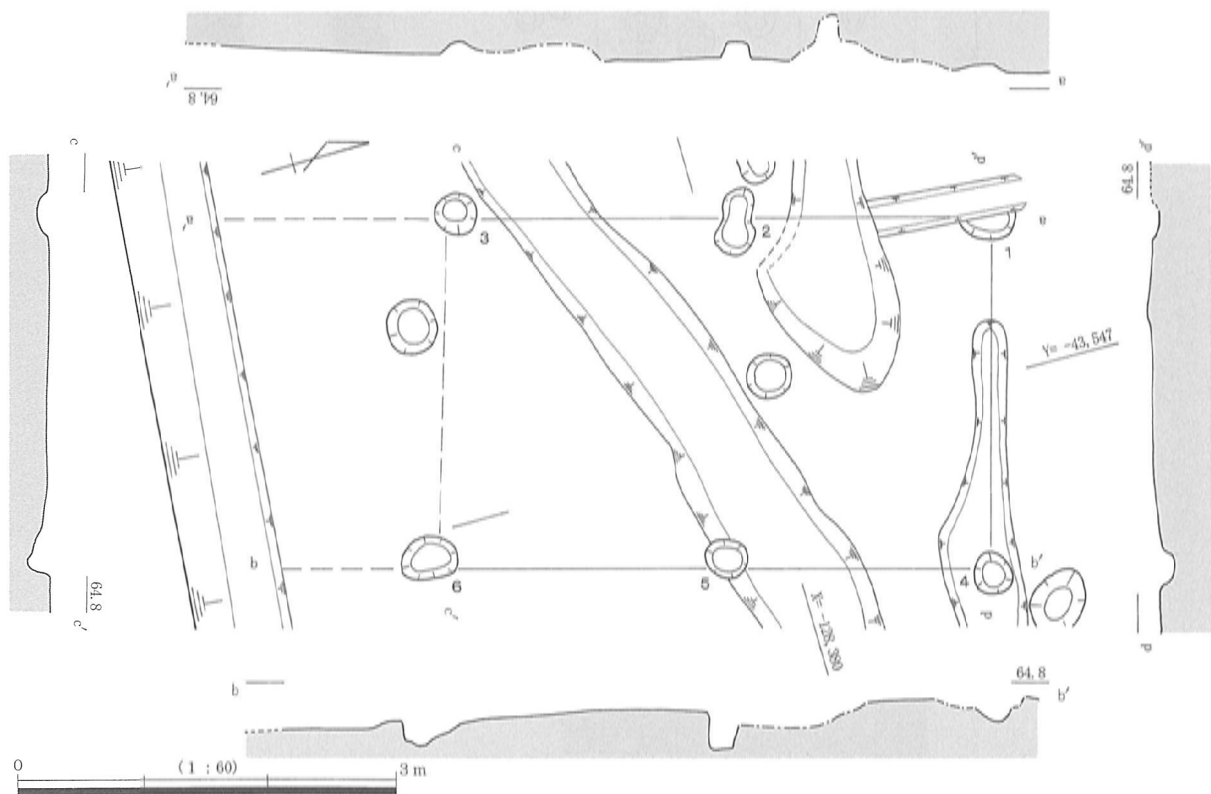
主な遺構に、建物3棟・焼土坑5基があり、他に、ピット・土坑などがある。

建物130 (第409・423・425図 図版155)

中央部に位置する。東西6間×南北1間、約13.4m×2.1m、約28.1㎡である。主軸方向は、N-6°-Eである。南の調査地外に続いている可能性がある。

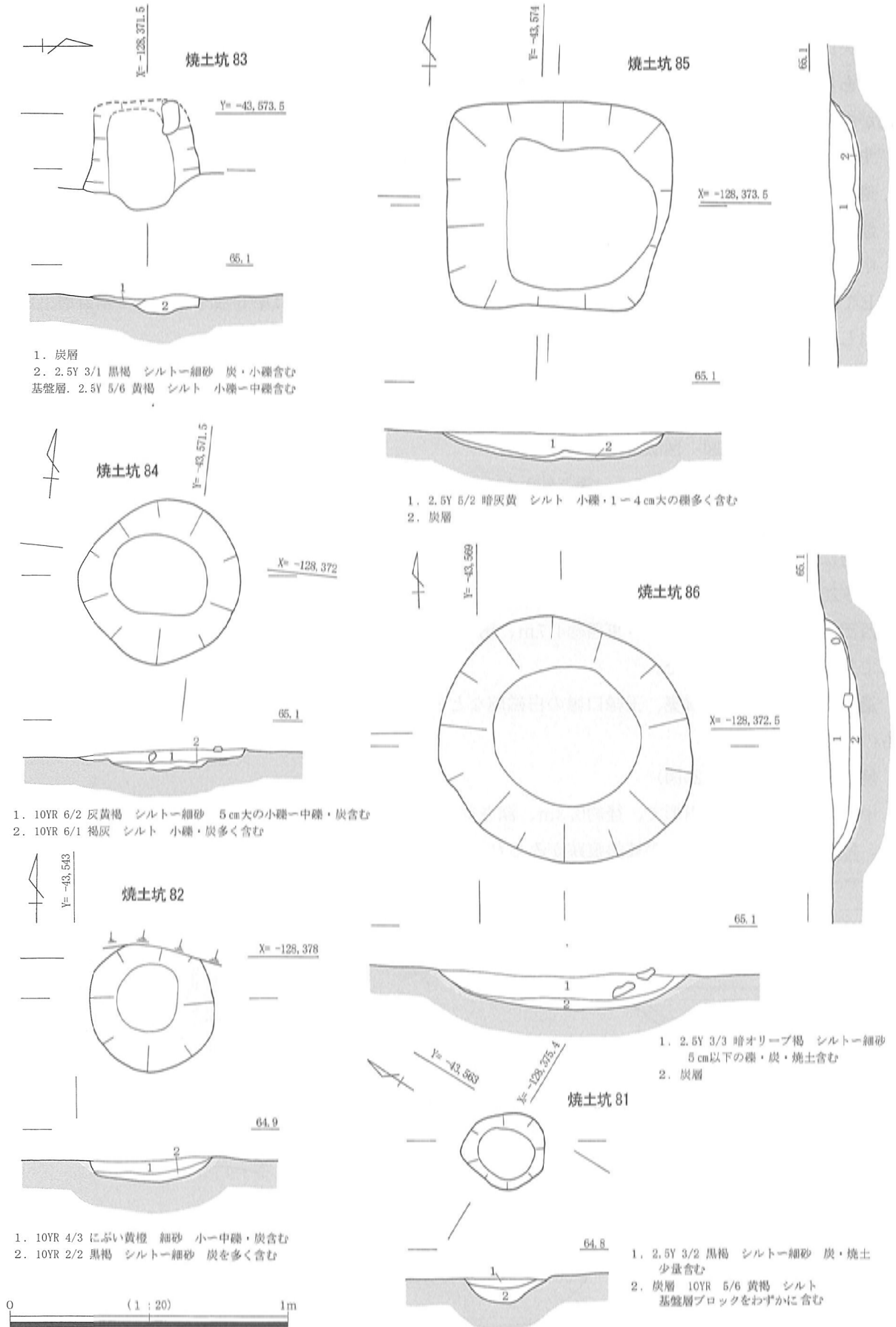
第5層に伴う礫群と位置が重なる。特に柱穴9は礫群の直下にあたり、確実に面3の遺構であるといえる。建物131と重複している。

遺物は、柱穴1から土師器大皿の小片、柱穴9から土師器小皿小片が出土している。9～10世紀のものと思われるが、わずかな小片であり、遺構の時期は決定できない。



第424図 建物132 平面・断面図

第1節 勝尾寺川段丘面(x域)



第426図 焼土坑81~86 平面・断面図

遺物は、土師器、瓦器の細片が出土した。

焼土坑83（第409・426図）

西部に位置する。第6層掘削中に検出した。検出状況から本来は第6層上面で検出できたものと考えられる。全形は不明であるが、南北約0.4m、東西0.4m以上、深さ約0.1mである。

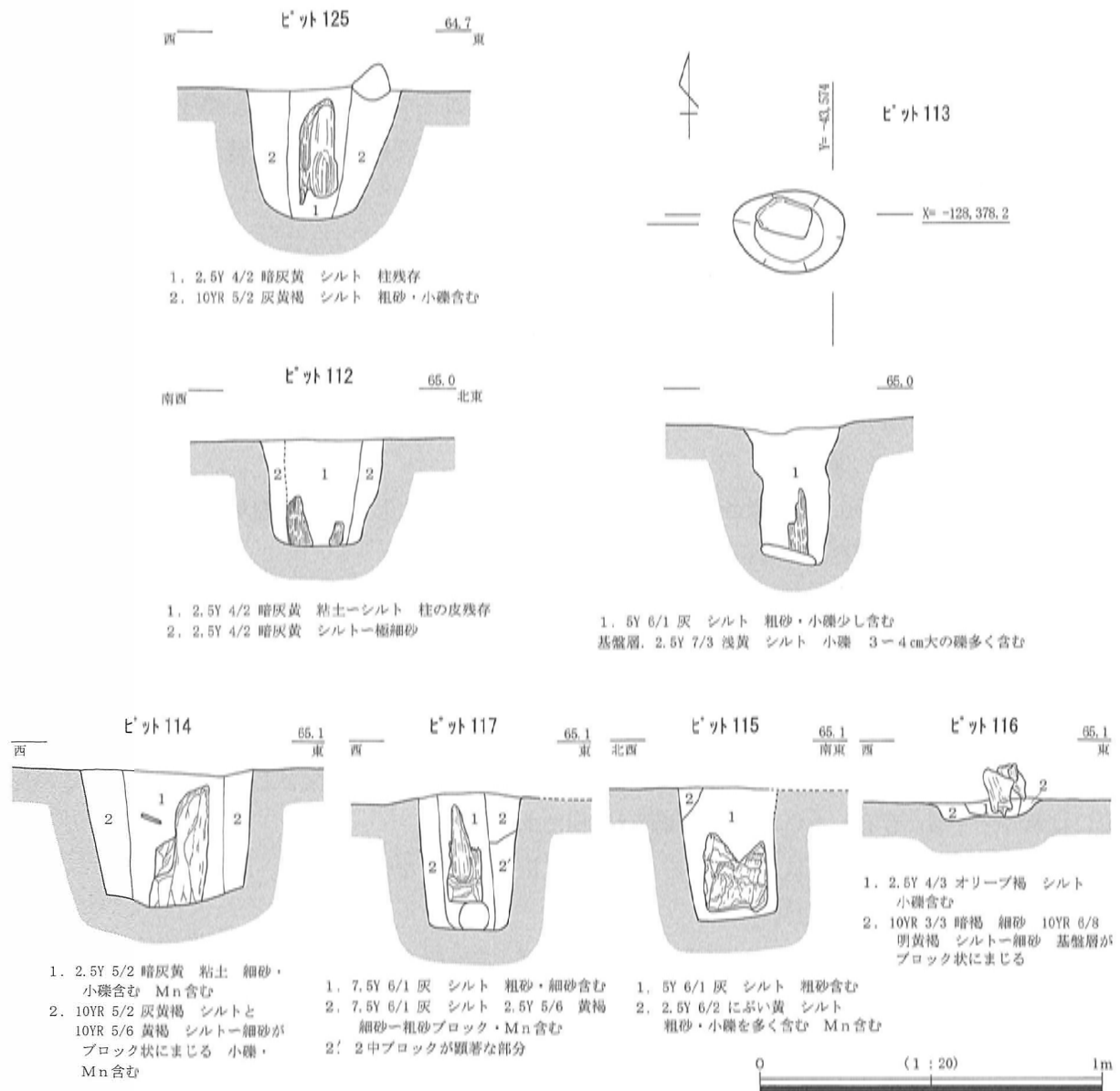
壁の一部が焼土化している。上層は炭層である。遺物は、出土していない。

焼土坑84（第409・426図）

西部に位置する。円形で、径約0.6m、深さ約0.1mである。第4層を除去した際に検出したが、第5・6層との関係が不明で、帰属面を確認することができなかった。被熱痕跡は顕著ではない。

遺物は、出土していない。

東側で検出した焼土坑86などは、第6層に伴うものと考えており、近接して存在する焼土坑群の一つとして、焼土坑84も第6層に伴うものである可能性が高いと考えている。



第427図 ピット112～117・125 平面・断面図

焼土坑85 (第409・426図 図版156)

西部に位置する。方形で、東西約0.8m、南北約0.7m、深さ約0.1mである。第4層を除去した際に検出しているが、第5・6層との関係が不明で、確実に帰属面を確認することができなかった。

被熱痕跡は顕著ではなく、一部がわずかに赤変していたのみである。下層は炭層である。

東側で検出した焼土坑86などは第6層に伴うものと考えており、近接して存在する焼土坑群の一つとして、焼土坑85も第6層に伴うものである可能性が高いと考えている。

焼土坑86 (第409・426図 図版156)

西部に位置する。円形で、径約0.9m、深さ約0.1mである。第5層除去後、第6層上面で検出した。壁に被熱痕跡がみられ、特に東側の上部は焼土化している。下層は炭層である。

遺物は出土していない。

所属面不明の遺構

建物129 (第409・428図 図版155)

中央部東寄り、丘陵がやや張り出している部分の段丘崖直下に位置する。東西3～5間×南北2間、東西約8.2m、南北約3.8m、約31.2㎡である。主軸方向は、N-7°-Eである。第4層を除去した際に基盤層上面で検出した。この部分には第5・6層が存在しないため、帰属面を確認できなかった。

遺物は、柱穴1・5から黒色土器A類の細片が出土している。

ピット114 (第427図)

西部に位置する。径約0.5m、深さ約0.4mである。第4層を除去した際に基盤層上面で検出した。この部分から北には第5・6層が存在せず、帰属面を確認できなかった。

柱根が遺存していた。樹種はムクノキで、柱根の遺存径は約14cmである。

遺物は、瓦器の小片が出土したのみである。

ピット115 (第427図 図版156)

東部に位置する。径約0.3m、深さ約0.4mである。第4層を除去した際に基盤層上面で検出した。この部分には第5・6層が存在しないため、帰属面は不明である。

柱根が遺存していた。樹種はコナラ亜属である。建物127の柱穴6と切り合っているが、前後関係は確認していない。

遺物は、土師器煮炊具片が出土したのみである。

ピット116 (第427図)

東部に位置する。径約0.3m、深さ0.04mである。第4層を除去して基盤層上面で検出した。この部分には第5・6層が存在しないため、帰属面は不明である。

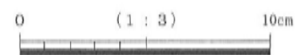
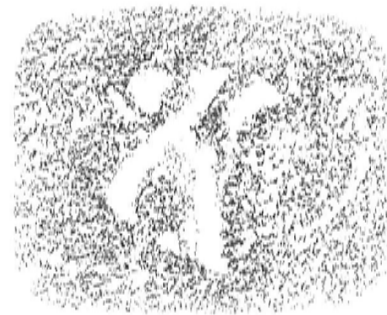
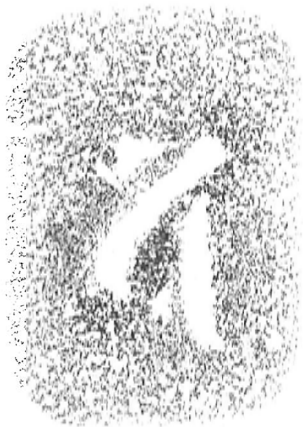
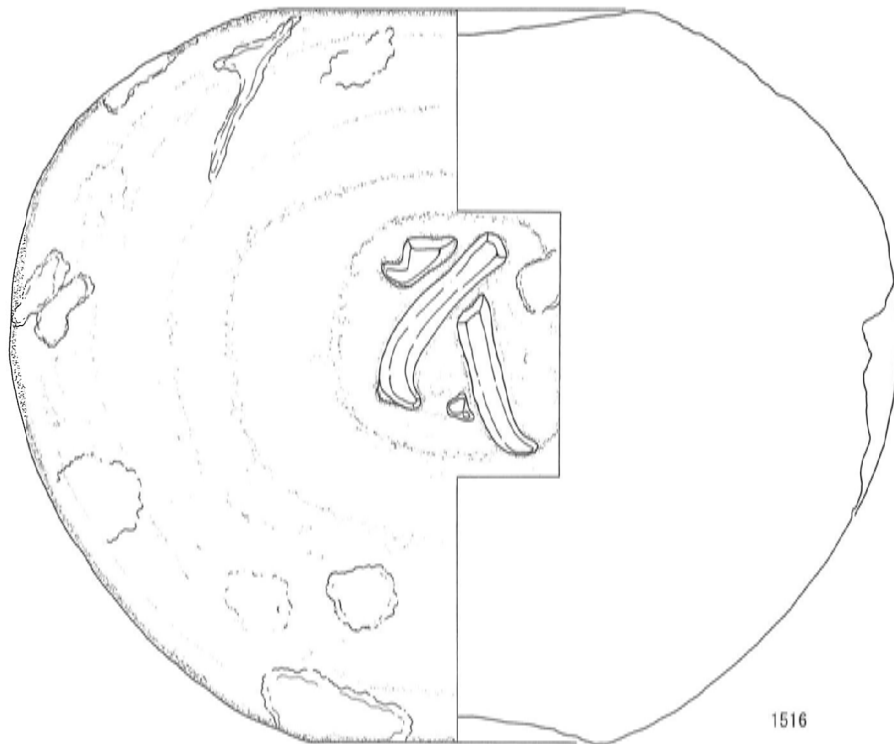
柱根が遺存していた。樹種はスギである。遺物は、出土していない。

ピット117 (第427図 図版156)

東部に位置する。径約0.3m、深さ約0.4mである。第4層を除去して基盤層上面で検出した。この部分には第5・6層が存在しないため、帰属面は不明である。

底面に石を置き、その上に柱を載せていた。柱根の樹種はスギである。

遺物は出土していない。



第429図 近現代盛土層 出土遺物

ピット118 (第409図)

中央部に位置する。径約0.4m、深さ約0.4mである。この部分は第5・6層ともに薄く、帰属面は確認できなかった。柱根が遺存しており、樹種はサカキである。遺物は、出土していない。

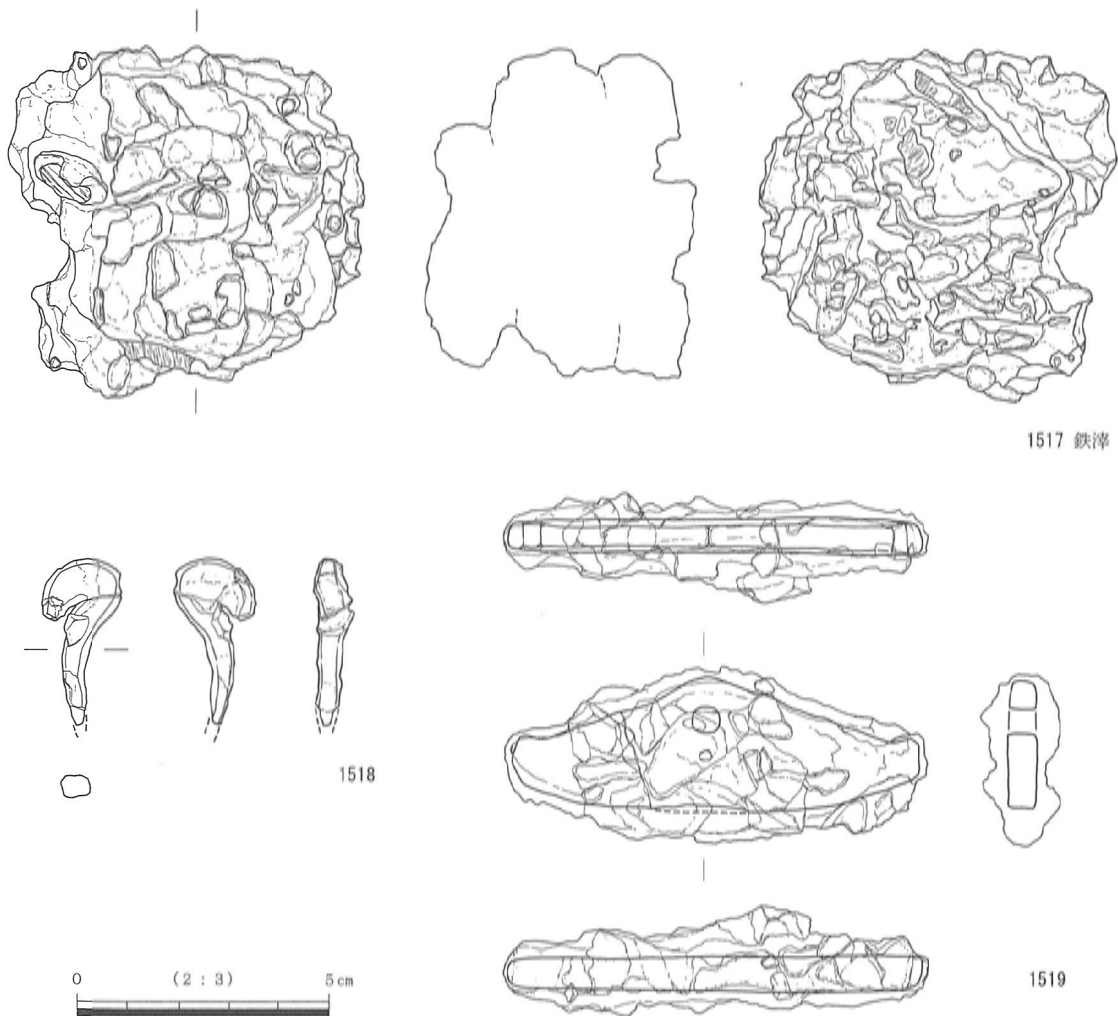
焼土坑82 (第409・426図)

中央部に位置する。円形で、径約0.5m、深さ約0.1mである。第4層を除去した際に検出したが、この部分には第5層が存在せず、帰属面が確認できなかった。壁が被熱して焼土化している。下層は炭層である。

遺物は、土師器の細片が出土したのみである。

層序と遺構面の状況については冒頭に詳述した。

第4層からは12世紀代のもも出土しているが、13世紀代のもものが中心である。見込みに「福」の刻印をもつ青磁碗、口髷の白磁など、やや新しいものも若干含まれている。また、鋳型の小片も出土している。第5層からは、12世紀代の破片と、13世紀のもものが出土している。なかには完形に近いものもみられる。第6層からは12~13世紀のもものが出土しているが、12世紀のもものが中心である。



第430図 近世作土層 出土遺物 (2/3)

小結

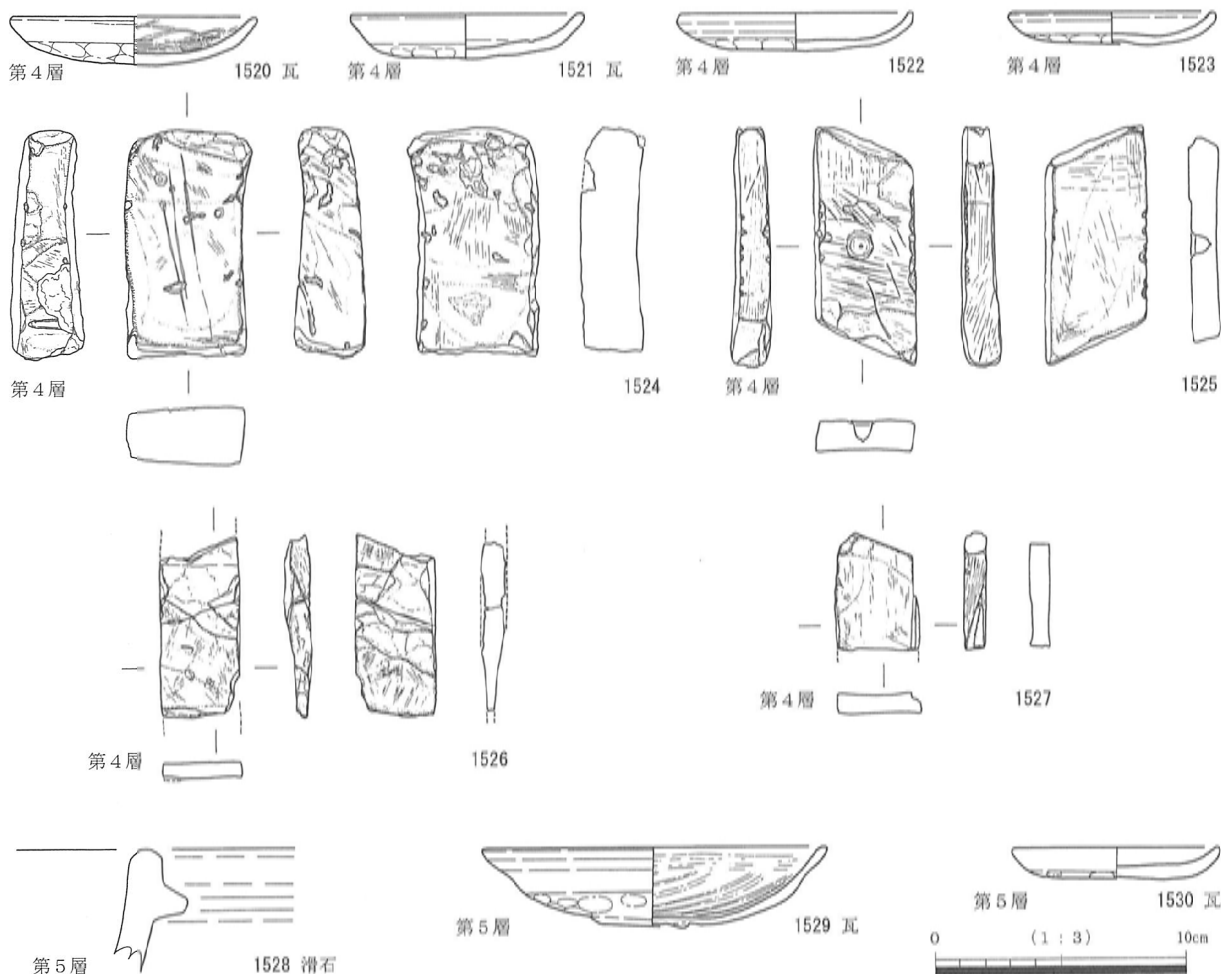
面3は、段丘崖直下の北部から南に向かって緩やかに低くなる地形で、特に中央南部が低くなっている。

面3に帰属すると思われる建物は、130～132の3棟がある。9～11世紀代と思われる遺物が出土しているが、わずかな小片であり、時期を決定し得るものではない。建物129は帰属面が不明である。また、建物として復元はしていないが、ピット125には柱根が遺存しており、他にも建物が存在していた可能性がある。

すべて中央南部の、地形的にやや低い部分に立地している。南側の調査地外は、さらに南の一段低い段丘面まで、調査地南端から数m以上、平坦な部分が続いていると思われる。この部分も含めて、段丘崖からやや離れた、比較的地形の平坦な部分に、建物が展開していたと想定される。建物の時期は確定できないものの、東側に隣接するy域には9～11世紀代と思われる建物群が展開しており、x域にもこの時期の建物が存在した可能性はある。

西部の地形的にやや高い部分には、土坑202、ピットなど12～13世紀の遺構がみられる。具体的な土地利用は不明で、これに伴う建物がなかったとはいきれないが、大規模な造成をおこなう前に、部分的に土地利用がおこなわれていたことも想定される。

x域では焼土坑を6基検出している。帰属面が確実におさえられるものは少ないが、多くが北西部分に位置しており、これらは同時期のものである可能性が高いと思われる。面3に帰属する可能性を考え



第431図 第4層・第5層 出土遺物

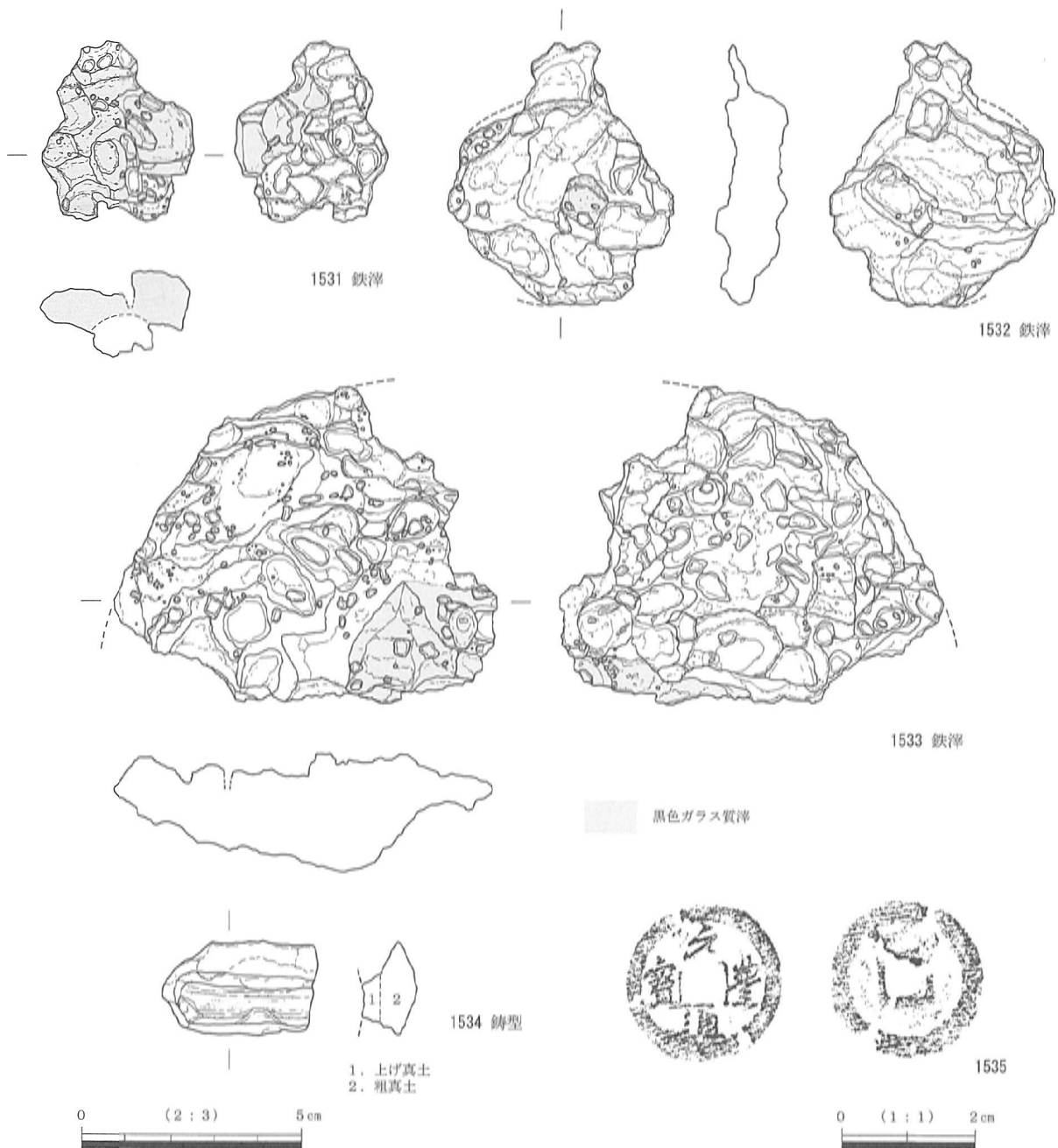
ている。

面1は整地後の面で、地形は平坦化している。遺構出土遺物は、12世紀中葉～後葉のものもみられるが、13～14世紀、特に13世紀を中心とした時期のものが主である。

面1に帰属する集石7からは、12世紀中葉～13世紀前葉の土師器皿がまとまって出土している。これは時期の確認できる面1の遺構のなかで、最も古いものに属する。面3の遺構にもこれと近い時期のものがみられることから、整地した時期に築かれたとことが想定される。土師器皿が意図的に入れられたものであるとすれば、整地に際して地鎮をおこなった可能性も考えられる。

土器集積4も、第4層掘削時に確認した、12世紀中葉～後葉の完形土師器皿の集積である。これも集石7同様、整地をおこなった時期のものであると考えられる。

建物は126～128の3棟があるが、いずれも、13世紀以降のものである。井戸は石組み2基（井戸12・



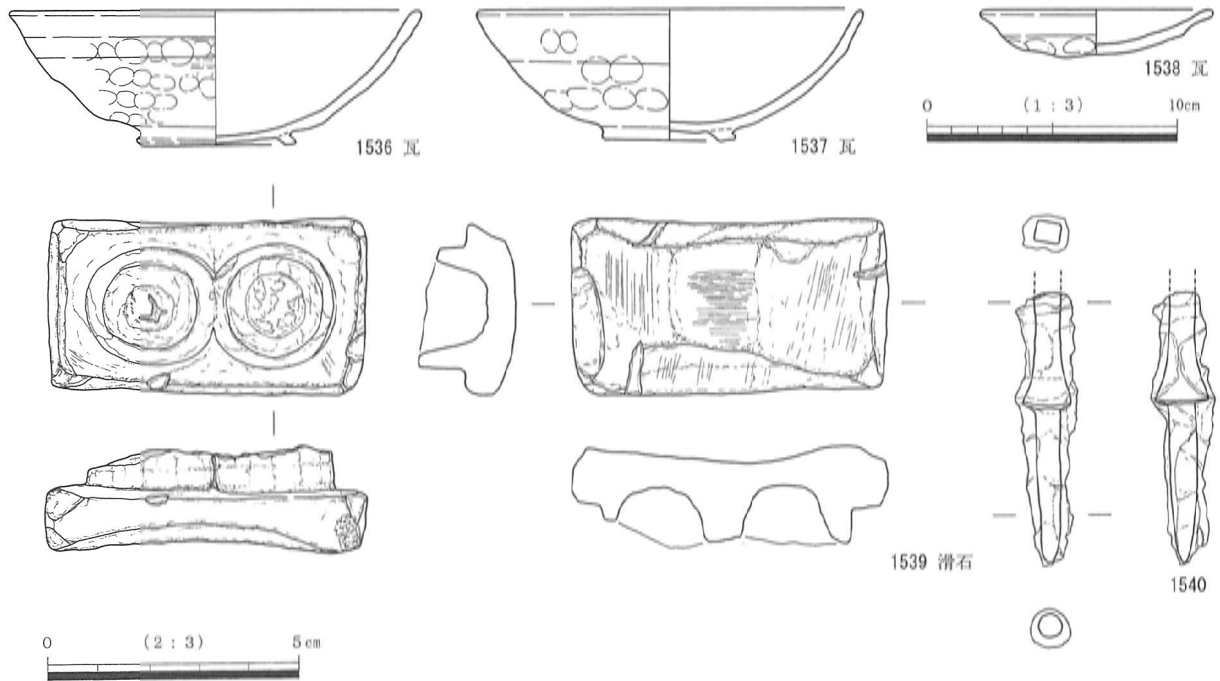
第432図 第4層 出土遺物 (2/3 = 1531～1534 1/1 = 1535)

14)、素掘り1基(井戸13)があり、素掘り井戸の時期は不明であるが、石組み井戸は13世紀代を中心とした時期のものと思われる。

建物は、整地以前から地形の高かった西部と東部に位置し、井戸はその間、中央やや西寄りの、これも整地前から比較的地形の高かった部分に立地している。ただし、層序の項でも述べたように、井戸の南側、整地前は地形が低かった部分では、遺構を検出し得ていない可能性がある。

東部に位置する建物127・128の東側は川1、北は段丘崖であるが、南側の調査地外には一連の遺構が展開していた可能性を残す。西側には帰属面不明の建物129がある。

西部に位置する建物126の北側は、段丘崖にあたり、同じく、西側の調査地外が高低差約0.8mの小規模な段丘崖である。崖上のw域では、建物を検出してない。南側の調査地外にのみ一連の遺構が展開していた可能性を残す。



第433図 第5～6層 出土遺物 (2/3 = 1539・1540)

第4項 y域 (付図7)

勝尾寺川段丘面地区の東端で、最も標高が低い部分である。北側の段丘崖は急勾配で高低差約6mである。段丘面は非常に平坦な地形である。段丘崖上はj域、西側の一段高い段丘面がx域である。

層序

現代水田作土層を第1層、主に近世のものと思われる複数枚の水田作土層と床土層を第2～3層、その下の包含層を第4層、第5層として、調査をおこなった。第4層、第5層共にごく一部にしか遺存しておらず、2層が重なった状態でみられるのは、東端部のみであった。その他の部分、中央部、西部では、棚田の造成時に削平を免れたごく一部にのみ遺存しているのみで、1層しか存在していなかった。これが東端部の第4層、第5層のいずれにあたるのかは確認できないが、土質は第5層に似ている。第4層を除去して第5層上面で精査をおこなったが、遺構は検出しなかった。

主な遺構に、建物16棟・焼土坑4基があり、他に、ピット・土坑がある。

建物133 (第434・436・445図 図版157・236)

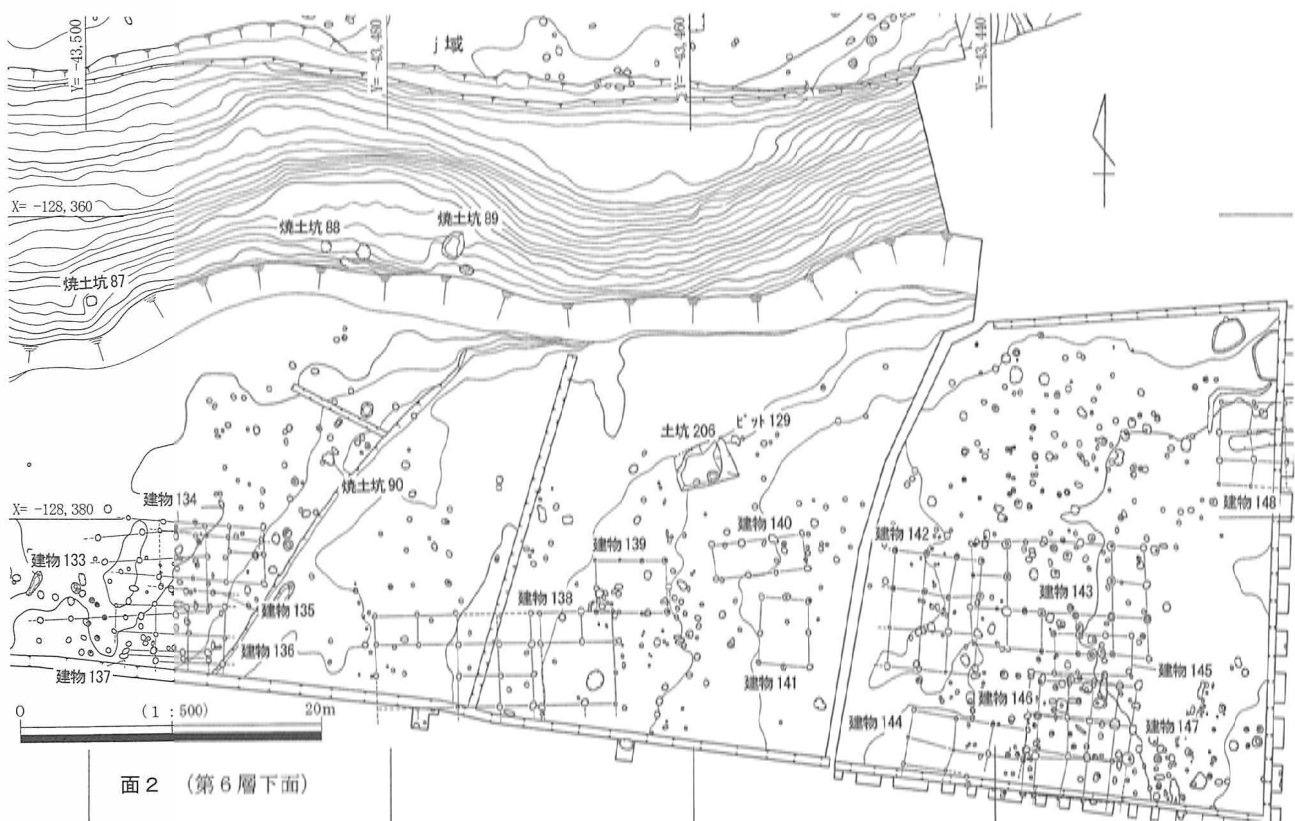
西部に位置する。東西5間以上×南北3間、約11.3m×5.4m、約61.0㎡である。主軸方向は、N-2°-Wである。北西側は削平が著しく、柱穴が失われた可能性もある。

遺物は小片がわずかに出土したのみで、土師器羽釜(1552)の他、須恵器、土師器がある。

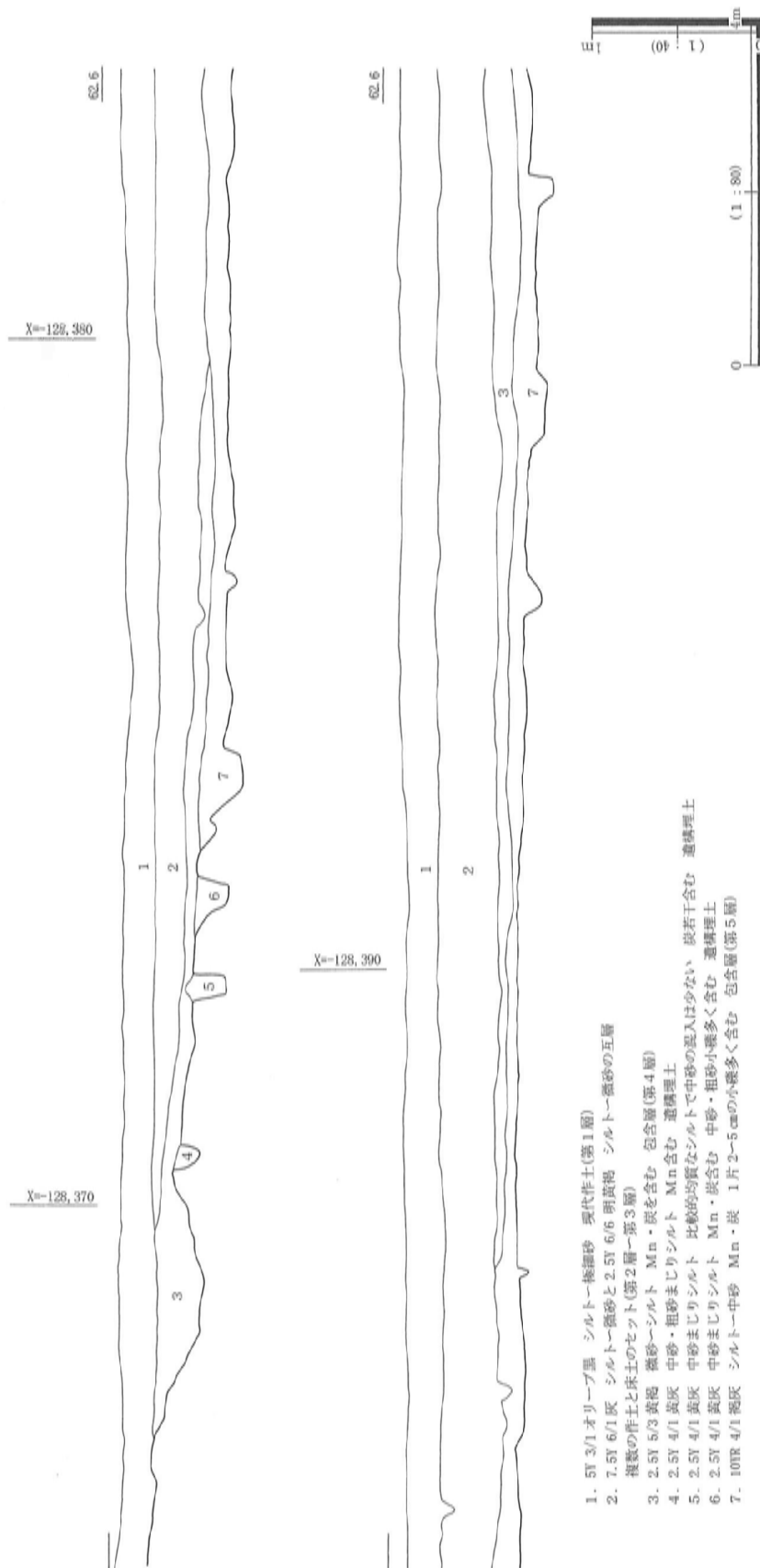
建物134～136と重複している。周辺の建物群とは方向軸を大きく違えている。

建物134 (第434・436・445図 図版157・236)

東西4間以上×南北2間、約9.4m以上×3.7m、34.8㎡以上である。主軸方向は、N-4°-Eであ



第434図 y域 平面図



第435図 y域東端部 断面図

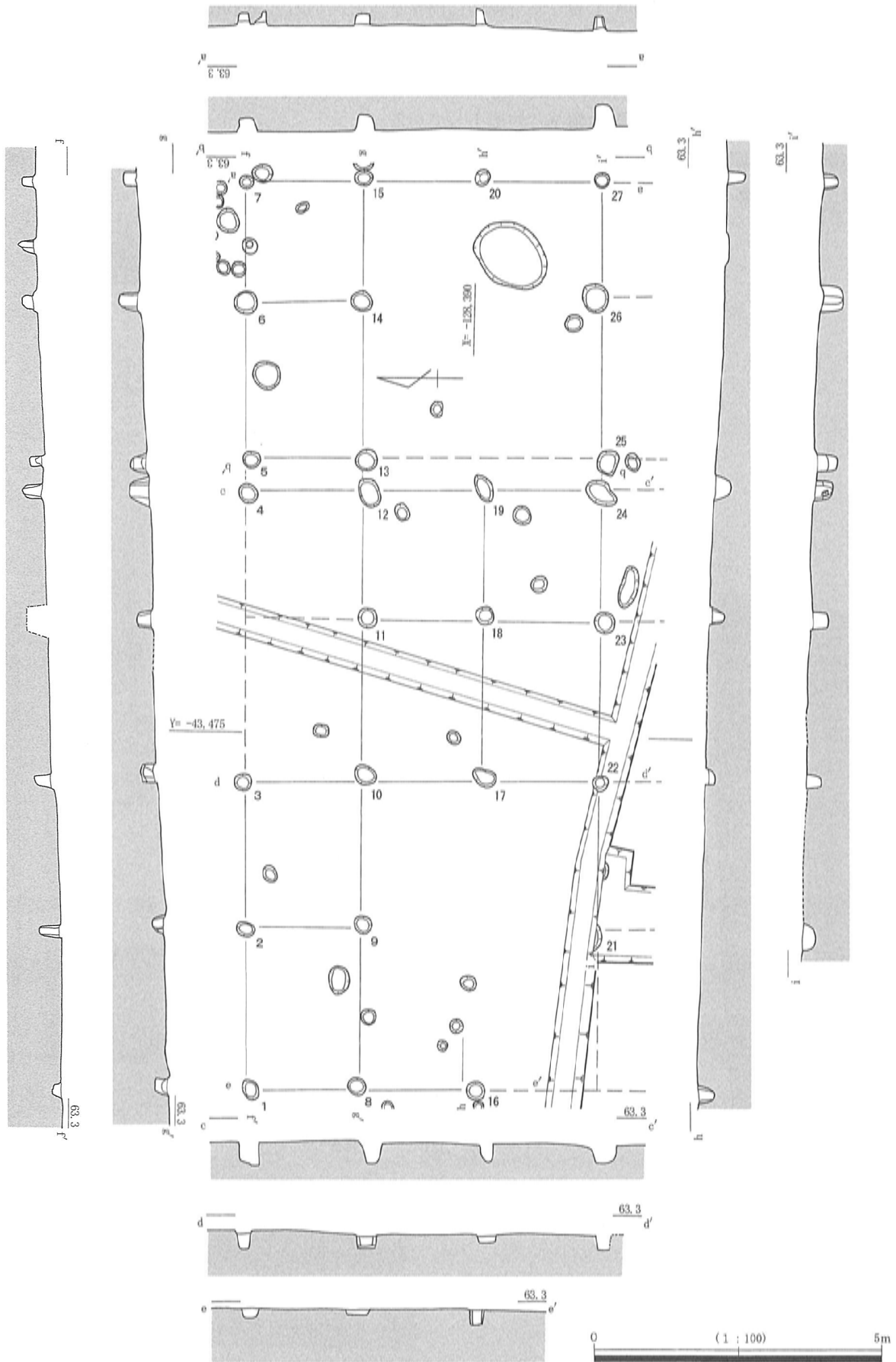
る。この部分には包含層は遺存しておらず全体的に削平を受けていると思われるが、特に西側は削平が著しく、柱穴が失われた可能性がある。

遺物は小片のみで、図示した柱穴9から土師器皿の他、器壁が薄く口縁端部をややつまみ上げたような土師器皿、須恵器甕、黒色土器A類などが出土している。

建物136と柱の並びを揃える。建物133・135とは重なっており、前後関係を有すると思われる。建物135とは方向軸が揃っており、南北長と柱の間隔もほぼ同じである。



第436図 建物133～137 平面・断面図



第437図 建物138 平面・断面図

建物135 (第434・436図 図版157)

西部に位置する。東西3間以上×南北1間以上、約7.0m×3.7m、約25.9㎡である。主軸方向は、N-4°-Eである。調査時に復元できていなかったため、柱穴の有無は厳密には確認できておらず、南東隅や南北1間の間に柱穴の有無は不明である。

出土遺物は、黒色土器A類と土師器の小片のみである。

建物133・134と重複する。建物134とは方向軸が揃っており、南北長、柱の間隔もほぼ同じであるが、先後関係は不明である。

建物136 (第434・436図 図版157)

西部に位置する。東西3間×南北2間、約7.4m×3.7m、約27.4㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。南側は調査地外に続いている可能性があり、西側は柵田の造成時に削平された可能性がある。

遺物は細片が少量出土したのみで、口縁端部内側に沈線をもつ黒色土器A類碗などがある。

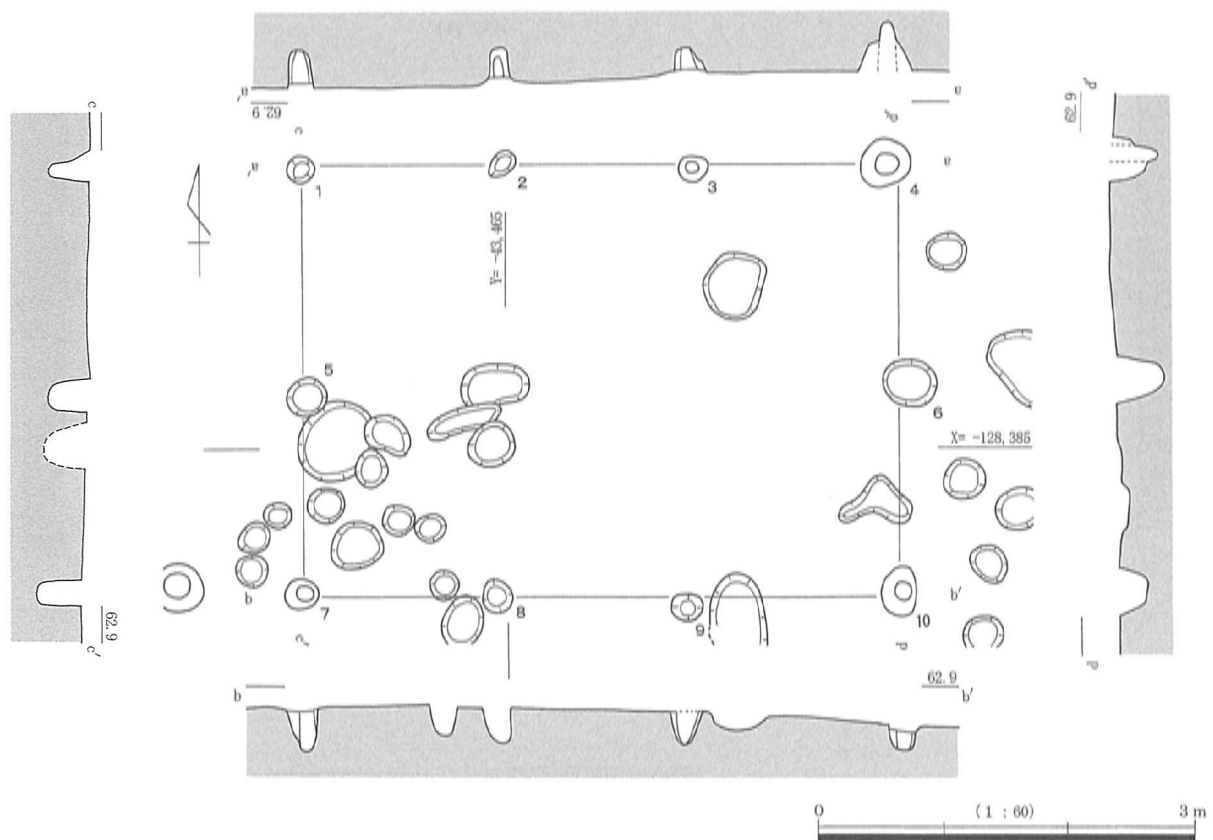
建物134と柱列を揃えている。建物133・137と重なるが、先後関係は不明である。

建物137 (第434・436・445図 図版157・236)

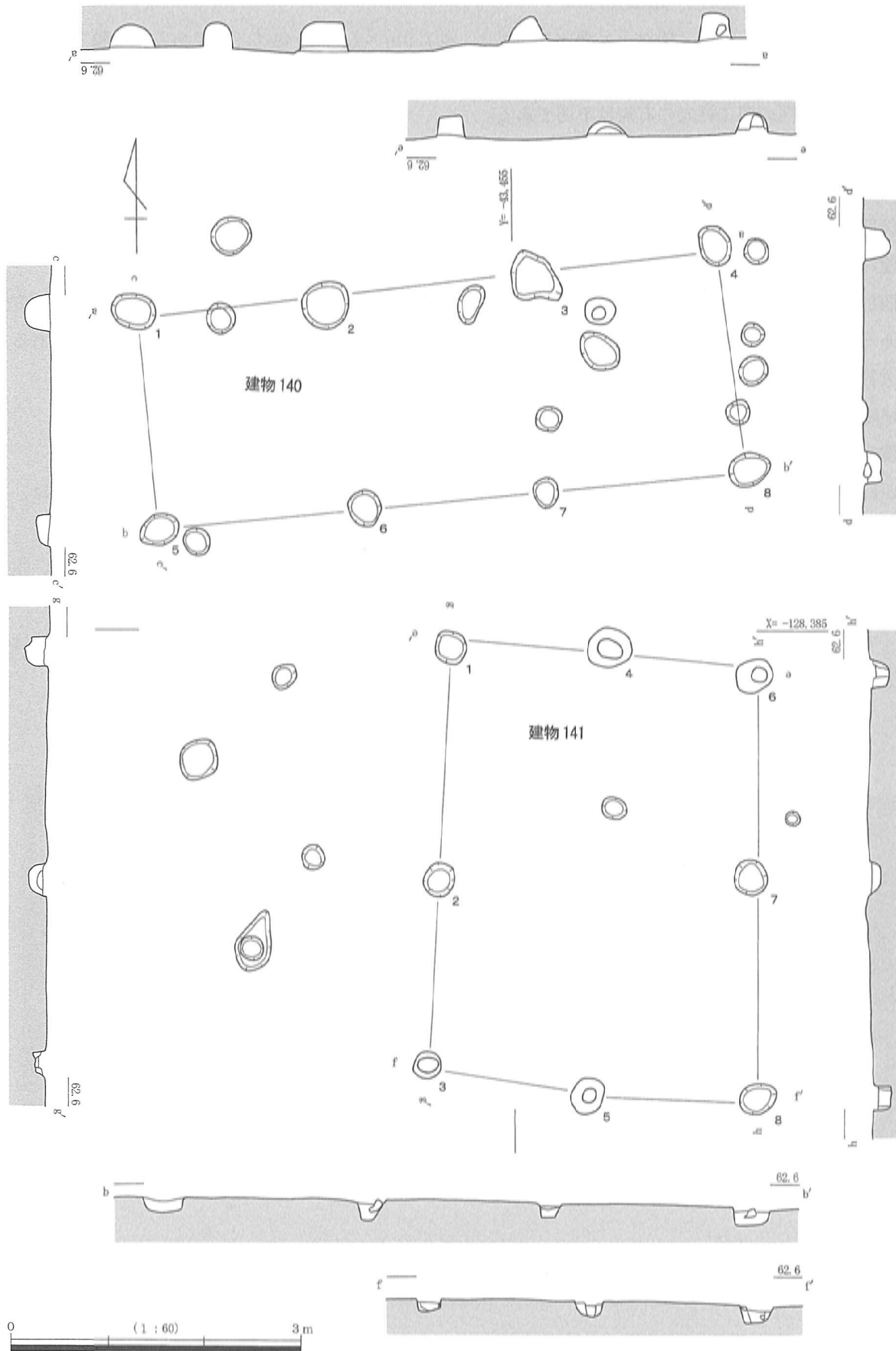
西部に位置する。東西3間、約5.7mの2列の柱列が非常に近接して存在している。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。南側の調査地外に組み合わさる柱穴が展開している可能性がある。

遺物は、柱穴1から黒色土器A類碗、柱穴3から土師器甕、須恵器、柱穴4から黒色土器A類、須恵器が出土しており、柱穴7からも、黒色土器A類、「て」字状口縁土師器皿などが出土している。

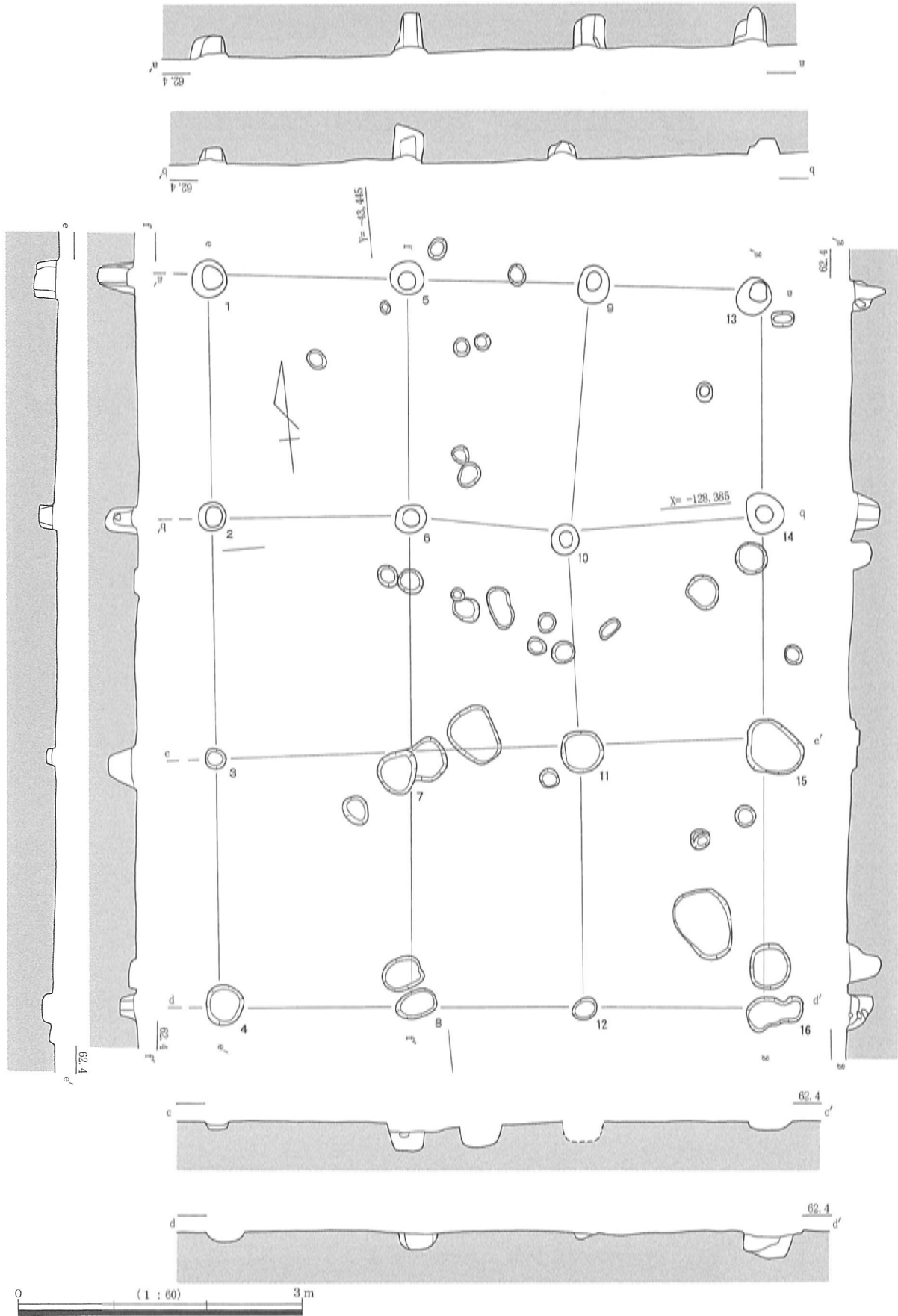
「て」字状口縁土師器皿は、10世紀代のものである可能性があり、柱穴1出土の黒色土器A類碗は丘陵上西部e域の土坑19より古い様相のものである。



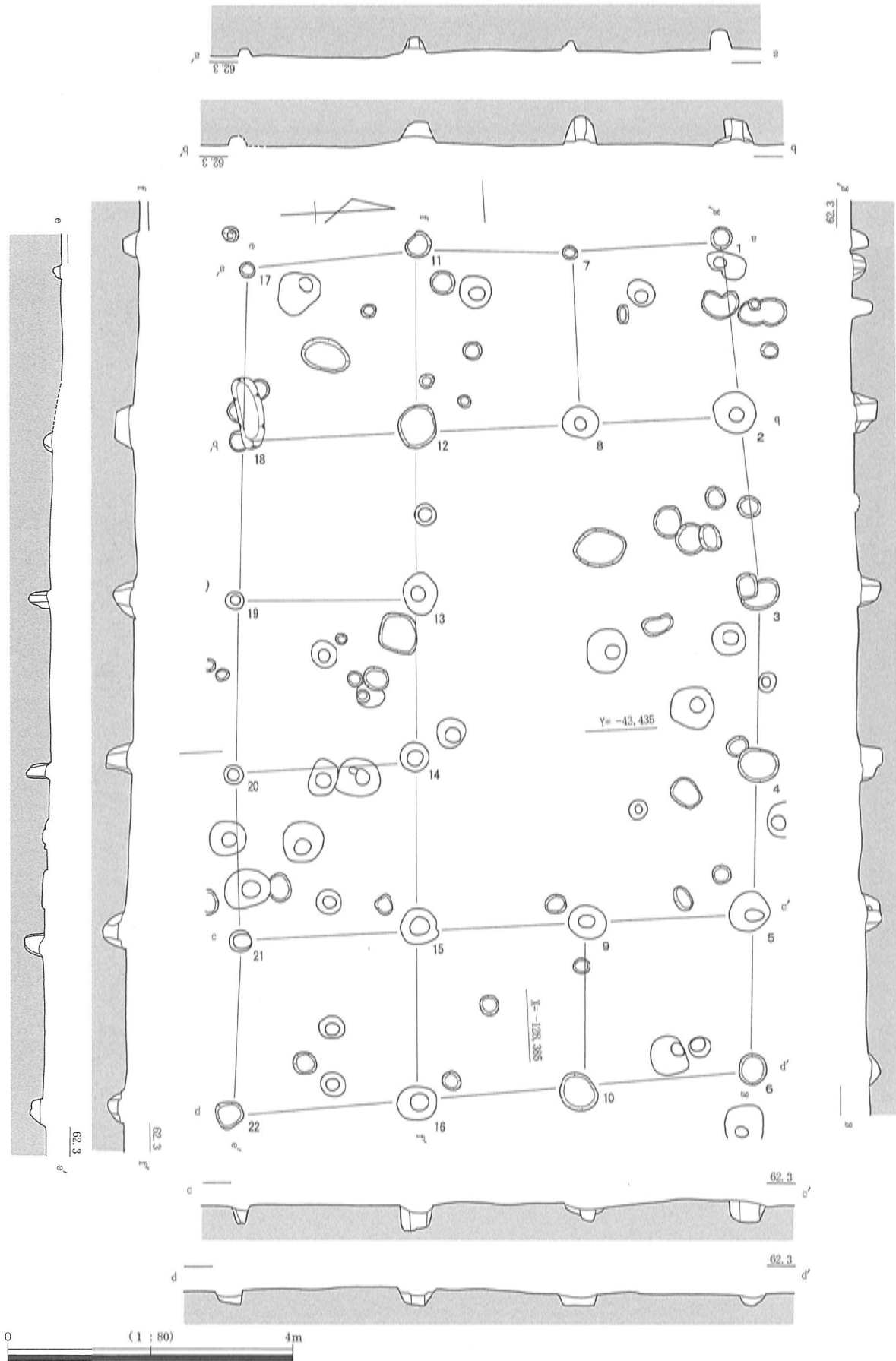
第438図 建物139 平面・断面図



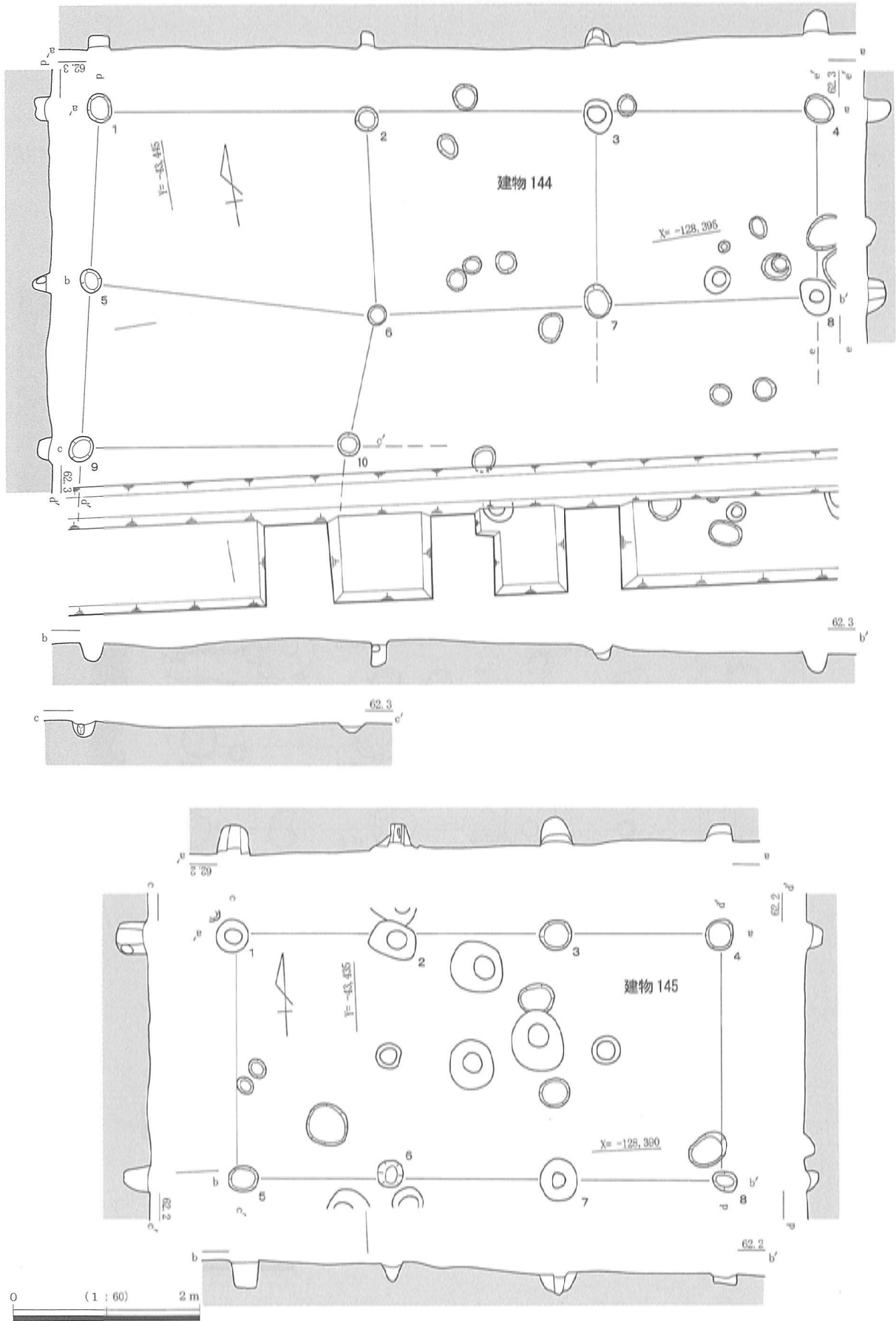
第439図 建物140・141 平面・断面図



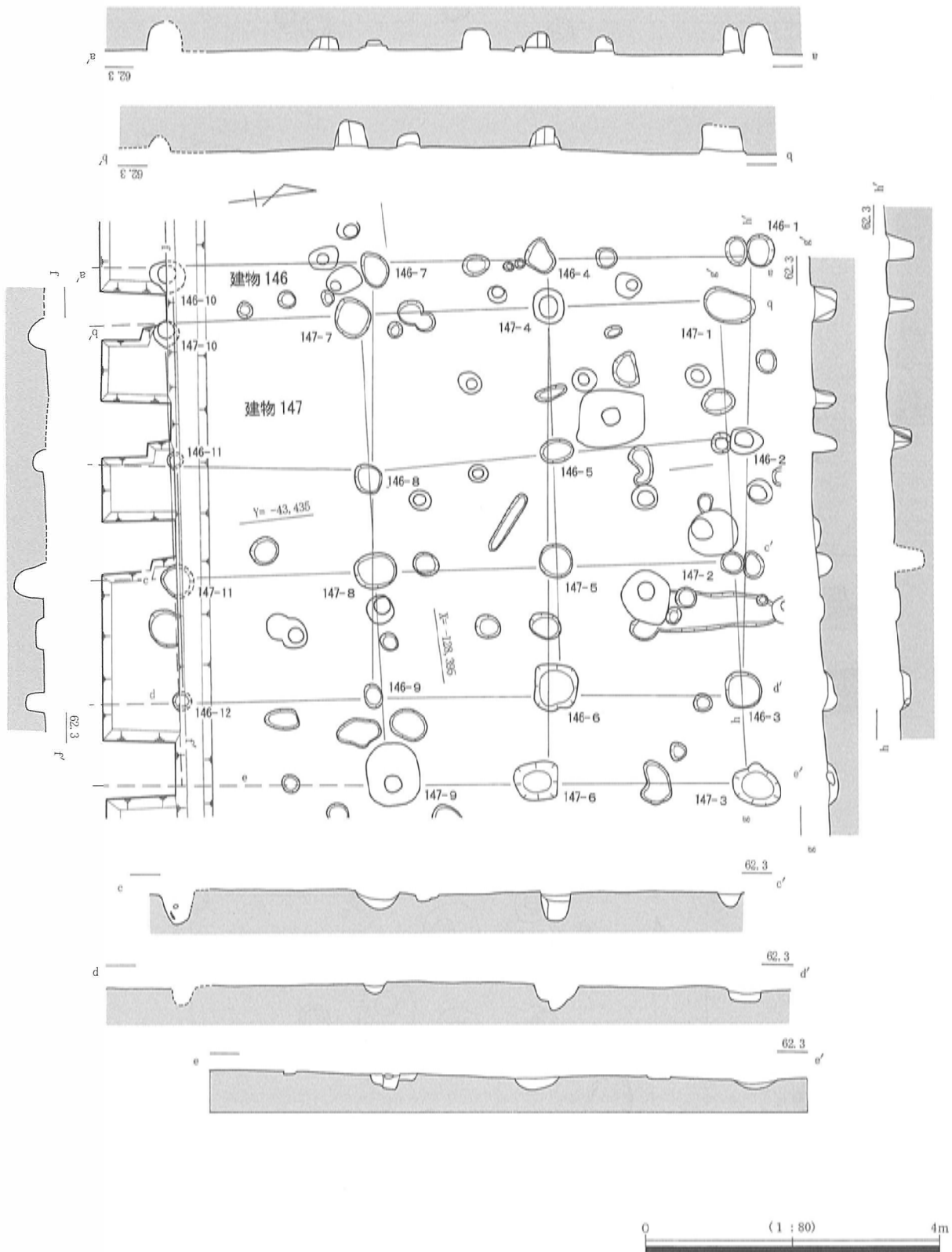
第440図 建物142 平面・断面図



第441図 建物143 平面・断面図



第442図 建物144・145 平面・断面図



第443図 建物146・147 平面・断面図

建物138 (第434・437・445図 図版157・236)

中央部に位置する。1棟の建物として復元したが、東西4間×南北3間の建物、東西2間×南北3間の建物、2棟である可能性もある。約15.7m×6.1m、約95.8㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。南側は調査地外に続いている可能性がある。

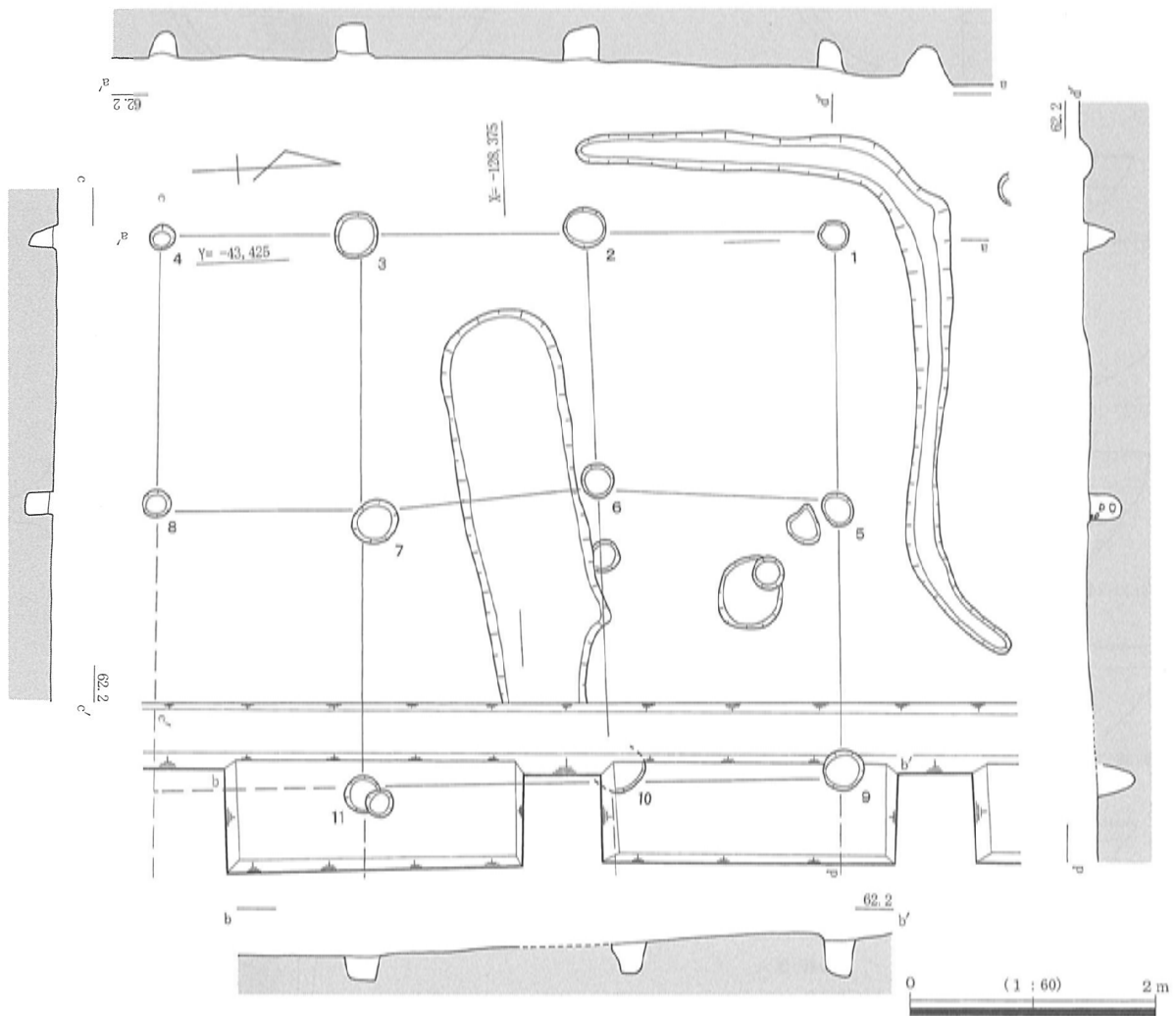
東端の東西柱間がやや狭くなっている。北辺中央では柱穴を検出していないが、調査用筋掘り掘削時に柱穴が失われた可能性がある。それ以外の柱穴を検出していない箇所は、本来より存在していなかったことを確認している。建物139と重なるが、前後関係は不明である。

遺物はほとんどが小片であるが、柱穴1から器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿と、口縁部が1段ナデで外反し、体部の深い土師器皿、柱穴2と12から黒色土器A類、柱穴5と22から供膳器種以外の黒色土器A類、柱穴8から黒色土器A類甕、柱穴13と27から土師器煮炊具、柱穴19から外面平行タタキの須恵器、柱穴24と25から黒色土器A類碗が出土している。

「て」字状口縁土師器皿は10～11世紀前葉のものかと思われる。

建物139 (第434・438図 図版157・158)

中央に位置する。東西3間×南北2間、約4.8m×3.5m、約16.8㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位



第444図 建物148 平面・断面図

を向く。建物138と重複するが、前後関係は不明である。

遺物は、小片がわずかに出土している。

建物140 (第434・439図 図版157・158)

中央部に位置する。東西3間×南北1間、約6.1m×2.3m、約14.0㎡である。主軸方向は、N-5°-Wである。

出土遺物は、細片のみである。

建物141 (第434・439図 図版157・158)

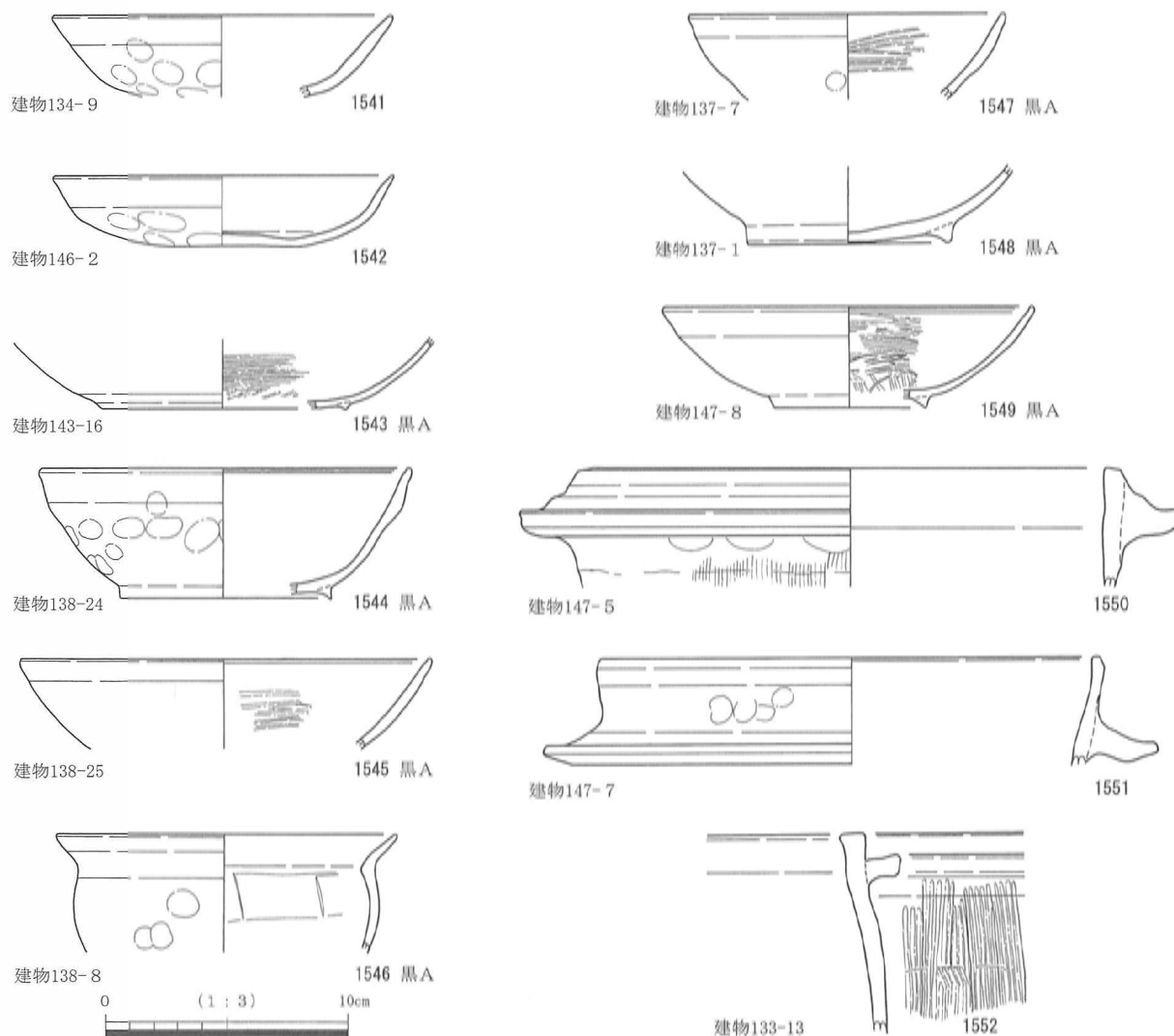
中央部に位置する。南北2間×東西2間、約4.5m×3.3m、約14.9㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。

遺物は、出土していない。

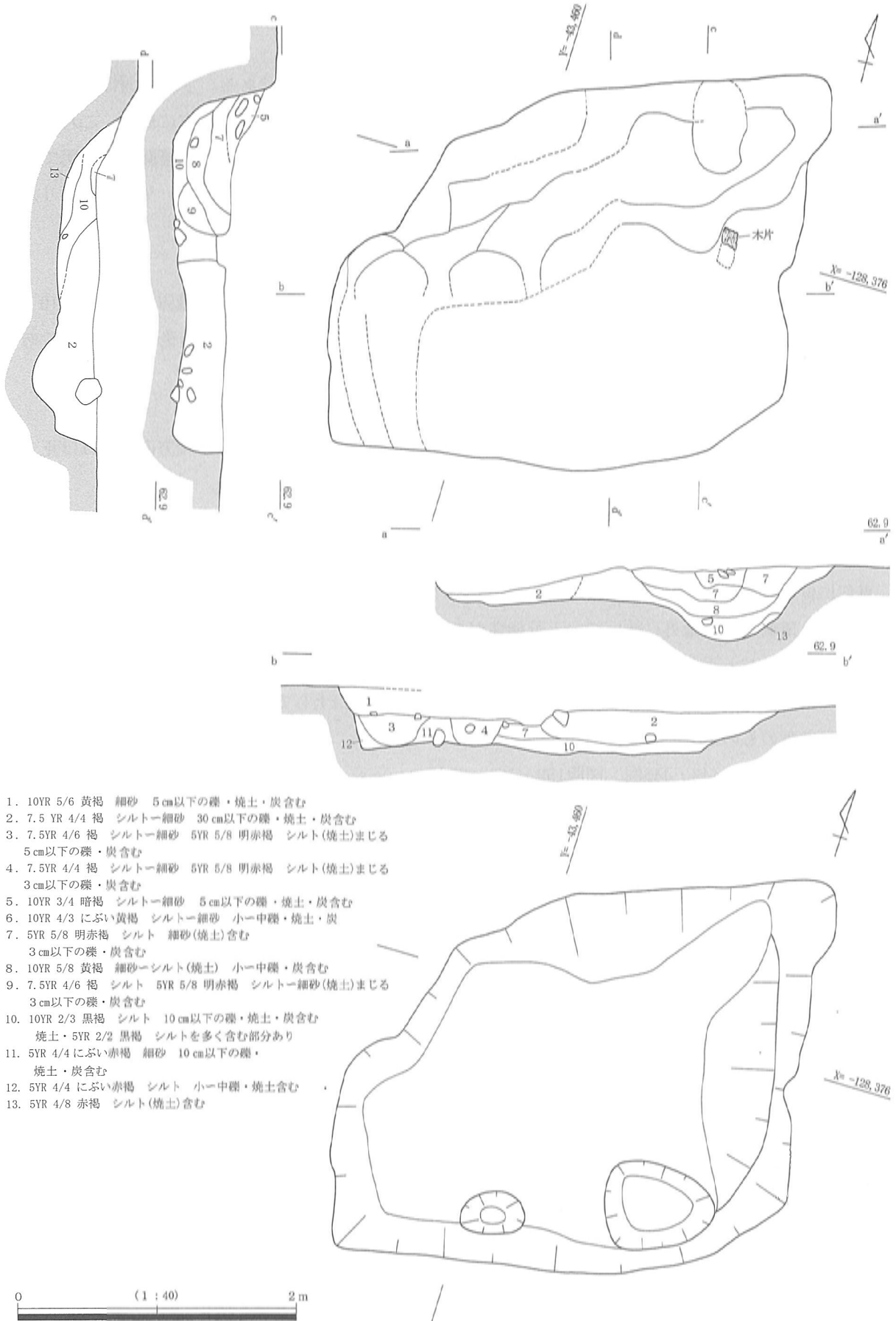
建物142 (第434・440図 図版159)

東部に位置する。南北3間×東西3間、約7.8m×5.9m、約46.0㎡である。主軸方向は、N-4°-Eである。さらに1間分西側の箇所には現代の水路が通っている。総柱で、柱間は東西が約1.7m~2.6m、南北が約2.3m~2.9mである。建物143と重なるが、前後関係は不明である。

遺物は、黒色土器A類碗、須恵器甕などの細片が出土した。黒色土器A類碗が比較的多くみられ、柱



第445図 建物133・134・137・138・143・146・147 出土遺物



1. 10YR 5/6 黄褐 細砂 5 cm以下の礫・焼土・炭含む
2. 7.5 YR 4/4 褐 シルト-細砂 30 cm以下の礫・焼土・炭含む
3. 7.5YR 4/6 褐 シルト-細砂 5YR 5/8 明赤褐 シルト(焼土)まじる
5 cm以下の礫・炭含む
4. 7.5YR 4/4 褐 シルト-細砂 5YR 5/8 明赤褐 シルト(焼土)まじる
3 cm以下の礫・炭含む
5. 10YR 3/4 暗褐 シルト-細砂 5 cm以下の礫・焼土・炭含む
6. 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト-細砂 小-中礫・焼土・炭
7. 5YR 5/8 明赤褐 シルト 細砂(焼土)含む
3 cm以下の礫・炭含む
8. 10YR 5/8 黄褐 細砂-シルト(焼土) 小-中礫・炭含む
9. 7.5YR 4/6 褐 シルト 5YR 5/8 明赤褐 シルト-細砂(焼土)まじる
3 cm以下の礫・炭含む
10. 10YR 2/3 黒褐 シルト 10 cm以下の礫・焼土・炭含む
焼土・5YR 2/2 黒褐 シルトを多く含む部分あり
11. 5YR 4/4 にぶい赤褐 細砂 10 cm以下の礫・
焼土・炭含む
12. 5YR 4/4 にぶい赤褐 シルト 小-中礫・焼土含む
13. 5YR 4/8 赤褐 シルト(焼土)含む

第446図 土坑206 平面・断面図

穴8出土の黒色土器A類椀は、器壁が薄く、口縁部を強く横ナデして外反させているものである。

建物143(第434・441・445図 図版159・160・236)

東部に位置する。東西5間×南北3間、約11.7m×7.3m、約85.4㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。西辺、南辺以外の柱穴の規模は径約0.5mで、遺跡のなかでは大きい方に属す。これに対して、西辺、南辺の柱穴は径約0.2mと小規模である。建物142・145と重なるが、前後関係は不明である。

遺物は、非常に器壁が薄く、底部が平らな黒色土器A類椀、口縁端部内側に沈線、外面にケズリが認められる黒色土器A類椀、土師器煮炊具などの小片が出土している。

建物144(第434・442図 図版159・160)

東部に位置する。東西3間×南北2間、約7.9m×3.6m、約28.4㎡である。主軸方向は、N-10°-Eである。南側の調査地外に続いている可能性がある。建物146と重複するが、前後関係は不明である。

遺物は細片のみで、黒色土器A類などがある。

建物145(第434・442図 図版159・160)

東部に位置する。東西3間×南北1間、約5.2m×2.6m、約13.5㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。建物143と重なる。

出土遺物は、黒色土器A類などの細片のみである。

建物146(第434・443・445図 図版159・161)

東部に位置する。南北3間×東西2間、約7.6m×5.9m、約44.8㎡である。主軸方向は、N-6°-Eである。南側は調査地外に続いている可能性がある。東西の柱間は、西側約2.7m、東側約3.3mである。建物144・147と重なるが、前後関係は不明である。

遺物は、黒色土器A類、土師器大皿・煮炊具、須恵器などが出土している。土師器大皿は10世紀後葉～11世紀前葉のものかと思われる。

建物147(第434・443・445図 図版159・161・236)

東部に位置する。南北3間×東西2間、約7.4m×6.4m、約47.4㎡である。主軸方向は、N-7°-Eである。南側は調査地外に続いている可能性がある。柱間は、南北が約2.4m～2.7m、東西の東半が約2.9m、西半が約3.5mである。重複している建物146とは、方向軸がほぼ同じで、構造も類似している。

遺物は細片のみで、土師器甕・羽釜、黒色土器A類椀、須恵器甕が出土している。

柱穴8出土の黒色土器A類椀は器壁が薄く底部が平らなものである。

建物148(第434・444・445図 図版159・161)

東部に位置する。南北3間×東西2間、約5.6m×4.5m、約25.2㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を示す。東側は調査地外に続いている可能性がある。北西には溝が巡っている。

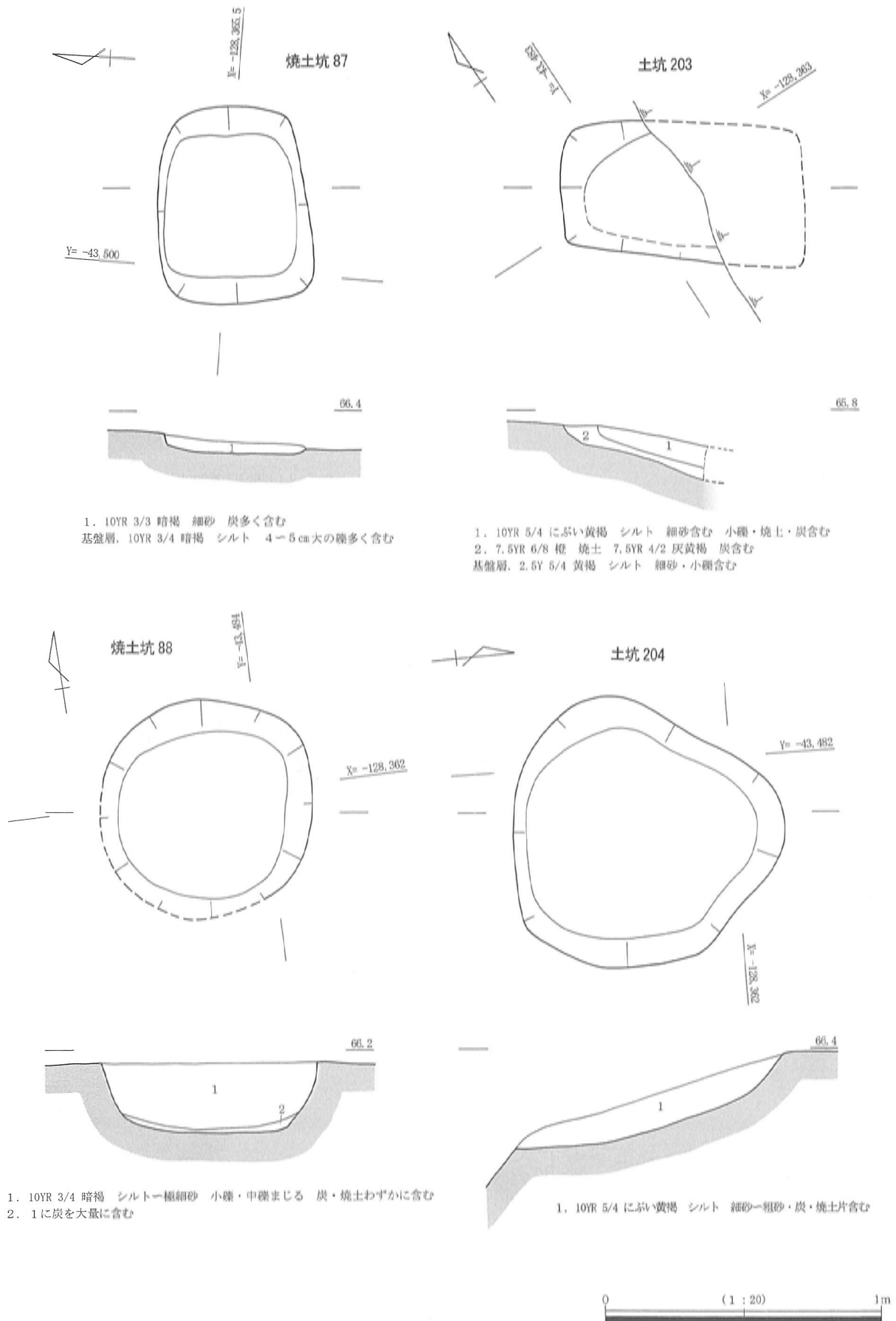
遺物は細片のみで、黒色土器A類などがある。

ピット129(第434・448図 図版162)

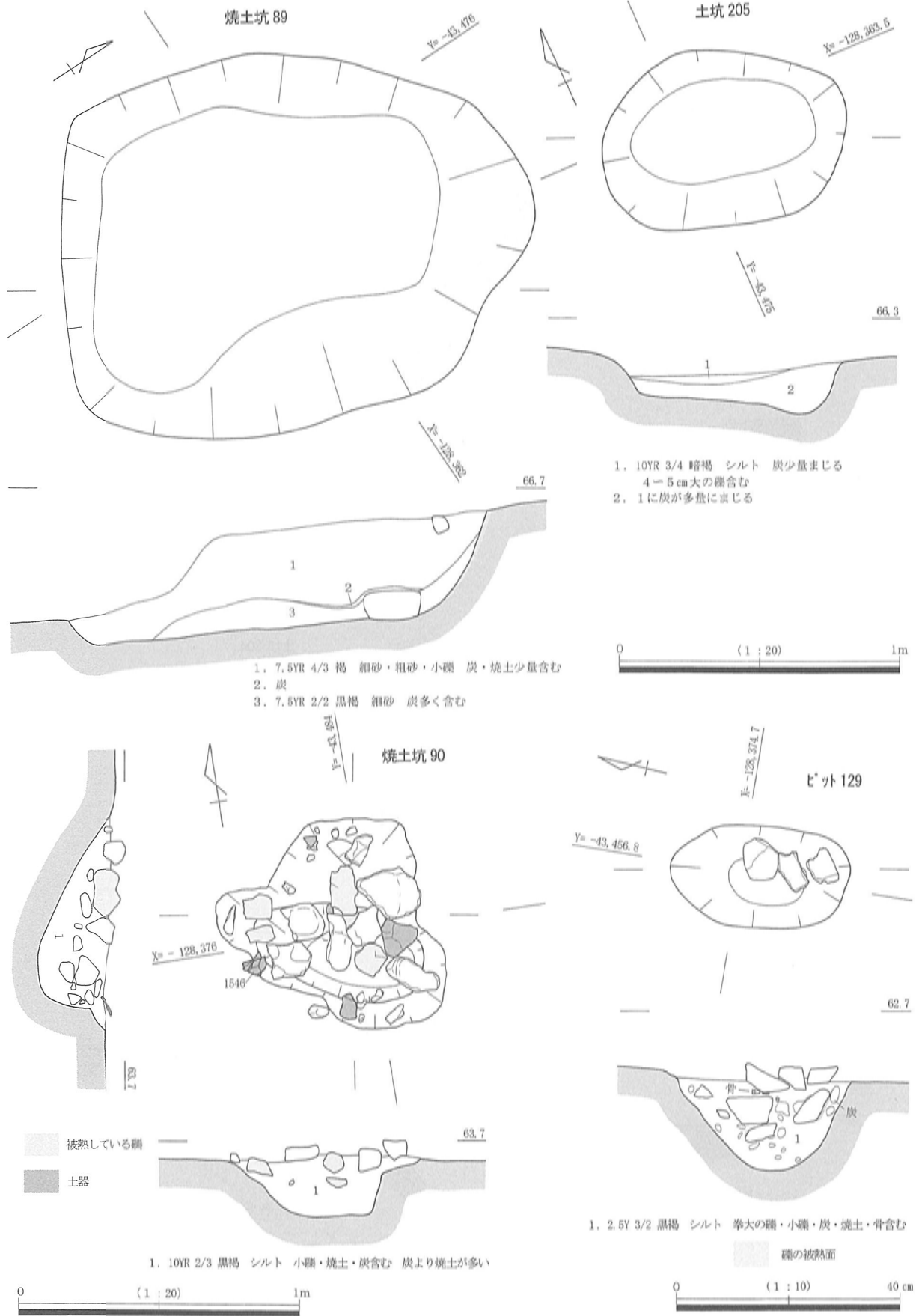
段丘面に立地し、楕円形で、長径約0.3m、短径約0.2m、深さ約0.2mである。埋土の比較的上部にこぶし大の礫を含み、2点に被熱痕跡が認められた。被熱を確認した礫は埋土の中位にあり、被熱面が揃っているといった状況ではない。

埋土に炭、焼土、骨片を含む。骨片は細片で原形をとどめていない。土坑206の東に隣接する。

遺物は出土していない。骨片の鑑定結果をIV 第3章に記載している。



第447図 土坑203・204 焼土坑87・88 平面・断面図



第448図 ピット129 土坑205 焼土坑89・90 平面・断面図

土坑203 (第447図)

段丘崖の比較的下部に位置し、崖に立地する、他の焼土を含む土坑、焼土坑と標高をほぼ揃えている。東部が不明であるが、長方形の可能性があり、長辺0.6m以上、短辺約0.5m、深さは約0.1mである。埋土に焼土片を多量に含む。焼土坑である可能性もあるが、被熱痕跡は認められなかった。

遺物は出土していない。

土坑204 (第447図)

段丘崖の比較的下部に立地する。他の焼土を含む土坑、焼土坑と標高をほぼ揃えている。歪な円形で、径約1.0m、深さ約0.1mである。埋土に炭、焼土片を含む。被熱痕跡は認められなかった。

遺物は、土師器の小片が出土したのみである。

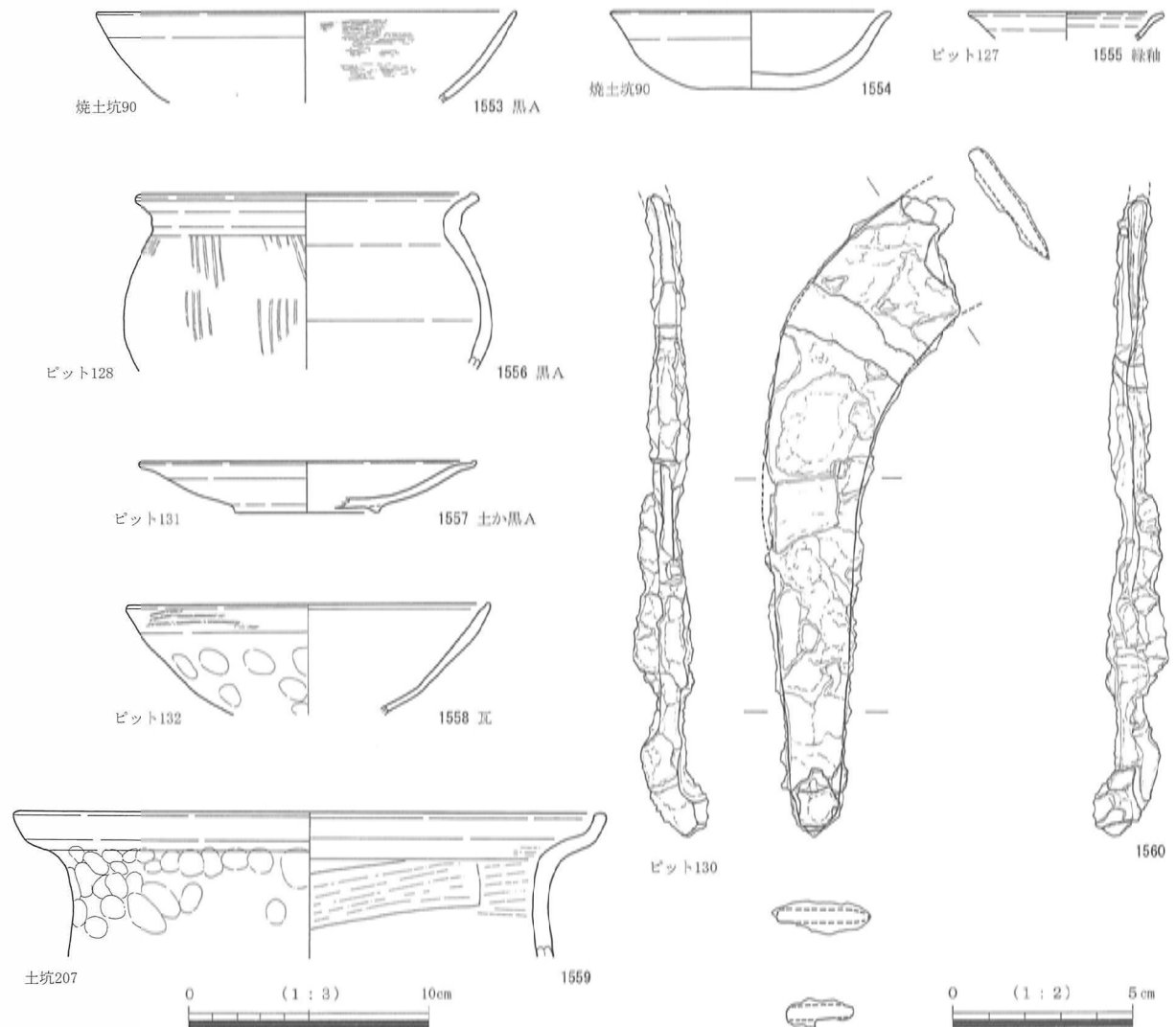
土坑205 (第448図)

段丘崖の途中、比較的下部に立地する。他の焼土を含む土坑、焼土坑と標高をほぼ揃えている。楕円形で、長径約0.9m、短径約0.6m、深さ約0.2mである。埋土に炭を多量に含む。

遺物は出土していない。

土坑206 (第434・446図 図版162)

段丘面の中央部、建物群の北側に位置する。不整形で、東西約3.3m、南北約2.8m、深さ約0.5mで



第449図 焼土坑90 その他の遺構 出土遺物 (1/2 = 1560)

ある。北西部分は削平を受けていると思われ、本来は方形であったと想定される。北東部と南西部の壁は、他の部分に比べて勾配が急である。底面の2箇所の窪みは埋土が土坑と一連のものである。

埋土に焼土と炭を多量に含むが、被熱痕跡は認められなかった。埋土の入り方は複雑な様相を呈しており、北から南へと埋まっていったと考えられる。

遺物は、幅約12cm、厚さ約5cm、長さ15cm以上の板状の炭化材1点のみである。

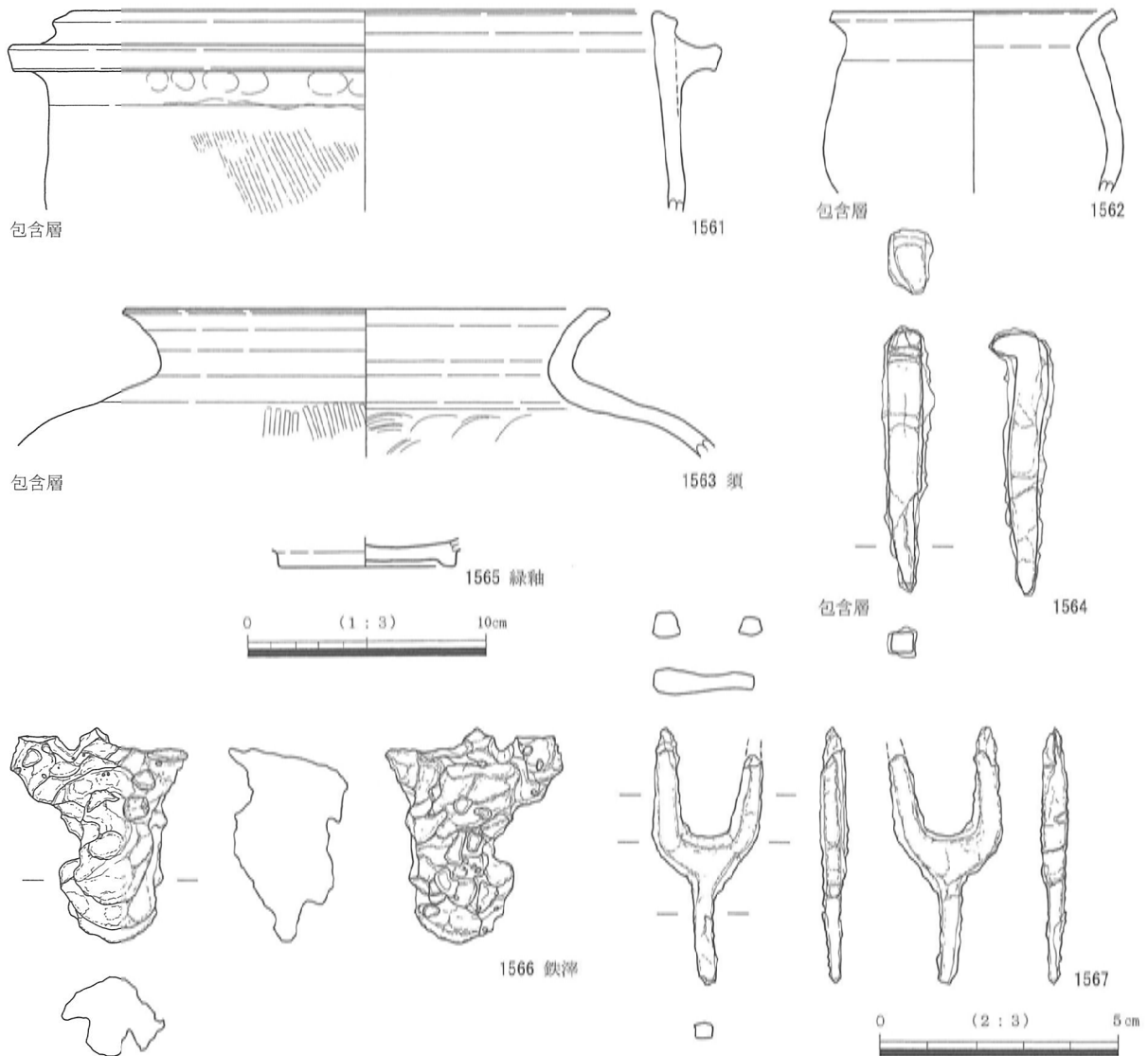
焼土坑87 (第434・447図)

段丘崖の比較的下部に立地する。他の焼土坑、焼土を含む土坑と標高をほぼ揃えている。隅丸長方形で、長辺約0.7m、短辺約0.6m、深さ約0.1mである。遺存状況が悪く、痕跡がわずかに残っていたのみである。全容は不明であるが、北側の壁には被熱痕跡が確認できた。

遺物は出土していない。

焼土坑88 (第434・447図)

段丘崖の比較的下部に立地する。他の焼土坑、焼土を含む土坑と標高をほぼ揃えている。全容が不明であるが、おそらく径0.8m程度の円形で、深さ約0.3mである。



第450図 包含層・近世作土層 出土遺物 (2/3 = 1564・1566・1567)

南西部分は遺存状況が悪く不明であるが、その他の部分では厚さ2cm程度壁が被熱して赤変している。底に薄い炭層がある。

遺物は、瓦器の小片が出土したのみである。

焼土坑89（第434・448図）

段丘崖の比較的下部に立地する。他の焼土坑、焼土を含む土坑と標高をほぼ揃えている。歪な楕円形で、長径約1.7m、短径約1.4m、深さ約0.4mである。南側は遺存状況が悪く不明であるが、北側の壁には被熱痕跡がみられる。下層には炭が多く含まれている。

遺物は出土していない。

焼土坑90（第434・448・449図 図版162・235）

段丘面に立地する。歪な形状で、南北約0.8m、東西約0.7m、深さ約0.3mである。壁、底面共に厚さ1cm～2cm程が赤変しており、被熱が認められる。底面の方が赤変の度合いはやや弱い。埋土の上部に礫が多く含まれているが、そのほとんどが被熱している。被熱痕跡のある面が下向きになって埋土に含まれていること、焼けている底面より浮いた状態で埋土に含まれていることなどから、礫が焼けた際の位置を保っている可能性は低いと思われる。しかし、礫の被熱痕跡は明瞭であり、土坑が被熱を受けた際に何らかの形で利用されていた可能性が高いと考えられる。

遺物も、礫と共に埋土の上部に含まれていた。黒色土器A類椀、土師器皿の破片の他、土師器煮炊具の体部片も出土している。土師器体部は、直線的で径が大きく、器壁も比較的厚く、縦方向のハケメがみられるものである。周辺の遺構出土のものと同様な時期のものであるが、土坑自体が近隣の建物などと同じ時期のもので安易に断定することはできない。

層序の項に記したように、包含層はごく一部にしか遺存していなかった。

東部では北端部を除いて削平の影響が比較的少ないが、中部、西部では北部分と中央西寄りにある棚田の段の下にあたる部分が削平の影響を大きく受けている。さらに著しいのは西端部分で、棚田造成時に加えて現代にも大きく削平を受けている。段丘崖は下部、上部が削平を受けている。

第4層、第5層は、出土遺物の時期にほとんど差がみられない。須恵器杯B、緑釉陶器、黒色土器A類、篠窯須恵器鉢、鋳が狭く口縁部が短い土師器羽釜などが出土しており、瓦器はほとんどみられない。黒色土器A類には、椀、高台のつかない杯タイプのもの、甕など供膳用以外の器種がある。須恵器に比べて土師器が圧倒的に多い。ほとんどが9～10世紀代のものと思われる。

その他きわめてわずかではあるが、「て」字状口縁土師器皿、瓦器椀など、11世紀代、13世紀代のものもみられる。

小結

遺構出土遺物は小細片のみで、時期のわかる遺構はほとんどない。ただ、y域全体において出土遺物は同様なものばかりであり、大きな時期幅は存在しないと考えられる。

全体的に黒色土器A類椀の出土が特に顕著で、他に器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類甕、鋳が狭く口縁部が短い土師器羽釜、須恵器甕、緑釉陶器などがある。

11世紀代の器壁の厚い「て」字状口縁土師器皿、瓦器椀もみられるが、2、3点である。おおよそ「て」字状口縁土師器皿は器壁の薄いものであり、黒色土器B類椀がみられないことから、11世紀前葉

以前のものであると考えられる。

丘陵上西部 e 域の土坑19からは黒色土器A類碗、器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿がまとめて出土しており、10世紀後葉頃の年代を考えている。土坑19の黒色土器A類碗が体部から底部にかけて丸みを帯びた器形であるのに対して、y域出土のものには底部が平らなものがみられる。また、全体的に器壁が薄いものが多く、口径の大きなものも含まれている。y域ではこのような特徴のものが少なからずみられ、土坑19出土のものよりさらに古いものが一定程度存在していると思われる。土坑19と同時期の10世紀後葉、または11世紀前葉のものが存在するかどうかは、不明であるといわざるを得ないが、土師器皿をみるとこの時期のものが存在している可能性は高いと思われる。

なお、包含層出土遺物に9世紀後葉～10世紀前葉頃と思われるものが認められるが、これらは遺跡内でほとんどみられないものであり、この時期にも土地利用されていた可能性はある。

以上、詳細な時期は不明ではあるが、y域の遺構群にはほぼ10世紀代を中心とした時期が想定できると思われる。

ただ、ピット132などからは瓦器片が出土しており、やや新しい時期のものも若干存在していると思われる。

y域の主な遺構は16棟の建物群である。しかし、個々の詳細な時期が不明であるため、セット関係、時期関係を知ることは難しい。上記の通り、ある程度限られた時期が想定されるのにかかわらず、他の建物と重複、前後関係を有するものが多い。

西部では、特に限られた範囲に最低でも3時期の建物が重なり合っている。建物134と136は、ほぼ方向軸と柱の並びを揃える。また、重複している建物134と135は、方向軸を揃え、構造がほぼ同じで、建て替えの関係である可能性がある。y域の建物は総柱のものが多く、この部分では建物133・134など、細長い平面形で、総柱ではないものがみられる。さらに、柱穴の径も比較的小さいものが多い。y域のなかではやや新しいと考えられる要素をもつ部分である。

中央部の建物139～141は、大型の建物が多いy域のなかでも特に小規模なものである。周囲の建物の付属棟である可能性もある。

東部の建物群には、y域のなかでも特に、柱穴の規模の大きいものが多くみられる。個々の建物の詳細な時期が不明であるため、セット関係を位置関係で推測するしかない。重複している建物146と147は、方向軸および構造が類似しており、建て替えの関係にある可能性が高い。それ以外の重複関係は、建物142と143、建物144と建物146、建物143と145である。また、建物144と建物146、建物142と143は、それぞれ、西側建物の東端と東側建物の西端部分が、わずかに重複している。北側の建物群(142・143・145)と南側の建物群(144・146・147)とは重なってはならず、両者で、セット関係が存在する可能性はある。

建物148は、y域で唯一、X = -150, 380以北で検出したものである。

遺跡内で、時期の確認できる最も古い建物は、これまで述べてきたなかでは丘陵上西部 e 域の建物群で、10世紀後葉前後のものと考えている。

丘陵上西部 f 域の建物45、丘陵上中部 j 域の建物98は、方形掘り方の柱穴を有し、遺跡内でも古いものである可能性が高いが、遺物がほとんど出土しておらず、時期が不明である。e域の建物群のうち、建物34は約81.8㎡、建物35は約77.7㎡である。これらは遺跡内において古いばかりでなく、特に大型のものでもあり、遺跡の開発を考える上で非常に重要なものである。

y域の建物群は、前述したように詳細な時期は不明であるものの、e域の建物群と同時期またはやや古い時期のものと想定される。なお、y域の建物群のなかにも約85.4㎡の建物143や、1棟の建物であるとすれば約95.8㎡の建物138がある。特に建物143は3面庇を有する構造的にも特徴のある建物である。

建物138の柱穴からは、10～11世紀前葉のものかと思われる遺物が出土しており、ほぼそれに近い時期のものであると考えられる。建物143の柱穴からは、口径が大きく、底部が平らで、器壁の薄い黒色土器A類椀（1543）が出土しているが、これはy域はもとより遺跡内で出土した黒色土器A類椀のなかで最も古い様相のものである。e域の建物と関連が想定される土坑19・20出土の黒色土器A類椀よりも古い様相のものであり、e域の建物群よりも建物143の方が古い可能性が高い。いずれにしても、これらの大型建物に限らず、前述したようにy域にはe域よりも古い建物が存在する可能性が高く、遺跡全体の開発を考える上で、y域の建物群は非常に重要であると思われる。

段丘崖は比較的傾斜が急であるが、焼土坑3基、炭や焼土片を含む土坑3基が、同様な標高に立地している。段丘崖ではこれら以外に遺構を検出していない。段丘崖寄りの段丘面北部では、炭、焼土と骨片を含むピット129、炭、焼土を多量に含む大型の土坑206、焼土坑90がある。

焼土坑90は、段丘崖の遺構群の崖下にあたる部分に立地している。他の段丘崖に立地する焼土坑は、底面に被熱が認められず、底に炭層がみられるものが多いが、これは様相を異にしている。また、遺跡全体をみても、このように多くの礫や遺物を含んでいる焼土坑は稀である。用途は不明とせざるを得ないが、遺跡内で検出された多くの焼土坑のなかでも、特異な様相を示すものである。

ピット129と土坑206はこれらからやや東に離れた位置に隣接して存在する。ピット129にも被熱礫が入っている。

上記の遺構群の時期は不明で、建物群との関係は、不明である。ただ、焼土坑88からは瓦器片が出土しており、少なくとも段丘崖の遺構群は、建物群の中心時期よりは比較的新しいものである可能性がある。

川1がy域西端部分を通ると思われるが、西肩はx域で検出しているものの、東肩は不明である。段丘崖部分では南に向かってやや下がっていく地形を検出しているが、川幅がこの部分では少し狭くなっていたと考えられる。y域西端部は削平が著しく、x域との境部分の旧地形は遺存していないが、後世にx域の地形が西へもう少し続いていたのを削りこみ、東側の平坦面を拡張する造成がおこなわれた可能性が高い。

東側、南側は調査地外であるが、同様な遺構群が続いていると想定される。南には勝尾寺川が流れているが、数m先までは調査地と同じ段丘面が続いていると思われる。

IV 自然科学分析

序章 自然科学分析の目的と方法

のべ5年間にわたる粟生間谷遺跡の調査では各種の自然化学分析を実施した。分析はそれぞれ調査年次ごとに分析委託契約により実施し、報告を受けているため、次章以下の報告、考察については本書に掲載するために改めて起稿したものも含まれる。本章では各分析結果の報告に先立ち、発掘調査段階における各種分析の目的について記述する。

1. 古環境分析

粟生間谷遺跡では河岸段丘上で古代末から中世にかけての集落域を調査したが、その前後の土地利用を検討するための考古学的知見は極めて断片的であった。特に近世以降の棚田造成以前に水田開発、耕作が行われていたかどうかは集落廃絶の背景を理解する上で重要な問題でありながら、棚田造成による削平により土層の遺存状況が不良でもあり明確にしがたい状況であった。また集落域を広範囲に調査したにもかかわらず集落盛期に帰属する明確な井戸遺構がみられず、飲料水をいかなる方法で得ていたのかについて明確にしえなかったが、丘陵上西部地区b域において検出した溜井と推察された遺構（井戸2）は集落内を貫流する溝を伴うものであり、これが飲料水の給水を担っていたのではないかという推測がなされるに至った。一方で、段丘上を開析する流路や川合裏川などもまた給水源の候補と当然なりうるものであり、井戸2をにわかに給水源であると判断するには躊躇するところでもあった。

以上の問題点に対して、該期の周辺、特に近接地の植生、ひいては土地利用の状況を把握するために花粉分析及び種実同定を実施することとした。丘陵上の調査区でもあり堆積土壌が良好に遺存する場所が残されていなかったため、各時期の古環境変遷を知るためのサンプリングは困難と考えられ、試料は井戸2および派生する溝11、丘陵上中部地区i域井戸4、さらに堆積時期は検討の余地があるものの川1の、それぞれの埋土から採取することとした。花粉分析の試料点数は各採取地点から合計31点であり、種実同定は井戸4埋土の土壌試料についてのみ実施した。いずれも良好な堆積環境を復元できる遺構ではないことから、分析結果の評価にも一定の注意を要する。

2. 残存脂肪酸分析

本書で焼土坑とする遺構は、個別には差異が認められるものの「内部での焼成により壁面が硬化、赤変」し、「埋土に多量の炭、灰を含む」という特徴を有する土坑で、粟生間谷遺跡では数十基が検出されている。焼土坑自体は全国各地において検出されているが、遺物を伴う例が少なく、時期決定も困難な場合がほとんどであり、その性格を明言できるケースは少ない。内部で相当の燃焼が行われたという点と、周辺の遺構分布との関連から、簡易な炭窯、土器焼成遺構、火葬墓、火葬場、狼煙台、炉などさまざまな評価がなされている現状である。もちろん焼土坑の性格がひとつに限定できるものではないと考えられるが、考古学的知見がいずれも状況証拠的であるという点を鑑み、自然科学的手法による性格の追及も求められるところである。今回の調査では多数検出された焼土坑のうちやや様相の異なる2基について埋土などの残存脂肪酸分析を実施した。意図するところは仮に火葬墓や火葬場であればヒトの埋葬に関する遺構と同様の状況が得られるのではないかという点と、燃焼に用いられた油脂類が特定で

できればその油脂類の流通などの状況から年代を限定する材料が得られるのではないかとこの点にある。試料は丘陵上西部地区 c 域焼土坑 4 から 4 点、丘陵上東部地区 p 域焼土坑 53 から 7 点を採取し、いずれも対照試料を含んでいる。試料採取時などに石油製品や人体との接触が無いよう注意し、オリジナルの試料の提供に努めた。分析結果については本文に譲るが、火葬あるいはヒトの埋葬に関わる可能性が指摘された。ただし報文に明記されるように、両土坑とも対照試料の分析結果が土坑内試料と大きく異なっていない点や、同一土坑内における試料ごとの分析結果のばらつき、あるいは植物性脂肪の残存状況が不明な点など、今回の分析結果だけでは遺構の性格を決定する状況には至らないと考えられる。

3. 金属分析

当遺跡では農具や武器、釘など多種多様な金属製品が数多く出土した。それに伴い、鉄滓・鋳型・溶解炉・羽口等の金属器生産関連遺物も確認された。調査において生産に関連する遺構は検出出来なかったが、先述のような遺物が出土していることにより、何らかの生産活動が行われていたことは想像に難くない。中世集落における生産活動の一端を窺わせる貴重な資料になることは明らかである。

そこで、当遺跡での生産活動の在り方やそこで用いられた原材料を復元することを目的とし、生産関連遺物（鉄滓・金属塊・鋳造炉）の分析を行った。本来ならば出土金属製品の分析を同時に行い、生産された製品の特定を進めるべきであったのであろうが、残念ながら出土した金属製品は銹化などの劣化が著しく、分析に適した状況にないと判断した。分析の詳細は後節に譲るが、鉄製品の鍛錬鍛冶作業や鋳造作業が行われていたことが明らかになった。

また、当センターが調査を行った国文地区内の徳大寺遺跡では鋳造関連遺構や遺物が検出され、栗栖山南墳墓群で発見された後期古墳群や中世墳墓から鉄滓が出土している。これらについても、併せて分析を行った。前者については生産された製品を推定するため原材料の特定を第一義の目的とした。後者は中世墳墓出土資料と後期古墳群出土資料に時期的な相違がみられるのか、さらには供献といった祭祀的な側面をもつ鉄滓と一般的な集落出土の鉄滓に何らかの差異が存在するのかを検討することを目的とした。前者に関しては鉄及び青銅が確認でき、2種の金属による鋳造作業が行われていたことを明らかに出来た。後者は時期的な相違は認められなかった。結果として中世墳墓出土資料が果たして当該期に供献されたものか、それとも後期古墳群に供献されたものが後世に混入したものか分析からは明らかにし得なかった。また、供献資料には一般集落ではあまり出土しない含鉄椀形滓が多く認められた。これについては、鉄滓に対して何らかの特別な意識が働いた行動の結果（つまり、含鉄椀形滓を意図して供献すること）である可能性も視野に入れておきたい。

第1章 花粉分析および種実分析

川崎地質株式会社・渡邊正巳

はじめに

粟生間谷遺跡は大阪府北部の箕面市粟生間谷東地内に位置する。

本報告は、(財)大阪府文化財センターが、粟生間谷遺跡での古環境復元を目的として、川崎地質(株)に数年次に亘り委託した花粉分析、および種実分析結果をまとめ直したものである。

試料について

図451に示す各地点で分析試料を採取した。各サンプル採取地点の断面図等は、川1(第11・12図)、丘陵上西部地区b域井戸2・溝11(第51図)、丘陵上中部地区i域井戸4(第165図)にある。各地点の模式柱状図および試料採取層準を図452～457のダイアグラム左端に示した。

分析方法および結果

花粉分析処理は、渡邊(1995)に従い行った。顕微鏡観察は400倍、あるいは必要に応じ600倍、1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。しかし、一部の試料では花粉化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数で200を越えることができなかった。

種実分析では、試料約300～500ccを約5%の水酸化ナトリウム水溶液に浸して1～2日放置し泥化させた後、0.5mmの篩いを通して集めた残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の抽出、同定を行った。

花粉分析結果を図452～457の花粉ダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また右端に分類毎の相対量を示すグラフを付けた。

種実分析結果として、検出植物遺体を記載し、検出個体数を示した。

①ウメ (*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.) バラ科サクラ属

核が19個体検出された。褐色、核の形は楕円形で扁平である。大きさは1.5cm程度。丸く大きな臍点がありへこむ。側面の一方には縫合線が発達する。表面は不規則にくぼみが配列する。

②キイチゴ属 (*Rubus* sp.) バラ科

種子が1個体検出された。褐色で大きさは2mm程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体は粗い不規則な網目模様でおおわれる。

③イバラモ属 (*Naja* sp.) イバラモ科

果実が1個体検出された。長楕円形で長さ2mm、幅0.5mm程度。表面には細長い亀甲状の網目模様がある。薄くて柔らかく、やや透き通る。

④スゲ属 (*Carex* sp.) カヤツリグサ科

果実が26個体検出された。大きさは2 mm程度。褐色で3稜がある。先端部は急に細くなる。表面は薄くて柔らかく、弾力がある。

⑤ナデシコ科 (Caryophyllaceae sp.)

種子が3個体検出された。黒色で、大きさは1 mm程度。表面には粗い突起が密に配列している。

⑥キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (Potentilla-Duchesnea-Fragaria) バラ科

種子が3個体検出された。褐色で大きさは1 mm程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体は粗い網目模様で覆われるが、浅いため不明瞭である。

⑦カタバミ属 (Oxalisp.) カタバミ科

種子が15個体検出された。黒色、楕円形で大きさは約1.5 mm。表面には横軸方向に平行に溝が数本走っている。

⑧コミカンソウ属 (Phyllanthus sp.) トウダイグサ科

種子が3個体検出された。側面観は半月形で上面観は三角形。褐色で大きさは1 mm程度。「へそ」部分がやや欠けたように見える。表面は柔らかい。

⑨イヌコウジュ属 (Moslasp.) シソ科

果実が3個体検出された。褐色。大きさは1 mm程度。いびつな球形で、先端に「へそ」が見られる。表面全体には、荒い亀甲状の網目模様がある。

⑩タカサブロウ (Ecliptaprostrata (L.) L.) キク科タカサブロウ属

果実が4個体検出された。縁辺部は灰色で中央部は褐色。大きさは3 mm程度。くさび型で中央部は膨らむ。水に浮く。

花粉分帯

花粉分析結果を基に、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。

(1) II帯 (川1断面1 試料No 9~1、川1断面2 試料No12~2、井戸4 試料No 1、溝11試料No 3~1、井戸2 東壁試料No 6~3、井戸2 底部試料No 9~7)

モミ属、マツ属 (複維管束亜属)、ツガ属、スギ属などの針葉樹種の他、アカガシ亜属、コナラ亜属などが他の種類に比べ高率で出現する。

上記の各種類の出現傾向から、c~a亜帯に細分した。

①c亜帯 (川1断面1 試料No 9、7、川1断面2 試料No12~11)

モミ属、マツ属 (複維管束亜属)、ツガ属、スギ属などの針葉樹種が卓越するほか、アカガシ亜属を伴う。

②b亜帯 (川1断面1 試料No 6、5、川1断面2 試料No10~8、)

針葉樹種のうちモミ属が減少するが、マツ属 (複維管束亜属)、ツガ属、スギ属はc亜帯と同程度の出現率を示す。アカガシ亜属もほとんど変化しない。草本花粉では、イネ科 (40ミクロン以上) が高率になり、ソバ属が出現を始め、最上位のI帯まで連続する。

③a亜帯 (川1断面1 試料No 4~1、川1断面2 試料No 7~2、井戸4 試料No 1、溝11試料No 3~1、井戸2 東壁試料No 6~3、井戸2 底部試料No 9~7)

針葉樹種のうちツガ属が減少するが、マツ属 (複維管束亜属)、スギ属はb亜帯と同程度の出現率を示す。広葉樹種のアカガシ亜属、コナラ亜属がやや高率になる。草本花粉では、b亜帯に比べイネ科

(40ミクロン以上)が高率になる。

丘陵上西部b域の各地点の内、井戸底部と井戸東壁はほぼ一連の堆積物である。この間の花粉組成変化を詳細に検討すると、最下部の井戸底部試料No 9、8ではブドウ科が高率を示し、さらにミカン科、カキノキ属が僅かに出現する。井戸2底部試料No 7～東壁試料No 4ではブドウ科が下部ほどではないが出現し、モクセイ科が特徴的に出現する。さらに東壁試料No 3では、上記の数種類が全く検出されない。また溝11では試料No 3、2でカキノキ属が、試料No 2でミカン科が検出される。

以上のことから丘陵上b域のII帯a亜帯をa iii亜帯(溝11試料No 3、2、井戸底部試料No 9、8)、a ii亜帯(井戸底部試料No 7～東壁試料No 4)、a i亜帯(東壁試料No 3)に細分した。

(2) I帯(井戸2東壁試料No 1、川1断面2試料No 1)

マツ属(複維管束亜属)が卓越するほか、スギ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)が卓越する。

古環境変遷

当初の目的である井戸2の使用形態にふれつつ、花粉分帯に対応する時期毎に遺跡周辺の古環境を推定する。

(1) II帯期(平安時代(末?)～鎌倉時代)

今回検出された木本花粉化石の多くは風媒のもので、遺跡周辺のみならず北摂山地全体に由来すると考えられる。大阪周辺地域の一般的な花粉組成変遷(例えば古谷, 1979)では、この時期はマツ属(複維管束亜属)の増加、アカガシ亜属の減少で特徴付けられている。今回の結果では特に優占する種類は無く、上位のI帯に向かってマツ属(複維管束亜属)の増加傾向が認められるなど既知の結果と調和的である。一方スギ属、ツガ属などの「温帯針葉樹種」が比較的高率を示すなど、今回の調査での特異な現象も認められる。現在の北摂山地には高槻市北部本山寺で見られる様な温帯針葉樹林(中間温帯林)が残存しており、同様な森の分布域が今より広がったことが推定される。

発掘の成果から、縄文時代には、すでに川1が段丘上を下谷していた可能性もある。しかし、この小河川の埋積物のほとんどはII帯期[平安時代～鎌倉時代]に堆積したものであり、この時期以前に急激な環境変化があったことが示唆される。また、II帯期での温帯針葉樹種花粉の減少傾向から、この間に開発が徐々に進み、温帯針葉樹林が縮小していったことも示唆される。

遺構の分布から、10～13世紀(平安時代から鎌倉時代中頃)にかけて、試料採取地点周辺には集落が広がっていたと考えられている。しかし、14世紀(鎌倉時代末から室町時代始め)には一転して集落の遺構が認められなくなる。一方花粉分析結果では、c～b亜帯期にかけては乾燥地に比較的多く分布するヨモギ属の花粉がやや高い出現率を示し、草地在広がっていたことが推定される。一方、cとb亜帯を境して、イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率が高くなり、ソバ属も出現を始める。これらのことから、b亜帯期の始めから遺跡近辺が徐々に開墾され、稲作およびソバ栽培が始まったと考えられる。a亜帯ではイネ科(40ミクロン以上)花粉はさらに高率になり、遺跡周辺の開墾がさらに進んだことが示唆される。上記のように花粉分析から推定される古植生は、発掘調査による同時期の成果とよく一致する。

井戸4からは、肉眼で認められていたウメのほか、小型の種実が多数検出された。これらのうち、食用になるものは、ウメ、キイチゴ属、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、ナデシコ科で

あるが、一般に栽培されるものではない。検出された多くは自然に井戸内に落ちた物と考えられる。また、井戸4の花粉分析結果では、バラ科、ミカン属-キンカン属-カラタチ属など、特殊な分類群が検出されたが、わずかな量であった。

井戸2および溝11ともに最下部でa iii亜帯が、上部でa ii亜帯が認められ、井戸から溝にかけての堆積物が成層していることが分かる。また、溝11の最下部（試料No3）からは多量の炭が検出され、溝11が堆積粒子の周囲からの流入により自然に埋まっていった可能性が指摘できる。したがって、井戸と溝11はほぼ同時期に使用され、自然に埋まったと考えられる。しかし、ミカン科、カキノキ属などの増減傾向から、井戸2の埋まり始めが溝11のそれより若干早かった可能性もある。一方、井戸2および溝11内で低率ではあるが特徴的に検出されるミカン科やカキノキ属は虫媒花粉であり現地性が強い。このことから、遺跡内あるいは遺跡の極近くで「ミカン」や「カキ」が生育（栽培？）していた可能性もある。

草本花粉では井戸2、溝11共にイネ科（40ミクロン以上）が高率を示し、ソバ属も数%検出される。したがって両遺構が埋まり始める時期に、遺構の周辺では稲作が行われ、二毛作、畦、あるいは休耕田を利用したソバ栽培も行われていたと考えられる。しかし現状では、調査地近辺で同時期の水田跡は見つかっておらず、水田跡の検出が今後の課題として残る。周辺に水田が存在したと仮定して、調査地は丘陵上に位置し水の便が悪いことから、井戸および溝11が田畑の灌漑に使用された可能性は指摘できる。しかし、住居に近いことから、他の用途にも使われていたか否かの判断はできない。

井戸を最も特徴付ける花粉化石はブドウ科（形態的特徴からブドウ属ではない）である。ブドウ属を除くブドウ科には一部有用植物もある（「ツタ」は平安時代に甘味料として使われた（牧野，1989））が、一般に栽培されたか否かは不明である。また、溝11からブドウ科はほとんど検出されていない。埋まった時期の前後関係が想定されるものの、（例えば）ツタが井戸周辺にのみ繁茂していた、あるいは井戸内に捨てられたなどの可能性が考えられる。

（2）I帯期（中世後半～近世）

前述の古谷（1979）と比較すると、マツ属（複維管束亜属）が卓越することから、I帯はF6帯と対比され近世以降の植生を表していると考えられる。

遺跡周辺には水田が広がり、前時期同様にソバ栽培も行われていたと考えられる。すでに「井戸」が埋まっていることから、前時期とは異なる灌漑施設ができていたと考えられる。

周辺の森林は、アカマツやコナラ類を要素とする「里山」に広く覆われていたと考えられる。一方で開発が進み、カシ類を要素とする照葉樹林や、II帯期で広範に分布していた温帯針葉樹林も、深山には残存していたと考えられる。

まとめ

今回の分析調査から、以下のことが明らかになった。

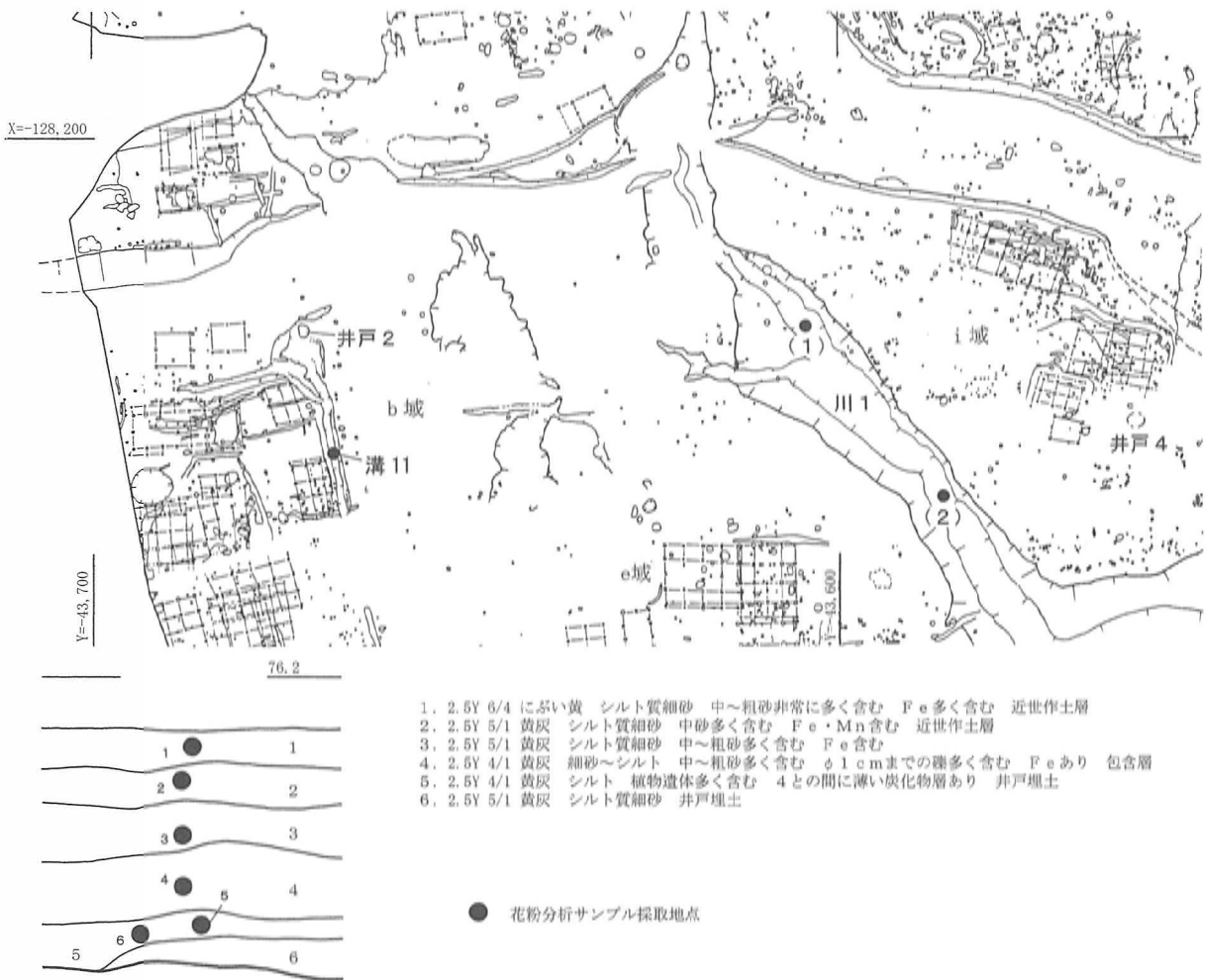
- ①花粉分析結果から、本地域の地域花粉帯としてI、II帯を、さらにII帯をa、b、c亜帯に細分した。また丘陵上西部地区b域では、II帯a亜帯をa iii～a i亜帯に細分できた。
- ②平安～鎌倉時代以降の遺跡周辺での植生変遷を推定した。II帯期とした時期について特筆すべき点は

以下の事柄である。

- 1) 丘陵上西部地区b域近辺でミカン、カキなどが生育して（あるいは栽培されて？）いた。
 - 2) ツタが井戸2の近くに繁茂していた。あるいは、井戸にツタを捨てたなどの事が考えられる。
 - 3) 井戸2が埋まり始めるころから周辺では稲作やソバ栽培が行われていた。
 - 4) 「温帯針葉樹林」が、現在より広範囲に分布していた可能性がある。
- ③周辺での稲作、蕎麦作が推定できることから、井戸2、溝11の用途の一つに灌漑が考えられる。
- ④井戸4から各種の種実が検出できた。「ウメ」には栽培されていた物である可能性もあるが、多くは周辺に生育していた「雑草」に由来すると考えられる。

引用文献

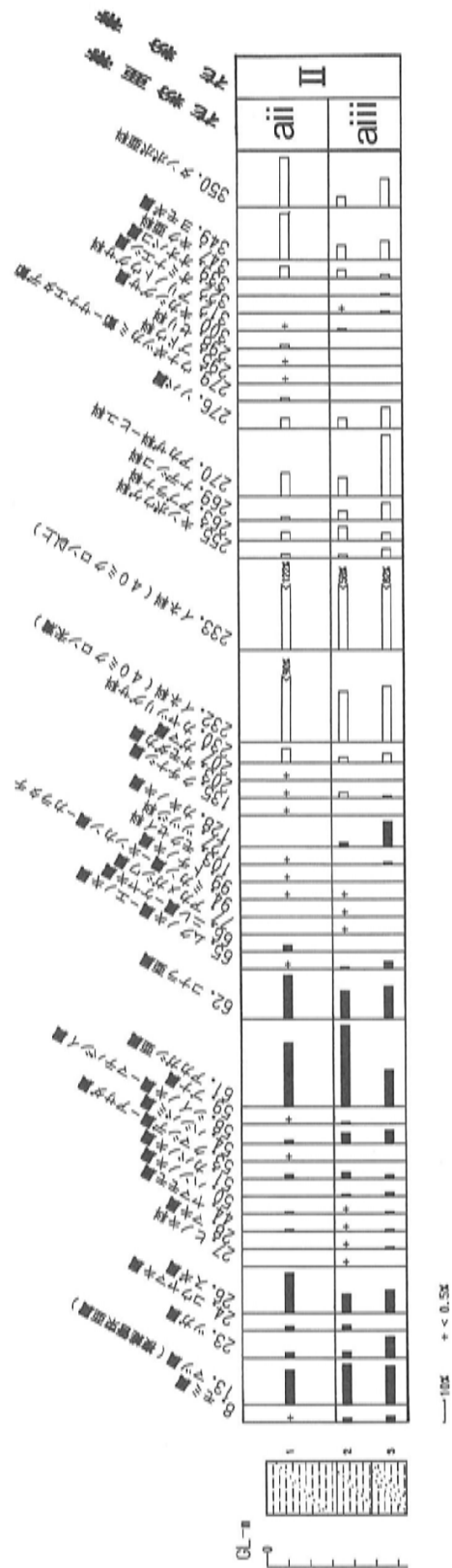
古谷正和 「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」『第四紀研究』 1979 18, 121-141.
 牧野富太郎 「1703ツタ, 改訂増補牧野新日本植物図鑑」 北隆館 東京 1989 426.
 渡邊正巳 「花粉分析法」『考古学ライブラリー65』『考古資料分析法』 84-85 ニュー・サイエンス社 東京 1995



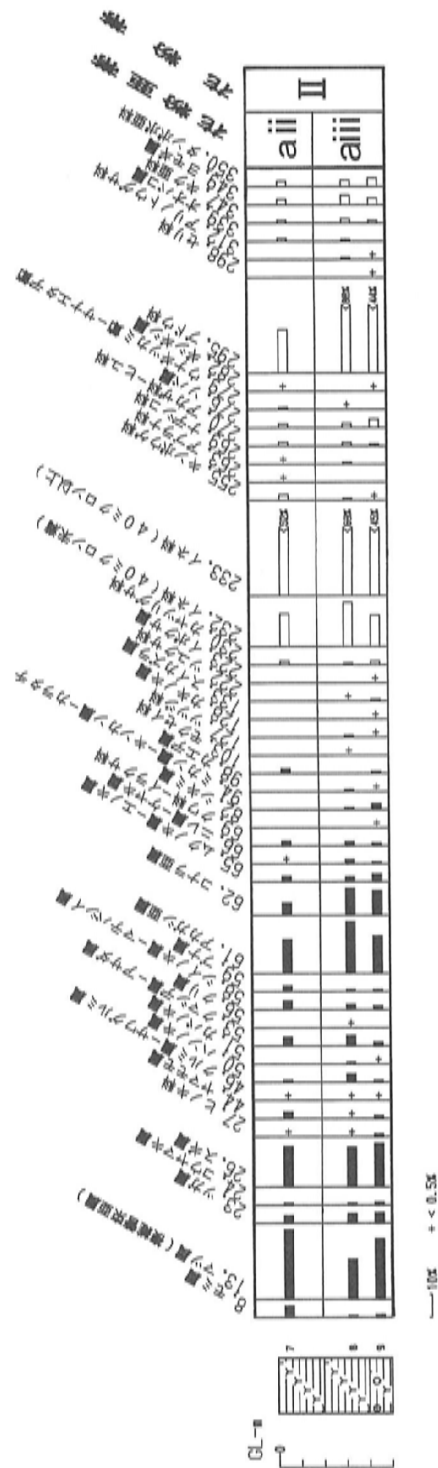
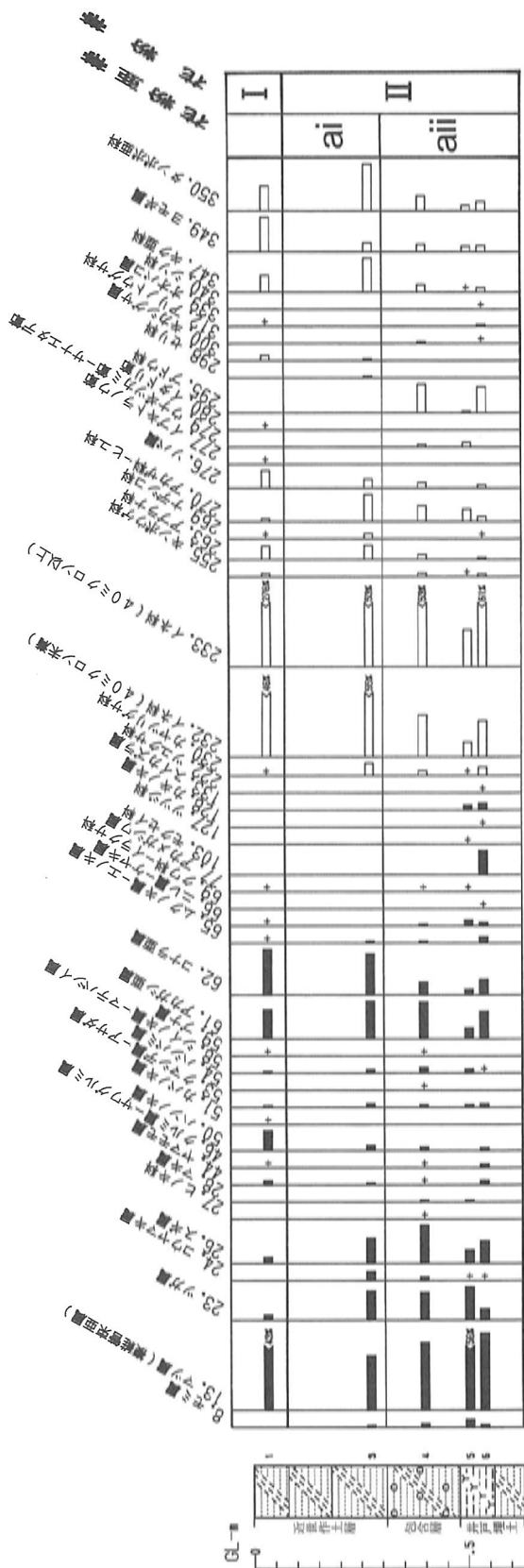
第451図 試料採取地点図 (1:1,000) 井戸2東壁土層断面柱状図 (1:40)



第454図 井戸4の花粉ダイアグラム



第455図 溝11の花粉ダイアグラム



第456図 井戸2東壁の花粉ダイアグラム

第457図 井戸2底部の花粉ダイアグラム

第2章 残存脂肪酸分析

帯広畜産大学生物資源科学科 中野益男

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子 門 利恵 長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁴⁾。脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに伸びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪酸分析法」という。この「残存脂肪酸分析法」を用いて、粟生間谷遺跡で検出した土坑の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

丘陵上西部地区 b 域焼土坑 4、丘陵上東部地区 p 域焼土坑 53・54 坑内外の土壌試料を分析した。

これら 2 基の土坑の推定年代は不明であるが、周辺の遺構は平安時代から鎌倉時代くらいのもものと推定されている。遺跡内での土坑の配置状況および土坑内外での試料採取地点を第 61・74、276・291 図に示す。試料 Na 1～Na 4 は焼土坑 4 のもので、Na 1～Na 3 を土坑内、Na 4 を土坑外地山から、Na 5～Na 9・Na 11・12 は焼土坑 53 のもので、Na 5・6・8・9・11 を土坑内、Na 12 を土坑外地山から、Na 10 は焼土坑 54 のもので土坑内から、それぞれ採取した。

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料 254～971 g に 3 倍量のクロロホルム-メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で 30 分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び 30 分間超音波処理をする。この操作をさらに 2 回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出

溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は0.0027~0.0074%、平均0.0045%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010~0.0100%の範囲内のものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸（80:30:1）またはヘキサン-エーテル（85:15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁹⁾。

残存脂肪の脂肪酸組成を図2-1と2-2に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16:0）、ステアリン酸（C18:0）、オレイン酸（C18:1）、リノール酸（C18:2）、アラキジン酸（C20:0）、エイコサモノエン酸（C20:1）、ベヘン酸（C22:0）、エルシン酸（C22:1）、リグノセリン酸（C24:0）、ネルボン酸（C24:1）の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中の脂肪酸組成パターンを見ると、土坑77の試料はほぼ同一で、土坑263の試料はさまざまであった。このうち炭素数18までの中級脂肪酸は、土坑77ではパルミチン酸、オレイン酸の順に多く、土坑263では試料No5~No7でパルミチン酸、オレイン酸、No9~No11でオレイン酸、パルミチン酸の順に多く、No8とNo12ではパルミチン酸とオレイン酸がほぼ同程度であった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来していると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。オレイン酸はまた、ヒトの骨のみを埋葬した再葬墓試料などにも多く含まれている。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸はそれら3つの合計含有率が試料No1とNo2で約13%、他のすべての試料中で約3~9%であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級飽和脂肪酸3つの合計含有率は約4~10%であるので、試料No1とNo2の合計含有率はわずかに高く、他のすべての試料中での合計含有率は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分が含まれている場合とがある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかは、コレステロールの

分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、粟生間谷遺跡の焼土坑4の試料中では中級脂肪酸はパルミチン酸、オレイン酸の順に多く、焼土坑53長軸北寄り部分の試料No5～No7ではパルミチン酸、オレイン酸の順に、長軸南寄り部分の試料No9、短軸西寄り部分の試料No11、焼土坑54の試料No10ではオレイン酸、パルミチン酸の順に多く、長軸南寄り部分上層試料No8と土坑外対照試料No12ではパルミチン酸とオレイン酸が同程度分布していることがわかった。高級飽和脂肪酸は焼土坑4の上層試料No1と下層試料No2にわずかに多いのみで、他のすべての試料中では通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みにしか含まれていないことがわかった。2土坑ともに土坑外対照試料が土坑内試料と特に異なる傾向を示すということとはなかった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から20～22種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No11に約20%、No5、No6、No8に8%前後、他のすべての試料中に約2～6%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2～6%分布している。従って、コレステロール含有量は試料No11に非常に多く、No5、No6、No8にわずかに多く、他のすべての試料中ではほぼ通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。植物由来のシトステロールは試料No8とNo9に約33～46%、他のすべての試料中に約8～21%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%もしくはそれ以上に分布している。従って、シトステロール含有量は試料No8とNo9で通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みで、他のすべての試料中では植物腐植土中でよりも少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンベステロール、スチグマステロールは、カンベステロールが試料No7に約12%、他のすべての試料中に約4～10%、スチグマステロールが試料No10に約11%、他のすべての試料中に約2～7%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンベステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、試料中のカンベステロール含有量は試料No7にわずかに多く、スチグマステロール含有量は試料No10にわずかに多いのみで、他のすべての試料中では通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールはすべての試料中に約0.4～2.0%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはエルゴステロールは数%分布している。従って、この程度の量は土壌微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは試料No4に約6%、他のすべての試料中に約1～2%分布していた。コプロスタノールは一般的な遺跡出土土壌中では分布していても1～2%くらいで、通常は殆ど検出されない。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物

の存在を確認することができる他に、通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある⁹⁾。今回は試料No 4 にやや多く含まれてはいたが10%以上ではなく、残存する脂肪の動物種や性別を判定できるものではなかった。しかし、コプロスタノールが通常よりは多めに含まれているということは、この試料中に哺乳動物の腸もしくは糞便由来の脂肪が残存しており、他のすべての試料中にはほとんど残存していなかったことを示唆している。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上⁷⁾、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる^{8,9)}。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように分布比は試料No 4 とNo 11が0.6以上、No 1、No 2、No 6が0.6に近く、他のすべての試料が0.4以下で、試料No 9は0.04で最も低かった。従って、試料No 1、No 2、No 4、No 6、No 11には動物遺体または動物由来の脂肪が残存しており、他の試料中には分布比で見ると動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性は少ない。

以上、粟生間谷遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールが焼土坑53短軸西寄り部分の試料No 11に非常に多く、焼土坑53長軸北寄り部分の試料No 5、No 6、長軸南寄り部分上層試料No 8 にわずかに多く、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールが焼土坑4の土坑外対照試料No 4 にやや多い他はすべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比は焼土坑4の土坑外対照試料No 4 と焼土坑53短軸西寄り部分の試料No 11が0.6以上、焼土坑4の上層試料No 1、下層試料No 2、焼土坑53長軸北寄り部分の試料No 6が0.6に近く、試料No 5が0.43で焼土坑53の土坑外対照試料No 12のコレステロールとシトステロールの分布比よりも高く0.6にもかなり近いことから、これらの試料中には動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性があり、他の試料中には分布比で見ると動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性が少ないことを示唆していた。焼土坑4の土坑外対照試料はコプロスタノール含有量がやや多めで、コレステロールとシトステロールの分布比も最も高く、土坑内試料とは傾向がやや異なっていた。この地点には哺乳動物に類する遺体が残存していた可能性がある。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に試料中に残存する脂肪の持主を特定するために、同じ大阪府内の遺跡で出土土壌にはヒト遺体を直接埋葬した場合と類似の脂肪が残存していると判定した大庭寺遺跡¹⁰⁾、西大井遺跡¹¹⁾、本町遺跡、蛸池遺跡¹²⁾、宮の前遺跡(その2)、服部遺跡、向出遺跡¹³⁾、兵庫県寺田遺跡、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡¹⁴⁾、ヒトの体脂肪、出土土壌を再葬墓と判定した宮城県摺菰遺跡¹⁵⁾、ヒトの骨油、出土した火葬土壌は焼土面やその周辺で動物遺体を焼いたと判定した遺跡の試料と類似しており、抗原抗体反応からヒトの存在も確認された福岡県上町木下遺跡、出土した焼土壌内でヒト遺体を火葬にした可能性があるとして推定した福岡県宮ノ本遺跡第5次調査区、出土した焼土面およびその周辺で動物遺体を焼いたと判定した兵庫県神出古窯址群、土坑内でヒト遺体を焼いたと判定した兵庫県行原遺跡、火葬土壌と推定された土壌にはヒトの骨油と植物腐植土中の脂肪が入り混ざっていると判定した兵庫県梶原遺跡、出土した墓、火葬場と推定されている遺構はヒト遺体を直接焼いた火葬墓や火葬場であろうと推定した滋賀県上田上牧遺跡¹⁶⁾、焼

土を伴う土壌に残存する脂肪は高等動物の骨部分も含む脂肪全般に由来し、成人女性が埋葬されていた可能性も推測された北海道キウス4遺跡I地区¹⁷⁾、加熱したヒトの体脂肪、加熱した人骨試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸との類似度を比較した。予めデータベースの脂肪酸組成とクラスター分析を行い、その中から出土状況を考慮して類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図461である。

図からわかるように、粟生間谷遺跡の試料No1～No4は大庭寺遺跡、向出遺跡の試料と共に相関行列距離0.05以内でA群を形成し、非常によく類似していた。粟生間谷遺跡の試料No5～No12は宮ノ本遺跡第5次調査区、上町木下遺跡、梶原遺跡、上田上牧遺跡の試料と共に相関行列距離約0.05の所でE群を形成し、非常によく類似していた。他の対照試料はB～D群、F～H群を形成した。これらの群のうちA群はB～D群と相関行列距離0.25以内の所にあり、互いに類似していた。E群はF、G群と相関行列距離0.2以内の所にあり、互いに類似していた。

以上、粟生間谷遺跡の焼土坑4に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪、またヒト遺体を焼いたことに関わる遺跡の試料の脂肪と類似していることがわかった。焼土坑53のそれはヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの骨油、またヒト遺体を焼いたことに関わる遺跡の試料の脂肪と類似していることがわかった。2土坑ともに土坑外対照試料も土坑内試料と同一群内にあり、特に異なる傾向を示すということはない。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた種特異性相関を図462に示す。図からわかるように、粟生間谷遺跡の試料No1～No4は第2象限内に分布し、A群を形成した。粟生間谷遺跡の他のすべての試料は第2象限から第3象限にかけて分布し、E群を形成した。A群の分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来し、E群のそれは植物腐植土中に高等動物の体脂肪や骨油が入り混じった形態のものに由来することを示唆している。

以上、粟生間谷遺跡の焼土坑4の試料中に残存する脂肪は高等動物の体脂肪や骨油に由来し、焼土坑53の試料中のそれは植物腐植土中に高等動物の体脂肪や骨油が入り混じった形態のものに由来することがわかった。2土坑ともに土坑外対照試料が土坑内試料と特に異なる傾向を示すということはない。

7. 総括

粟生間谷遺跡から出土した土坑の性格を判定するために、土坑内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析、ステロール分析、脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、動物性

コレステロールを含む試料が全試料ではないが存在することから、2土坑ともにヒト遺体との関わりがあると考えられる。焼土坑4に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪と類似していることから、体脂肪が燃焼して残っているタイプの火葬場、焼土坑53に残存する脂肪はヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの骨油と類似していることから、ヒトの骨部分も含む全般が燃焼して残っているタイプの火葬墓であった可能性が推測される。一般に植物性脂肪は動物性脂肪に比べ残存する脂肪の絶対量が少ないため、仮にこれらの土坑で植物性のものを燃やしても余程その量が多くなないと残存する脂肪としては検出されにくい。従って、今回の土坑は完全に火葬関係の目的以外のものではなかったとは言い切れない。しかし、焼土坑4の試料中には動物性コレステロールが少ないが、焼土坑53には動物性コレステロールが約20%も含まれる試料が存在することこの土坑が焼土坑であることを考えると、火葬関係の目的が推測される。ヒト遺体であることを明確にするには、動物種特有の抗原抗体反応を用いた免疫試験を行うとはっきりする場合もある。焼土坑4の土坑外対照試料中に哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールがやや多く含まれていたが、この試料採取地点付近に哺乳動物に類する脂肪が何らかの形で存在していた可能性がある。その理由については不明である。

註・参考文献

- 1) R. C. A. Rottlander and H. Schlichtherle 'Food identification of samples from archaeological sites' "Archaeo Physika" 10 巻 1979 pp260
- 2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold 'Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed' "Nature" 292巻 1981 pp146
- 3) R. C. A. Rottlander and H. Schlichtherle 'Analyse frühgeschichtlicher Gefas-inhal' "Naturwissenschaften" 70巻 1983 pp33
- 4) 中野益男 「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』 第10巻(6) 1984 pp124
- 5) M. Nakano and W. Fischer 'The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021' "Hoppe-Seyler Z. Physiol. Chem." 358巻 1977 pp1439
- 6) 中野益男 「残留脂肪酸による古代復元」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』 田中 琢 佐原 眞編 クバプロ 1995 pp148
- 7) 中野益男 伊賀 啓 根岸 孝 安本教傳 畑 宏明 矢吹俊男 佐原 眞 田中 琢 「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』 第26巻 1984 pp40
- 8) 中野益男 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」『真脇遺跡』 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 pp401
- 9) 中野益男 根岸 孝 長田正宏 福島道広 中野寛子 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」『ヘロカルウス遺跡』 北海道文化財研究所調査報告書第3集 1987 pp191
- 10) 中野寛子 明瀬雅子 長田正宏 中野益男 「大庭寺遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」『大庭寺・伏尾遺跡』 (財)大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書第27集 1998 pp407
- 11) 中野寛子 明瀬雅子 長田正宏 中野益男 「西大井遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」『西大井遺跡発掘調査概要・1992年度-'92-1区』 大阪府教育委員会 1994 pp37
- 12) 中野益男 中野寛子 菅原利佳 長田正宏 「宮の前・蛭池遺跡採集土壌の残存脂肪分析」『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・蛭池西遺跡』 1992・1993年度発掘調査報告書 (財)大阪文化財センター 1994 pp167
- 13) 中野益男 中野寛子 長田正宏 「向出遺跡残存脂肪酸分析」『向出遺跡』 (財)大阪府文化財調査研究センター 2000 pp370
- 14) 中野益男 幅口 剛 福島道広 中野寛子 長田正宏 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」『原川遺跡Ⅰ』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第17集 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 pp79
- 15) 中野益男 長田正宏 福島道広 中野寛子 「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」『摺萩遺跡』 宮城県文化財調査報告書第132集 宮城県教育委員会・宮城県土木部水資源開発課 1990 pp929
- 16) 中野益男 中野寛子 長田正宏 「上田上牧遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析」『上田上牧遺跡Ⅰ』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XXV-1 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1998 pp180

- 17) 中野益男 中野寛子 星山賢一 「キウス4遺跡I地区から出土した遺構に残存する脂肪の分析」『キウス4遺跡(3)』
(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第134集 (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 pp522

参考資料

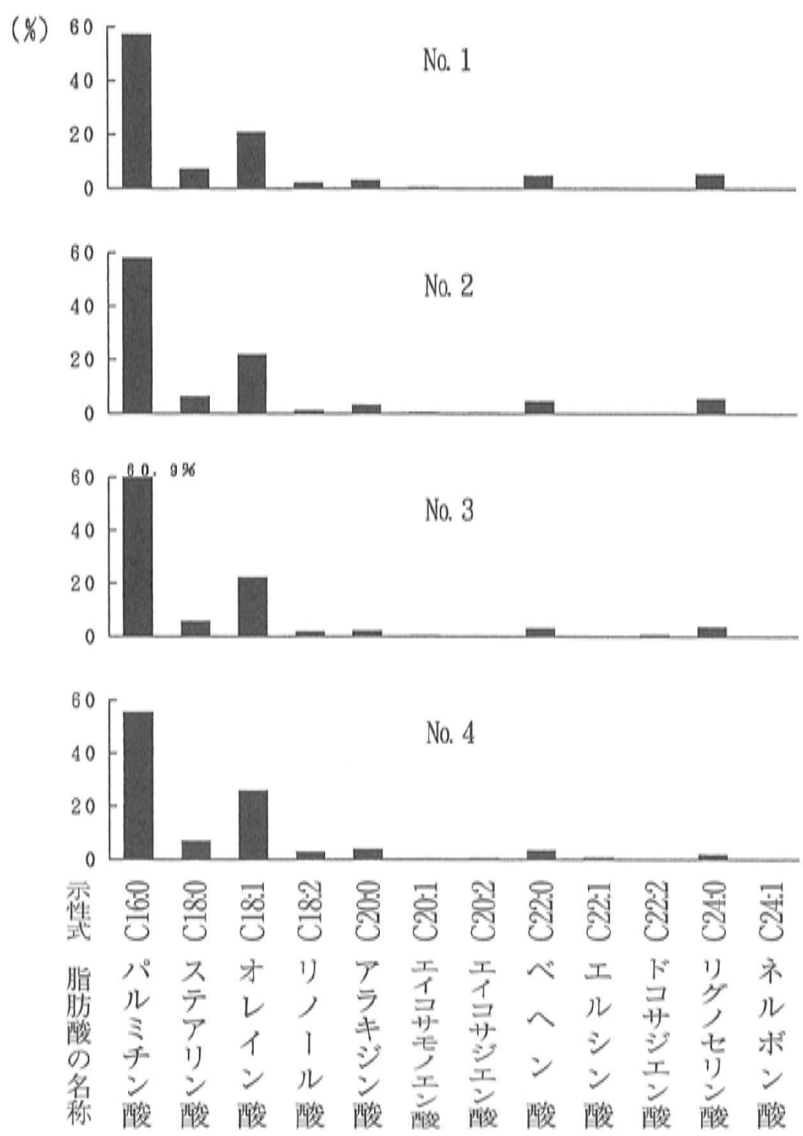
- | | | | | |
|------|------|------|------|--------------------------------|
| 中野益男 | 中野寛子 | 菅原利佳 | 長田正宏 | 「本町遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」 |
| 中野益男 | 中野寛子 | 長田正宏 | | 「宮の前遺跡(その2)から出土した土坑に残存する脂肪の分析」 |
| 中野益男 | 中野寛子 | 長田正宏 | | 「服部遺跡から出土した遺構・遺物に残存する脂肪の分析」 |
| 中野益男 | 中野寛子 | 福島道広 | 長田正宏 | 「寺田遺跡土壇墓状遺構に残存する脂肪の分析」 |
| 中野寛子 | 明瀬雅子 | 長田正宏 | 中野益男 | 「上町木下遺跡から出土した土壇に残存する脂肪の分析」 |
| 中野寛子 | 明瀬雅子 | 長田正宏 | 中野益男 | 「宮ノ本遺跡抽出試料残存脂肪分析」 |
| 中野益男 | 中野寛子 | 福島道広 | 長田正宏 | 「神出古窯址群遺構の焼土に残存する脂肪の分析」 |
| 中野寛子 | 明瀬雅子 | 長田正宏 | 中野益男 | 「行原遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」 |
| 中野益男 | 中野寛子 | 菅原利佳 | 長田正宏 | 「梶原遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析」 |

第2表 土壤試料の残存脂肪抽出量

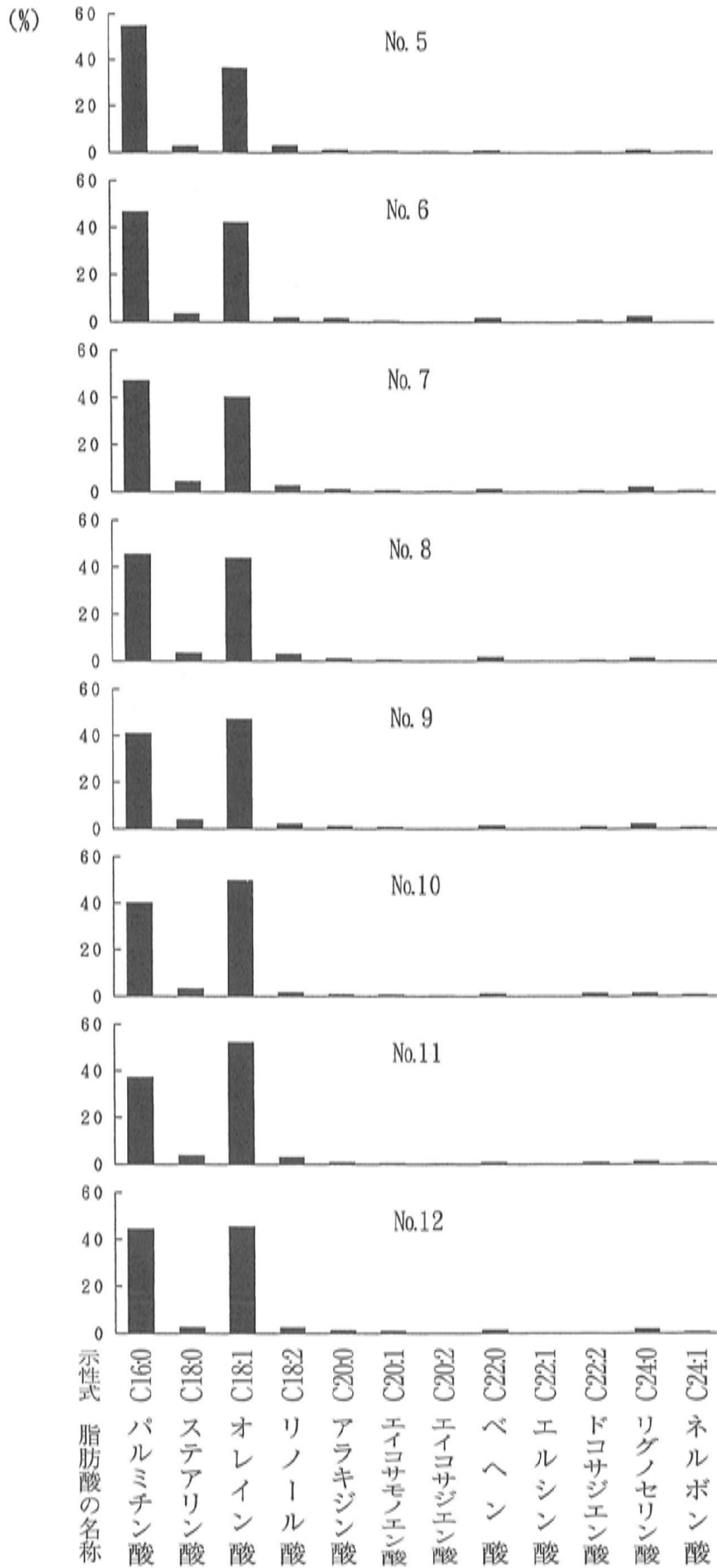
試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	焼土坑4 中央上層	271.1	10.3	0.0038
2	焼土坑4 中央下層	254.1	16.0	0.0063
3	焼土坑4 壁面上層	389.3	17.6	0.0045
4	焼土坑4 地山	253.9	6.9	0.0027
5	焼土坑53 北寄り上層	955.8	35.7	0.0037
6	焼土坑53 北寄り下層	950.3	56.9	0.0060
7	焼土坑53 北底面直下	430.5	11.9	0.0028
8	焼土坑53 南寄り上層	970.8	51.9	0.0053
9	焼土坑53 南寄り下層	793.3	58.7	0.0074
10	焼土坑54 下層	923.4	27.1	0.0029
11	焼土坑53 西寄り下層	935.6	35.0	0.0037
12	焼土坑53 地山	631.4	28.3	0.0045

第3表 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

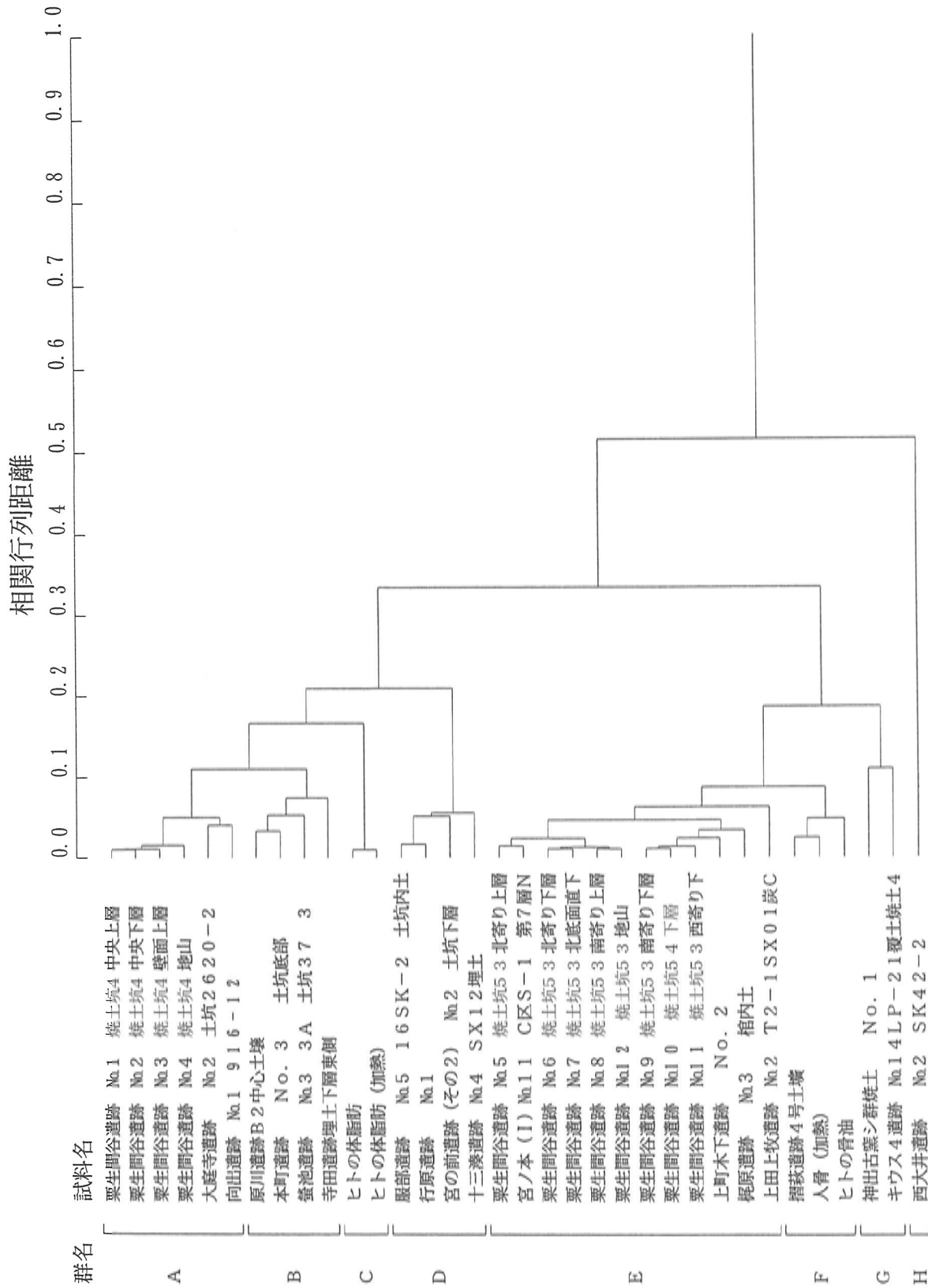
試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	5.57	10.35	0.54
2	5.80	10.30	0.56
3	2.68	7.94	0.34
4	4.75	6.16	0.77
5	7.91	18.20	0.43
6	8.36	14.21	0.59
7	4.89	19.99	0.24
8	7.50	33.01	0.23
9	1.94	45.51	0.04
10	4.41	19.31	0.23
11	19.94	13.55	1.47
12	3.13	20.76	0.15



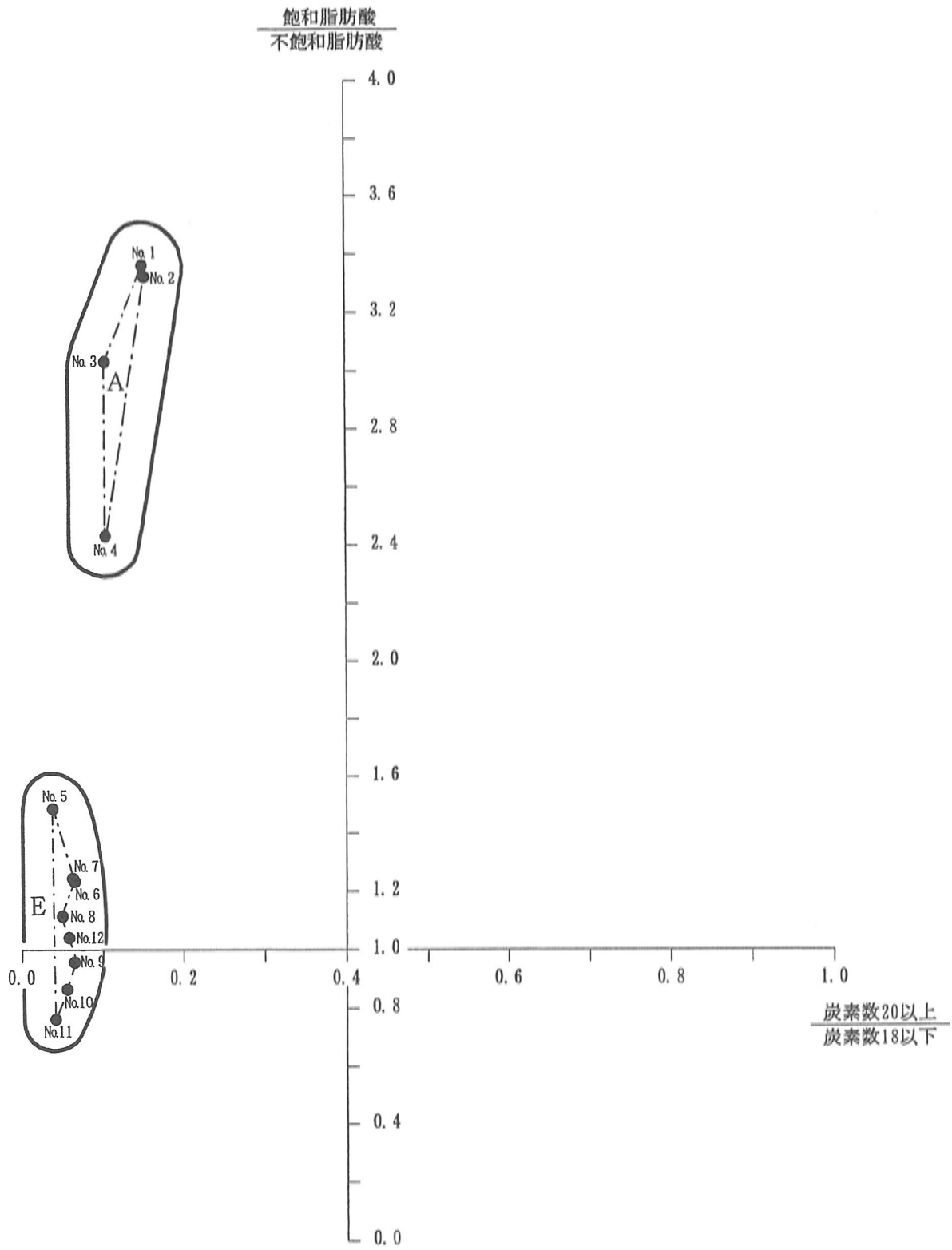
第458図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成 (1)



第459図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成 (2)



第461図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第462図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

第3章 人骨・動物遺体について

大阪市立大学 安部みき子

1. 人骨

粟生間谷遺跡から出土した人骨は平安中期から近世の遺構から出土した。丘陵上東部q域の焼土坑57出土のものが不明である以外は、すべて焼骨の骨片であった。焼骨は、いずれの時代のものも火葬時に出来たひび割れや歪みが大きく、燃焼温度が高かったと思われる。骨片は頭骨片と長骨の骨幹の破片が多かったが、骨端部の海面質や椎骨の一部も出土している（第4表）。部位まで同定できた骨片は8点であった。頭骨では、前頭骨の眼窩縁、側頭骨の錐体の一部が2点、後頭部横洞溝の一部の4点で、その他の骨は、橈骨の骨頭の一部、尺骨または橈骨の骨幹の一部、右の有鉤骨と大腿骨の一部の4点である。これらの部位からの年齢や性、体格などを推定することは出来なかった。しかし、近世のものの中に長骨の骨端部に骨端軟骨が存在していたことを示す形態が見られ、被葬者は20歳以下の成長期であったと思われる。

出土骨片は近世のものが一番多く時代を遡るに連れて出土数が少なくなる。しかし、出土状況は時代における差は見られない。

2. 動物遺体

出土した動物遺体を第5表に示した。

平安時代またはそれ以前の層から出土したイノシシまたはブタと思われる右大腿骨は保存状態が悪かったが、依存している骨幹の大きさから成体と思われる。

12世紀ではウマの臼歯と思われるエナメル質の破片が出土している。

時期不明の溝からは第1大白歯より後部が遺存しているイヌの下顎骨が出土し、第1大白歯と第2大白歯は釘植していた。計測部位を弥生時代の亀井遺跡から出土したイヌと比較すると（第6表）、下顎枝長は中型犬のオスである1号犬よりは小さいが、中型犬のメスの2号犬よりは大きかった。しかし、下顎枝高や下顎体高は2号犬より小さかった。また、第1大白歯近遠心径は亀井犬の個体より大きく、中型犬に属していると思われる。

参考文献

宮崎 泰史 「亀井遺跡の犬について」『亀井遺跡』（財）大阪文化財センター 1982 p.205-230

第4表 人骨の一覧表

地区	遺構番号	時代	出土部位		詳細
			左右	部位	
1 丘陵上r域	墓11	10~11世紀		頭骨片	多数
2 丘陵上r域	墓11	10~11世紀		骨片	多数
3 丘陵上q域	焼土坑57	12世紀		頭骨	脳頭骨の一部
4 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀	不明	前頭骨	眼窩縁
5 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀	不明	長骨片	1
6 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀	不明	骨片	1
7 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀		頭骨片	多数
8 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀	右	側頭骨	錐体の内耳孔周辺
9 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀	—	後頭骨	横洞溝の一部
10 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀		頭骨片	多数
11 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀	不明	長骨片	1
12 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀		頭骨片	1
13 丘陵上j域	焼土坑17	13~15世紀		長骨片	1
14 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		頭骨片	2
15 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		長骨片	多数
16 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		長骨片	4
17 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		長骨片	2
18 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀	不明	大腿骨	骨幹
19 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		長骨片	1
20 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		頭骨片	2
21 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		長骨片	4
22 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		頭骨片	1
23 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		長骨片	1
24 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		長骨片	1
25 丘陵上p域	土坑89	14~15世紀		長骨片	2
26 丘陵上p域	焼土坑55	14~15世紀		長骨片	1
27 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀		長骨片	4
28 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀		長骨片	多数
29 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀		頭骨片	多数
30 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀		長骨片	多数
31 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀	不明	側頭骨	錐体の内耳孔周辺
32 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀		頭骨片	多数
33 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀		長骨片	多数
34 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀		頭骨片	多数
35 丘陵上p域	焼土坑49	17世紀		長骨片	4
36 丘陵上p域	焼土坑50	17世紀	不明	長骨片	多数
37 丘陵上p域	焼土坑50	17世紀		長骨片	骨端部の未融合部分 若い(成年)
38 丘陵上p域	焼土坑50	17世紀		長骨片	多数
39 丘陵上p域	土坑83	近世		骨片	1
40 丘陵上p域	焼土坑47	近世		長骨片	骨端部の関節部
41 丘陵上p域	焼土坑47	近世		長骨片	多数
42 丘陵上p域	焼土坑47	近世		長骨片	骨幹部 多数
43 丘陵上p域	焼土坑47	近世		長骨片	関節部 8
44 丘陵上p域	焼土坑47	近世		骨片	3
45 丘陵上p域	焼土坑47	近世	不明	橈骨	橈骨頭の一部
46 丘陵上p域	焼土坑47	近世	不明	大腿骨	骨幹の一部
47 丘陵上p域	焼土坑47	近世	不明	尺骨or橈骨	骨幹の一部
48 丘陵上p域	焼土坑47	近世		長骨片	多数
49 丘陵上p域	焼土坑48	近世		骨片	1
50 丘陵上p域	焼土坑48	近世		長骨片	多数
51 丘陵上p域	焼土坑48	近世		椎骨片	5
52 丘陵上p域	焼土坑48	近世		長骨片	多数
53 丘陵上p域	焼土坑48	近世		椎骨片	5
54 丘陵上p域	焼土坑48	近世		骨片	2
55 丘陵上j域	墓6	不明		長骨片	1
56 丘陵上p域	土坑89周辺の包含層	不明		骨片	1
57 勝尾寺川段 丘面y域	ピット129	不明	右	有鈎骨	鈎状突起破損
58 勝尾寺川段 丘面y域	ピット129	不明		骨片	多数

第5表 動物遺体一覧表

地区	遺構番号	時代	種名	出土部位		詳細
				左右	部位	
1	川2下流域下層	～平安	イノシシ?	右	大腿骨	遠位部 骨端は破損
2	丘陵上a域 井戸1	12世紀	ウマ?	不明	臼歯	エナメル質の破片のみ残存 第1大白歯より後部が残存、歯は第1・2 大白歯が釘植、第3大白歯は、歯根のみ 残存、第1大白歯の磨耗が見られないこ とより若い個体
3	丘陵上p域 土坑105南側の溝	不明	イヌ	左	下顎骨	
4	丘陵上p域 焼土坑57	12世紀	ウシかウマ		臼歯	エナメル質の破片のみ残存 焼けている

第6表 犬の下顎骨の計測値

計測部位	粟生間谷	亀井1号犬 (オス)	亀井2号犬 (メス)
下顎枝長	38.44	42.11	36.6
下顎枝高	41.53+	51.6	49.8
下顎体高 M3後縁	19.43	24.6	24.6
下顎体高 M1後縁	18.81		
下顎体高 M3中央	18.05	23.3	22.5
第1大白歯 近遠心径	21.92	18.3	20.2
第1大白歯 頬舌径	8.58	7.8	8.6
第2大白歯 近遠心径	8.86		
第2大白歯 頬舌径	6.54		

単位はmm、+は計測点破損のため誤差が大きい